

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	山崎 美保
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 247 号
学位授与の日付	2018 年 4 月 25 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	中部ジャワ時代の社会と王 - 9 世紀から 10 世紀初めの古ジャワ語刻文からの考察 -

Name	YAMASAKI Miho
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 247
Date	April 25, 2018
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The kingship and the structure of Old Javanese society: Analysis from Old Javanese inscriptions in the 9th and the early 10th centuries

中部ジャワ時代の社会と王

- 9 世紀から 10 世紀初めの古ジャワ語刻文からの考察 -

(目次)

はじめに	1
第1章 先行研究と史料に関して	4
第1節 先行研究	4
第2節 中部ジャワ時代の刻文	8
第3節 刻文史料の所在と関連文献	9
追記 表記方法と略号	11
第2章 社会構造	14
第1節 王と高官	14
第2節 村	22
第3節 寺院	28
第3章 シーマ定立の内容と意義	34
第1節 シーマ定立	34
第2節 シーマ定立に伴う規定	39
第3節 シーマ定立の経済的・政治的影響	43
第4節 シーマ定立に伴う儀式とその役割	46
第4章 古代ジャワ社会における王	50
第1節 中部ジャワ時代の王	52
第2節 カユワンギ王時代	61
第3節 バリトゥン王時代	65
第4節 バリトゥン王以後の王たち	77
第5章 中部ジャワ時代の王のありかた	83
おわりに	90
参考資料1 シーマ定立を記す刻文の内容構成（ルカム Rukam 刻文を例に）	92
参考資料2 シーマ定立の儀式（ルカム刻文を例に）	97
参考資料3 古ジャワ語『ラーマーヤナ』に記された王の資質	103
参考文献	106

(附表一覧)

附表 1 本稿で使用する刻文の表

附表 2 刻文のローマ字転写のための文字表

附表 3 シーマ定立における定立者・目的・規定をまとめた表

附表 4 高官リスト

はじめに

ジャワの古代史は、その政治の中心地の所在によって、大きく二つの時代に区分される。一つは中部ジャワにその中心があった中部ジャワ時代（7世紀頃から928/929年まで）、もう一つは東部にその中心があった東部ジャワ時代（929年から16世紀初め）である。しかし、ジャワで現在までに見つかっている文字史料で最古のものは、西部ジャワで発見されている。その文字資料とは、タールマーTārumā国のプールナヴァルマンPūrṇavarman王を称賛する諸刻文である。これらの刻文に紀年はないが、その字体から5世紀後半のものとされている[Casparis 1975: 18]。これらの刻文には、南インド起源のブラーフミー文字から派生した文字（一般にパッラヴァpallava文字と呼ばれる）が用いられ、サンスクリット語で書かれている。王の名もサンスクリット語由来である。この刻文が書かれた時代にはすでにインド文化の影響を受けた国が存在していたことが確認できる¹。

西部ジャワではプールナヴァルマンの刻文以降、10世紀初めまで刻文は確認できないが、中部ジャワでは7世紀頃から928年までの刻文が発見されている。中部ジャワの最初期の刻文は7世紀頃と考えられている。紀年はないが、この時代の刻文と考えられるソジョムルトSojomerto刻文やトゥク・マスTuk Mas刻文にはヒンドゥー教の影響が見られる。しかし王の名や王の統治する国などについての記述はない。一方、漢籍には、ジャワには王がおり国があったことが記される。7世紀の貞観14年（640年）から9世紀後半の咸通年間（860～873年）に朝貢している訶陵はジャワにあったと考えられる[深見 2001b: 289]。『新唐書』「列伝」（卷二百二十二下、南蛮伝下訶陵）には、「王は闍婆の都に住む。その祖先である吉延は婆露伽斯の都に東遷した。その傍には小さな国が28あり、服従しないものはない。その官には32の大夫があり、その中で大坐敢兄が最も位が高い（王居闍婆城。其祖吉延東遷於婆露伽斯城，旁小国二十八，莫不臣服。其官有三十二大夫，而大坐敢兄為最貴）」とあり、王がジャワの都に住み、小さな政体が傍にあり、大坐敢兄などの高官がいたことが読み取れる。また、現在のスマトラのパレンバンを中心としたシュリーウィジャヤŚrīwijaya²のコタ・カプルKota Kapur刻文（686年）の末尾には、シュリーウィジャヤに忠実でないブーミ・ジャーワbhūmi jāwa（「ジャワの地」）への遠征軍が686年2月28日に出發したことが記されている[Coedès 1992b: 55]。このように、7世紀のジャワにはインド文化（サンスクリット語やブラーフミー文字、ヒンドゥー教など）の影響を受けた政体がいくつか存在し、他の国々と関係を持っていた。

ジャワで紀年のある最初の刻文は732年のチャンガルCanggal刻文(中部ジャワ)である。

¹ タールマー国と関係する遺跡として、バトゥジャヤBatujaya遺跡が注目される。この遺跡は仏教の性格を持つ遺跡群であり、大小30の遺構が確認されている[Hasan 2010: Manguan 2011: 113-118]。残念ながら、この遺構の歴史的背景がわかるような刻文は現在のところ発見されていないが、6世紀から10世紀頃の遺跡とされる[Hasan 2010: 108]。

² サンスクリット語刻文では「śrīvijaya」、コタ・カプル刻文では「śrīwijaya」と転写され、また現在のインドネシア語表記では「sriwijaya」である。本稿では、現地語刻文であるコタ・カプル刻文の転写に基づき、カタカナ表記を「シュリーウィジャヤ」とした。

この刻文には、サンジャヤ Sañjaya という王がリングを建立したことが記される。その後、8 世紀後半になると、シャイレンドラ王家 Śailendravarman を名乗る王たちによって刻文が發布される。778 年のカラサン Kalasan 刻文では、シャイレンドラ王家の王師たちがパナンカラナ Panankarana を説得して、ターラー女神の祠堂を建立させたことが記される。このパナンカラナはシャイレンドラ王家に服属した王であると考えられている[岩本 1983: 85-93]。また彼は、マンティヤシ Mantyasih I 刻文（907 年）に記される諸王のリスト（「サンジャヤ王統」に属す諸王のリストとされる）に挙げられるラカイ・パナンカラナ rakai panankaran と同一人物とされる。このことから、サンジャヤ王統の王が 778 年までにシャイレンドラ王家に服属したことになる[岩本 1983: 90]³。9 世紀になると、サンスクリット語に代わり古ジャワ語によって刻文は記される。刻文の内容の大半は、シーマ sīma 定立、つまりシーマと呼ばれる不輸不入地の設定に関するものである。ラクルヤン rakryan やパムグト pamgēt の称号を冠した地方領主によって、寺院のためにシーマが設置された。そして、850 年のトゥラン・アイル Tulang Air I 刻文には、その時の王と高官たちが列挙されている。これは王と高官がともに列挙された最初の刻文であり、この時代にはすでに王とその臣下たちによって政治的中心（王宮）が形作られていたことがわかる。9 世紀後半から 10 世紀前半にかけては、それ以前よりも多くの刻文が發布され、中部ジャワだけでなく東部ジャワからの刻文の数も増える。929 年以後の刻文は中部ジャワからはほとんど発見されず、政治の中心は中部から東部に移ったと考えられる。

本稿では、中部ジャワ時代の後半にあたる 9 世紀から 10 世紀初めに焦点をあて、当時のジャワの社会構造を明らかにし、その社会における王とはどのような存在であったのかを、古ジャワ語刻文に基づき考察する。

中部ジャワ時代を含め、ジャワの古代史はオランダ時代から多くの研究が行われている。ジャワ古代史の一次史料である刻文研究が盛んに行われ、それらの研究に基づき歴史が構築されてきた。しかし、刻文史料の新たな発見や刻文年代の修正によって、再検討が必要である。これが本稿の目的の一つである。

そしてもう一つの目的は「王朝」を土台とした議論への批判である。古代ジャワの歴史研究においては、長年にわたり「王朝」の存在を前提とした議論が多くなされてきた。古代ジャワの王朝研究では、大きく分けて単一王朝説、二王朝説、複数王朝説がある。しかし、これらの説で議論される諸「王朝」のうち、刻文において実際にその家系を名乗っているのはシャイレンドラ王家のみである。これらの王朝議論の多くは、刻文に記された諸王をそれぞれの王朝に属する王とみなし考察を行っているところに問題がある。

そもそも刻文では、王や高官の血縁関係が記されるのは稀であり、王と前王の血縁関係が述べられることはない。また、本稿の考察対象の時期について記す『新唐書』などの漢籍資料においても同様に、王の血縁関係は記されない。刻文や漢籍の記述によって、中部

³ パナンカラナをシャイレンドラの王とする意見もある[Poerbatjaraka 1958: 259-264; Boechari 1966: 245]。

ジャワ時代の王朝を論じることには限界がある。また、現在利用できる史料だけでは、ヨルダーンが指摘するように[Jordaan 2003: 11]、刻文に記されるある人物を他の人物と同定しようとする試みはすべて失敗に終わるだろう。こうした理由により、本稿では王朝を中心に据えての議論は行わない。すべての王をある王朝に収斂して語ると、刻文に記された王を含む有力者を王朝の枠組みの中でのみ議論することになり、これら有力者の自立的な動きや彼らの社会への影響力を過少評価してしまうことになる。しかしながら、王朝の議論はさておき、刻文の記述から当時の王の統治や彼を取り巻く社会状況、社会構造を読み解くことで、当時の社会における王（王権）の位相を明らかにすることはできる。本稿では、王朝を枠組みとする歴史ではなく、王の統治の実態を考察することを通して、当時の社会構造と王のあり方を明らかにすることを目指す。したがって、この考察の中では、刻文で「ratu（王）」や「śrī mahārāja（大王）」と記される者以外の有力者についても検討し、彼らの社会的立場を明らかにする。また、「王朝」といった場合、血縁によって連綿と続く王位の継承を想起しがちである。そのため、先行研究での議論を検討する場合を除き、本稿では王統や王家という言葉を使用する。

本稿では、中部ジャワ時代の社会と王（王権）のあり方を明らかにするために、まず第1章においては、第1節にて本稿の議論に関わる先行研究の問題点について説明し、第2節では史料となる古ジャワ語刻文の性質・内容について概観する。第2章では、刻文史料に基づいた、当時のジャワの社会構造の大枠の把握を目指し、中部ジャワ時代の社会における王、領主／高官、民衆（村人）、そして寺院について明らかにする。続く第3章では、シーマ定立について、その内容、それに伴う規定、その経済的政治的意義について分析し、王の統治にとってのシーマ定立の重要性を考察する。そして第4章では、ワヌア・トゥンガ III 刻文に記された王を中心に、特に刻文の数が多いカユワンギ Kayuwani 王時代（在位 855～885 年）、バリトゥン Balitung 王時代（在位 898～910 年頃）に焦点をあて、中部ジャワ時代の王の統治を検討する。そしてこの第4章では、王位の継承は、血縁によるものではなく、王自らの力に基づいていたのではないかという仮説を導き出す。続く第5章では、現在までに議論された国家モデルを取り上げながら、中部ジャワ時代の王とはどのような存在であったのか、中部ジャワ時代の王（王権）について考察する。

そして結論として、中部ジャワ時代の王の資質はその血縁にあるのではなく、実力あるいは他の有力者を服従させる力にあったことを示し、そして、王は従来単一王朝説や二王朝説で考えられていたように、王朝（王統）に属していたのではなく、領主たちの中で有力な者が王となって統治を行っていたことを明らかにする。

第1章 先行研究と史料に関して

本章では、はじめに、「王朝」の議論に関する先行研究についてまとめ、その問題点を明らかにする（第1節）。次に、本稿で使用する刻文史料に関して、その特徴と内容を説明し（第2節）、また刻文の所在と刻文研究における関連文献について紹介する（第3節）。

第1節 先行研究

中部ジャワ時代を含め、ジャワの古代史はオランダ時代から多くの研究が行われている。ジャワ古代史の一次史料である刻文研究が盛んに行われ、それらの研究に基づき歴史が構築されてきた。クロムの *Hindoe-Javaansche geschiedenis* [Krom 1931] は刻文や漢籍などに基づいて編まれたジャワ古代史研究の大著である。しかし、刻文史料の新たな発見や刻文年代の修正によって、再検討が必要となった。

古代ジャワの歴史研究においては、長年にわたり「王朝」の存在を前提とした議論がなされてきた。古代ジャワの王朝研究では、大きく分けて単一王朝説、二王朝説、複数王朝説がある。単一王朝説では、シャイレンドラ王家と、マンティヤシ I 刻文に列挙されたサンジャヤ王統を一つの王朝と考える [Poerbatjaraka 1975 (1952); Boechari 1966, 2012d; Marwati 2008]⁴。そして、7 世紀の刻文とされる、古マレー語のソジョムルト刻文に記されたダプンタ・セーレーンドラ *Dapunta Selendra* をシャイレンドラ王家の始祖とする [Boechari 1966: 245-247]。二王朝説はシャイレンドラ王朝のほかに、サンジャヤ王朝（マタラム *Mataram* の諸王）があったとする。カスパリスはこの二つの王朝が 9 世紀半ばに婚姻によって統合されたとする [Casparis 1956]。しかし、ボスはサンジャヤ王朝とシャイレンドラ王朝のほかにシヴァ教を信奉する第三の王朝（ハル *Halu* 王朝）が存在していたことを指摘し [Bosch 1958: 319]、ナールスンは多数クラトン *Kraton*（王宮）説を唱えた [Naerssen 1977: 38-40]⁵。またヨルダーンは、ジャワには一つの仏教を信奉する王朝（シャイレンド

⁴ 深見がすでに指摘しているように、このような単一王朝の議論はヒンドゥー教と仏教という宗教的な違いを重視する傾向が強く、具体的には単一王朝の二分家説を採る [深見 2001b: 297]。また深見は、この単一王朝説には、全ジャワ的な規模での統一国家が存在したという印象を与える漢籍の記述が影響していると指摘する [深見 2001b: 297]。

⁵ ナールスンは当時の王朝・統治者に関して次のように述べる。「873 年頃までの古い諸刻文（カユワング王によって発布された）に反映されるように、ひとつの王朝が中部ジャワのような広大な領域に対して中央集権化された行政を持って統治していたと想像するのは難しい。この時期に少なくとも二つあるいは三つのクラトンが存在し、その統治者は諸ワヌアの収入の処分権を持っていた。（つまり）クドゥの刻文に記されたサンジャヤ王朝の諸統治者、ハル（ワライン *Walaing*）の王朝とマレーの素性を持つパタパーンのラカ（彼の古マレー語刻文によってわかる）である。主導権とその諸クラトンを集権化する試みの闘争があったことは確かである。これらはバリトゥン王の統治以前には実現しなかった。しかしながら、この時、バリトゥンが統治権を得る以前だけでなく、証拠はあまりにもないが、ヒンドゥー・ジャワ時代全体においても、他の統治者の政治的力を我々は過少評価すべきでない。」 [Naerssen 1977: 39]。そして、「我々は、依然としてヒンドゥー化されておらず、筆記の手段を持っていなかった諸クラトンがあったという可能性を考慮すべきである」と

ラ王朝)と二つのシヴァ教を信奉する王朝(サンジャヤ王朝とパタパーン王朝)があったと主張している [Jordaan 2009: 38]。ザカロフは、シャイレンドラと、一般に刻文でマタラムと呼ばれるサンジャヤ王統の他にも多くの政体があったと主張し、ほかにワライン Walaing つまり訶陵と、ブーミ・サンバーラ bhūmi sambhāra が中部ジャワにはあり、さらに小さな政治的集団が存在していたと主張した[Zakharov 2012: 82-84]⁶。しかし、これらの諸「王朝」のうち、刻文において実際にその家系を名乗っているのはシャイレンドラ王家のみである。

そして、1983 年に、バリトゥン王以前の諸王をその即位年とともに記すワヌア・トゥンガ Wanua Tengahan III 刻文が発見されたことで、従来の王朝の見解の再考が促された。クセンはこの刻文に記載された諸王に血縁関係があるものとして系譜図を作成し、これらの王をサンジャヤ王統の王と考えている[Kusen 1994]。しかし、このワヌア・トゥンガ III 刻文には諸王間の血縁関係は記されておらず、クセンの系譜の再考は推測の域を出るものではない。クリスティは、この刻文に記された「rahyangta i hāra」をサンジャヤの従属的な「弟」で、漢籍に訶陵 He-ling (Holing) として知られる国の統治者であり、この仏教徒の統治者がシャイレンドラ王家に属していた可能性を指摘し、この訶陵の統治者に関係する女性とサンジャヤの結婚によって、両王家が 8 世紀半ばに統合されたに違いないとする[Christie 2001: 34]。Sejarah Nasional Indonesia (2008) (以下、SNI) は単一王朝説をとり、すべての王をシャイレンドラ王朝と結びつける[Marwati 2008]。深見はワヌア・トゥンガ III 刻文の記述に基づき、カスパリスの二王朝説の同定や解釈における問題点を挙げ、刻文の諸勢力を二王朝に収斂させることには無理があるとする[深見 2001b: 298-300]。またヨルダーンは、クセンとクリスティの説を検討し、彼らの歴史的分析には弱点があることを指摘した[Jordaan 2003: 2-10]⁷。

ヨルダーンの見解をまとめると次の通りである。ワヌア・トゥンガ III 刻文はジャワの有力な諸王の名を記しているだけであり、外国起源を理由にシャイレンドラの王たちはこれに含まれなかった⁸。このことは、彼らの名をワヌア・トゥンガ III 刻文の諸王の名と同定

指摘する[Naerssen 1977: 39.n.88]。ナールスンが指摘するように、刻文を残さなかった統治者の存在も考慮されるべきだが、しかし、他を支配する力を持っていた統治者が文字を持たずにいたということは考え難い。いずれにせよ、本稿は文字資料である刻文の記述から考察を行うものであり、刻文に記されない統治者について記述することはできない。

⁶ ワラインと訶陵の同定はダメイの説に基づくものであるが、岩本によれば「訶」の文字が「wa」の音を写すことはない[岩本 1962: 63-64]。

⁷ ヨルダーンが指摘するように、クセン[1994]の分析は歴史的事実と理論的可能性を混同しており、さらに単一王朝を念頭に行われている[Jordaan 2003: 2-10]。そのため年代を根拠に刻文に記載された諸王を同定し、一つの王朝に属するように考察している。同様に、クリスティ[2001]の諸王の同定も年代に基づく。

⁸ ヨルダーンがシャイレンドラを外来王家とする理由は次の二点である。第一に、マンティヤシ I 刻文とワヌア・トゥンガ III 刻文に記載された統治者たちとシャイレンドラ王たちとの同定に、誰も成功していないことである。第二に、ジャワにおける彼らの統治の確立が多くの外因的な変化、つまりプレ・ナーガリー文字、同じ文字で銘が冠せられた白檀

するいかなる試みも失敗に終わることを意味している。マンティヤシ I 刻文のリストのジャワの諸王の統治が十分ではなかったこと、ジャワ人ではない多くの王がこの時期に中部ジャワを統治していたという確固たる証拠がある。その一つに、カユムウンガン Kayumwungan 刻文とガンダスリ Gandasuli II 刻文で彼とその家族に王族の威厳(royal dignity)を主張したラカイ・パタパーン／パルタパーン Rakai Patapān／Partapān の名前がこの刻文には記されないことである⁹。二つ目に、中部ジャワにおける少なくとも二つの王国の中心の存在が『新唐書』「列傳」(卷二百二十二下、南蛮伝下驃)の 800 年頃の中国へのピュー(驃)の使節団について記した箇所を確認できる¹⁰。最後に、これらのワヌア・トゥンガ III 刻文とマンティヤシ I 刻文に記されたどの王も自身を「シャイレンドラ王家の装飾」であるという伝統的なフレーズ、あるいは「英雄的な敵の殺戮者」のようなシャイレンドラの別名で言及する刻文が今のところ見つかっておらず、また反対に、シャイレンドラの王たちが彼ら自身にジャワのラカイ称号を冠していないという事実がある[Jordaen 2003: 3-4]。これらのヨルダーンの指摘すべてには首肯することはできないが、少なくともシャイレンドラ王家を名乗る王たちの他に、マンティヤシ I 刻文やワヌア・トゥンガ III 刻文のリストに含まれる諸王、その他の有力者の存在が刻文には確認できる。いずれにせよ、中部ジャワ時代の王がいかなる存在であったのかを語るために、これらの諸王や有力者を「王朝」に収斂して語る必要はない¹¹。

花模様の銀貨、マハーラージャ称号の導入、「東への」ジャワの王都の移動(必ずしも東部ジャワである必要はない)、突然の大乗仏教建造物を伴うからである [Jordaen 2006: 5-6]。ヨルダーンのこれらの指摘は的を射ている。例えば文字に関してしてみると、シャイレンドラの刻文以前にジャワで使用されていた文字は南インド由来のブラーフミー系文字(パッラヴァ文字)であり、またシャイレンドラ以後の 9 世紀の刻文ではそのブラーフミー系文字から派生した古ジャワ文字が使用されている。このように、プレ・ナーガリー文字の使用はシャイレンドラに限られる。

⁹ SNI は、おそらくラカラヤーン・パタパーンはシヴァ教を信奉し続けたシャイレンドラ王家の成員の一人であるとし、王として権力を持っていた彼の親族(カユムウンガン刻文に記されたサマラトゥンガ)が彼の地域に仏教チャンディを建てた時に、そのシーマとなるように土地を寄進したと考える[Marwati 2008: 145]。また、ガンダスリ II 刻文には、カラヤーン・パルタパーンの親族が記され、彼のおじとしてウィシュヌラタ Wiṣṇurata という人物が確認できる。SNI は、このウィシュヌラタをリゴール B 刻文に敵を殺す者として記されるウィシュヌ(SNI はラカイ・パナンカランと同定している)とおそらく同じであると指摘し、ラカイ・パタパーンはシャイレンドラ王家の成員であり、ラカイ・パナンカランの甥、サマラトゥンガのいとこと考える[Marwati 2008: 146]。

¹⁰ 『新唐書』の原文は「經多茸補邏川至闍婆，八日行至婆賄伽盧(多茸補邏川を経て闍婆に至り、八日行けば婆賄伽盧に至る)」である。しかし、この驃国に関する箇所で言及される闍婆はジャワではなく、マレー半島に同定すべきとする意見があり[藤善真澄 1990: 90-91]、これを根拠にジャワに二つの王国が存在していたとは言えない。

¹¹ 単一王朝説は言うまでもなく、二王朝説も刻文に記された諸王や有力者をそれぞれの王朝を構成する成員として組み込み議論する。また、複数王朝説では、シャイレンドラ王朝とサンジャヤ王朝以外に、ハル王朝やパタパーン王朝があったことを指摘するが、彼らをシャイレンドラ王朝のような「王朝」(あるいは「王家」)として、同列に語るには史

上で述べた先行研究のうち、ナールスン、ヨルダーンやザカロフらはシャイレンドラ王家やサンジャヤ王統以外に、複数の政体（王家）があったことを指摘し、単一王朝説などのように「王朝」の枠組みに当てはめた議論はしていない。しかし、複数の政体があった例として挙げられる王朝あるいは王家の存在に関しては疑問がある。例えばザカロフはブーミ・サンバーラを「国」とするが、シャイレンドラ王家やサンジャヤ王統と同等の政体（王の下に高官がいる、つまり「国」）と呼べるものではなかっただろう（第4章第1節にて論じる）。本稿の考察では、彼らの議論にも言及し、その問題点の検討を行う。

先行研究には、王朝だけでなく、当時の社会構造や交易に関して論じたものがある。特にバレット・ジョーンズ[Barrett Jones 1984] やクリスティ[Christie 1983; 1991]の研究が代表的である。バレット・ジョーンズは交易や生産活動、シーマ定立の意義、ラクルヤンやパムグトなどの高官の称号や役職などについて刻文の記述から論じている。そこでは、刻文の中にみえる王や役人、村内の人々やその職種などについて細かな考察が行われてはいるが、それぞれが個別に議論されており、彼らのつながりや当時の社会の全体像がみえにくい。社会のなかで、王や高官（宮廷）、村、寺院がどのように位置づけられるのか明確ではない。本稿では、王や高官、村、寺院がジャワ社会のなかでどのような活動を行い、互いにどのような関わりを持っていたのかをより明確に論じる。次にクリスティは、古代ジャワの経済（生産）活動[1986; 1992]、社会構造[1983; 1991]、貨幣[1996]、国家モデルの検討[1986]など多くの研究を行った。特に、2001年の論考ではワヌア・トゥンガ III 刻文の記述から、そこに記された諸王について再検討を行った。シャイレンドラの諸王との同定は主に統治年を根拠に行われており、納得できる同定ではないが、それぞれの王に関する考察は比較的詳細に論じられている。また1986年の論考では、「マンダラ論」や「多数クラトン説」などの国家モデルの検討を行い、どのモデルも初期ジャワ（8世紀～13世紀頃）には当てはまらないと結論付けている。本稿の対象時期では、史料不足により、これらのモデルの核となる王の宗教的側面（国家儀礼など）についてはわからないことが多く¹²、必然的にこれらの国家モデルに当てはまらない部分が顕著となるため、これらのモデルをもって議論するには限界がある。そのため、本稿では国家モデルを中心に据えて議論は行わないが、第5章において、当時の王のあり方を考察する際に、より明確にその位相を示すために、クリスティのこれらのモデルに対する見解を参照しながら、国家モデルを採り上げ検討を行う。

料不足である。

¹² この時代の史料は刻文が主要な史料となるが、その多くがシーマ定立の記録を内容としている。これらの刻文からは王がヒンドゥー教や仏教を信奉し、それらの寺院にシーマの恩恵を与えていたことがわかる。しかし、王による国家儀礼などの明確な記述はなく、その宗教活動の内実は不明である。また、シーマが与えられた寺院に関しても、王との繋がりを明確に示すものはない。このように、当時の王の宗教的な側面は不明な点が多く、王の称号や呪詛の内容にその一端が垣間見えるだけである。

第2節 中部ジャワ時代の刻文

次に、本稿の一次史料となる刻文について、その特徴と内容を説明する。

中部ジャワ時代を含め、ジャワの古代史における一次史料は刻文である。刻文とは石や金属に刻まれた文字を指す。インドネシアで発見された刻文の多くは、石や銅板に刻まれている。現在までにインドネシアで発見された古代の刻文は 1300 点を超える（アラビア文字による墓碑を除く）。本稿で史料とするのは中部ジャワと東部ジャワで発見された、10 世紀前半までの刻文である。本稿で使用した刻文は附表 1 に記した 229 点である。

中部ジャワの最初期の刻文は 7 世紀頃と推定される。これらの刻文には紀年がなく、使用された文字の字体から年代が推定されている。ジャワで最古の紀年を持つ刻文は 732 年のチャンガル刻文（中部ジャワ出土）である。8 世紀の刻文は 10 点に満たないが、9 世紀に増加し、928 年までに約 130 点の刻文が知られている。一部は東部ジャワで発布された刻文であるが、大半が中部ジャワのものである。しかし、中部ジャワでは 929 年以降の紀年を持つ刻文はほとんど発見されず、929 年を境に東部ジャワにおいてのみ刻文は作られたようである。

ジャワの刻文は一般的に石と銅板に刻まれているが、稀に彫像の裏や台座、金葉（金を薄く伸ばした板状のもの）などにも彫られている。カンボジアやチャンパーの遺跡では、祠堂入口の柱に刻文が書かれる場合も多いが、ジャワでは祠堂に刻文を彫ることはほとんどない¹³。刻文が刻まれる石や銅板の大きさは定まっていないが、石の場合は高さ 60cm～120cm、幅 50cm～80cm、銅板の場合は縦 15cm 前後、幅 30～40cm のものが多い。刻文は石の場合、表面だけでなく裏面や左右の側面に彫られることもある。銅板刻文の場合は、表面のみ、あるいは表面と裏面に刻まれ、複数枚からなることもある。

ジャワで最古の紀年を持つチャンガル刻文では、南方系のブラーフミー文字に起源を持つ文字（一般にパッラヴァ文字と呼ばれる）とサンスクリット語が使用されている。サンスクリット語の刻文の多くはインドの韻律に則って書かれている。ジャワでは 8 世紀後半になるとパッラヴァ文字の要素を残した古ジャワ文字が使用され始める。また、同時期に北インド系の文字であるプレ・ナーガリー文字で刻まれた刻文が数点ある。9 世紀に入ると、サンスクリット語に代わり古ジャワ語の使用が圧倒的となり、9 世紀以降の刻文のほとんどは古ジャワ文字・古ジャワ語で記されている。若干数ではあるが、古マレー語やサンスクリット語の刻文も見つかっている。

ジャワで発見された 8 世紀以前の刻文では、主に王への賛辞、リングや寺院の建立、神への祈願などが記される。9 世紀になると、シーマ *sīma* と呼ばれる不輸不入地の設置に関する記述が圧倒的に多くなる。シーマは主に寺院のために定立されるが、公共事業や臣下への王による褒賞を目的として定立される場合もある。

¹³ チャンディ・プラオサン・ロールでは、主祠堂を取り囲む複数の副祠堂に、その寄進者と考えられる者の名が刻まれている。また、東部ジャワのチャンディには建立年が刻まれることもあるが、中部ジャワでは見られない。

シーマ定立を内容とする刻文は主に、以下の項目によって構成される。

1. 日付。年はインド起源のシャカ暦が主に使用される。続けて月名・日・白分／黒分・週（1週間が6日・5日・7日から成るそれぞれ）の曜日、月宿などの情報を記すものもある。
2. シーマを定立した者（王や領主／高官）。王の命令や恩恵によるシーマ定立では、王や彼の命令を伝える一連の高官らが記載される。
3. シーマ定立の理由、シーマからの利益を得る寺院（あるいは公共事業など）。
4. シーマに関する記述（シーマとなる土地あるいは村、そこにかかる税の状況、水田やその他の土地の大きさ）。
5. シーマ定立によって生じるいくつかの結果、権利や義務。シーマに立ち入りが禁止される税徴収者がこの箇所最初に来る。次に、定立に伴うシーマへのスカドゥカ *sukhadukha*（喜びと悲しみ）¹⁴に関する権利の所在、シーマあるいはシーマが定立された寺院などの義務、手工業者と彼らに関する税の変化の記述、交易・生産規定。
6. 高官や役人、近隣の村からの証人への贈り物のリスト。
7. 定立に伴う儀式の記述（供物のリスト、儀礼など）。
8. 共食を伴う宴会（提供された飲食物のリスト、参加者や、踊りや音楽を演奏する者への言及）。
9. シーマの決定に反する者への呪詛。
10. この刻文を書いた書記官の記述。

すべての刻文が上記の内容を含むわけではなく、1と2の項目だけを記すなど、短文のものも多い。また、内容の順番は刻文によって異同がある。実際に、ルカム刻文を例にその内容を見ると、参考資料1のように分割できる。ルカム刻文では、儀式の供物が列挙された後で、参加者たちによる共食が行われ、その後にシーマの決定に違反する者への呪詛を含めた儀式が記述される（そのため、項目7の途中に項目8が入る）。そして最後に書記官ではなく、そのシーマ定立を実際に取り仕切った人物たちの名が記されている（そのため、10の項目はない）。

シーマ定立に関する詳細は第3章で論じる。この時代の刻文には、シーマ定立のほかに、借金問題の判決、王や高官に対しての請願を記録するものもある。数は少ないが、これらの刻文も当時の社会構造を明らかにするために重要であり、本稿の考察対象である。

第3節 刻文史料の所在と関連文献

ジャワの刻文の多くは、ジャカルタにある国立博物館（Museum Nasional Indonesia）に所蔵されている。石の刻文は「D」、銅板刻文には「E」が所蔵番号の最初に付与されている。中部ジャワから発見された刻文に関しては、国立博物館のほかに、ジョグジャカルタ考古

¹⁴ 第3章第1節で述べるが、殺人や遺体の放置などシーマ内での好ましくない出来事を指す。

遺物保存局 (Balai Pelestarian Peninggalan Purbakala Yogyakarta¹⁵)、中部ジャワ考古遺物保存局 (Balai Pelertarian Peninggalan Purbakala Jawa Tengah¹⁶)、ジョグジャカルタのソノブドヨ博物館 (Museum Sonobudoyo)、ソロのラディア・プスタカ博物館 (Museum Radya Pustaka) などにも数点の刻文が所蔵されている。インドネシア国外では、オランダのライデンにある民族学博物館 (Rijksmuseum Volkenkunde) にも数点の刻文がある。

紀年のあるジャワの刻文に関しては、仲田による目録 *An inventory of the dated inscriptions in Java* [Nakada 1982]がある。この目録には、約 600 点の刻文の名称、紀年、発見地、所蔵場所、関連文献などの情報が掲載されている。またダメイによる *Etudes d'épigraphie indonésienne : III Liste des principaux inscriptions dates de l'Indonésie* [Damais 1952]は、インドネシアの紀年のある刻文の目録を掲載している。ジャワ (8 世紀から 15 世紀) の刻文 210 点、バリ (9 世紀から 15 世紀) の刻文 67 点、スマトラ (7 世紀から 14 世紀) の刻文 13 点、スンダ (11 世紀) とマドラ (14 世紀) の刻文各 1 点が記載されている。この目録にはシャカ暦と西暦の紀年のほか、言語、参考文献、王名などをあげている。ジャワの刻文リストには他に、紀年、発見地、参考文献を記載した *Répertoire onomastique de l'épigraphie Javanaise* [Damais 1970]がある。そのほかオランダ時代から、刻文の写真や拓本がとられており、ジャカルタの考古学研究センター Pusat Penelitian Arkeologi Nasional に保存されている。写真の場合、所蔵番号の前に「OD」あるいは「DP」を伴う。

オランダ時代から現在までのジャワの刻文の集成に関して、以下に主なものを紹介する。*Kawi Oorkonden* [Cohen Stuart 1875]では、30 点の刻文をとりあげ、ローマ字転写とオランダ語による解説を行っている。*Oud-Javaansche Oorkonden* [Brandes 1913]では、156 点の刻文がとりあげられ、うち 125 点のローマ字転写、発見地などの情報が記載されている。*Prasasti Indonesia II* [Casparis 1956]には、スマトラ (7 世紀頃)、ジャワ (9 世紀頃) で発見された 10 数点の刻文のローマ字転写、英訳、解説が含まれている。*Corpus of the inscriptions of Jawa (up to 928 A.D.)* [Sarkar 1971-1972]では、中部ジャワ時代の刻文のローマ字転写 (先行研究からの引用)、英訳、解説が行われている。なかには、解説のみで転写の一部分しか掲載されていないものもある。

さらに、中部ジャワ時代の刻文を分析し当時のジャワ社会を考察した研究書であるバレット・ジョーンズの *Early tenth century Java from the inscriptions* [Barrett Jones 1984]には、考察に使用した刻文のリストと 6 つの刻文のローマ字転写と英訳 (刻文によって転写あるいは訳のみ) が掲載されている。ここに掲載されている刻文のローマ字転写と英訳は、バレット・ジョーンズが従来の転写あるいは翻訳を改訂したものである。また 9 世紀から 10 世紀のシーマ定立と宗教建造物に焦点をあて、刻文の記述を考察した *Sima dan bangunan*

¹⁵ 著者が 2011 年に調査を行った後、2012 年に名称が Balai Pelestarian Cagar Budaya Daerah Istimewa Yogyakarta (BPCB DIY)に変更された。

¹⁶ 同じく、著者が 2011 年に調査を行った後、2012 年に名称が Balai Pelestarian Cagar Budaya Jawa Tengah (BPCB Jateng)に変更された。

keagamaan di Jawa abad IX-X TU (9～10 世紀のジャワにおけるシーマと宗教建造物) [Riboet 2003]にも、10 点の刻文のローマ字転写とインドネシア語訳、発見地、形状などの情報が掲載されている。ここには、上記の集成には掲載されていない刻文が含まれている。ただし、ローマ字転写に関しては長母音などの特殊記号がついていない場合もあり、完全な転写とはいえない。

国立博物館所蔵刻文の集成には、*Prasasti Koleksi Museum Nasional* [Museum Nasional 1985-1986]があり、銅板刻文(88 点)と指輪(43 点)や金葉など金属に彫られた刻文のローマ字転写、所蔵番号、発見地、形状、紀年、王名を記している。石の刻文に関しては未刊行である。

ジョグジャカルタ考古遺物保存局に所蔵されている刻文に関しては、*Pusaka aksara Yogyakarta* [Herni Pramastuti, ed. 2007]に写真とローマ字転写、インドネシア語訳、発見地、所蔵番号、形状等の情報が掲載されている。

中部ジャワ時代の刻文のローマ字転写・翻訳に関しては、以下の論文も参考になる。古ジャワ文字刻文をローマ字に転写した、仲田浩三「インドネシア刻文の古文書学的研究 (I) ～ (VI)」(『鹿児島大学史学科報告』35-40) [1988-1990]、サンスクリット語刻文を翻訳、解説した、岩本裕「ジャワ碑文研究 (1) ～ (4)」(『南方文化』8-11) [1981-1984]である。

上記で紹介した文献以外にも、各研究機関刊行の機関誌など、刻文のローマ字転写や翻訳を掲載しているものがある。しかし、すべてを列挙すると煩雑になるため、ここでは割愛する。また本稿で使用する刻文の転写・翻訳に関して参考にした文献は附表 1 の刻文リストの翻字・翻訳の項目に挙げている。附表 1 に挙げた刻文の多くは著者が実物を確認しているが、すでに紛失したものや磨滅等の理由により確認できないものは、その転写を先行研究に拠っている。

追記 表記方法と略号

本稿では、古ジャワ文字のローマ字転写を記載する際には附表 2 の文字の転写に従い、古ジャワ語を表記する。また、サンスクリット語刻文に記載された王名などの単語は、「w」は用いず「v」を使用する。文字は同じだが、サンスクリット語では「v」、古ジャワ語では「w」とするのが一般的である。先行研究の転写を利用する際にも、古ジャワ語刻文であるなら「w」を用い、サンスクリット語刻文は「v」とし、統一する。サンスクリット語の転写は基本的に、先行研究の転写表記に依拠し、また古ジャワ語刻文でも、磨滅などの理由により自身で確認できなかったものに関しては先行研究の転写に依拠する。また、刻文の文字には大文字・小文字の区別はないため、ローマ字で表記する際には固有名詞も含め小文字で示す。さらに、本稿の対象時期には古マレー語による刻文も若干数ある。古マレー語の場合は古ジャワ語と同様に表記する。

古ジャワ語およびインドネシア語のカタカナ表記において、子音で終わる単語を表記する場合は促音を入れずに表記する。例えば、「pamgèt」は「パムグット」ではなく「パムグ

ト」とする。また刻文名に関しても同様である。サンスクリット語の「e」と「o」は長母音を表すため、カタカナ表記でもそれに従う。また、古ジャワ語刻文でサンスクリット語名を冠す人物名や神名も同様とする。

さらに、古ジャワ語やサンスクリット語の単語を表記する際には、刻文の引用であるなら、刻文の原文の表記に準ずるが、刻文の引用ではなく一般的な単語を表記する場合、古ジャワ語は Zoetmulder [1982]、サンスクリット語は Monier William [1872]の見出し語の表記を用いる。

また、刻文の原文あるいは内容を引用する際には、引用箇所を原文の後ろに[]を用いて記す。例えば、銅板刻文 2 枚目の 10 行目を引用した際は[2: 10]、碑文の裏面の 10 行であれば[裏面: 10]と記す。先行研究において、何枚目かの区別や、表面と裏面の区別のために数字ではなくアルファベットを用いる場合、同様にアルファベットで記載する。刻文が一面のみの場合は行数のみ[]に記載する。

本稿では、一般に略号を用いて記される文献は同様の略号をもって記載する。その他、共著であり、かつ執筆箇所が特定できない文献は、執筆者を表記すると長くなるため、便宜上略号をもって表記する。本稿で用いる略号は以下のとおりである。

BEFEO : *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. Hanoi: F.-H. Schneider.

BKI : *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*. (1949 年に *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* に改称される。)

HJG : Krom, N.J. 1931. *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*. 's-Gravenhage: Nijhoff. (The revised edition).

INI : *Inscripties van Nederlandsch-Indië, uitgegeven door het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen* (1940). Batavia: Kon. Drukkerij de Unie.

JASBL : *Journal of the Asiatic Society of Bengal* (Letters, from 1935).

JBG : *Jaarboek van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*.

JGIS : *Journal of the Greater India Society*.

KO : *Kawi Oorkonden*. [Cohen Stuart 1875]

MISI : *Madjalah Ilmu-ilmu Sastra Indonesia*, Jakarta.

MKAWL : *Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, Afdeling Letterkunde*.

NBG : *Notulen van de Algemeene en Bestuurs-Vergaderingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*.

OJO : *Oud-Javaansche Oorkonden*. [Brandes 1913]

OV : *Oudheidkundig Verslag*.

PKMN : *Prasasti koleksi Museum Nasional*. Jakarta: Proyek Pengembangan Museum Nasional. [Museum Nasional. 1985-1986]

RCO : *Rapporten van de Commissie in Nederlandsch-Indië voor Oudheidkundig onderzoek op Java*

en Madoera.

SNI : *Sejarah Nasional Indonesia II Zaman Kuno*. Jakarta: Balai Pustaka. [Marwati 2008]

TBG : *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*.

TPB : *Tiga Prasasti dari masa Balitung* (バリトゥン時代の3点の刻文). Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional. [Titi 1982]

VBG : *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*. (1932 年以降「het Bataviaasch」の部分が「het Koninklijk Bataviaasch」に改称される。)

VG : *Verspreide Geschriften*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff. [Kern, H. 1913-1936]

第2章 社会構造¹⁷

本章では、刻文史料に基づいた、当時のジャワの社会構造を概観し、中部ジャワ時代の社会における王、地方領主／高官、民衆（村人）がどのように社会を構成していたか、そして相互にどのような関係を持っていたのかについて明らかにする。

第1節 王と高官

刻文の大半を占めるシーマ定立は、「シュリー・マハーラージャ śrī mahārāja（吉祥なる大王）」の称号を持つ王の命令 *ajña* あるいは恩恵 *anugraha* によるものが多い。王は9世紀後半にシュリー・マハーラージャの称号を冠する以前には、古ジャワ語で「ラトゥ *ratu*」と記された。王に関しては後述する。このシーマ定立の命令や恩恵がシーマの定立を許された者に伝えられる際に、ラクルヤン *rakryan*、ラカラヤーン *rakarayān*、ラカイ *rakai* やラケ *rake*、サムグト *samġġt*／サムガト *samgat* やパムグト *pamġġt*／パムガト *pamgat* という称号が冠せられる人々が刻文に列挙される。これらの人々は、王宮の高官たちであると考えられる [Barrett Jones 1984: 62; Casparis 1986: 52, 56-57]。王と高官が列挙された最初の刻文は850年のトゥラン・アイル *Tulang Air I* 刻文である¹⁸。これらの称号は彼らの支配領域と関係し、次第にその称号が高官の地位や役割を示すようになる。

まず、ラクルヤンから検討を行う。サルカルは、ラクルヤンの異形であるラカラヤーン *rakarayān* は *ra* (*da*) + サンスクリット語の *kārya* あるいは *kriyā*（行為する）+ *an* から成るとし、「仕事を遂行する高貴な人」を意味し、ラカ *raka* はその省略形だとしている¹⁹ [Sarkar 1971: 54]。この称号の後に、ヒノ *hino* やシリカン *sirikan* などの語が続く。ラクルヤンの称号の後にくるヒノやシリカンなどの語は、ワトゥク *watġk* / *watak* の後に続く語と同じである

¹⁷ 本章は、著者が2010年1月に提出した修士論文「古代ジャワにおける社会構造—9世紀から10世紀前半の古ジャワ語刻文からの考察」（東京外国語大学大学院）[山崎 2010]に、大幅に修正・加筆を行ったものである。

¹⁸ この刻文はラカイ・パタパン *rakai patapan* によるシーマ定立（王の命令ではない）を記録するが、この時の王 *ratu* はラカイ・ピカタン *rakai pikatan*、パティ *patih* はラカイ・ウカ *rakai wka*、シリカン *sirikan*、ティルアン *tiruan*、マンガフリ *mangahuri*、ハララン *halaran*、パラルヒャン *palarhyang*、ウラハン *wlahhan*、ダリナン *dalinan*、パンクル *pangkur*、タワーン *tawān*、ティリップ *tirip*、ランピ *langpi*、ワディハティ *wadihati*、マクドウル *ma(k)udur* であると記されている。ここでは、王の個人名は記されないが、高官たちはその名が記されている。

¹⁹ 語の成り立ちから言えば、サルカルが指摘するように「*raka*」が省略形であるが、刻文では「*rakai/rake*」（「*raka*」+前置詞「*i*」）という表記が多いことから、「*rakai/rake*」をラクルヤンの省略形とするほうが妥当である。ズットムルデルは「*rakryan*」と「*rake*」の項目を分け、前者を「人の階級を示す」とし、後者を「集団の長」としている [Zoetmulder 1982: 1491]。本稿の対象とする時代の刻文では、「*rakryan*」や「*rake*」の明確な使い分けは確認できず、同じ人物でも両方の用語が使用されている。そのため、本稿では「*rakryan*」や「*rake*」を区別せず、異形として扱う。本稿でラクルヤンと表記した場合、ラケ、ラカイなどの異形を含む。ただし、刻文や先行研究の引用部分では原文にしたがって、ラクルヤン、ラケ、ラカイなどを区別して記述する。

ことが多い。ワトゥクには、「集団、仲間」という意味がある[Zoetmulder 1982: 2223]。一般に「wanua i pakalangkyañan watak pagarwsi」[パングムラン Panggumulan A 刻文: 902 年]のように記述される。ワヌア wanua は居住場所、村を指し、パカランキアングアン pakalangkyañan は地名である。ワトゥクはワヌアの上に位置する行政単位として捉えることができ、「パガルウシというワトゥクに属するパカランキアングアン村」と解釈できる²⁰。またこの刻文にはラケ・パガルウシ rake pagarwsi という語を冠したプ・ウィーラビクラマ pu wīrabikrama という人物が確認できる。ウィーラビクラマは人名、プは人名につけられる冠詞的な役割を持つ語である。この例に見られるように、ラクルヤンに続く語はワトゥクに続く語と同じである場合が多く、ラクルヤンの称号を持つ者は、ラクルヤンに続く語と同じ語を後ろに持つワトゥクを統治していたと考えられる。また、ワトゥクとワヌアに続く語は同じ場合もあるが、バレット・ジョーンズは、ラルクヤン、ワトゥク、ワヌアの後に来る語を考察し、ラクルヤンはワヌアよりむしろワトゥクと関係していたと結論付けている[Barrett Jones 1984: 75]。

また、ラクルヤン称号は支配領域（ワトゥク）を示すだけではなく、何かしらの地位を示していた²¹。例えば、ダクシャ時代の刻文であるスギ・マヌク刻文（915 年）では、「rakryān binihaji parameśwarī」が贈り物を受け取る人のリストに記されるが、binihaji は王の妻、parameśwarī は王妃を指す言葉である。しかし、ラクルヤン称号が示す地位が明確にわかるものは少ない。中部ジャワ時代の古ジャワ語刻文で頻繁に記されるラクルヤンは、ヒノ hino、ハル halu、シリカン sirikan、ウカ wka /wēka たちである。ヒノは皇太子の地位にある者が冠する称号と考えられているが[Riboet 2003: 148; Boechari 2012a: 118-121]、確かな根拠はない[Barrett Jones 1984: 99-100]²²。また、ウカに関しては古ジャワ語で「子」という意味があり、カスパリスは王の息子の一人に与えられた称号の可能性があると指摘する[Casparis 1986: 57]。

しばしば、刻文にはラクルヤン・マパティという語が記される。バレット・ジョーンズは、このラクルヤン・マパティが王の次に最も力のあった役人を指し、しばしばヒノがこの語に続くとは指摘している[Barrett Jones 1984: 106]。実際に、ランドゥサリ刻文、サンサン刻文、マンティヤシ I 刻文などでは「rakryān mapatih i hino」と記され、ラクルヤン・マパティはヒノを指している。一方、ラタウン Ratawun I 刻文では「rakarayān mapatih i wka pu catura」とあり、ここではウカがマパティとして記載されている。また同刻文では、「彼（シーマの定立者であるラカラヤーン・マパティ・イ・ウカ）はラカラヤーン・マパティに贈り物を

²⁰ 以下、村と記す場合、ワヌアを指す。

²¹ ラクルヤンの称号はもともと支配領域などの地名を表していたが、次第に地位（役職）を表すようになったと考えられる[Sarkar 1971: 52]。

²² ブハリは、ヒノは一般的に王に次いで重要な役職であったようで、それ故に王国で次に最も重要な地位である王位を継ぐ皇太子であったに違いないと推測したが、バレット・ジョーンズが指摘するように、10 世紀前半までの刻文において、この見解を支持する証拠はない[Barrett Jones 1984: 99]。

贈った mangasĕakan sira pasĕk pasĕk i rakarayān mapatiḥ」[A: 2]という文の後に、ラケ・ヒノら高官が列挙され、同様にラムウィ Ramwi 刻文では、ラカラヤーン・マパティの語の後にヒノに始まる高官たちが列挙されている。このことから、ラクルヤン・マパティはヒノやウカだけでなく、彼らに続くシリカンなどを含めた複数の高官を指している可能性がある。

次に、パムグトやサムグトについて検討する。高官のリストには、ラクルヤンのほかに、パムグトやサムグトの称号を持つ者がいる。パムグトやサムグトは相互に入れ替えが可能で、同一とされる[Barrett Jones 1984: 101-102]²³。マクドゥル makudur、ワディハティ wadihati などの語がしばしばパムグトに続く語として記述される。パムグトが述べられる場合、一般にラクルヤンの称号を持つ者の後にくる。ラクルヤンと同様にパムグトに続く語もワトックに続く語と同じであることが多く、パムグトの称号を冠する者は、パムグトに続く語と同じ語を後ろに持つワトックを統治していたと考えられる。例えば、リントカン Lintakan 刻文 (919 年) では、「wanua i pulung watak makudur (マクドゥルのワトックに属するプルンの村)」と述べられ、プルンの村はマクドゥルの管轄下にあったようである。マクドゥルやワディハティは、シーマ定立の儀式の際に儀礼を執り行うことがしばしば刻文に記され、宗教的役割を持つ役職名として捉えることもできる。また、サムガト・ピナパン samgat pinapan が住人の借金問題の判決を下したこと (907 年のグントゥル Guntur 刻文)、サムグト・ジュール samgĕt juru が外国人であると疑われた人物を現地の生まれであると認める証文を出したこと (922 年のウルドゥ・キドゥル Wuruḍu Kidul B 刻文) が知られる。このことから、おそらくパムグトら領主は彼らの領地で起こった争いを解決する義務と権限を持っていた。

これらのラクルヤンやパムグトの称号を持つ者らは、自らの出身ワトックではないワトックの長であった[Barrett Jones 1984: 75]。例えば、パングムラン A 刻文では、ラクルヤン・ワンティル rakryān i wantil であるプ・パーラカ pu pālaka は「ウラカンのワトックに属すウアタン・スギの住人 anak wanua i wuatan sugiḥ watak wulakan」である。また彼らの管轄内の村々、つまりワトックに属す複数の村は散在していたと考えられる。そしてある村は、複数のワトックに属していた²⁴。多くの研究者が指摘しているように[Christie 1983: 18; Barrett Jones 1984: 76; Casparis 1986: 58]、ラクルヤン、パムグトの称号を持つ者たちの統治していたワトックが彼らの出身地ではないこと、彼らのワトック内の村が地理的に散在していたことは、彼らに地縁的結びつきを持たせないということが王によって意図されていたと考えられる。これらによって彼らの力の拡大は抑えられていた。

すべてではないにせよ、ラクルヤンやパムグトの称号を持つ高官はもともと各地を治めていた領主であったと考えられる。ナールスンによれば、ラトゥ、ラカ raka、バガワンタ

²³ 以下、パムグトと表記した場合、パムガト、サムグト、サムガトを含む。原文を引用する場合は、それぞれ区別し表記する。

²⁴ 例えば、リントカン刻文において、ルア lua の村はルア lua とタンジュン tañjung のワトックに属している。

bhagawanta、パムガト pamgat の称号を持つ者は、ジャワ文化の変容が起こる以前に彼らの経済力を維持し確立した古代の豪族 (landed gentry) であり、9 世紀後半のカユワンギ王の時代にはこれらの多数の地方権力が次第に「マハーラージャ」の支配権に服することになった[Naerssen 1977: 39-40, 51]。そのように考えられる理由として、「ハル王朝」がラカイ・カユワンギの支配に属したことを挙げる[Naerssen 1977: 38-39, 51-52]。

863 年のウキラン Wukiran 刻文 (シヴァへの賛辞が記され、シーマ定立を記録する) には、「ハルの王の子孫であるラケ・ワラインのプ・クンバヨーニ rake walaing pu kumbhayoni puyut sang ratu i halu」[8-9]の記述が見られる。このことから、少なくともこの刻文の発布される以前に「ハルの王」が存在していたことが指摘でき、シヴァ教を奉じた「ハル王朝」が存在したと解釈される[Bosch 1958: 319; Naerssen 1977: 39]。しかしながら、「ハルの王」が存在していたことは指摘できるが、「ハル王朝」と呼ぶことができるような、連綿と続く王家や王権の継承が行われていたとは断言できない。

ハルの領主であるラクルヤン・ハルが最初に刻文に現れるのは、882 年のラムウィ Ramwi 刻文である。ここでは、高官のリストが挙げられるが、ラクルヤン・ハルはこの高官のリストには含まれていない。この刻文では、ラムウィの森を水田に変え、ラクルヤン・ハルであるプ・チャトゥラ pu catra のパスティカ Pastika にある寺院 dharmma のためのシーマにするというラケ・カユワンギの命令が記述されている。このラムウィの土地はハルのワトゥクに属している。プ・チャトゥラは、878 年のムラク Mulak I 刻文、879 年のクワク Kwak I 刻文、881 年のラタウン I 刻文などでは、ラクルヤン・ウカ rakryan wēka の地位に就いている。このプ・チャトラが 882 年のラクルヤン・ハルであるプ・チャトラと同一人物であるなら、ラクルヤン称号がウカからハルに変更されたことになる。この変更の理由はわからない。もしラクルヤン称号の変更が王によって行われるのであれば、ハルの地位は、高官リストには含まれないが、すでに王の支配下にあったのかもしれない。また、後のバリトゥン王発布のアヤム・トゥアス Ayam Tēas 刻文 (901 年) では、初めてラクルヤン・ハルが、高官のリストに含まれるようになる。後のマンティヤシ I 刻文やワヌア・トゥンガ III 刻文にも確認できる。以上のことから、カユワンギ王統治間の 882 年あるいはバリトゥン王の統治間に、ハルのラクルヤンの権利は中央の王宮に統制されるようになったと考えられる[Naerssen 1977: 50-51]。

また、891 年に自らの領域内で自立的に行動していたラカイ・カヌルハン rakai kanuruhan (バリンガワン Balingawan 刻文) は、915 年にダクシャ ḍakṣa 王から恩恵を得ており (スギ・マヌク Sugih Manek 刻文)、ラカイ・カヌルハンは、ダクシャの王宮に統制されていたと考えられる[Naerssen 1977: 53-54; Kulke 1986: 10]。

上記のように、王の支配下に組み込まれた地方の領主たちは、王の高官として統制された。850 年のトゥラン・アイル I 刻文に始まり、多くの刻文で高官のリストが記述される。バリトゥン王時代の大半の刻文に、この高官リストが記される。しばしば高官はラクルヤンあるいはパムグト称号とともに名前が記載されるので、わずかではあるが人物を辿って

いくことが出来る。例えば、バリトゥン王時代の複数の刻文でワディハティとして記されるプ・ダピト *pu ḍapit* はダクシャ王時代の刻文であるバラーハーシュラマ *Barāhāśrama* 刻文でも、ワディハティとして記されている。また、バリトゥン王時代の複数の刻文でマンフーリ *manghūri* であるプ・チャクラ *pu cakra* は、ダクシャ王時代のウィンタン・マス *Wintang Mas A* (915 年頃) 刻文ではサムガト・マンフーリ *samgat manghūri* であり、王が異なっても高官はそのまま王宮にとどまっている²⁵。またバリトゥン王の恩恵を記すクブクブ *Kubukubu* 刻文 (905 年) などでは、ラクルヤン・ヒノはプ・ダクシャ *pu dakṣa* であり、バリトゥンの次の王である。ダクシャの次の王であるトゥロドン *tlodhong* 王によって発布されたリントカン刻文では、贈り物を受け取る人々の箇所ではラカイ・ハルであるプ・シンドク *pu siṇḍok* が見える。シンドクは、トゥロドンの次の王であるワワ *wawa* 王発布のサングラン *Sangguran* 刻文 (928 年) では、ヒノとして記される[Barrett Jones 1984: 5]。

このようにバリトゥンの時代以降、ダクシャ、トゥロドン、ワワ、シンドクまで、一部であるが、高官の連続性がみて取れるのに対して、カユワンギ以前の刻文では、このような連続性は確認できない。おそらく、カユワンギの時代から徐々に他のラクルヤンを支配下に置きながら、バリトゥン時代に王の統制下にくる高官らの地位が安定してきたものと考えられる。

ラクルヤンやパムグトの称号を持つ者の刻文からわかる一般的な権利は、自らのワトゥクに属す村から一定の税を集め、自らの収入とすることである。彼らがワトゥクから税を集める権利は王から付与されたものではなく、むしろ王の統治下に組み込まれる以前に彼らが持っていた権利に基づいていたようである[Christie 1983: 20]。

これらの高官らは、彼らの下に下級の役人を従えていた。ヒノに属するパルジャル *parujar i hino* やワディハティに属するトゥハン *tuhan i wadihati* のように記述される。パルジャルは「*ujar*」が言葉の意味であり書記官を指す[Zoetmulder 1982: 2105]。トゥハンは支配権を持つ人、主人を指す言葉である[Zoetmulder 1982: 2047]。彼らは刻文において、その出身地とともに記されることが多い。彼らの出身地は彼らが属する高官のワトゥクの村の場合もあれば、他の高官のワトゥクの村の場合もある。例えば、ルカム *Rukam* 刻文 (907 年) では「タンキル・スギのマクドゥルのジュル *juru i makudur i taṅkil sugiḥ* であるプ・マニケ *pu manike* はマクドゥルのワトゥクに属すマンティヤーシの住人 *anak banua i mantyaṣiḥ watak makudur*」[1: 9-10]であるが、同刻文の「サン・ラパダン (地名?) のティリプのパルジャル *parujar i tirip sang rapaḍang* であるプ・ラーラルー *pu rālarū*²⁶はダリナンのワトゥクに属すユギハンの住人 *anak banua i yugihan watak dalinan*」[1: 17]である。

²⁵ 異なる王の下で記述される同名の人物が他にも確認できるが、ラクルヤンなどの称号が異なる場合に、彼らが同じ人物ではあるが称号 (地位) が変化しただけなのか、あるいは同名の別の人物であるのかは判断できない。刻文に記される彼ら個人の情報は、その個人名と称号のみであり (稀に出身地が記されるが)、区別することは困難である。

²⁶ TPB では「*raghū*」と読む[Titi 1982: 24]。この箇所は状態が良くないが、「*rālarū*」と読める。

次に王について検討を行う。王は9世紀半ばには「ラトゥ」と呼ばれる。「ラトゥ」は地方領主の中で最も有力な者であったと考えられる。9世紀後半になると、王は「シュリー・マハーラージャ（吉祥なる大王）」の称号を冠する。サンスクリット語で記されたカラサン刻文には「mahārāja²⁷（大王）」の語がみられるが、その後「śrī mahārāja」としてはつきりと刻文に現れるのは、ラカイ・カユワンギのトゥナハン Tunahan (873年) 刻文（古ジャワ語）が最初である^{28・29}。「śrī mahārāja」の称号のあとは、ラクルヤンの称号、名前、時に神格名を含む王の称号が続く。例えば、「śrī mahārāja rakai watukura（ラクルヤンの称号）dyaḥ balitung（名前）śrī dharmmodaya mahāsambu（神格名を含む称号³⁰）」（サンサン Sangsang 刻文：907年）である。

一般的に古ジャワ語の刻文は王朝の系譜を語ることはないが、バリトゥン発布のマンティヤシ I (907年) 刻文とワヌア・トゥンガ III (908年) 刻文においてのみ、諸王が系列的に記載されている。マンティヤシ I 刻文では、呪文が唱えられ神々が列挙される箇所、
「ムダンで以前に神格化されたもの rahyangta rumuhun ri mḍing」[B: 7-8]として8人の人物が挙げられている³¹。ワヌア・トゥンガ III 刻文では、シーマ定立の破棄と再定立³²が記述され、それを行った諸王が記される。同刻文では、王の即位年とその最後が記されており、バリトゥンを含め計13人の王が確認できる。しかし、ワヌア・トゥンガ III 刻文ではとり挙げられる王が、マンティヤシ I 刻文では、記載されていない。この2つのリストに挙げられた諸王が、どのような意図でバリトゥンによって記載されたのかは不明である³³。マンティヤ

²⁷ サンスクリット語の「mahārāja」は、語幹は「mahārājan」、主格・単数で「mahārājā」となるが、この刻文では複合語として使用され、「mahārāja」となっている。また、モニエルの辞書では語幹の形「mahārājan」を見出し語とする。しかし本稿では、サンスクリット語からの借用語であるが、「シュリー・マハーラージャ」という古ジャワ語の称号（あるいは「マハーラージャ」という「大王」を指す古ジャワ語の単語）と捉え、本文中では、引用部分でない場合に、ズットムルデルの辞書の見出し語「mahārāja」を用いて表記する。

²⁸ カユワンギは863年のワヌア・トゥンガ I・II 刻文では、ラトゥと記され、大王の称号は冠していない。

²⁹ マンティヤシ I 刻文に列挙されるカユワンギ以前の王は śrī mahārāja を冠しているが、それぞれが発布した刻文では、この称号を冠していない。

³⁰ 一般に即位名 (abhisheka) とされるが、バリトゥン王は神格名を含む称号を複数持っており、この論文では即位名とせず、王が持つ神格名を含む称号として論じる。なお、クリスティは、abhisheka を「神聖化」の名としている[Christie 2001: 28]。

³¹ この前文では、ラヒヤンタが「村を治め、寺院の主となり、王宮（クラトン）を造った sirangbāsa ing wanua sang mangdyān kahyañan. sang magawai kaḍatwan.」[B: 7]と記されている。この一文から、過去に王とはどのような存在であったかを知ることができる。

³² この刻文では水田がピカタン pikatan（地名）の僧院 wihāra のためのシーマとして定立されたが、後にシーマの地位を破棄された。しかしその後、この水田は再びシーマとして定立された。この刻文には、このような一連の水田に対する諸王の対応が時系列で記録されている。第4章で詳述する。

³³ クセンは、マンティヤシ I 刻文は正当な王位継承者として自らの正当性を示す枠組みのなかで発布され、王宮地域のすべてに対して十分に統治権を持っていた王のみが記されているとする。そしてワヌア・トゥンガ III 刻文では、その水田の所属を変えた者との結びつ

シ I 刻文で、チャンガル刻文 (732 年) を発布したサンジャヤを最初に挙げていることから、刻文に挙げられた王たちは一般的に「サンジャヤ王統」と呼ばれる³⁴。これらの諸王のうち 9 世紀から 10 世紀前半の刻文ではっきりと確認できるのは、819 年のガルン Garung 刻文に見えるラクルヤン・イ・ガルン、863 年のワヌア・トゥンガ I 刻文などのラカイ・カユワンギ、887 年のムングウ・アンタン Munggu Antan 刻文のラケ・グルンワンギ、901 年のタジ Taji 刻文などに見えるバリトゥンである³⁵。このうちガルンはラクルヤン称号のみでガルン刻文に記される。

上述のように王たちはシュリー・マハーラージャの称号を持つと同時に、ラクルヤンの称号も持っている。王も他のラクルヤンの称号を持つ者たちと同様に、ラクルヤンの称号に続く語と同じ名を持つワトックから収入を得ていたと考えられる。王も自らのワトックを支配する領主であった。クリスティは、「中部と東部ジャワ時代初期のラジャ（王）が常に同じではないが、大きなワトックと関係するラケ称号を冠していたことから、ラジャは多くの領主たちつまり（彼より）下級の統治者たちのなかの第 1 人者以上のものではなかったという印象を受ける」と指摘している[Christie 1983: 21]。実際に、バリトゥン以前のシーマ定立を記す刻文では、王以外のラクルヤンやパムグトの称号を持つ者によるシーマ定立も多い。例えば、ムラク Mulak I (878 年) 刻文で、ラクルヤン・ウカのプ・チャトゥラ pu catura は寺院のためにシーマを定立している。879 年のクワク II 刻文でも、同じ寺院のためにシーマを定立している。しかし同じ 879 年のクワク I 刻文では、シュリー・マハーラージャであるラケ・カユワンギの命令で、プ・チャトゥラは別の寺院のシーマを定立するという恩恵を与えられている。サリマル Salimar 刻文 (880 年) では、サン・パムガト・バラカス sang pamgat balakas がシーマを定立し、ラーマンタ rāmanta らに与えている。このカユワンギの時代には、クリスティが指摘したように、王はラクルヤンの称号を持つ領主たちのなかの一番の有力者として、その力を行使していた。

しかし、バリトゥン時代以後の刻文からは変化が見られる。バリトゥンの時代には、半数を超える刻文において王の命令あるいは恩恵によってシーマ定立が行われる [Barrett Jones 1984: 86-87, list12]。さらにシンドク王の時代には、王の命令によるものがほとんどで、ラクルヤン、パムグトの称号を持つ者が自立的にシーマを定立することはない。少なくともバリトゥン王の時代とシンドク王の時代に、王の力が伸長したものと考えられる。バリトゥンは東部ジャワにも刻文を発布しており、中部ジャワだけでなく東部ジャワにも力を及ぼしていたと推察される。また、彼の称号をみると、901 年のタジ刻文でバリトゥン王は「śrī mahārāja rake watukura dyah balitung」という称号と名前前で述べられているが、同年のア

きのなかで出され、水田の所属を変えた者と関係を持つすべての統治者がリストに含まれたと結論付けている[Kusen 1994: 91]。第 4 章で詳述する。

³⁴ サンジャヤは「śrī mahārāja」の称号は冠せられず、「ratu（王）」と記される。

³⁵ ディア・デーウェンドラ dyah dewendra はポウ・ドウルウル刻文でラカイ・リムス rakai limus、ラケ・ウンカルフマラン rake wungkalhumalang はパヌンガラ刻文で、同意語であるラケ・ワトゥッフマラン rake watu humalang として記される[kusen 1994: 90]。

ヤム・トゥアス刻文では「śrī mahārāja rake watukura dyaḥ dharmodaya mahāsambhu³⁶」、908 年のワヌア・トゥング III 刻文では、「śrī mahārāja rake watukura dyaḥ balitung śrī īśwarakeśawotsawatuṅgarudramūrti」と記述される。これらの称号の後半部分に含まれる、「マハーサンブ mahāsambhu (マハーシャンブ mahāśambhu)」や「イーシュワラ īśwara」は、ヒンドゥー教の神シヴァの別称であり、シヴァ神を指している。「ルドラ rudra」もしばしばシヴァ神と同一視される神である。また「ケーシャワ keśawa」はヴィシュヌ神の別名である³⁷。このことは、少なくとも称号の上では、王がヒンドゥー教の神格と結び付き、神聖化されていたことを意味している³⁸。後述するが、死後に王は神として記述される。このように、バリトゥン王の時代に、王の権威が次第に高まっていることが確認できる。

王は彼の住居である王宮 (kadatuan) を持っていた³⁹。その王宮の構造は刻文からははっきりしない。しかしリントカン刻文には、贈り物を受け取る人々の箇所、「anak wanua i kinaling kabinihajyan」つまり「王妃の住居 (支配下) のキナリンの住人」が述べられており、王の妻が住む場所があった。刻文には明記されていないが、この王妃の居住地は王宮内にあったと考えられる。このような王宮には、ワトゥク・イ・ダルム／ジュロ watĕk i dalĕm/jro 「王宮の集団」と呼ばれる集団がいたようである。この集団はマンガララ・ドゥラウィア・ハジ mañilala drawya haji (「王の税徴収者」) のリストに記載されている。この集団に属す人々は王宮に仕え、その報酬として、おそらく村から税を徴収する権利を王から与えられていたと推測できる。

以上、王について述べたが、刻文に記される諸王のほぼすべてが異なるラクルヤン称号を冠している。つまりラクルヤン称号は歴代の王によって継承されるものではない。諸王の血縁関係や地縁関係がはっきりしないため、このラクルヤン称号の違いが何を意味するのか断定はできないが、上述のようにラクルヤン称号がワトゥクと密接な関係にあるので

³⁶ この刻文では「balitung」という名は用いられない。「mahāsambhu」の前の「dharmodaya」は、「dharma (秩序、規則、教説)」と「udaya (起上ること、出現、太陽と月が昇るとされる東の山)」に分けられる。「dharmodaya」は個人名ではなく、尊称と考えられる。

³⁷ 「keśawa」に続く「utsawa」はサンスクリット語 (「utsava」) で「祭礼」や「祭り」などの意味を持つ [Monier 1872: 152]。「tunga」は王の称号を構成する語として頻繁に出てくるため、「高位の、優れた」を意味する語ではないかと考えられている [Zoetmulder 1982: 2067]。

³⁸ カスパリスは王の神聖化について、13 世紀以前の古ジャワ語文献や刻文においては明確に言及されることはめったにないが、(バリトゥン王の śrī dharmodaya mahāsambhu のような) 長いサンスクリット語の名前の使用は、ほとんどの王が実際に神聖化されていたことを示唆すると指摘している [Casparis 1992: 489. n.9]。

³⁹ 中部ジャワ時代の王たちの王宮の遺構は発見されていない。しかし、907 年のルカム Rukam 刻文には、「クドゥにある王の居住地を守護する者 makmit pomahan haji i kḍu」 [1: 26] という記述があり、王宮がクドゥにあったことが示唆される。クドゥという地名は他の刻文にも記されており、スンドロ Sundoro 山の東、ウンガラン Ungaran 山の西南の地域を指していたと考えられる。これは現在のトゥマングン県にほぼ一致する。また、2008 年に発見されたリヤンガン Liyangan 遺跡はクドゥ地域に位置し、宗教遺構だけでなく、居住地、農業地の遺構も確認でき、王宮との関係がある遺構かもしれない [Balai Arkeologi Yogyakarta 2011]。

あれば、彼自身の領地に関係して称されるものと考えられる。しかし支配する領地が異なることを理由に、これらの王たちに血縁関係がなかったと断言はできない。なぜなら、ラクルヤン称号は親子間でも異なることが知られている⁴⁰。

第2節 村

上述の高官のほかに、村に関係していたと考えられる役人パティ *patih* や村の長老ラーマ *rāma* とよばれる人々がいる。シーマ定立の儀式における贈り物のリストで彼らはしばしば、パティ・ギリカン *patih gilikan* やラーマ・カスギハン *rāma kasugihan* のように記述される。ギリカン、カスギハンが村名であり、このようにパティやラーマの後に続く語は村の名である場合が多い[Barrett Jones 1984: 105-106]。当時の村の社会構造・組織を明らかにするために、まずラーマについて検討を行う。

ラーマは村の長老のような存在で、しばしばラーマ・マンガガム・コン *mangagam kon*、ラーマ・マラタ *rāma marata* と記される。ラーマ・マンガガムは現職のラーマ、ラーマ・マラタは引退したラーマである[Christie 1983: 14; Barrett Jones 1984: 108]。刻文には、カラーマン *karāman* という語がでてくる。「ka」という接頭辞と「an」という接尾辞をつけることで、その場所を示すため、カラーマンは「ラーマが居るところ」を表し、ラーマたちの集会所あるいは共同体を指していると考えられる。村はこれらのラーマたちによる自治組織によって運営されていた。またラーマは土地を所有していたことが、ママリ *Mamali* (878 年) 刻文やタジ刻文からわかる。ママリ刻文ではラーマの菜園 (*kēbuan*) が、シーマとされるためにラクルヤンの称号を持つ者によって購入されている。またシーマ定立の刻文にはしばしばラーマンタ *rāmanta* という語が現れる。これはラーマに宗教的繋がりを示す称号で使われる「nta」という接辞がついたものである[Casparis 1986: 63. n.11]。実際にサリマル刻文では、シーマのための土地がラーマンタに贈られ、ワトゥクラ刻文では、ラーマンタの義務に神への祈りが含まれている。彼らは村のラーマの中でとくに寺院への奉仕を行っていた者たちと考えられる。

次にパティについて考察する。パティは大きく二つに分類される。一つは、前節で述べた「a」あるいは「ma」の接頭辞を伴いラクルヤンの称号とともに記されるもので、もう一つはこれらの接頭辞を伴わないものである。ここでは、後者のパティについて考察する。

パティは多くの刻文で贈り物を受け取り、定立の儀式に参加し、共食にも参加している。パティが刻文に記される場合、パティの語の前あるいは後ろに村の名前が続くことが多い。しかし、パティはラーマや村の住人 (*anak wanua*) には含まれなかった[Casparis 1986: 52]。マンティヤシ I 刻文には、5 人のパティが王からの褒賞としてシーマを定立されたことが記述される。この刻文では王からパティへの褒賞の理由の一つとして、道の護衛を挙げている。またパティはしばしばシーマ定立の儀式でワフタ *wahuta* とともに記述される。このワ

⁴⁰ 例えば、タジ刻文ではラクルヤン・ワトゥティハン *rakryan watutihang* の娘であるディア・デター *dyah dhetā* は「*rake śrī bhāru*」を冠している[Barrett Jones 1984: 96]。

フタの職能については明らかではないが、カスパリスは軍事的側面がみられると指摘する [Casparis 1986: 53-55]。道の護衛をおこなうという義務や軍事的側面を持つワフタとともに記されることから、パティはその機能の一つに軍事的な機能を持っていたと考えられる。カラディ刻文では、「patih manusuk sapuluh (10 人の定立を行ったパティ)」と記されている。

パティの役割について刻文は明確には記述しないが、村の名前と共に記されること、ラーマや村の住人に含まれないこと、王から褒賞を与えられていることを考えると、パティは王から各々の村に派遣された役人であったのではないかと推察される。カスパリスは、彼らはラクルヤンやパムグトの称号をもつ地方領主の役人としては記述されず、彼らは中央政府に責任を負っていたようだと指摘する [Casparis 1986: 55]。

シーマ定立の儀式でパティが記述されることが多いのは、おそらくパティは王が村に派遣した役人であり、証人として呼ばれることが多かったのではないかと推察される。パティはシーマ定立の儀礼を記録する刻文すべてに見られるわけではない。刻文からはパティがすべての村に派遣されたとは断定できず、彼らは重要な村にのみ派遣されたのかもしれない。パティはパルジャルなどの役人を引き連れていたことが刻文にみられ、パルジャルなどの役人とともに村における彼らの役割を遂行していたと考えられる。

ラーマやパティのほかに贈り物のリストでしばしば述べられるのは、トゥハ・ワヌア *tuha wanua*、ウィンカス *winkas*、カラン *kalañ*、グスティ *gusti* らである。トゥハ・ワヌアは村の長という意味である。カスパリスによると、ウィンカスは命令を受け取る者であり、より高位の者のために活動していた人だが、王宮の高官や役人からの命令を受け取るパティ、ナヤカ、ワフタとは異なり、(彼自身が属していた) ある集団として村の長 (ラーマ) の名前で活動していた [Casparis 1956: 329. n.104]。カランやグスティについてはよくわからないが、クワク I 刻文 (879 年) には、クワクのラーマ・マーグマン *rāma māgman*⁴¹ として、カラン、グスティ、トゥハ・バヌワ (ワヌアに同じ)、ウィンカスが記されている。またママリ刻文ではラーマが列挙され、カラン、トゥハ・ワヌア、グスティのほかに、フル・ウラス *hulu wras*、ワリガ *wariga*、パルジャル *parujar*、マプカン *mapëkan* (市場の売手)、トゥハ・アラス *tuha alas* (森の監督官) が含まれている。このことから、ラーマとして列挙されたカランなどもウィンカスと同様にラーマとして活動していたといえる。

村には寺院や儀礼に関係する者たちがいたと考えられる。サリマル刻文では、マルヒャン *marhyañ* やウィハーラスワーミ *wihāraswāmi* が記され、これらはラーマンタに含まれる者と考えられる。サリマル III 刻文では 4 人のマルヒャンの名が挙げられている。マルヒャンはしばしばシーマ定立の贈り物リストに言及されるが、その職務などの詳細は知られていない。しかし、「hyañ」という語が付くことから、寺院などの聖域に関係する人物であろう。ズットムルデルは「聖域の管理人」としている [Zoetmulder 1982: 659]。ウィハーラスワーミ

⁴¹ 「ラーマ・マンガガム・コン *mañagam kon*」と同一か。「*māgman*」は「*agēm* (一握り)」から成る語 (接頭辞 *ma* と接尾辞 *an* が付加された形) であり、「*mañagam*」も同一の語根から成る (接頭辞 *mañ* が付加された形) [Zoetmulder 1982: 25]。

はマルヒャンに比べ、記述されることは稀であり、その詳細も知られていないが、僧院の長あるいは守護者（「wihāra」は僧院、「swāmi」は長、所有者の意味）と考えられている[Zoetmulder 1982: 2268]。ほかに、シュリーマンガラ II 刻文では、ラーマ・ジャータカ rāma jātaka、スターパカ sthāpaka、ウパカルパ upakalpa、カーヤスターkāyasthā、デーワカルマ dewakarmma が記される。ラーマ・ジャータカ以外の者たちがラーマに含まれるかははっきりしないが、おそらく村の成員であったと考えられる。ラーマ・ジャータカはおそらく占星術に関する職務を持ち、スターパカは供犠を司る司祭あるいは寺院の守護者、ウパカルパは供犠を準備する職務を持っていたと考えられる[Zoetmulder 1982: 731, 1822, 2131]。カーヤスターは書記カーストの人を意味する言葉であり[Monier 1872: 221]、おそらく寺院関係の書記を行っていた人物である。デーワカルマについてはその役割ははっきりしないが、宗教的な職務を持っていた者と考えられる⁴²。

村にはほかに、トゥハ・ブル tuha buru（獵師の長）、トゥハ・グサリ tuha gusali（鋳物師の長）などがいた[Barrett Jones 1984: 108-109]。これらのほかに交易・生産規定の箇所では、多くの職種が記されている。金（mas）、銀（pirak）、銅（tambaga）などの鋳物師、赤い染料を作る人（mañubar）、砂糖を作る人（maṅgula）、石灰を作る人（mañhapū）、器を作る人（maṇḍyun）、綿（kapas）、銅、錫（gaṇsa）、塩（garam）、ゴマ油（lēṇa）、砂糖（gula）、鉄（wēsi）などを運ぶ人、また踊り子（menmen）、楽器奏者（mapaḍahi）などである。

タジ刻文には、僧院のためのシーマを安定させる人々の中に、サン・チャトルワルナ sang caturvarṇa の語が見られる。チャトルワルナはサンスクリット語（caturvarṇa）で4つの色を意味し、4つの階級を指す。クティ Kuṭi 刻文（840年）の呪いの箇所では、「シュリー・マハーラージャの恩恵に違反する者がいたなら、（その違反する者が）もし王（prabhu）であったなら、もし大臣（mantri）であったなら、もしクシャトリア kṣatriya であったなら、もし村人（grama）であったなら」[10a: 1-4]と述べられている。ワハル刻文では、シーマの自由を侵すものがいたなら、ブラフマナ brahmana、クシャトリア、ワイシャ waisya、スードラ sudra の生まれでも、罰が与えられ死にいたることが述べられる。クティ刻文は後代の複製とされているので、873年のワハル刻文が最初に4つのカーストが見られるものである。

またタジ刻文の他の箇所では、定立の儀式が行われる天幕（witāna）に座る人の中に、奴隷（hulun）が述べられている。この奴隷とともに述べられるのは、ラーマ、年寄り、若者、ハディアン hadyan（高位の人）、住人（gr̥hastha）、宗教者（wiku）であり、奴隷はハディアンと住人の間に記述される。サングラン Sangguran 刻文（928年）では、ハディアン、奴隷、年寄り、若者、男、女、宗教者、住人などが挙げられ、高い地位を示すハディアンと対比され、低い地位のものとして奴隷が挙げられている可能性もある。同じくサングラン刻文の共食をする人々が列挙される中に、男、女の後に最下位・中位・上位（kaniṣṭhamaddhyamotama）が述べられているので、ハディアンの後に来る奴隷はおそらく

⁴² ランダ刻文にはデーワカルマの水田があることが記され、彼らの義務として神に祈ること、マパガルの水田内を掃除すること、ランダ（の水田）を掃除することが述べられる。

文字通りの奴隷を示しているのではなく、高位の者に対する低い地位の者として述べられているのだろう。階級や身分の差というのは、上記のように刻文では呪いの箇所や共食の箇所でこれらの語が挙げられるのみで、実際にどのような身分による制約などがあったのかは確認できない。しかし、バレット・ジョーンズによれば、外国人の地位は土着の人々よりも低かったようで、生来の村人には課せられなかった税を納めていた[Barrett Jones 1984: 23-26]。これはウルドゥ・キドゥル Wuruḍu Kidul A・B 刻文（922 年）において、ある人物がキララン kilalan（外国人のある集団）と間違えられ、税を徴収されたことからの推察である。

村に外国人がいたことはカラディ Kaladi 刻文（909 年）などからわかる。カラディ刻文では、キラランと呼ばれる人たちのシーマへの立ち入りを禁じている。このキラランに含まれるのは、カリング (kling)、アールヤ (arja)、シンハラ (singhal)、ドゥラヴィダ (drawila)、そしてパンディキラ (paṇḍikir)、チャム (campa)、ラーマンニャ (rammān)⁴³、クメール (kismmira⁴⁴) [7b: 1-2]である[Barrett Jones 1984: 186]。しかし、すべての外国人がキラランに属していたわけではない[Barrett Jones 1984: 23]。これら外国人たちが当時の社会の中で、どのような活動を行い、どのような地位にあったのかは定かではないが、おそらく交易を目的にジャワを訪れ、彼らの中には現地、村に住み着く者もいたのであろう。

そして村には、さまざまな税が課せられていた。土地に対する税は、その面積によって決められていたことが刻文から明らかである⁴⁵。税徴収に必要な土地台帳の存在は、古ジャワ語刻文にははっきりと述べられることはないが、役人が測量を行い、それに基づき税が課せられていたことがパルパンガン Palēpangan 刻文（906 年）などからわかっており、おそらく土地台帳のようなものが存在していた。シーマとなった村や土地は、マンガララ・ドゥラウィア・ハジの立ち入りが禁じられる。このマンガララ・ドゥラウィア・ハジは、「王の税徴収者」を意味し、そのリストには、数多くの徴税対象が述べられている。バレット・ジョーンズは、929 年までの刻文に現れるマンガララ・ドゥラウィア・ハジをリストアップしている[Barrett Jones 1984: 151-156. list22]。意味のよくわからないものも多いが、鋳物師や金細工人 (limus galuh) などの職種、物品や動物に対する税がかけられていたことがわかる。おそらく上述の長とされるトゥハなどが税を課せられた人々から徴収し、王の徴税者に一括して渡していたのかもしれない。さらに刻文には、「ジュル・グサリ（トゥハ・グサリに同じ）の共同体」と解釈できるカジュルグサリアン kajurugusalian という語も見え、ある職

⁴³ バレット・ジョーンズはペグーPegu から来た人々とする[Barrett Jones 1984: 187]。

⁴⁴ 「kēmir」と考えられる[Barrett Jones 1984: 186]。

⁴⁵ バレット・ジョーンズはキヌウ Kinēwu 刻文の記述から、土地に対する税はその収穫量ではなく土地の広さによって決められていたと指摘する[Barrett Jones 1984: 128]。確かに、キヌウ刻文では、ある土地が測量された値よりも実際は小さく、その税を満たすことができなかったために、再測量の後に土地が拡張されたことが記されている。ただし、多くの刻文で、水田などの土地の規模が記される際には、その面積と収穫量のどちらかで記入されていることから、税の決定は土地の広さだけではなく、収穫量（生産性）が考慮されていた可能性もある。

種の組合のようなものがあり、トゥハはこのような組合の長であったと推測できる。

また村全体がシーマに定立されたことを記述するいくつかの刻文では、交易の規定が含まれる。この規定にはさまざまな職種や物品などが列挙されており、村々では、砂糖、塩や金属などの商取引が盛んに行われていたことがわかる。刻文にはトゥハ・ダガン *tuha dagañ* つまり「商業の長」が見られ、このような商取引を管理していたと考えられる。リントカン刻文の贈り物を受け取る人々の箇所では、「ガルの商人集団の住人 *anak wanua i kabanyāgān ing galuh*」という語が見られ、商人たちの居住地が村にあったことも示唆される。

また村の住人は彼らの村（あるいはその周辺）の犯罪について何らかの費用を負担させられていた。891 年のバリングワン刻文では、シーマが与えられた理由として、「飛び散った血と濡れた死体によって常に支払い続けるために、バリングワンの住人に弱さを引き起こす *mangde durbbala rikanang anak banua ri balingawān āpan lanā ya manahur dening rāh kasawur wangke kabunan*」[ガネーシャ像: 8-9]という記述がなされている⁴⁶。また、村人らはブワト・ハジ *bwat haji* と呼ばれる賦役を課せられていたようである。例えばトゥラン *Tělang II* 刻文（904 年）では、川の舟渡しに関して 3 つの村がシーマに定立されるという王の命令が記されるが、カムラン *kamulan*⁴⁷と舟を守るために金 7 *mā*（約 16.9g）、カランに金 2 *mā*（約 4.8g）が 1 年ごとに（シーマとなる村から）出されることが述べられる⁴⁸。この金を支払うために定立されたシーマを維持することが村のラーマのブアト・ハジであることが述べられる⁴⁹。またロンカブ *Rongkab* 刻文（901 年）では、ロンカブのラーマ *rāma i rongkab* がサン・パムガト *sang pamgat* によって召使を提供することを免除された記述がある。このように、村にはさまざまな税、賦役が課せられていたことが刻文から明確である。

村には、水田 (*sawah*)、菜園 (*kěbuan*)、陸稻栽培地 (*gagā*)、原野 (*těgal*)、湿地 (*rěněk*)、居住地 (*pomahan*) などがあり、周辺に森 (*alas*) があつた。ある土地がシーマとなった場合、それはほとんどが水田である。水田以外の土地がシーマになるとき、その土地を水田に変えることを記述するものもある（ジュルンガン *Jurungan*、クワク I・II、ラタウン I・II 刻文など）。水田に欠かせないものは、もちろん水である。刻文には、水利に関する記述がいくつかある。水利管理に関係していたと考えられる人々で、しばしば言及されるのは、フル・アイル *hulu air*、アイル・ハジ *air haji* である。フル・アイルは、村のラーマの成員に見られる。名前が挙げられるのみで、どのような機能を持っていたのかは不明であるが、「水

⁴⁶ ここに記された「支払い」が誰に支払われていたのかは不明である。バレット・ジョーンズは、この支払いがこの地での犯罪に対して住人に課せられた罰金であると解釈しているが[Barrett Jones 1984: 59-60]、実際には死体を処理するために住人が負担する費用であった可能性もある。

⁴⁷ カムランは「*kamulan*」の異形で、宗教建造物と考えられる。本章第 3 節にて詳述する。

⁴⁸ ストゥッテルヘイムは、1 *māṣa* (*mā*) = 0.002412kg として計算する[Stutterheim 1940a: 17]。実際にジャワで発見された初期の金貨 1 *māṣa* の一般的な重さは 2.3~2.5g である[Wicks 1986: 57-59]。

⁴⁹ おそらくこの舟渡しは、寺院とともに述べられることから、第一の目的は寺院に必要な物資、人を運ぶために使用されたものだと考えられる。

の長」という意味である。アイル・ハジは税徴収者マンガラ・ドゥラウィア・ハジの中に現れる。この語の意味は「王の水」であり、おそらく王が水に関する何らかの税をかけていたと考えられる。フル・アイルは9世紀から13世紀にかけての刻文に一般に見られる[Christie 1992: 14]。ほかにジュクト・エル *jukut er/ air* がみられる。クリスティは、フル・アイル、ジュクト・エルは行政の成員というよりむしろ宗教的な役人であったと指摘しているが[Christie 1992: 14]、刻文の記述からフル・アイル、ジュクト・エルの機能を明らかにすることは難しい。

水利施設としては、水路 (*kali*) や堰 (*dawuhan*) が見られる。クブクブ刻文 (905 年) では、水路として使われる (竹の) 管 (*talañ*) [Zoetmulder 1982: 1907]、水の道 (*hawān ing wai*) の記述がある。シーマ定立の理由として、サムドゥン *samuḍung* の2 タパク *tapak* (単位か) とクブクブ *kubukubu* の4 タパクの水を引くための管にカヒュナン *kahyunan* のサン・アパティ *sang apatih* の水が流れることが述べられる。2枚目の銅板が欠如しているため、この水が何のために使われたのかは不明である。しかし、シーマの定立者たちは、名前にダプンタ *ḍapunta*、サン *sañ*、ダプ・ヒャン *ḍapu hyañ* などを冠していることから、宗教的な性格を持った人たち (寺院に関係する人たち) であり、この水は、寺院施設あるいは寺院の水田などのために使用された可能性が高い。

またハリンジン *Hariñjing* A 刻文 (804 年) では、ウランギ *wulanggi* のバガワンタ・バーリー *bhagawanta bārī* が建設した堰と水路に関する記述がある。この刻文の裏面には 921 年の日付が付されたトゥロドン王の命令が記されている。ハリンジンのその水路に責任を持つのは、バガワンタ・バーリーの子孫であることが記され、ウランギのバガワンタ・バーリーの子孫の場所とカビクアン・ムラ *kabikuan mula* (ムラの住居) はマンガラ・ドゥラウィア・ハジによって干渉されないことが述べられる。また 18 行目には、「ハリンジンの寺院 (ダルマ) の水路 *ikanang dharma kali i hariñjing*」と記され、この水路が宗教施設と関係していたことがわかる。この水路が何のために使用されたのかは記述されない。クリスティは水利管理に関する刻文、つまりハリンジン、ウリグ *Wulig* (10 世紀中頃)、クスマラ *Kusmala* (年代不明)、チャネ *Cane* (1021 年)、カマラギャン *Kamalagyan* (1037 年) を考察し、ほぼすべてが宗教的意味合いを持っていると指摘する[Christie 1992: 17-19]。クリスティによると、統治者は彼の水利事業が神聖な施設の利益となることを強調し、不老不死の水 (アマリタ) のイメージを求める宗教的言葉によって (その事業を) を説明する。そして、初期のジャワやバリの刻文では水利管理の実践的な側面において王権の存在は極めて希薄であり、灌漑のための調整は、統治者ではなく直接影響を受ける地域の組合によって、直接的あるいは寺院組織を通して、行われていた可能性が高いと指摘している[Christie 1992: 17-22]。

メールは現在のバリに見られるような水利共同体スバク *subak* が古代のジャワにも存在したとする[Meer 1979]。しかし刻文の内容から、これを実証することは難しい。水田のための灌漑としてはっきりと記載する刻文はほとんどない。さらにジャワとバリでは、地形に相違がある[Christie 1992: 12]。ジャワの人口の中心である火山の裾野の地形は比較的平ら

であり、険しい斜面を持つバリの地形とは異なる。このためバリとは異なり水を引くのは比較的容易にできる。上で述べたように、村には水の管理を行っていたと考えられるフル・アイルなどがあるが、灌漑組織などの記述は見当たらない。古代ジャワにおいて、灌漑はおそらくバリに現在見られるスバクのような緻密な管理組織の形成を必要とするものではなく、より手間のかからない簡素なものであったに違いない。

ナールスンは、古代ジャワにおける権力の出現を灌漑システムにおく [Naerssen 1977: 37-39]。その権力の成立過程は以下の通りである。水田の出現により、灌漑システムが必要になる。同じ川の水、あるいはその恩恵に授かる水に依存する複数のワヌアが存在する。1つのワヌアを超えた権力を持つ長が必要となり、ワヌアのラーマの「兄」としてラカが出現し、生産や労働を使用する権利を持つ。そして消費階層が発達し、クラトン（王宮）が成立する。上述したように、初期のジャワにおいて、比較的水を手に入れやすい状況の中ではあったが、川などの同じ水系を水源とする複数の村々を束ねるために、1つの村を越えた権力を持つ統治者が存在した可能性は否定できない。しかし、実際の農業水利に関する調整は、クリスティが指摘するように、統治者によってではなく、村の共同体内で行われていたと推測できる [Christie 1986: 78-79; 1992: 7-8, 17-22]。

本節では村の構成員、経済や宗教活動、水利管理について検討を行った。村には様々な職人や商人たちがおり、活発な交易が行われた。そして明確な記述はないが、村人たちによって農作物が育てられ、特に水稻耕作が行われたであろう。このことはシーマに定立される土地の多くが水田であったことからわかる。クリスティによると、村は他の村々との経済的な結びつきを持ち、自給自足ではなかった [Christie 1986: 79-82]。村はラーマによって運営され、組織として自立可能であったが、村には農業従事者以外に多くの専門職や交易に従事する者たちがおり、交易が活発に行われ、その経済は他の村々と結びついていた。

第3節 寺院

中部ジャワには、多くの古代の宗教建造物（現在ではチャンディ *candi* と呼ばれる）が現存している。これらの宗教建造物は仏教、ヒンドゥー教の性格を持つものである。しかし、刻文に記される宗教建造物を指す語は、その建造物がどの宗教に属するのかを明確に示すことは稀である。本節では、宗教建造物を指す語の意味や使用例から、その機能を明らかにし、また寺院の構成や組織について検討する。

刻文のなかに述べられる寺院は、一般に土地の名前で呼ばれている。例えば、プラーサーダ・イ・パスティカ *prāsāda i pastika* である。「i」は場所を表す前置詞であり、「パスティカの寺院」となる。寺院は、このように寺院が位置する土地の名を付して呼ばれるため、一般にヒンドゥー教の寺院なのか仏教の寺院なのか判断しにくい。刻文の記述内容からわかることもあるが、ほとんどの場合において不明である。しかし、一般に寺院を表すダルマ *dharma/dharmma* やプラーサーダには、ヒンドゥー教、仏教の区別はないようである⁵⁰。また、

⁵⁰ 刻文での記述のされ方を見るに、ダルマは伽藍を含めた、広い意味での寺院を指し、プ

カビクアン kabikuan は宗教的地位の人々が居住する場、ウィハーラ wihāra は僧院であると判断できる。カビクアンの「biku (wiku)」は宗教的地位あるいは職務を持つ人、祭司、僧、賢人などを指し、カビクアンは彼らの「共同体」、彼らが「いる場所」を指す。またウィハーラは、インドでは「vihāra」と表記し僧院を指す。

刻文ではほかにチャイティア caitya という語が記述される。リントカン刻文では、「トゥラマンガンビル(地名)の大王の父のチャイティア caitya ni yayah srī mahārāja i turamangambil」[1: 4]という記述がみられる。インドにおいてチャイティアは、葬送のモニュメントやストゥーパなどを指し、聖樹などもチャイティアと呼ばれる[Monier 1872: 330]。また、刻文に頻繁に記されるものにカムーラン kamūlan (kamulan/kamulān) がある。mūla は「始まり、起源」という意味であり、ズットムルデルは「起源の寺院(祭壇)」とする[Zoetmulder 1982: 1158]。しかし、刻文には「mūla」や「mula dharma」と記される者たちがいる。877年のハリワンバン Haliwangbang 刻文では、近隣の村からやってきた人々のなかに「ムーラであるシ・ウリン(人名) mūla si wuring」と記され、909年のカラディ刻文で「ムラ・ダルマの共同体の水田が自由に従い(自由となり)、ムラ・ダルマによって守られ管理される tumut ri kaswantantran ikang sawah kamuladharmmān kacāyan kawiseṣa dening mula dharma」[6a: 6-6b: 1]と記されている。これらの用例から、ムーラ(あるいはムラ)は何らかの役割を持った人々である。特にムラ・ダルマは宗教的な性格を持っていると考えられる。また「ムーラの共同体・居るところ」を意味するカムーランは、しばしばダルマなどの寺院と関係して記される。トゥラン II 刻文やルカム刻文には、シーマが定立される際に、カムーランを作ることが命じられている。このことから、おそらく「mūla」も寺院に関係した役割を持ち、寺院あるいはそれに関係するものを管理する者たちであったと考えられる。さらにトゥラン II 刻文では「umah kamulan」の語が確認できる。「umah」は「家」を意味するので、この場合「ムラ(の共同体)の家」と考えられる。以上のことから、「kamūlan/kamulan」の語はムラの共同体、あるいはムラの果たすべき役割や共同体そのものに関係する(宗教的な性格を持つ)建造物を指している。

ほかにパルヒヤンガン parhyaṇan という言葉が出てくる。「hyaṇ」という語は神を意味し、刻文のなかでは山の名、地名、守護神、あるいは精霊の名と考えられる「タウィハン tawihān」や「クラウィンガン kurawiṇan」などの前にこの語が使われる。また現在のバリでは、死者の霊が浄化され神となったとき、サン・ヒャン sang hyang という[Goris 1984: 84]。クティ刻文ではヒャンのつく語が多く見られるが、このヒャンがつく地名の中に、ムダン mḍang がある。この地域は、マンティヤシ I 刻文では、神格化された王がいる場所(rahyangta rumuhun ri mḍang)として記述される。クティ刻文の「サン・ヒャン・ムダン sang hyang mḍang」も、神格化された王を指していると考えられる。ハリンジン B 刻文には、「トゥワクに横たわる(葬られた)聖なる神 sang dewata lumah i twak」、「トゥワクに横たわる聖なるものの恩恵 anugraha sang lumāh ri twak」、「聖なる神の恩恵(anugraha sang hyang)」という記述がある。こ

ラーサーダは伽藍内の建造物を指している可能性がある。

こから、トゥワクで葬られたものがサン・ヒャンと呼ばれ神格化されており、デワタとヒャンが同格で使われていることがわかる。現在のバリにおいてと同様に、死者が神格化されたものをサン・ヒャンと呼んでいることがわかる。また、ウインタン・マス A 刻文では「パスティカに横たわる聖なるもの sang lumah ing pastika」を「パスティカの聖なる神 sang dewata ing pastika」とも表現しており、「dewata」と同じく「sang lumah」はすでに神格化された人物を指していることがわかる。トゥラン刻文では、「シャタシュリンガに横たわる神の王 haji dewata lumāh ing śataśṛṅga」、ウインタン・マス A 刻文には、「パスティカに横たわる聖なる大王 śrī mahārāja sang lumah i pastika」という記述があり、王が死後に神格化されていることがわかる。他の刻文においても、一般に神格化されているのは王である⁵¹。クリスティは、パルヒヤガンは精霊と関係のある場所としているが[Christie 1991: 29]、上で述べたことから、おそらく外来の神々ではない、もともとその地域に根付いていた山岳信仰などの精霊（神）、祖先神を祀っていた場所であると考えられる。この解釈が正しければ、タジ刻文に、「ラジャ（地名）の王のパルヒヤガン parhyangan haji ing raja」が述べられていることから、王もヒンドゥー教や仏教のみでなく、土着の神あるいは祖先神を崇拝していたことになる。

刻文には上述のように、「ある場所に横たわる（葬られた）王（あるいは神）」という語句が記される。しかしこの横たわる場所が寺院であることを明確に示した記述は確認できない。スクモノは考古学調査、刻文や文献の記述から、「チャンディは決して墓ではなく、寺院である」と主張している[Soekmono 1995]。これらの寺院が、墓としての埋葬寺院であるのか、それともスクモノが主張するように墓の機能を持たない寺院であるのか、刻文の記述では判断できない。しかし、「パスティカの神 sang dewata ing pastika」（ムング・アンタン刻文）、「パスティカに横たわる聖なる大王」（ウインタン・マス A 刻文）の記述は、このパスティカの地が、王が葬られたことに関係する特別な場所であることを示唆している。ランドゥサリ Randusari I 刻文には、「パスティカに横たわる神のシルンルンである神聖なるチャイティア sang hyang caitya mahaywa silunglung sang dewata sang lumāh i pastika」[1b: 3]と記される[Stutterheim 1940a: 8]。ストウッテルヘイムによると、シルンルンは「人を葬る際に作られたもの」であり、「一時的な材料で作られた」ものである[Stutterheim 1940a: 14]。また、チャイティアは葬送のモニュメントであり、この刻文に記されたチャイティアがパスティカに横たわる神（王）の記念碑や廟を指す可能性がある。

刻文からは、当時の寺院の構成ははっきりしないが、929 年のチュンガララン Cunggarang 刻文には導水設備のある沐浴場 (pañcuran) の記述がある。この刻文のシーマ定立の理由は、寺院 (prāsāda) の神々への祈り、苦行場、沐浴場のためである。また刻文にしばしば記されるものにカビクアン kabikuan／カウイクアン kawikuan がある。ティンバナン・ウンカル Timbanan Wungkal 刻文では、ダルマ・カウイクアン dharma kawikuan つまりダルマ（寺院）

⁵¹ 929 年のチュンガララン Cunggarang II 刻文では、シンドク王の妃であるディア・クビ dyah kēbi の父ラクラン・バワ rakryan bawa が「聖なる神となったもの sang siddha dewata」と記され、死後に神格化されていることがわかる。

のカウイクアンの記述があり、おそらくこれらは寺院に付属していたものと考えられる⁵²。また、スギ・マヌク刻文では、シーマを定立する理由の1つとして、「神の壁を完成させるための収入 *āsābya sakaparipūrṇākna bhatāra tambak*」とすることが述べられており、寺院はその周囲を壁によって囲まれていたことがわかる⁵³。

刻文には多くの寺院が記載されるが、これらの寺院は相互に関係を持っていたのだろうか。カンボジアでは前アンコール時代（6世紀～9世紀後半）の刻文に、複数の寺院の共有財産が記されている[石澤 1982: 156-166; 2013: 297-315]。ここに寺院の相互関係が見て取れるが、古ジャワ語刻文ではこのような共有財産の記述はみられず、寺院間の相互のやり取りは確認できない。しかし、929年のシンドク王公布のグルングルン *Gulunggulung* 刻文では、シーマの使用目的として、ラクルヤン・フジュン *rakryān hujung* の寺院であるフマド *hēmad* のマハー・プラーサーダの稲作地である宗教施設の土地が、パンガワン *pangawan* のサン・ヒャン・カヒャンガン *sang hyang kahyangan* に、毎年のパンガワンの神の儀礼ごとに「*wdu l pada l*（何らかの単位）」を贈ることが述べられる⁵⁴。また、続けてパンガワンとフマドにおける儀礼の仕事をお互いに手伝うことが記される。この仕事を行う者ははっきりしないが、それぞれの寺院に奉仕していた者たちであろう。これら2つの寺院の関係は明確ではないが、「唯一、神はフマドで、パンガワーンで具現化する *tunggal bhatāra mangadhiṣṭāna i hēmad i pangwān*」[前面: 9]という記述があり、同一の神を祀るあるいは同じ宗派の寺院であったと考えられる。この刻文以外に、寺院同士の結びつきを示す刻文は確認できない。

寺院は世俗の権力に税を支払っていたようである[Barrett Jones 1984: 76-77]。例えば、ティンバナ・ウンカル刻文（913年）ではダルマ・カウイクアン *dharma kawikuan* がマンガララ・ドゥラウィア・ハジによって干渉されないことが記されている。また、ウィンタン・マス *Wingtān Mas A* 刻文（915年頃）からは、ダルマ *dharma* がサムガト・マンガリヒ *samgat mangulihi* への銀の支払いをやめたことが知られる。

刻文には明確な記述はないが、これらの寺院には、寺院に奉仕していた者たちや彼らから成る組織があったと考えられる。寺院での儀礼施行だけでなく、寺院の管理や、上述した税の支払いなどを執りまとめる者や組織があったであろう。リプトは、ワヌア・トゥンガ III 刻文⁵⁵でシーマが破棄された間も寺院はこのシーマなしで約25年間（ワラク *warak* が

⁵² ブハリは、カヌルハン *Kanuruhan I・II*（943年）やバル *Baru*（1030年）刻文には4種類の建物の寺院が述べられており、古代ジャワにおいてもバリと同様に寺院伽藍のシステム（*sistim percandian*）があったのではないかと指摘している[Boechari 1977: 320]。

⁵³ 現存する多くの寺院遺構においても、寺域を囲む石積みの壁が確認できる。

⁵⁴ あるいは、「パンガワンのサン・ヒャン・カヒャンガンに属すラクルヤン・フジュンの寺院であるフマドのマハー・プラーサーダの稲作地である宗教施設の土地が、パンガワンの神の祈りごとに贈る」とも解釈できる。

⁵⁵ 一般にシーマは未来永劫続くと刻文に記されるが、その例外としてあるのが、ワヌア・トゥンガ III 刻文である。746年に即位したパナンカラ *panañkaran* がピカタン *pikatan* の僧院にワヌア・トゥンガの王の水田を与えたことに始まり、彼に続く諸王の時代におけ

破棄しガルンが再定立する間)と約 61 年間(ピカタンが破棄しバリトゥンが再定立する間)存続し、寺院はシーマの恩恵を享受せずとも、寺院ごとに持つ寺院(神)の土地を主な財源とし、地域住人からの奉仕者を持ち、自立していたと指摘する[Riboet 2003: 247, 264]⁵⁶。9 世紀頃のディエン Dieng III 刻文には、「神の所有物」のリストがあり、この中には奴隷や水牛などが含まれる。これらの神の所有物が寺院の資金源の 1 つであったと考えられる。刻文には、このような神の所有物の記述、寺院へのシーマの義務やシーマからの収入の記述がみられ、これらを管理する寺院組織があったことが示唆される。ブハリは、寺院にはそのシーマを管理する実務組織と寺院を管理する宗務組織があったのではないかと推測している[Boechari 1977: 325-328]。つまりそのシーマのなかでの実務組織は、通常通り農民や商人、事業者からの税を集め、一方で宗務組織は、その寺院内で行われるべき宗教儀式を管理していた。ブハリの寺院運営組織を踏まえ、リプトはその著書[Riboet 2003]のなかで、寺院には以下の 3 つの役職集団があったことを推測している。①宗教者の集団(宗教儀礼を執り行う義務を持つ)、②サン・マクミタン・ダルマ sang makmitan dharmma の集団(宗教施設や供物の世話の管理を義務とする)、③サン・マクミタン・シーマ sang makmitan sīma の集団(シーマと神の土地の収入を管理する義務を持つ)である。リプトはこの 3 つの集団が寺院の 1 つの組織を成し、彼らの生計は寄付とシーマからの収益によって支えられるとしている[Riboet 2003: 266]。サン・マクミタン・ダルマは「ダルマ(寺院)を守護する者」、サン・マクミタン・シーマは「シーマを守護する者」を意味する。彼らは、交易・生産規定の箇所で、ある生産に関してその税が 3 等分されるときにのみ刻文にみられ、実際にどのような活動をしていたのかは明確ではないが、その語の意味からおそらくリプトが挙げている義務を行っていた。ほかに、寺院に関わる役職として、サン・カルマ sang karmma が挙げられる。サン・カルマは寺院の神々を世話する職務を持っていたようである[Zoetmulder 1982: 808; Barrett Jones 1984: 109]。

またワトウクラ刻文にはワルガ・シーマ wargga sīma の語が見られる。この集団は、ワトウクラにシーマを定立し、ドゥラウィア・ハジなどからシーマが自由になることをバリトゥン王に誓願している。この集団がどのような集団であったのかははっきりしないが、シーマでの生産活動を行った集団、あるいはシーマを管理した集団であったと考えられる。

次に寺院に祀られる神について考察する。一般に寺院の神という場合には、ヒャン hyaṇ ではなくバターラ bhatāra あるいはバターリ bhatāri の語が使われる。バターラは男神、バターリは女神を指す。寺院の神にヒャンが使われることは稀である⁵⁷。刻文に一般に記述されるのはバターラであり、この言葉は寺院と同様に後ろに「i+地名」が続く。例えば、バター

る、水田の所属の変遷を述べていく。この水田のシーマとしての地位は二度破棄され、後に再定立されるが、その理由などは述べられない。

⁵⁶ リプトは、ピカタンがシーマを破棄しバリトゥンが再定立する期間を 54 年としているが、正しくは約 61 年である。

⁵⁷ ンガンジャタン Nganjatan II 刻文では「sang hyang buddha」の語が見られ、仏陀に「hyang」が使われている。

ラ・イ・サリンシンガン *bhatāra i salingsingan* である（サリンシンガン刻文）。ヒャンは山の名、地名、精霊の名のほか、シーマ定立時に建てられる石や火（の神）、また寺院や王の命令など、神聖なものに付与されている。上述したように、デワタは王に関して述べられ、ムング・アンタン刻文とウィンタン・マス A 刻文（後ろに地名が来る）、トゥラン刻文とハリンジン B 刻文（後ろに *lumah* がくる）に見られる。デワタは死後に神格化された王に使用された。

本章では、刻文に記された王と高官、村、寺院について考察を行った。刻文に基づくと、王や高官がいる王宮、高官ら地方領主のワトゥク、ワトゥクに属す村々という三つの領域がみえてくる。王や高官たちを村と結び付けていたのは、税や賦役、そして寺院（宗教）であった。稀に、王や高官への村人からの請願も刻文には記されるが、これらも土地の測量、ひいては税に関係していた。一方で、地方領主と彼の領地である村とのつながりは、税や賦役、寺院だけでなく、地方領主による住民たちの問題解決があった。

次章では、刻文の大半を占めるシーマ定立の詳細を明らかにし、このシーマ定立が王や高官、村、寺院にとってどのような意義があったのかを論じる。

第3章 シーマ定立の内容と意義

この章では、シーマ定立を記す9世紀から10世紀前半までの刻文を分析し、シーマ定立の内容とその意義について考察する。附表3はシーマの定立者、シーマの目的、交易・生産規定の有無、権利の所在についてまとめたものである。これらの刻文の考察から得た結果を以下の項目に分け、シーマ定立とは何かを論じる。

第1節 シーマ定立

シーマは、サンスクリット語で「境界」を意味する「*sīmā*」に由来する語である。古代ジャワ社会では、王、ラクルヤンやパムグトたちによって、主に寺院のために「不輸不入地」として定められた村あるいは村の一部の土地をシーマと呼ぶ。ここでの「不輸不入」とは、領主や王に徴収される税（や労役の義務）を免除され、その土地の収益や労役を寺院維持などの目的のために使用することを意味する。シーマとなった場合、マンガラ・ドゥラウィア・ハジ *mañilala drawya haji*（以下、MDH）⁵⁸、パンクル *pañkur*、タワーン *tawān*、ティリップ *tirip*⁵⁹などの王やラクルヤンたちの税徴収者のシーマへの立ち入りが禁止され、それ

⁵⁸ 「*mañilala*」は「～の使用権を享受する」、「*drawya*」は「取り分」、「*haji*」は「王、王族」を意味し [Zoetmulder 1982: 867, 416, 572]、MDHは「王の取り分に権利を持つもの」であり、しばしば「王の税徴収者」と訳される [Christie 1983: 18]。しかし、パングムランA刻文ではラクルヤンがシーマ定立を行い、王の記述はない（ただし贈り物リストでは王宮の高官たちが列挙されている）が、一部のMDHの立ち入りを禁止しており、ドゥラウィア・ハジ(DH)の権利は王に限定されない可能性もある。バレット・ジョーンズは「*haji*」を王に限定せず、MDHについて以下のように説明している。MDHは税を徴収するために王やラクルヤンの許可を得、村の人々からそれらを徴収する者たちであった。彼らは、土地耕作以外の活動に従事する人々から徴収していた。そして、徴税者と考えられるパティ、ワフタ、ナヤカ、パンクル、タワーン、ティリップとは区別されていた [Barrett Jones 1984: 138, 141]。パングムランA刻文においてもすべてのMDHが列挙されているわけではないため、MDHに含まれる人々は王の権威のもとに税を徴収していた者とラクルヤンなどの領主の権威のもとで徴税をしていた者が存在していた可能性もある。しかし、パングムランA刻文以外の刻文では、後代の複製と考えられる刻文を除くと、DHの免除／MDHの立入禁止が記される刻文はすべて王の命令や恩恵によるものである。パングムランA刻文においても王の高官たちが記されることから、王が承知した上で、DHの免除／MDHの立入禁止が行われたと考えられる。以上の理由から、本稿では、MDHは「王の税徴収者」として論じる。

⁵⁹ バレット・ジョーンズによると、パンクル、タワーン、ティリップも税、おそらくラクルヤンの称号を持つ者のための税の徴収に関与した者たちである [Barrett Jones 1984: 105]。これに対しサルカルは、この3人は王の税を徴収する重要な王宮の役職として、彼らが訪れた村々、つまり（彼らによって）統治された地域の支配者かもしれないと指摘する [Sarkar 1971: 214]。しかし、ラクルヤンやパムグトたちがシーマ定立の贈り物や証人リストで言及されるのとは対照的に、彼らが言及されることは稀であり、村とのかかわりもはっきりしない。またカスパリスによると、シンドク王時代（929年～946年頃）のいくつかの刻文では、マーナ・カトリーニ *māna katrīṇi*（パンクル、タワーン、ティリップ）の命令により行動するすべての者によって、シーマは入られることはない、という記述があり、この3人がある範囲での税の請負人の活動を管理していたことが推測できる [Casparis 1986: 59]。少なくとも、彼らはシーマに入ることが禁じられており、MDHとともに列挙されることから、

まで王、ラクルヤンやパムグトに納入されていた税が寺院や公共事業を引き受ける者に納入されるようになる。

シーマ定立とは、村や土地をシーマと定めることである。刻文では、「区別する、境界を定める manusuk/sumusuk (ともに「susuk (シーマを境界づけるための神聖な石)」から成る語)」と記され、この語は英語では「demarcate/inaugurate/establish」と訳される[Barrett Jones 1984; Zoetmulder 1982: 1874]。

刻文には、シーマを定立する者が証人などに贈った物品のリストがしばしば記される。「シーマ定立の決まりに従って *wyawasthā ning manusuk sīma/sabyawastha ning manusuk sīma*」贈り物をするという記述から、シーマ定立には何かしらの一般的な規定があったと考えられる。贈り物を受け取る者は高官や近隣の村々からの参加者（主にラーマ）たちであり、これらの人々はシーマ定立の証人として記述される場合もある。贈り物は主に衣服（*wēḍihan*）、金（*mas*）や銀（*pirak*）が多く、指輪（*simsim*）なども贈られる。また、贈り物が受け取られた後には共食を伴う宴会が開かれ、シーマ定立の証人たちをもてなす。いくつかの刻文ではその最後にシーマ定立を行う費用の合計が記載される。例えばムラク Mulak I 刻文では、金 1 カー *kā*（約 0.62kg）である。

また、村ではなく土地がシーマになることを記す刻文では、シーマの範囲が明記され、他の土地との区分けが行われている（例えばママリ刻文やムラク I 刻文）。ママリ刻文では、シーマのために購入された土地の角にシーマ石（*watu sīma*）を新しく建てたという記述が見られる。シーマ定立によってシーマとそうでない土地の境界がはっきりと区分された。

シーマの目的

シーマは、主に寺院のために定立される。ラクルヤンたちの多くは自身の寺院のためにシーマ定立を行った[Barrett Jones 1984: 67]。寺院のほかに、舟渡しを維持するため（トゥラン刻文）、褒賞として（マンティヤシ I 刻文）、災害の救済措置として（ルカム刻文）、シーマが定立された。

カラディ刻文では、パニ克蘭・ススル *panikelan susur*（何らかの義務）の（ための）花を植える土地としてダンプンタ *ḍampunta* たちによって祈られ、シーマが定立された。ダンプンタという語は宗教的地位の高い人に用いられた冠詞であり、この義務は寺院やその儀礼に関するものであると考えられる。またこの刻文では、シーマが定立された理由として「グナンタ *guṇanta* とカムラ *kamula* の間にあるガヤーム *gayām* とピヤピヤ *pyapya* の地は森⁶⁰であり、恐れられ・・・昼夜、商人や下流からの人々を危険にさらしていた。そして、そ

何かしらの税と関係していた者たちであっただろう。彼らは、MDH とは異なる税を徴収する者あるいはその監督者たちであつたと考えられる。

⁶⁰ 原語は「*alas arañan*」であり、「*alas*」は森、木を意味し、「*arañan*」はおそらく植物の名であると考えられる[Zoetmulder 1982: 47, 120]。刻文の次の行では同じ場所を指して「*alas*」とのみ記されているので、ここでは「森」とした。バレット・ジョーンズは「*alas arañan*」と「*alas*」をともに「未耕地 *uncultivated grounds*」と訳す[Barrett Jones 1984: 181]。

の森が水田となり、恐怖の場ではなくなり、バワン *bawang* のワトゥクに属さない」[1b: 2-5]という記述がある[Barrett Jones 1984: 180-181]。このシーマは何らかの義務のために定立されたが、その森がシーマとなり水田となったことで、この地域の安全につながったことが読み取れる。同様の記述はバリングワン刻文（891 年）にも見られる⁶¹。このように、シーマ定立の目的は一つに限られず複数ある場合もあった。

また、サリマル刻文では、パムガト・バラカス *pamgat balakas* がサリマルの森 *alas i salimar* にシーマを定立するが、その土地をラーマンタ *rāmanta* らに与えている⁶²。ラーマンタは宗教的役割を持つラーマと考えられるが、この刻文では、寺院や神に関しての記述は無い。このシーマ定立が何を意味するのか断言はできないが、おそらく村の寺院あるいは儀礼などを行うために、その村を領地としていたパムガトがシーマを定立し、そのシーマの管理をラーマンタたちに任せたのだと解釈できる。

シーマとなった村や土地は寺院の維持のために、そこからの収益（の一部）を寺院に納める。シーマを寺院のために定立することは、寺院への一種の寄進行為と捉えることができ、定立者の宗教的地位を高めたであろう。また、恐怖のあった森がシーマとなることで、その地域の安全が確保されたように、シーマ定立は社会的安寧をもたらす手段としても働いた。

シーマの定立者

シーマ定立を行うのは、多くの場合、王あるいはラクルヤンやパムグトの称号を持つ地方領主、高官である。シーマは主に寺院のために定立されるが、寺院自身がシーマを定立することはない。ラクルヤンやパムグトラが自身の権威のもとにシーマを定立する場合と、王による命令 (*ajña*) や恩恵 (*anugraha*) によってラクルヤンやパムグトがシーマを定立する場合がある。王の命令や恩恵によるシーマ定立において、命令や恩恵を受け取る人（受領者）、つまりシーマ定立を認められた人は、主に寺院を持つ高官たちであるが、実際にシーマからの利益を受け取る（受益者）のは、その寺院である [Barrett Jones 1984: 65-68]。シーマ定立を行ったラクルヤンやパムグトは、自らの寺院を維持する、あるいは拡張するためにシーマを定立し、そのシーマからの利益を寺院運営に使用することで、彼らの宗教的権威を高めた[Barrett Jones 1984: 67]。

⁶¹ バリングワン刻文では、カムラーンのシーマが定立されるが、その定立の理由として、その原野に飛び散った血と濡れた死体のために、常に（罰金あるいは費用を）支払い続けることになり、バリングワンの住人を弱らせていたことが記される。また、この恩恵が与えられた理由は大きな道を守るためとも記される。この道は原野を通る道であろう。

⁶² サリマル刻文はリング状の石に刻まれた刻文で、サリマル I から VI までである。I、III、IV、V はカンダンのラーマンタ *rāmanta i kaṇḍang* に、II はパク・ワンギのラーマンタ *rāmanta i paku wangi* [OJO XV] に、VI はユウェニのラーマンタ *rāmanta i yuweni* [Riboet 2003: 242] にその土地を与えている。おそらく、シーマとなった土地はそれぞれのラーマンタたちに分割して与えられた。

シーマの管理者と土地の所有者

刻文には、シーマに対する権利がどこにあるのかを明記する場合が多い。多くは寺院や神、あるいはそのシーマを定立した者（の子孫）である。この権利とは、シーマ内でのスカドゥカに対する権利、そしてドゥラウィア・ハジに対する権利のことである。

スカドゥカとは、「sukha（喜び）」と「dukha（悲しみ）」から成る語であるが、古ジャワ語刻文では以下のようなことがスカドゥカとして記される。「スカドゥカとは、ビンロウが花をつけず、不当でひどい罰を受け、あらゆる病気で死に、落とされて死に、投げ込まれ、雷に打たれて（死ぬ）。ヒョウタンが地面をはい、血が飛び散らされ、死体が濡られるなど *sukhaduḥkhanya mayang tan tka ring wwaḥ ḍaṇḍa kuḍaṇḍa bhaṇḍihalādi salwirā ning wipati mati katibā māti kalbu inalap ni glap walū rumambatting natar raḥ kasawur wangkai kābunnan itiyamādi*」[表面: 16-18]（スギ・マスク刻文）。単に「sukhadukha」とのみ記される場合も多いが、さらに多くの内容を含むものもある（サングラン刻文など）⁶³。このスカドゥカに対する権利を持つということは、ここで列挙された事（スカドゥカ）がシーマに起こった場合にこれに対処する権利を持つということを意味していると考えられる。より具体的には、これらの事柄に対しては罰金が科せられ、従来は王によって徴収されていたが、この罰金がスカドゥカの権利を与えられた者に支払われるということである [Stutterheim 1925: 269-272; Barrett Jones 1984: 11, 59-60]⁶⁴。

また、タジ刻文では、カビクアン *kabikuan* のためにシーマを定立したラクルヤン・ワトゥティハン *rakryan watutihang* の子であるラケ・シュリー・パール *rake śrī bhāru* がダルマ⁶⁵を守り、その子が未来において、聖なるダルマを良く管理する権利を持つとされる。そして、ラケ・シュリー・パール以外のラクルヤン・ワトゥティハンの子は、このダルマとこのシーマに関わりを持たないことが明記される。また、スカドゥカがあった場合は、ラジャ *raja*（地名）のサン・マルヒャン *sang marhyang* が規則に基づき、善悪を判断する。ここでは、ダルマとシーマはシーマの定立者であるラクルヤン・ワトゥティハンの子とその子孫が権利を持ち、そのシーマ内でのスカドゥカに対しては（おそらくダルマの聖職者あるいは管理者である）サン・マルヒャンが権利を持っている。

スカドゥカに対する権利のほかに、シーマの DH に対する権利について記載される場合が

⁶³ 中部ジャワの刻文（後代の複製を除く）では、一般に「sukhadukha」という語のみで記される場合がほとんどであるが、サングラン刻文などの東部ジャワの刻文では、スカドゥカに含まれる多くの内容が記載される。これは、中部ジャワよりも権利が細かく規定された、あるいは中部ジャワでは「sukhadukha」という語で表される内容に関して一般的に知られていたが、東部ではその内容が知られておらず、明記する必要があったとも考えられる。

⁶⁴ 第2章第2節で記したように、バリングワン刻文（891年）では、「飛び散った血と濡れた死体によって常に支払い続けるために、バリングワンの住人に弱さを引き起こす」という一文があり、村人が殺人に対して罰金（あるいは死体の処理費用などの何らかの費用）を払っていたことがわかる。

⁶⁵ このダルマはシーマを与えられたカビクアン、あるいはそのカビクアンが付属する寺院のことを指していると考えられる。

ある。ドゥラウィア・ハジに対する権利についての記述は刻文によって異なる。MDH に干渉されないドゥラウィア・ハジが列挙される場合、そのドゥラウィア・ハジに関しては寺院や神がその権利を持つと記される場合が多い。単に、MDH によって干渉されない、という記述のみの場合もある。また、後述するが、交易・生産規定が記される場合、ドゥラウィア・ハジに対する権利はより複雑になる。例えば、規定範囲を超えた場合に MDH により徴収されるもの、MDH と寺院（あるいは神）とシーマの守護者 *makmitan sīma*（あるいは寺院の守護者 *makmitan dharma*）に三等分されるものなど、ドゥラウィア・ハジによって、またその状況によって権利を持つ者が変わる。

しかし、刻文に記されるこれらの権利の中に、シーマである村あるいは土地の所有権が含まれているかどうかはよくわからない。おそらく土地の所有権は変わらず、定立以前のものであったと考えられる。つまりシーマとなった村や土地には所有権の移動はなく、ここからの収入を得る権利が移動した。なぜなら、刻文に記されるのは土地の所有についてではなく、シーマからの収益（ドゥラウィア・ハジ）への権利を細かく規定しているからである。またシーマを定立する際に、土地を購入しシーマとする場合もあるが、この場合も土地の所有者は土地の購入者であり、シーマの受益者ではなかったと考えられる。

後述するが、シーマになった村は「ワトゥク（に属すること）をやめる」と記される場合がある。この場合においても、そのシーマの所有権は土地の元来の所有者にあると考えられる。村そのものの所有権が誰にあるかは不明であるが、おそらく村の住人の共同体にあると考えられる。例えば、タジ刻文では、ラクルヤン・ワトゥティハンによって、ドゥムンのワトゥクに属すタジの複数の菜園の土地 *lmah kbuan kbuan i taji watëk dmung* がシーマとされたが、その土地を持つもの *anung makalmah ikanag lmah/malmah* として、数名のタジの住人 *anak wanua i taji* が列挙されている⁶⁶。そして、彼らとタジのラーマらの同意によって、ラクルヤンによるその土地のシーマ定立が承認されたことが記される。このことから、土地は村人によって所有されていたこと⁶⁷、そして、土地の使用には所有者だけでなくその村のラーマによる同意が必要であったことがわかる。この村の属するワトゥクの領主は、ラクルヤン・ワトゥティハンではなく、彼の妻であるサムガト・ドゥムン *samgat dmu(ng)* のプ・チンティアー *pu cintyā* であったと考えられるが⁶⁸、彼女の承認ではなく村の住人である土地の所有者とラーマの承認が必要であった。つまり、たとえ領主であっても土地の所有者と村のラーマによる同意がなければ、シーマを定立することができなかったと考えられ

⁶⁶ 土地の所有者として 8 人の名前が列挙されているが、そのうち 2 人は女性である。

⁶⁷ 菜園を意味する「*kbuan*」は複数形で書かれているが、8 人がそれぞれ個人の菜園を持っていたのか、それとも 8 人あるいは数人でいくつかの菜園を共有していたのかははっきりしない。

⁶⁸ サムガト・ドゥムンはこのシーマの定立者ではなく、彼女が刻文に記されるのは、上述したラケ・シュリー・バールの母としてである[d: 4]。つまりラケ・シュリー・バールがシーマとそのシーマを与えられたカビクアンに対して権利を持つ理由は、おそらくシーマとなった土地の領主であるサムガト・ドゥムンの子どもであるためと考えられる。

る。このことは、シーマ定立の証人として、しばしば村のラーマたちが列举され、贈り物を与えられることから想像できる。つまり、領主であるラクルヤンやパムグトはワトゥクに属する村々から税を徴収することはできたが、その村や土地を所有していたわけではない、すなわち徴税権を持っていたが所有権は持っていなかったことが示唆される。

また、刻文では「カビクアンの村 *wanua kabikuan*」の記述が確認できる。このカビクアンの村の所有権はそのカビクアンにあると考えられるが、これがカビクアンのシーマとして定立された村であるのかははっきりしない。しかし、ウラカン *Wulakan* 刻文（928 年）では、「カフルナンのワタクに属すトゥルマンガンのカウィクアンの村 *wanua ing kawikuan i turumangamwil watak kahulunan*」[A: 11]という記述があり、この場合、ワトゥクに属していることから、この村はシーマではなく、カビクアン所有の村であるといえる。シーマとなった村は通常ワトゥクには属さないからである。刻文ではほかに、「カビクアンのシーマである・・・村 *wanua ...sīma kabikuan*」という記述もある。この場合は、カビクアンのためにシーマとされた村であり、上述のように、必ずしも村や村の土地の所有権がカビクアンにあるとは限らない。このような宗教施設の村が記述される場合、ほぼすべてがカビクアンの村である⁶⁹。

上述のように、村の土地はその村の住人によって所有されており、その土地がシーマになったとしても、その所有権は依然として元の所有者にあったと考えられる。ただし、シーマとなった土地や村に対して、シーマからの収益を与えられた寺院がその土地の所有権を持っていた可能性も排除できない。

第2節 シーマ定立に伴う規定

シーマになった村や土地は、それまで王や領主などに収めていた税をシーマが定立された目的のために使用する。その目的の多くは寺院（の維持）や神（の儀礼）である。刻文では、単に村や土地がある目的のためにシーマとなること、そのシーマの証人が記されるだけのものもあるが、多くは様々な規定が含まれる。

税徴収者の立ち入り禁止

多くの刻文では、シーマとなった村や土地は、MDH やその他の税徴収者と考えられる人々による立ち入りが禁止されることを記す。例えば、ウアタン・ティジャ *Wuatan Tija* 刻文では、MDH の立ち入りが禁止されることが記される。この場合は MDH によって徴収されていた税がすべて免除されたと理解できる。一方、「*saprakara mangilala drbya haji*（列举されたものと）同等の数の MDH」と記され、MDH のリストが記される場合も多い。この場合、立ち入りが禁止された者たちが徴収していた税は免除されるが、この立ち入り禁止の項目に入らない税は引き続き、徴収されたものと考えられる。MDH の他に、9 世紀末からは、

⁶⁹ 例外として、906 年のパルパンガン刻文では、「パハイの僧院の所有であるスラーンガンの村 *wanua i srāngan pumpunan ni bihāra ing pahai*」[12]が確認できる。

パンクル、タワーン、ティリップなどの税徴収者の立ち入り禁止を記す刻文が増加し、また、カラディ刻文(909年)以降にはパティやワフタの立ち入りを禁止する刻文が多くなる。

義務 (ブアト・ハジ)

シーマからの利益を受け取る寺院あるいはそのシーマの受領者にはブアト・ハジ(王や領主への奉仕、強制労働の一種 [Barrett Jones 1984: 61]) が課せられることもある。例えば、クワク I 刻文では、「チャイトラ月とアスジ月の昼夜平分時(つまり秋分・春分)にパスティカ(の寺院)のために、花かごを作る *buathajyanya mangragā kamwang ing pastika akan bisuwa caitrāsūji*」[A: 4] ことがそのシーマのブアト・ハジとされる。またタジ刻文では、「その(シーマの) ブアト・ハジはラジャの神のために一年ごとに花かごを作る、そして香(をかうために)金 2 ク *ku* をチャイトラ月に拠出し、同様に金をアスジ月に出す *buatthajyanya mangragā kamwang angka tahun muang mas ku 2 panumwasa hasap maknā ri bhaṭāra ring raja umtua ing caitra samangkana mas umtua ring asūji*」[d: 7-8] とされる。このように、ブアト・ハジの多くは寺院への供物や儀礼に関することである⁷⁰。

交易・生産に関する規定

バリトゥン王時代になると、シーマ定立の規定の中に交易と生産(手工業者)に関する規定が記されるようになる[Naerssen 1977: 67; Barrett Jones 1984: 37]。この交易・生産規定では、ある一定の範囲内であれば税が免除される。さらに、その規定範囲を超えた場合の超過規定を含む場合もある。サンサン刻文には次のように記される。

ājña haji kinonnakan i kanang masamwyawahāra hana ng kāna hīnghīngana kwaiḥha-nya paṇḍai mas paṇḍai wsi tambaga gang(ś)a tlung ububan ing sasīma macadar 4 mangarah lumpang 3 mangulang tlung tuhān ing sa sīma kbo anya 20 ing satuhān sapi...0 80 aṇḍah wantayan 1 parahu---bhaṭāra 1 masunghara 3 tan patuṇḍāna magulungan tlung pasang samangkana tan knān(a i para)masan yāpuan pinikul daganganya kadyanggāning mabasana masa(yang) makacapuri kapas wungkuḍu tāmbra gangsa sobuban i satuhān garam paḍak lṅa gula saprakāra ning dual pinikul kalima bantal i satuhān pikul pikulananya tlung tuhān ing sasīma i kanang samangkana tan knāna de sang mangilala drabya haji yāpuan lwih kwaiḥnya sangkā i ni kānang panghīnghīng iri ya knāna ikana saka lwihnya de sang mangilala sodhāra haji kunang i kanang mañambul mañawring mangapus manglākha daṇḍaha nira mamungus mangubar manahab manuk mamisaṇḍung manganammanam mamukat wungkuḍu manarub mangdyūn manggula manghapū ityaiwamādi kapua ya tribhāgān sadūman umarā i bhaṭāra sadūman umarā i sang mangilala drabya haji sadūman umarā i sang makmit sīma [A: 12-B: 6] [Naerssen 1937: 442-443]

⁷⁰ 寺院のための供物はしばしばチェトラ(チャイトラ)月とアスジ月になされ、この時期に何らかの儀礼がおこなわれていたと考えられる。

(訳) 王の命令 (によって)、交易を行う者にその数の制限があることを命じられた。(その数とは、) 金職人、鉄職人、銅、鐘青銅 (職人) はそのシーマで 3 つのふいご (をもつ)。束で運ばれるもの 4、荷造りされて運ばれるもの 3 はそのシーマで 3 人の長に買い上げられる。一人の長につき水牛 20、牛・・・40、山羊 80、アヒル 1 かご、神の (ために?)・・・牽引なしに舟で運ばれるもの 1、帆柱 (?) 3、荷車で運ばれるもの 3。そのようなものは税に当たらない。もし天秤棒で運ばれるなら、服の行商人、銅職人、マカチャプリ (?), 綿、ウルクドゥ (赤い染料が採れる植物)、銅、鐘青銅のような物は、一つのふいごにつき一人の長 (に限られる)。塩田の塩、ゴマ、砂糖 (のように)、天秤棒で運ばれる物に属するものは、一人の長につき 5 つの荷物 (に限られる)。(そのような) 天秤棒で運ばれる物はそのシーマで 3 人の長 (に限られる)。そのようなものは MDH によって干渉されない。もしその制限されたものからその数を超えたなら、その超過分は MDH によって干渉される。そして、黒い染料を作ること (あるいは作る者)、赤い染料を作ること、縄を作ること、赤い染料を作ること、・・・⁷¹染料を使って行うもの、鳥を捕まえること、罾で捕まえること、編むこと、糸をよること、小屋を作ること、器を作ること、砂糖を作ること、石灰を作ることなどのすべて (に関する取り分) は三等分される。一部が神に行き、一部が MDH に行き、一部がシーマの守護者に行く。

この交易・生産規定の内容は 3 つの徴税形態に分類できる。バレット・ジョーンズが指摘しているように[Barrett Jones 1984: 37-39]、①その税が三等分されるもの、②「商取引 (samwyawahāra)」の言葉に含まれるもの、③「天秤棒を担いで運ぶ商取引 (pinikul dagang)」に含まれるもの、である。②、③においては、ある一定の範囲で商取引を行う場合に限り、商取引にかかる税が免除されるものである。この範囲というのは、商取引の方法によって、その運ぶ品物によって規定されている。

①は、染色すること (mañubar)、砂糖をつくること (mañgula)、石灰をつくること (mañhapū) などが述べられ、これらの税は神 (bhaṭāra) あるいは寺院、MDH、シーマの守護者 (makmitan sīma) あるいは寺院の守護者 (makmitan dharma) の間で三等分されることが述べられる。シーマの守護者も寺院の守護者も、おそらくシーマが定立された目的のためにシーマの管理を行う者たちである。

②の箇所では、商取引を行う際に、MDH によって干渉されない数に制限があることが述べられる。例えばサンサン刻文では、金職人、鉄職人、銅職人、錫職人はそのシーマにおいて 3 つのふいご (ububan) (が使用でき) [Zoetmulder 1982: 2095, Sarkar 1972: 92]、束で運ばれるものが 4[Barrett Jones 1984: list7]、荷造りされて運ばれるものが 3[Barrett Jones 1984: list7; Sarkar 1972: 92]、それは、そのシーマで三人の長 tuhan に買い上げられる⁷²。そして 1

⁷¹ 「daṇḍaha nira mamungus」の箇所の訳は不明である。

⁷² この箇所の記述は解釈が難しく、「三人の長」が誰を指すのか、「買い上げる」とはどう

人の長ごとの水牛、牛、山羊、アヒルの数の制限が記される。

③では天秤棒を用いて行われる商取引の品物（服、銅製品、綿、塩、砂糖など）が述べられ、その品物は、そのシーマの 3 人の長ごとに 5 つの荷物に制限される。この数を超過した場合、超過分は MDH あるいはマンギララ・ソダーラ・ハジ mangilala sodhāra haji (MDH と同じ意味を持つ) によって徴税される。

なぜ、バリトゥン王以前の刻文にはこのような交易・生産規定が記されないのか。バレット・ジョーンズは、バリトゥン王以後の王たちが村々の活動、米生産だけでなく村内交易と職人の生産に対して、より強いコントロールを持つようになったと指摘している [Barrett Jones 1984: 38-39]。そして中部ジャワよりも東部ジャワの刻文に交易・生産規定が多い理由として、米は王の重要な収入源であり富の重要な基盤であったに違いないが、東部ジャワ時代においてはより多くの交易の可能性に伴って交易活動に対する税がより有益なものとなったことを指摘している [Barrett Jones 1984: 39]。クリスティもまた、バリトゥン時代は域内の農業基盤の拡大と東部ジャワの港での交易からの収入によって国庫が改善され、この時期はアジアの海上交易が再び活発化した時期と一致することを指摘している [Christie 2001: 49]。ではなぜ、バリトゥン王は以前の王よりも村内交易にまでコントロールを及ぼす力があつたのか。これはバリトゥン王の王権強化と関連があるのではないかと考えられる。バリトゥンの王権強化に関しては第 4 章にて考察する。

ワトゥクからの離脱

シーマになった村や土地は、それが属していたワトゥクに属することをやめたという記述がカラディ刻文、トゥラン II 刻文などにある⁷³。他の刻文にはこのような記述ははっきりとは見られないが、税の納入先が寺院などに変わり、交易・生産規定において超過分はラクルヤンやパムグトの称号を持つ者ではなく王の徴税者に支払われることから、おそらく同様にワトゥクに属することをやめたはずである。刻文では、シーマとなった村が属していたワトゥクの領主であるラクルヤンあるいはパムグトに対して贈り物がなされる記述がある。村が属していたワトゥクから収入を得ていた領主は、村がシーマとなることで収入が減り損失を被ったと考えられる。そのためシーマ定立の際に贈り物がなされた。そして、贈り物を受け取ったことで、その村がシーマとなることを認めることとなった。つまり、ワトゥクへの帰属をやめるということの意味は、それまで属していたワトゥクの領主（つ

いうことを意味するのか明確ではない。しかし、このようなシーマ内での取引に関する詳細な規定を守るために、シーマ内での取引を管理する者がいたはずで、おそらく「三人の長」がこれにあたる人物たちであったと推察される。

⁷³ また、シーマとなることでワトゥク名が記載されない村の例が、証人などの出身地の記載箇所に見える。例えば、901 年にコルンガン kolungan 村はウカ wka のワトゥク (wanua i kolungan watak wka) として記されるが (カユ・アラ・ヒワン Kayu Ara Hiwang 刻文)、928 年には「シーマであるコルンガン村 wanua i kolungan sima」と記述され (ウラカン Wulakan 刻文)、シーマとなったことで、ワトゥク名が書かれていないことがわかる。

まりラクルヤンやパムグト) によって税を徴収されなくなるということである。

上述のように、シーマとなったことで生じるいくつかの結果(規定)が記される場合がある。これらの規定が記されない場合は、シーマとなることで得られる結果が一般的に知られており、特に明記されなかったと考えられる[Barrett Jones 1984: 60]。シーマには公に認識されていた規定があったことが、贈り物リストの箇所での文言からわかる。バレット・ジョーンズは、MDH や役人の立ち入り禁止、ワトゥクからの分離、職人や商人から徴収される科料(fines)や税(dues)の受益者の交代が、証拠はないが、すべてのシーマ定立に適用されたと推測している[Barrett Jones 1984: 60-61]。

第3節 シーマ定立の経済的・政治的影響

シーマ定立の経済的影響

シーマになった村やその土地の収益は、それまで王や地方領主、高官に入っていたものが寺院や公共事業のために使われる。そのため村人たちにとって、シーマの定立すなわち免税というわけではない。しかし、シーマになることで寺院のためにその税が使用され、また村がシーマになった場合には、交易・生産規定によって一定の範囲内での税は免除され、村に宗教的安寧と経済的恩恵を与えるため、シーマ定立は村人たちにとっても歓迎すべきものであった。

交易・生産規定による免税処置は、シーマとなった村や土地における交易の活性化をもたらし、経済的な向上をその周辺にもたらしたと考えられる。ただしクリスティは、この商取引の免税規定は、その規定範囲内でのシーマにおける活発な商取引を奨励したかもしれないが、その規定範囲以上の商取引の成長を促すことは難しかったと述べる[Christie 1991: 39]。その可能性も否定はできないが、この時期にアジアの海上交易が活発化しジャワの海上交易での機会が拡大していたのであれば、それとともに域内交易も活発化し、さらにシーマにおける一部免税の規定が後押しする形で、村内での商取引の活動が刺激され、拡大したのではないかと考えられる。

また刻文では、森や原野を水田に変えシーマとする例がいくつか見られる(ラムウィ、クワク I・II、ラタウン I・II 刻文など)。森や原野が水田となることは、その地域の生産力が向上したことを示唆する。そしてシーマとなった場合にも、一部の税は MDH に徴収されることになるので、間接的に国庫の収益の増加を意味すると考えられる。また、カラディ刻文では安全な交通のために森が水田に変えられシーマとなっている。これはシーマ定立によって、道の安全が確保されることで人々の往来が活発になったことを示唆する。

寺院の沐浴場(tirtha)などのための水路の建設や維持を目的にシーマが定立された場合、その水路は寺院のためだけではなく、周辺地域の水田などの灌漑に利用された可能性がある(クブクブ刻文、ハリンジン A・B 刻文)。

また、舟渡しを維持するためにシーマが定立されたことを記す刻文がある(トゥラン刻

文)。この刻文では、どの地位の人でも川を渡ることができると記されている。この舟渡しは人々の往来を容易にし、交易の活性化を手助けしたと考えられる。交通の整備は交易を容易にし、ひいては税の徴収にとって重要であった[Barrett Jones 1984: 81]。

シーマ定立の政治的影響

シーマが定立されるということは、それまでその土地から税を徴収していた者にとってはその税収入の損失を意味する。その土地の領主が自らの寺院のためにシーマを定立することは、彼の寺院維持のためにその税が使用されるため損失とはならず、寺院へのシーマ定立の行為は彼の宗教的地位を高めた[Barrett Jones 1984: 67]。王が税収入の一部を徴収していた領主の土地がシーマとなった場合には、王はその土地からの収入（の全てあるいはその一部）を失う。しかし、王の命令や恩恵によってシーマが定立されることは、シーマを実際に定立する領主とともに、王の宗教的地位を高めた。また、王が領主に対してシーマ定立を認めた場合、これは王から領主への恩恵であり、王と領主の友好的な関係を築くための手段であったといえる。

さらに王の命令あるいは恩恵のもとでシーマが定立される場合、王はあるラクルヤンに、他のラクルヤンのワトックに属する村をシーマとして与えることがある。このことは、シーマになった村が属していたワトックから利益を得ていた者にとっての損失を意味する⁷⁴。バレット・ジョーンズは、王はシーマの定立によってラクルヤンの力を制御することができ、同様に王はシーマを与えることで寺院に対しても制御を行うことができたと指摘し、シーマ定立の制度が 10 世紀の中部ジャワの政治的支配の道具であったとする[Barrett Jones 1984: 80]。上述したが、シーマ定立は公共事業や救済を目的として定立されることもある。以上のことから、シーマは単に寺院を維持するための手段ではなく、王の重要な政策の一手段として機能していたといえる。

シーマ定立刻文の類型

バレット・ジョーンズはシーマ定立を記す刻文をその記述方式から次のように 4 つに分類している[Barrett Jones 1984: 62-65]。

1. アジュナ *ajña*（命令）型：王の勅令、一般的にこの命令がシーマを定立することが認められた者（受領者）に届くまで多くの役人を通して伝えられる。
2. アヌグラハ *anugraha*（恩恵）型：王または高官の恩恵が受領者に伝えられる。
3. スムスック *sumusuk*（自立）型：王の権威とは無関係にラクルヤンやパムグトが独自の権力と自発性において行う。
4. 請願型：高官が自らの寺院を維持するためのシーマを定立するのに王の許可を求める。

⁷⁴ 損失を被る者には、他の証人とともに、一般的にシーマを定立する者から贈り物がなされる。

命令型、恩恵型（王によるもの）、請願型は王の権威を示すものといえる。バレット・ジョーンズは、この方式に基づいて分類した刻文のリストを作成している[Barrett Jones 1984: 86-87, list12]。このリストをみると、バリトゥン王以前のシーマ定立を記した刻文は、王の権威を示す命令型と恩恵型の合計が 6 点（うち二つは後代の複製）⁷⁵であるのに対し自立型は 20 点である。しかしバリトゥン王の統治期間には、命令型と恩恵型（王の恩恵でない 1 つを除き）が 7 点⁷⁶、自立型が 3 点、請願型が 1 点である。さらにバリトゥン王以後、シンドク王以前には命令型・恩恵型は 6 点、自立型が 2 点（王による一点を除く）、請願型が 1 点、シンドク王の統治期間では、自立型が完全になくなり、命令型、恩恵型、請願型のみとなる。この 3 つの方式による 18 点のうち、命令型は 13 点と圧倒的に多くなる。これは王の権威が確立したことを示唆する。バリトゥン王以前にはまだ王の力が弱く、バリトゥン王時代において王の力が伸長し次第に王の権威が認められるようになり、シンドク王時代にはこの王の権威が確立したといえる[Barrett Jones 1984: 63]。またシーマ定立が王の命令あるいは恩恵型に限定されてくるということは、王がシーマ定立の権利を独占するようになったと解釈できる[深見 1999: 367]。シーマ定立の際には、高官や証人たち、そして王に贈り物が行われる。王はシーマを定立することで贈り物からの利益を得ており[Barrett Jones 1984: 80]、王は宗教的権威を得る手段としてだけでなく、自らの利益を得る手段として、シーマ定立を利用していたのではないかと推察される。

シーマ定立の規定のシステム化

10 世紀以降の刻文では、ドゥラウィア・ハジに対する寺院の取り分の明確化（収益に対する権利の明確化）と、交易・生産規定における税徴収が行われる場合の細かな規定がみられる。シーマ定立には慣例があり伝統的な規定があったと考えられるが、バリトゥン王時代はこの伝統的な規定の上に、さらに交易・生産規定を設け、ドゥラウィア・ハジの権利をより明確化したといえる。バリトゥン王が即位する数年前まで王の不在時期があった。この王の不在時期に不安定になった国庫の税徴収の基盤を再構築するにあたり、交易・生産規定をシーマ定立に組み込むことで、交易の活発化（経済の活性化）を促し、国庫の収益の拡大を図ったと考えられる⁷⁷。交易・生産規定はシーマ内に限られるが、シーマ内での交易が活発になれば、その周辺での交易活動も盛んに行われたと推察される。村や土地がシーマとなることで、国庫の収益は一部減少したと考えられるが、すべてが免税になったわけではなく、一定の収益はあった。シーマ定立によって変化する税（収益）をより細かく規定し、超過分の税はきっちり徴収することで、経済活動を活発化させながら、収入の安定化を図ったと考えられる。

⁷⁵ 本稿では、これにラムウィ刻文が追加され 7 となる。

⁷⁶ 本稿では、これにルカム刻文が追加され 8 となる。

⁷⁷ 王の不在時期においても、税システムはラクルヤンやパムグトラ領主によって維持されていたが、バリトゥン王が即位した時期は王権が未だ脆弱であり、王の収入（国庫）は不安定になっていたと考えられる。

第4節 シーマ定立に伴う儀式とその役割

シーマ定立には一連の儀式が伴う。シーマ定立の儀式は刻文に詳細に記載され、重要な意味を持っていたと考えられる。この節ではシーマ定立の儀式の意義、役割とは何であったのかを論じる。

シーマ定立の儀礼の執行者

シーマ定立に伴う儀礼を執行するのは一般にマクドゥルであるが、彼はパムグトの称号を持ち、高官のリストに含まれる。彼は宮廷付の司祭であったと考えられる。王の高官がシーマ定立の儀礼を執行することは、シーマ定立が王によって整えられたことを示唆する⁷⁸。マクドゥルの他に、儀式を行う者としてしばしば刻文に記されるのは、サン・ワフタ・ヒャン・クドゥル *sañ wahuta hyañ kudur* 「神聖なクドゥルの聖なるワフタ」である。ワフタに関して、カスパリスは軍事的側面がみられると指摘しているが[Casparis 1986: 54-55]、この箇所におけるワフタは代理人を意味していると考えられる。なぜなら、クドゥルというのは、シーマ定立の際の儀礼のことであり、その儀礼を行う者という意味を持つ語がマクドゥルであるが、サン・ワフタ・ヒャン・クドゥルは、このマクドゥルが行う儀礼を代行して行う者であると考えられるからである。例えば、ウアタン・ティジャ刻文ではマクドゥルではなくサン・ワフタ・ヒャン・クドゥルが儀礼を行うように王に命令されている。マクドゥルはこの刻文では記されていない。

儀式の内容

このシーマ定立の儀式にはいくつかの儀礼が伴う。その大まかな内容は、証人への贈り物、神や聖なる石への供物、マクドゥルが卵を割り、鶏の首を切り、違反者への呪文を唱えること、共食を伴う供宴などである。儀式は天幕の下で行われ、野外で実施されることがわかる。

例えば、ルカム刻文に記されたシーマ定立の儀式は次のようなものである[参考資料 2]。高官、役人、近隣の村のラーマとその妻などへの贈り物がなされた後、シーマ定立の供物 (*saji ning manusuk sīma*) として、サン・ヒャン・ブラフマー *sang hyang brahmā* (火の神)、サン・ヒャン・クルンパン *sang hyang kulumpang* への供物が準備された。そして、「供物が準備された後、サン・ワフタ・ヒャン・クドゥルとラクルヤーン・マパティ *rakryān mapatiḥ* の従者であるサン・パングラン *sang pañurang*、そしてワフタ・パティ *wahuta patiḥ* と近隣のラーマ、そしてラーマンタ、ラーマンタの妻 (*reṇanta*)、定立された(その村の者)すべて、住人、宗教者 (*wiku*)、すべてが広場で(料理を)与えられ食事をした」。これらの食事には、ご飯、魚の干物、肉や野菜などの食べ物、そしてヤシ酒、蒸留酒が提供された。そし

⁷⁸ 後代の複製ではあるが、クティ刻文には、マクドゥルが王によって定立の儀式を行うように命じられたという記述がある。

て「食べ終わった後に、パンガリ（衣服）を着て、化粧をし、花をつけた。昼の 6 刻（現在の昼 3 時⁷⁹）になり、彼らは皆、移動し、地面に座り、（その）場所で円になった。天蓋の下にサン・ヒャン・ウンカル・シーマ sang hyang wuñkal sīma とクルンパンに直面した。サン・マクドゥルは呪いを唱え始めた。呪詛を発し（ながら）鶏を切り、シーマの石に卵を投げつけ、灰を撒いた。ラクルヤーン・マパティの従者と定立された（村の）ラーマと近隣のラーマすべてに直面した」。そして、呪詛の言葉が記される。この呪詛には、ヒンドゥー教神が列挙される。ルカム刻文では、バプラケーシュワラ baprakeśwara、ブラフマー brahmā 神、ウィシュヌ wiṣṇu 神、マハーデーワ mahādewa 神が最初に記される。これらの神々の後にヒンドゥー教の半神や他の神々が続く。そしてこれらの列挙の後に「ジャワの地の大王の王宮を守ることで知られる神よ dewata prasiddha mangrakṣa kaḍatwan śrī mahārāja ing bhūmi jawa」[2: 14]と呼びかけられ、シーマの規則に従わない者への呪詛が続く。呪詛が唱えられた後、「パティ、ワフタ、そして近隣のラーマ、そして定立された（村の）ラーマ、男、女、すべてがサン・ヒャン・ワトゥ・シーマとクルンパンに祈った。彼らすべてが（食事のための）葉を換えた。その後、また、彼らは踊った」[2: 20-21]。

ルカム刻文のように、刻文には儀式的参加者が共食すること、参加者がともに座してシーマの違反者に対する呪詛を含む儀礼に参加すること、花で飾り化粧をして踊ったり、時には賭博など娯楽が提供されることが記される。またウカジャナ Wukajana 刻文では、「ビーマ・クマーラ」や「ラーマーヤナ」を語ったことや「ワヤン（影絵芝居）を行った mawayang」ことが記述されている。刻文には、食事に提供された肉や野菜、酒などが列挙され、共食が重要な意味を持っていたようである。共食という行為は、個人を集団の中に位置づけ個々の連帯を強める意味合いがある。儀式参加者、証人たちは共食を通して、このシーマ定立の正当性を承認した。また、刻文には長い贈り物リストが記される。この贈り物をするという行為はシーマ定立の正当性を承認してもらうための見返りとして行われ、シーマの正当性を保障するための行為の一つである。

さらに、このシーマ定立の儀式が記される箇所では、しばしばサン・ヒャン・クルンパン、サン・ヒャン・ワトゥ・シーマ sang hyang watu sīma、サン・ヒャン・ワトゥ・トゥアス sang hyang watu tēas という語が見られる。クルンパンはシーマ定立の儀礼の際に建てられる神聖な石であり、ワトゥ・シーマはシーマ石、ワトゥ・トゥアスは境界石である[Riboet 2003: 135-136]。刻文から、これらの石の形状は読み取れないが、ワトゥ・シーマやワトゥ・トゥアスはシーマの区域を位置づけるために建てられていたと推察できる。現存するチャンディ・サンビサリの遺構などでは、チャンディ敷地内の主祠堂を囲むように複数のリング状の石が置かれている。刻文には、定立の儀式において、このようなチャンディと同様に石を置くことで、シーマの区域を示し、その場を神聖化していたと考えられる記述があ

⁷⁹ 「昼の 6 刻」の原語は「tabēḥ nēm ing rahina」であり、この「tabēḥ」では 1 日は昼間の 8 刻と夜間の 8 刻に分かたれる[Titi 1982: 51.n.134] [Zoetmulder 1982: 1892]。そのため昼間の 6 刻は午後 3 時頃に相当する。

る。例えば、ママリ刻文では、シーマの土地の角にワトゥ・シーマが置かれた。リントカン刻文では、「聖なるシーマ石を完全にする *sumangaskāra sang hyang watu sīma*」[3: 13]と記される。そしてウカジャナ刻文では、「マクドゥルが鶏を切り、サン・ヒャン・クルンパンの土台にした *sang makudur manětēk hayam linaṇḍasakan i sang hyang kulumpang*」[B: 1-2]という記述がある。また上記のルカム刻文のように、卵がシーマ石に向かって投げられる。刻文には、鶏の首が切られ、卵が割られるという記述がしばしばあり、これらの石にも供物が置かれ、何かの呪文が捧げられることが記される。またこれらの石はサン・ヒャンという語を冠しており、神聖視されている。これらの行為に見られるように、神聖な石を建立することでシーマの区域を示しシーマの土地を神聖化している。鶏の首を切る、卵を割るという行為は、これらの石に宿った聖なるもの *hyang*、つまり精霊への供儀とも考えられる。

以上の考察から、シーマ定立の儀式とは、シーマの土地を神聖なもの、精霊に守護されるものとし、また共食や贈り物の贈呈を通して、そのシーマの正当性を多くの人々に承認させるために実施された儀式であったといえる。

呪詛にみられる神々

刻文にはシーマ定立の儀式で唱えられる呪詛が記載されている。9世紀の刻文においてはシーマへの違反者に対する呪詛の中では、自然現象による違反者への罰が記され、自然現象への信仰が示唆される。これらの呪詛には次第に、ラークシャサ *rākṣasa* やバナスパティ *banaspati* などのインドの半神が採用される。また違反者への呪詛には様々な神々が召喚されるが、これらの多くは外来のヒンドゥー教の神々である。10世紀頃になると、王はこれらの外来神であるヒンドゥー教神を自らの称号に取り込み、あたかも自身が神であるかのように振舞っている。また古ジャワ語『ラーマーヤナ』[Robson 2015]では、王の義務がヒンドゥーの神々の性質に例えられ、王の中に神々が存在することが記載されている（参考資料 3）⁸⁰。実際に王が神そのものと考えられていたかは明確ではないが、王は神との繋がりを示すことで、自らの宗教的権威を高めていた。

また、9世紀後半からの刻文には、呪詛の中でヒンドゥー教神が列挙された後に、「マタラムの地の大王の王宮を守ることで知られる *prasiddha mangrakṣa kaḍatuan śrī maharaja i bhūmi i mataram*」（ウアタン・ティジャ刻文）[裏面: 6]という文言が挿入されることがある。この文言の初出は880年のウアタン・ティジャ刻文である。その後、バリトゥン、ダクシャ、ワワ、シンドクら王の刻文に記される。シンドク王時代後半になると、この文言が「マタラムの地のムダンのラヒヤンタ（死去し神格化された者）の王宮を守ることで知られる *prasiddha mangrakṣa kaḍatuan rahyangta i mḍang i bhumi mataram*」（アンジュク・ラダン *Anjuk Ladang* 刻文）[裏面: 31-32]と変化する。これは、「大王の王宮」から「すでに死去した者の

⁸⁰ この『ラーマーヤナ』では、王の中に神々が存在するという文言はあるが、神々の性質や役割になぞらえて王のあるべき姿・行動を記しており、この記述をもって王が神格化されていたとは言えない。

王宮」と記されることから、シンドク王以前の王宮あるいは諸王らが過去のものとして認識されていることを示している[Boechari 2012b: 159-160; Barret Jones 1984: 5]。

この変化と同じく、呪詛で列挙される神々にも変化がみられる。その変化はワワ王の時代に始まる。ヒンドゥー教神の列挙が記されるカユワンギ以降の刻文では、最初に「バブラケーシュワラ」という語が記されることが多い。この語に続き、ヒンドゥー三神であるブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュワラ *maheśwara*（あるいはマハーデーワ *mahādewa*、共にシヴァ神を指す）が記される。しかし、ワワのアイル・カリ刻文では「バブラケーシュワラ」に代わり、「ハリチャンダナ *haricandana*」神が記されるようになる。そして、ヒンドゥー三神に代わって、アガスティア *agastya*、マハールシ *mahārṣi* がハリチャンダナに続く。ワワの次に即位したシンドク王の刻文では、「バブラケーシュワラ」とハリチャンダナがともに記される刻文もある。937年のアンジュック・ラダン刻文からはハリチャンダナ神のみが記されるようになる。この937年の刻文では、上述のように、「すでに死去した者の王宮」の文言が使用される。この神々の変化と「王宮を守ることで知られる」の文言の変化がどのような意図のもとで行われたのかは定かでない。しかし、可能性として次の点が指摘できる。一つ目に、神々の変化はワワ時代に始まるが、彼の刻文の多くは東部で発布されており、東部での信仰が反映された。二つ目に、ワワの治世中にそれまでの王の神を捨て新たな神を戴く必要があった。すでに、ワワは東部にその政権の中心を移動させていたのかもしれない。また「王宮を守ることで知られる」文言の変化の理由として、シンドク王統治の後半にはもはや中部の諸王たちの権威にすぎる必要がなくなった、つまりシンドク王の権威が強固なものになったからだと推測される。

この章では、シーマ定立の内容に関して考察を行った。交易・生産規定の考察において、バリトゥン王が村内の交易と手工業生産に対して、税徴収という形で関与することができるようになり、前任者よりも村内の活動に対してより強い統制を持つようになったことが先行研究で指摘されていることに触れた。しかし、この理由に関しては先行研究では特に論じられていない。先行研究ではこの時期に海上交易が活発になり、交易活動に税をかけることが有益なものとなったことが指摘されているだけである。バリトゥン王が村内活動において前王たちよりもコントロールを及ぼすことができたのはなぜか。これは、バリトゥン王の王権強化と関係があるのではないかと考えられる。

次章では、まず中部ジャワ時代の諸王、特に多くの刻文が見つかったカユワンギ王とバリトゥン王の統治を考察し、中部ジャワ時代の王の統治について検討する。その考察の中で、バリトゥン王が即位した時期の社会的状況を捉え、彼がさまざまな手段を用いて王権を強化したことを明らかにする。さらに、バリトゥン王が退位して以降、その強化された王権が継承されなかった可能性を指摘する。

第4章 古代ジャワ社会における王

従来、刻文に記された王たちをシャイレンドラ王朝やサンジャヤ王朝に結び付けた議論が多くなされ、中部ジャワの王は王朝史の中で語られてきた。近年では、諸王とその即位年を記したワヌア・トゥンガ III 刻文の発見によって、従来の議論が再考された[Kusen 1994; Christie 2001]。これらの研究ではシャイレンドラ王家の王たちをワヌア・トゥンガ III 刻文に記された諸王と同定する試みが行われたが、ヨルダーンが指摘するように失敗に終わっている[Jordaan 2003: 3-11]。ある刻文に記された王を別の刻文に出てくる王と同定することは、現段階では徒労に終わり、中部ジャワの王を語る際には重要な作業ではないだろう。王朝史という枠組みの中で王を語るのではなく、個々の王がどのような統治を行い、その統治を行った背景を語ることが中部ジャワ時代の王を考える際には有意義である。

この時代の刻文には、すべてではないが、当時の王のラクルヤン称号と個人名が記される。しかし、刻文には王の出自や前王との関係を記すものはないに等しく、即位の年が記されることもない。例外的に、バリトゥン王発布のワヌア・トゥンガ III 刻文（908 年）には、ラカイ・パナンカランからバリトゥンまでの王の即位年が記される。しかし、王の出自は記されない。この刻文はピカタンの僧院にシーマとして定立された水田に関する歴代の王の態度を記したものである。この刻文には、これまで刻文が見つかっていない王の存在も確認できる。また、バリトゥン王発布のマンティヤシ I 刻文（907 年）にはサンジャヤ王をはじめとする諸王が列挙される。このリストがサンジャヤに始まることから、これらの諸王はサンジャヤ王統の王として捉えられている。マンティヤシ I 刻文とワヌア・トゥンガ III 刻文に記された諸王を表 1 にまとめた。

マンティヤシ I 刻文では、サンジャヤのみ「ratu（古ジャワ語で王を意味する）」と記され、他の諸王は「śrī mahārāja（サンスクリット語で吉祥なる大王を意味する）」を冠している。「mahārāja」を自身の刻文の中で初めて冠したのはラカイ・パナンカランであり、また「śrī mahārāja」の称号が初めて確認できるのはカユワング時代の刻文である⁸¹。サンジャヤのみを「ratu」と呼ぶのは、サンジャヤの時代には王を「(śrī) mahārāja」と呼ぶことがなかったためか、あるいはバリトゥン王がサンジャヤは「王」ではあったが「大王」ではなかったという認識を持っていたためと推測される。

以下では、両刻文の記述に基づき、他の刻文を参照しながら、中部ジャワ時代の王について考察を行う。

⁸¹ マレー半島で発見されたサンスクリット語のリゴール刻文の紀年のない面には、シュリー・マハーラージャの称号を冠したヴィシュヌ Viṣṇu というシャイレンドラ王家の王の名が知られている[岩本 1962: 50]。この刻文の反対面には 775 年（シャカ暦 697 年）の刻文が記されるが、紀年のない面はこれよりも後代のものと考えられている[Coedès 1992c: 110; Boechari 2012d: 416-419]。

表1 マンティヤシ I 刻文とワヌア・トゥンガ III 刻文に記載された諸王

マンティヤシ I 刻文 (907 年)	ワヌア・トゥンガ III 刻文 (908 年)	
ラクルヤン称号／名前	即位年	ラクルヤン称号／名前
ラカイ・マタラーム rakai matarām／サンジャヤ Sañjaya ⁸²		(rahyangta i mḍang)
ラカイ・パナンカラン rakai panañkaran	746	ラカイ・パナンカラン rakai panañkaran
ラカイ・パヌンガラ rakai panuṅgalan	784	ラケ・パナラバン rake panaraban
ラカイ・ワラク rakai warak	803	ラカイ・ワラク rakai warak／ディア・マナラ dyah manara
	827	／ディア・グラ dyah gula
ラカイ・ガルン rakai garung	828	ラケ・ガルン rake garung ⁸³
ラカイ・ピカタン rakai pikatan	847	ラケ・ピカタン rake pikatan／ディア・サラドゥ dyah salaḍū
ラカイ・カユワンギ rakai kayuwañi	855	ラケ・カユワンギ rake kayuwañi／ディア・ローカパーラ dyah lokapāla
	885	／ディア・タグワス dyah tagwas
	885	ラケ・パヌムワンガン rake panumwañan／ディア・デーウェンドラ dyah dewendra
	887	ラケ・グルンワンギ rake gurunwañi／ディア・バドラ dyah bhadra
	王位の空白期	
ラカイ・ワトゥフマラン rakai watu humalang	894	ラケ・ウンカルフマラン rake wuñkal humalang ／ディア・ジュバン dyah jbang
	898	ラケ・ワトゥクラ rake watukura／ディア・バリトゥン dyah balitung

⁸² サンジャヤ王の即位年は西暦 716／717 年とされる [Damais 1951: 60; Christie 2001: 32; Marwati 2008: 131]。ティハン Tihan 刻文 (914 年) では、シャカ暦 (836 年) とサンジャヤ暦 (198 年) が併用され、シャカ暦 638 年がサンジャヤ暦の起年となる。サンジャヤ暦の起年はサンジャヤが王位に就いた年と考えられる。現存するサンジャヤ王が発布した刻文は、チャンガル刻文 1 点のみである。

⁸³ 同刻文で、rake garung と rakai garung の 2 つの表記がある。

第1節 中部ジャワ時代の王

サンジャヤ Sañjaya

マンティヤシ I 刻文では「ラカイ・マタラームである聖なる王サンジャヤ *rakai matarām sang ratu sañjaya*」と記される。ワヌア・トゥンガ III 刻文には名前が記されないが、同刻文の「*rahyangta i mḍang* (ムダンで神格化された者)」と同一人物とされる[Christie 2001: 32]。

732年のチャンガルCanggal 刻文において、クンジャラクンジャ *Kuñjarakuñja* にあるシヴァ神の寺院にリングを建立したことが記される。サンジャヤの叔父（あるいは父）であるサンナ *sanna* 王についても言及している。

ラカイ・パナンカラ *rakai panankaran*

746年10月7日（シャカ暦668年）に即位する。ラカイ・パナンカラはピカタンの僧院のためにワヌア・トゥンガをシーマとする。彼はマンティヤシ I 刻文のリストではサンジャヤの次に記される。

778年のカラサン Kalasan 刻文には、パナンカラナがターラー女神の祠堂を建立したことが記される。このパナンカラナ *panankarana* はパナンカラと同一人物であると考えられる。パナンカラナはパナンカラがサンスクリット化した名前と考えられる[岩本 1983: 88]。この刻文に記される「シャイレンドラ王家の装飾 *śailendravaṃśa tilaka* の王」がパナンカラナを指しているのか、あるいは別の王を指しているのかで、意見が分かれている。岩本は、サンスクリット語の解釈から、それぞれ別の人物であり、パナンカラナはシャイレンドラに服属した王と考える [岩本 1983: 88-90]⁸⁴。782年のクルラク刻文には、「シャイレンドラ王家の装飾の王」とされるインドラ王（サングラーマダナンジャヤ *sanggrāmadhanañjaya* の称号を持つ）が確認できるが、この王がカラサン刻文に記された「シャイレンドラ王家の装飾の王」と同一人物であるかもしれない。

パナンカラナは大王 *mahārāja* の称号を冠している。ナールスンによると、おそらくこの大王の称号は、パナンカラの土地の寄進への見返りとしてシャイレンドラ王の王師たちによって778年にパナンカラに与えられた[Naerssen 1977: 39]⁸⁵。シャイレンドラ王家

⁸⁴ 岩本は、カラサン刻文の第2頌「シャイレンドラ王家の王師たちによって祠堂と僧院を建立させられた」、第4頌「王名を奉ずる三人の官吏によって建立させられた」において過去受動分詞形が用いられていることから、シャイレンドラ王家の王師たちはパナンカラナを説得して翻意を促しうる立場にあったこと、パナンカラナの祠堂建立は王命すなわちシャイレンドラ王の王命を奉ずる三人の官吏によって監督されたということを指摘し、パナンカラナはシャイレンドラの王とは別の人物であると考えている[岩本 1983: 89]。

⁸⁵ ナールスンと同様、岩本もマハーラージャの称号はシャイレンドラの王師たちによって与えられたものとする。岩本は、マハーラージャの称号はインドではグプタ *Guputa* 朝以後、藩侯の称号であるので、パナンカラナがこの称号を冠しているのは、彼が祠堂と僧院を建立し土地を寄進した褒賞として、シャイレンドラ王の命により、王師たちから贈られたものとする[岩本 1983: 92-93]。一方ザカロフは、もしパナンカラナがシャイレンドラの王でないとすれば、その宗主の王が単なる「*raja*」という称号を冠し、他方でその臣下

はおそらく外来の王家であった[Jordaen 2006]⁸⁶。パナンカラナは中部ジャワを統治していた王の一人（おそらくラクルヤンの中で最も力のあった者）であったが、力を伸長したシャイレンドラ王家に服属したと考えられる⁸⁷。この服属がどのようなものであったのかは定かではないが、ナールスンは、シャイレンドラ王は明らかに外来の王朝に属していたので、土地からの税収や労働力の処分権、その偉大な事業を完成させるために必要な資金を持っておらず、そうした税と労役の処分権を持っていたのがジャワのパナンカランであったと指摘している[Naerssen 1977: 38]。ナールスンの指摘が正しければ、パナンカランがシャイレンドラ王家に「服属」したのは宗教的な理由かもしれない。この「服属」関係は必ずしも君主と臣下の主従関係（称号は上下関係を示唆するが）ではなく、それは宗教を介した同盟関係であったかもしれない。ワヌア・トゥング III 刻文にはパナンカラナがシャイレンドラ王家に服属したことをほのめかす記述はなく、シャイレンドラ王家に関しても記されない。

また、パナンカランの統治期間にあたる 752 年の紀年を持つプルンプンガン Plumpungan 刻文は、王と考えられるバーヌ bhānu という人物の土地寄進について記す⁸⁸。おそらくバーヌはシャイレンドラ王家に属する王と考えられているが、詳細は不明である[岩本 1962: 57]。バーヌがシャイレンドラ王家の王であったならば、パナンカランの統治間にシャイレンドラ王家の王が少なくとも二人、王位についていたことになる。プルンプンガン刻文の発見地は現在のサラティガ Salatiga（中部ジャワのムルバブ Merbabu 山の北側に位置する町）であるため、この地域をバーヌが治めていたと推察される。そして同時期に、パナンカランがプランバナ地域を治めていたが、後にこの地域にシャイレンドラの王が進出し、パナンカランが服属したとも考えられる。

ラケ・パナラバン rake panaraban

784 年 4 月 1 日（シャカ暦 706 年）に即位する。マンティヤシ I 刻文のリストでは、ラカイ・パナンカランの次にラカイ・パヌンガラ rakai panungalan が記される。このラカイ・パヌンガラはラケ・パナラバンと同一人物と考えられる[Kusen 1994: 85]。

またラトゥ・ボコで発見された金葉には、仏教マントラとともに「panarabwan/panarabban」と読むことができる文字が確認され、これをラケ・パナラバンとする意見がある[Sundberg

が「mahārāja」と呼ばれるのかを説明できないと指摘し、彼をシャイレンドラの王とする[Zakharov 2012: 83]。しかし、岩本が指摘するように、シャイレンドラの王とパナンカラナは別の人物である可能性が高く、またマハーラージャの称号が王ではなく、その下位の者に付与される称号であると考えれば、問題にはならない。

⁸⁶ ヨルダーンがシャイレンドラを外来の王家とする理由はすでに述べた（注 8）。

⁸⁷ クリスティは、パナンカランをシャイレンドラの王とし、782 年のクルラク刻文に記されたインドラ・サングラーマダナñjaya indra sanggrāmadhanañjaya をパナンカランの即位名と推測する[Christie 2000: 14-17]。

⁸⁸ 刻文の冒頭で「臣下の者たちに祝福あれ svasti prajābhyah」と記されることから、王と考えられる[岩本 1962: 57]。

2003: 174]。さらに、サンベルグは彼をシャイレンドラの王とし、サマラトゥンガ samaratungga 王に同定する[Sundberg 2003: 174-176]⁸⁹。しかし、ヨルダーンらが指摘するように、サマラトゥンガの刻文は 824 年の紀年を持ち、パナラバンとサマラトゥンガを同一人物とするのは難しい[Jordaan, R. E. and Colles, B. E. 2004: 59]。

792 年の古マレー語のマンジュシュリーグリハ Mañjuśrīgrha 刻文には、王の保護の下にランダのダン・ナヤカであるルーラワン dang nayaka di raṇḍa lūrawang がマンジュシュリーの祠堂 mañjuśrīgrha を拡張したことが記される[Christie 2000: 19; Boechari 2012f: 476]。この刻文に記された王は「narendra sārāṇa」あるいは「nareśwara」として言及される。「narendra」と「nareśwara」は、サンスクリット語で「王」を意味する[Macdonell 1971: 137]。「sārāṇa」は王の名前と考えられるが、現在名前が知られている王に該当する人物はいない。しかし、ワヌア・トゥンガ III 刻文の記述に従うならば、792 年に王であったのはラケ・パナラバンであるので、「sārāṇa」はラケ・パナラバンの個人名である可能性は高い。また、マンジュシュリーグリハ刻文はプランバナンのチャンディ・セウの伽藍内で発見され、刻文に記されたマンジュシュリーの祠堂はチャンディ・セウを指すと考えられている[Christie 2000: 19]。同様に、782 年のマンジュシュリー像の奉納を内容とするクルラク刻文もチャンディ・セウの近くで発見されており、これらの刻文には関連性が指摘されている[Christie 2000: 19-20]。マンジュシュリーの祠堂を拡張した、ダン・ナヤカであるルーラワンは、古マレー語を使用しており、おそらく王に仕えた土着の役人であったと考えられる⁹⁰。マンジュシュリーグ

⁸⁹ サンベルグは、パナラバンの前任者であるパナンカランがラトゥ・ボコの周辺に、ターラー寺院（カラサン刻文）とマンジュシュリー寺院（クルラク刻文）を建立し、また 792 年までにシンハラ人のためのシャイレンドラの僧院（アバヤギリウィハーラ Abhayagiriwihāra 刻文：シャイレンドラのダルマトゥンガデーヴァ darmattuṅgadeva 王による）が建立されたことを指摘し、パナラバンの即位時に仏教の建立活動が活発であり、パナラバンがラトゥ・ボコの最も高く大きな建造物である門の建立によって、この造営活動を継続していたことに驚きはないとし、そしてラトゥ・ボコでの仏教的記念物を置く特権を与えられた人々は少なく、おそらく王族や主要な仏教聖職者であったと述べる[Sundberg 2003: 174-175]。しかし、パナラバンがシャイレンドラの成員であるという根拠は乏しい。第一に、パナラバンに言及する刻文は、その名が記されるマンティヤン I 刻文とワヌア・トゥンガ III 刻文のリストのみであり、彼のシャイレンドラに関する記述は一切ない。また、パナラバンが金葉の見つかったラトゥ・ボコの建設に関わっていたとしても、シャイレンドラの一員である必要はない。そもそもラトゥ・ボコの建立がシャイレンドラ王らによるものかどうかは明らかでない。仮に、ラトゥ・ボコの建立がシャイレンドラによるものであるとするならば、次のように考えることもできる。パナラバンはシャイレンドラの王が持たないラクラン称号を持っており、そのため彼がジャワの王であったと言えるならば、これらの仏教寺院建立に際し、何かしらの理由（宗教的理由や宗主権の承認など）によって、現地の有力者として労働力や資材、土地などを提供し、造営に関わっていた可能性もある。そして、サンベルグはパナンカランをシャイレンドラの王と考えているようだが、上述の通り、パナンカランはシャイレンドラに「服属」した王と考えられる。パナンカランと同様に、パナラバンもシャイレンドラに「服属」したジャワの王であった可能性が高い。

⁹⁰ 古マレー語はスマトラにおいて、7 世紀に書記されている。古マレー語に対し、古ジャワ

リハ刻文に記された王がパナラバンであるならば、ダン・ナヤカはパナラバンに仕えていたことになる。クルラク刻文ではシャイレンドラの王が関係しているので、チャンディ・セウを介して、シャイレンドラ王とパナラバンに何かしらの関係があった。この関係は、パナラバンの前任者であるパナンカランとシャイレンドラ王の関係と同じかもしれない。つまり、パナラバンもシャイレンドラに「服属」した王であった可能性がある。

ラカイ・ワラク rakai warak ディア・マナラ dyah manara

803 年 3 月 28 日（シャカ暦 725 年）に即位し、ピカタンの僧院のシーマの地位を破棄した。死後、クラサ Kelāsa に埋葬された。マンティヤシ I 刻文のリストでは、ラカイ・パヌンガランの次に記される。

クリスティは、ナーランダー刻文に記された、バーラプトラの祖父にあたる「シャイレンドラ王家の装飾である」ヤヴァブーミ yavabhūmi 王をラカイ・ワラクであると推測している[Christie 2001: 41]。しかし、その根拠は示されておらず、おそらく年代からの推測である。ラカイ・ワラクはシャイレンドラ王が冠さないラクルヤン称号を持っており、土着の王であったと考えられる。

ラカイ・ワラクの治世中の 824 年に発布されたカユムウンガン Kayumwungan 刻文には、シャイレンドラ王であるサマラトゥンガ samarattuṅga によって仏教寺院にインドラ (śrī Ghananātha) の像が安置されたことがサンスクリット語で記されている[Christie 2000: 55]。クリスティは、この「samarattuṅga」という名をラカイ・ワラクであるディア・マナラの即位名ではないかと推測している[Christie 2000: 55]。しかし、この刻文を含め、サマラトゥンガとディア・マナラを同一人物とする証拠はなく、おそらくラカイ・ワラクはサマラトゥンガと異なる系統の王である。さらに、この刻文の古ジャワ語部分には、ラカラヤーン・パタパーンであるブ・パラール rakarayān patapān pu palār とその妻によるシーマ定立が記されている。このラカラヤーン・パタパーンはガンダスリ Gandasuli II 刻文（810 年頃）に記されるカラヤーン・パルタパーン karayān partapān と同一人物とされ、ヨルダーンはガンダスリ刻文において彼が彼とその親族に王族の威厳 (royal dignity) を主張したことを理由に、サンジャヤ王統やシャイレンドラ王家とは異なる系統の王家の一員であると考えられる[Jordaen 2003: 3-4]⁹¹。

語の書記は 9 世紀の初めまで待たねばならない。7 世紀や 8 世紀のジャワで古マレー語が使用される理由は、古マレー語はすでにスマトラにおいて書記されており、交易などを通じて、その書記方法が伝えられ、その言語を書記できる人物がジャワにいた、あるいは古マレー語圏の人々がジャワ内陸部に住み着き刻文を残したと考えられる。827 年のガンダスリ I 刻文のように、9 世紀に入っても古マレー語を使用する刻文が数点ある。

⁹¹ ガンダスリ II 刻文の 8 行目には「rājya」（王国、王宮）の語が使用されるが、文意が明らかでないため、パルタパーンが王であったかは定かではない。しかし、彼とその親族はウィンタン Wintang の聖なる寺院（あるいは寺院の北）に埋葬された「hyang haji」（死去した王か）と関係があったようで[Christie 2000: 33]、おそらく地方の有力者であったと考えられる。しかし、クリスティは、根拠を示さないが、彼が地方の統治者 (local ruler) であったこと

ディア・グラ dyah gula

827 年 8 月 5 日（シャカ暦 749 年）に即位する。ラクルヤン称号が記されない。マンティヤシ I 刻文のリストには記されない。

在位期間が短く、他の刻文にも記載がない。彼はラクルヤン称号を冠していないが、これは何を意味するのか。一般にラクルヤン称号を持つ者はその地域を統治する領主であると考えられる。つまり、ラクルヤン称号を持たないということは自身の領地をもたず、即位したということになる。領地をもたない彼が王位に就くことができたのはその血筋のためかもしれない。しかし、前王との血縁関係を含め、彼の出自については不明である。もし、血筋によって王位に就いたならば、血縁による王位継承のシステムがあった可能性も考えられる⁹²。

ディア・グラの在位期間は半年足らずであり、王自身の力が弱かったためにラクルヤンたちを惹きつけ、統治することができなかったのだろう。彼は自らの領地を持たず、その権力基盤は弱かったと考えられる。

ラケ・ガルン rake garung

828 年 1 月 24 日（シャカ暦 750 年）に即位する。名前は記されないが、「トゥークに埋葬された人の子 anak sang lumāḥ i tūk」と記される⁹³。829 年（シャカ暦 751 年）にピカタンの僧院のシーマを再び定立した。その時のサンスクリット語の刻文が引用される。ガルンに関する記述の最後には、彼は死んだと述べられる。マンティヤシ I 刻文のリストでは、ラカイ・ワラクの次に記される王である。

819 年のガルン刻文にラカラヤーン・イ・ガルン rakarayān i garung の存在が確認できる⁹⁴。この刻文はガルンによるパムガト・アムラティへの税の変更に関する命令を記録する。刻

はなさそうであると記している[Christie 2000: 33]。また、850 年のトゥラン・アイル Tulang Air 刻文では、ラカイ・パタパーンであるプ・マヌクー rakai patapān pu manukū がシーマを定立したことが記される。この刻文では、この時の王がラカイ・ピカタンであることが記され、その高官たちが列挙されている。このことから、824 年のラカイ・パタパーンが仮に王であったとしても、（パタパーンの地位が家系内で相続されるものであると仮定するならば、）少なくとも 850 年までにラカイ・パタパーン（の家系）は他の王の権威を認める地方領主であり、王ではなかったことがわかる。

⁹² クセンは、ディア・グラがラクルヤン称号を持っていないのは彼が幼くして王位についたためであると考え[*Kusen 1988-1989: 84; 1994: 87*]。しかし、ラクルヤン称号の継承についての詳細は知られておらず、ラクルヤン称号をどのように、いつ獲得するのかは定かではない。親と子で異なる称号を冠している場合、夫婦で同じ称号を冠している場合とそうでない場合もある[*Barrett Jones 1984: 95-96*]。

⁹³ 「sang lumāḥ i tūk」に関しては他に記述がなく、誰を指すのか不明である。

⁹⁴ この刻文の年号は一般にシャカ暦 741 年（西暦 819 年）とされるが[*Barrett Jones 1984: 18, list 2*]、OV (1928)では、751 年あるいは 761 年としている[*Goris 1929: 65*]。ワヌア・トゥンガ III 刻文の記述が正しければ、シャカ暦 751 年あるいは 761 年の可能性が高い。

文の最後に「彼（パムガト・アムラティ）への王の言葉 *ujar haji ri sira*」とあるので、ガルンはすでに王位に就いていたと考えられる。ここでガルンは「haji」と記され、「śrī mahārāja」ではない。ワヌア・トゥンガ III 刻文では、「śrī mahārāja rakai garung」と記される。実際に紀年のある刻文で、「śrī mahārāja」という称号が王に初めて冠せられたのは、カユワング王の時代 873 年のトゥナハン Tunahan 刻文である⁹⁵。

842 年のトゥリ・トゥプサン刻文では、シュリー・カフルナン śrī kahulunnan によってサンバーラの地にあるカムーラーン *kamūlān i bhūmi sambhāra* のためにカフルナンのワトゥクに属すトゥリ・トゥプサンの村がシーマとして定立された。一般に「bhūmi」は「土地」を意味し、刻文では「bhūmi i mataram」や「bhūmi i jawa」のように使用され、マタラムの国やジャワの国と訳される。同様に、「bhūmi sambhāra」をサンバーラという名の国（政体）があり、カフルナンによって統治されていたと考える研究者もいる[Zhakarov 2012: 83-84]。

「bhūmi sambhāra」は、「bhūmi i mataram」や「bhūmi i jawa」の使用にみられるように、ある程度の広がりのある地域を指していたと考えられる。シュリー・カフルナンに関しては、王の母を意味するという意見があり[Boechari 2012d: 402-405; Marwati 2008: 155-156]⁹⁶、ある国の統治者とは考え難い。カフルナンがシーマとした村はカフルナンのワトゥクに属し、そのワトゥクの領主であったカフルナンは自らの領地をブーミ・サンバーラのカムラーンのためにシーマとして定立しただけであり、カフルナンが「bhūmi sambhāra」の統治者であったという証拠はない。また、この刻文には王の名前や王をほのめかすような記述もなく、「bhūmi sambhāra」がマタラムのような国としての概念を伴っていたとはいえない。他の刻文にも「bhūmi sambhāra」の統治者の記述はなく、マタラムの王のように、その他の領主に対して権力を持っていた統治者は確認できず、「bhūmi sambhāra」が王に従う高官によって

⁹⁵ 「mahārāja」という語自体はすでに、778 年のサンスクリット語刻文（カラサン刻文）においてパナンカラナに付されているが、「śrī mahārāja」という称号はカユワング王時代に初めて記される。

⁹⁶ 「śrī kahulunan」の語は古ジャワ語の散文『ウディヨーガパルワ Udyogaparwa』では、ユディシュティラ yudhiṣṭhira が彼の母であるクンティ kuntī を呼ぶ際に使用されている。カスパリスは「śrī kahulunan」は「王妃」であると考えが[Casparis 1950: 83-86]、1161 年のスクン Sukun 刻文には、「śrī parameswari（王妃）」とは別に「śrī kahulunan」の語が確認でき、また、バル Baru 刻文（1030 年）やハンタン Hantang 刻文（1135 年）では「王の側室」を意味する「strī haji」が「śrī parameswari」とは別に記されることから、「śrī kahulunan」は王の妻ではないと考えられる[Boechari 2012d: 403-404]。ブハリは、スクン刻文[VI.b.1-5]では「śrī kahulunan」は王の親族とともに記され、また上記の『ウディヨーガパルワ』で「śrī kahulunan」が「母」の意味で使用されることから、「śrī kahulunan」は「皇太后」とであると指摘している[Boechari 2012d: 404-405]。

SNI では、スクン刻文中に「王の従者 wadwa haji、王妃の従者 wadwa rakryan śrī parameswari、王の妻の従者 wadwa rakryan binihaji、ラクルヤーン・マハーマントリ・イ・ヒノの従者 wadwa rakryan mahāmantri i hino」などが列挙され、その中で「シュリー・カフルナンの従者 wadwa śrī kahulunan」に言及していることから、「śrī kahulunan」が王妃や王の妻ではないことが明らかであると指摘しているが[Marwati 2008: 155-156]、ブハリの転写では確認できない[Boechari 2012f: 517-522]。

構成される政体であったといえる根拠はない⁹⁷。

ラケ・ピカタン rake pikatan ディア・サラドゥ dyah salaḍū

847 年 2 月 22 日（シャカ暦 768 年）に即位した。この王によって、水田のピカタンのウィハーラのシーマとしての地位が再び破棄された。死んだことが述べられる。マンティヤシ I 刻文のリストでも、ラケ・ガルンの次に記される。

850 年のトゥラン・アイル刻文に「ラトゥ ratu」として記される（個人名の記載はない）。856 年のシワグリハ Siwaḡṛha 刻文に記される「シヴァの住居」はプランバナン寺院のチャンディ・シヴァについて言及しているとされ[Jordaan 1996: 24]、これが正しいければ、856 年までにチャンディ・シヴァが建立されたことになる。このことから、ラケ・ピカタンの時代にその建設に着工したことが示唆される。

また、仏教系のチャンディ・プラオサン・ロルの 2 基のストゥーパに、ディア・サラドゥの名が確認できる。ここでは、ピカタンではなく、グルンワングのラクルヤン rakryan gurunwaṇi 称号を冠している。彼の名前には、一般に王族の名前に使用される冠詞ディアが付されることから、王に近い関係であったと考えられる[Casparis 1958: 21]。プラオサンのストゥーパに刻まれたグルンワングのディア・サラドゥがピカタンのディア・サラドゥと同一人物であったなら、彼は即位前にはグルンワングのラクルヤン称号を冠し、仏教とヒンドゥー教の寺院建立に関係していたといえる。このことから、王自身が仏教とヒンドゥー教どちらの信奉者であったかわからない（あるいは両方の信奉者であったかもしれない）が、仏教とヒンドゥー教ともに保護していたと推察できる。

ラケ・カユワング rake kayuwaṇi ディア・ローカパーラ dyah lokapāla

855 年 5 月 27 日（シャカ暦 777 年）に即位する。死んだことが述べられる。マンティヤシ I 刻文のリストでは、ラケ・ピカタンの次に記される。

王の個人名は現地語名であることが多いが、カユワングはサンスクリット語名である。ローカパーラは「世界の守護者」を意味する。

⁹⁷ カスパリスは「kamūlān i bhūmi sambhāra」をブーミ・サンバーラと呼ばれる仏教施設、つまりボロブドゥールであると考え[Casparis 1950: 160-164]。「kamūlān」（しばしば「kamulān」と表記される）は一般に宗教施設と考えられ、ズットムルデルは「始まり、起源」を意味する「mūla」から派生した語と捉え「起源の寺院（祭壇）」とする [Zoetmulder 1982: 1158]。しかし、SNI ではムーラ mūla という役人の家と考え、カスパリスの説を否定している [Marwati 2008: 153-155]。SNI では、ムーラの義務は古代ジャワ社会では明らかでないとするが、カラディ Kaladi 刻文に記される「mula dharma」は寺院を守る人々であったと考えられることから、「mula」という単体で使われた場合も、おそらく「mula dharma」と同様の職務、少なくとも宗教に関する職務を持つ人であったと推察される。また第 2 章第 3 節に記したように、「kamūlān」は「dharma」などの寺院と関連してしばしば言及され（トゥランやルカム刻文など）、またトゥラン刻文ではカムラーンを作るとあるので、建造物であることがわかる。これらのことから、「kamūlān」は寺院に付随する建造物であり、「kamūlān i bhūmi sambhāra」も「サンバーラの地にある（宗教的な）建造物」であると考えられる。

856 年のシワグリハ刻文では、カユワングの即位以前にバーラプトラ *bālaputra*⁹⁸との戦いがあったことが記される。また、880 年のウアタン・ティジャ刻文にはラクルヤン・マーナク *rakryan mānak* (カユワング王の妻と考えられる) がその子ディア・ブーミジャヤ *dyah bhūmijaya* とともに、彼女の弟 *rakryān landhayan* によって誘拐されたことが記される。ディア・ブーミジャヤはカユワング王の子であり、王宮内での争いがあったことが伺える。

ディア・タグワス *dyah tagwas*

885 年 2 月 5 日 (シャカ暦 806 年) に即位する。王宮で抑圧されたことが述べられる。マンティヤシ I 刻文には記載がない。

エル・ハンガト *Er Hangat* 刻文⁹⁹では、大王ディア・タグワス・シュリー・ジャヤキーティワルダナ *mahārāja dyah tagwas śrī jayakītiwarddhana* という人物が確認できる[1b: 7-8; 2a: 7]¹⁰⁰。この刻文においてもラクルヤン称号が記されない。彼はラクルヤン称号を持たないので、彼自身の領地を持っていなかった可能性がある。また、彼の次の王は 885 年 9 月 27 日に王位についており、彼の統治期間は 9 か月にも満たない。クリスティは、彼の名前は前任者のカユワング王の刻文には確認できず、また彼自身の刻文には前任者の統治期間の役人が言及されていないことから、彼が指名されたカユワングの後継者ではなかったと指摘する[Christie 2001: 46]。カユワング王時代の末期は王宮内での争いがあり、その混乱の中で王位についたのが、ディア・タグワスであった。しかし、彼は周りのラクルヤンたちを支配できず、彼らからの支持を得られなかったのだろう。これが彼の約 9 か月間という短い治世の理由と考えられる。

ラケ・パヌムワンガン *rake panumwānan* ディア・デーウェンドラ *dyah dewendra*

885 年 9 月 27 日 (シャカ暦 807 年) に即位する。王宮で抑圧された。マンティヤシ I 刻文に記載はない。

⁹⁸ バーラプトラは、インドのナーランダー刻文に言及されたバーラプトラデーワ *bālaputradewa* と同一人物と考えられ、この戦いの後、シュリーウィジャヤ (刻文ではスヴァルナドゥヴィーパと記され、スマトラを指す) の王となったと考えられた[Christie 2001: 41]。しかし、ナーランダー刻文に記されたインドのバーラ朝の王デーヴァパーラ *devapāla* の統治年代の解釈が早まったため、この刻文の発布は 843 年～850 年の間となった[Jordaan 2000: 7]。そのため、バーラプトラは中部ジャワに介入する前に、スヴァルナドゥヴィーパの王であったことになる。ヨルダーンは、シャイレンドラ王家のバーラプトラの姉妹であるプラモワルダニーとジャワ土着のラカイ・ガルンが結婚したことで、中部ジャワにおけるシャイレンドラの力が徐々に減退し、さらに 847 年にラカイ・ピカタンが即位したことでシャイレンドラの中中部ジャワにおける直接統治が終わったことを背景に、バーラプトラが 855 年までに反乱を起こしたが敗北し、スマトラに戻ったと考察している[Jordaan 2000: 9-12]。

⁹⁹ この刻文は、贈り物リストの途中から始まっているが、サン・バムウナ *sang bamwuna* がエル・ハンガトの傍にシーマを定立し、大王の恩恵が彼に与えられたことがわかる。

¹⁰⁰ この刻文は銅板 2 枚からなるが、一枚目裏側[1b]と 2 枚目表[2a]は同じ内容を記す。1b では王の名前「tagwas」の「ta」の文字は確認できない。

次の王が 887 年 1 月 27 日に王位についており、ラケ・パヌムワンガンの治世は 1 年と 4 か月である。890 年のポ・ドゥルル刻文には、大王ラケ・リムスであるディア・デーウィーンドラ mahārāja rake limus dyah dewīndra という人物が記される。この大王とラケ・パヌムワンガンが同一人物であるなら、王宮を追われた後に、依然として大王を名乗っていたことになる。ワヌア・トゥンガ III 刻文では、890 年には王宮に統治者がいなかったことが記されており、政治的に混乱した状況の中で、王を称していたと考えられる。ラケ・パヌムワンガンであるディア・デーウェーンドラとラケ・リムスであるディア・デーウィーンドラが同一人物でなかったにしても、この混乱した情勢の中で、デーウィーンドラは大王を名乗り、少なくとも刻文が発布された地域でその権力を行使していたといえる¹⁰¹。

ラケ・グルンワング rake gurunwañi ディア・バドラ dyah bhadra

887 年 1 月 27 日（シャカ暦 808 年）に即位する。887 年 2 月 24 日に王宮から逃げたことが述べられる。彼が王宮から逃げた後、「この時、その世界の統治者がいなかった anāyaka ikanang rāt rikang kāla」[IIA: 4]ことが記される。

887 年 2 月 9 日のムング・アンタン Munggu Antan 刻文に、大王であるラケ・グルンワング śrī mahārāja rake gurunwangi として記されている。この刻文は「パスティカの神の王妃 binihaji sang dewata ing pastika」とその兄によるシーマ定立を記録する。この「パスティカの神」はカユワング王と考えられる[Christie 2001: 44]。このシーマ定立はラケ・グルンワングの恩恵であると記される。クセンはこれを彼が自らの地位を高めるためにとった措置と解釈している[Kusen 1994: 90]。この刻文の約 2 週間後に、ラケ・グルンワングは王宮から去った。この後、894 年に次の王が即位するまで、「世界」には統治者がいなかった。この王の不在時期にはおそらく、上述のデーウィーンドラのような有力者たちが彼ら自身の領域で統治を行っていた。

ラケ・ウンカルフマラン rake wuñkal humalang ディア・ジュバン dyah jbang

894 年 11 月 27 日（シャカ暦 816 年）に即位する。死んだことが述べられる。マンティヤシ I 刻文では、ラカイ・ワトゥフマラン rakai watu humalang と記される。「wuñkal」と「watu」は同義語（「石」を意味する）であり、ラケ・ウンカルフマランとラカイ・ワトゥフマランは同一人物と考えられる。

896 年のパヌンガラ Panunggalan 刻文に「王であるラカイ・ワトゥフマラン haji rakai watu humalang」の記述がある。この刻文は「ラジャのワトゥクであるパヌンガラ Panunggalan の僧院のダプンタ ḍapunta i kawikwan i panunggallan watēk raja」の義務に関する。ダプンタがその義務をパムガトの怠慢のために満たすことができなかった。そのパムガトは「以前に、ラヤンに葬られた聖なるものである王に愛され、そして王であるラカイ・ワトゥフマランが統治していた時代の最後まで愛され続けた sira ikana masih ngūni kāla nira raja i sang lūmāh i layang

¹⁰¹ ポ・ドゥルル刻文の発見地はクドゥ Kedu 地方のバラック Balak 地域である。

matangngyan tinulussakan asih nira wkassan kĀla haji rakai watu humalang umadag」[1B: 3-5]とある。この刻文では、ラカイ・ワトゥフマランは「haji」とのみ記され、「śrī mahārāja」の称号を冠していない。このことは、彼は王ではあったが、大王よりも低い地位の「王」であったことが示唆される¹⁰²。また、この刻文ではティルアンを除き、ラクルヤンたち高官の記載がない。この刻文はシーマ定立や王の命令・恩恵を記録するものではないので、単に高官たちが記されなかっただけかもしれない。このティルアンは人物が列挙される箇所（おそらく証人たち）で名前が記されるが、彼は次のバリトゥン王の時代にも同じくティルアンとして登場している。このことから、ラケ・ウンカルフマランからバリトゥンへの王位の継承は比較的円滑に行われたと推察できる。

ラケ・ワトゥクラ rake watukura ディア・バリトゥン dyah balitung

898 年 5 月 23 日（シャカ暦 820 年）に即位する。904 年（シャカ暦 826 年）にジャワのすべての「サン・ヒャン・ダルマ・ビハーラ（聖なる寺院・僧院）sang hyang dharma bihāra」を「自由 swatantra」とした。905 年 10 月 15 日（シャカ暦 827 年）には、彼がニュー・ガディン Nyū Gading から王宮に上がったことが記される¹⁰³。そして 908 年 10 月 1 日（シャカ暦 830 年）にピカタンのシーマを再び定立した。

この王はマンティヤシ I 刻文とワヌア・トゥング III 刻文を発布した王である。中部ジャワを中心に、東部ジャワでも刻文が発見されている。

以上、ワヌア・トゥング III 刻文、マンティヤシ I 刻文の諸王について検討した。王の名が確認できる刻文の数は、王によってばらつきがあり、すべての王に関して詳細な考察を行うことは難しい。これら諸王の中でその統治年間に発布した刻文の数が多いいのは、カユワンギ王とバリトゥン王である。以下では、中部ジャワ時代の王がどのように統治を行い、当時の社会の中でどのような存在であったのかを明らかにするために、この二人の王に焦点をあてて考察を行う。

第 2 節 カユワンギ王時代

カユワンギ王は 855 年に即位し、おそらく 885 年頃に死去したと考えられることから、およそ 29 年間にわたり統治を行った。彼の支配の中心地域はその刻文の分布から、現在の

¹⁰² 「śrī mahārāja」を冠する王にも、「haji」という言葉が使用される例がある。例えば、バリトゥン王はクブクブ Kubukubu 刻文の最後に「haji balitung」と記される。また「王の言葉 ujar haji」の例は、クワク I 刻文やサリンシガン刻文にもみられる。しかし、これらの「haji」は同じ刻文の中で「śrī mahārāja」として記載される。一方で、ラカイ・ワトゥフマランはパヌンガラ刻文の中で、「śrī mahārāja」とは一度も記載されていない。

¹⁰³ クブクブ刻文（905 年 10 月 17 日）の最後には、「シュリー・ダルムモダヤ、ラクルヤン・ワトゥクラである王バリトゥンは王宮に住む śrī darmmodaya rakryan watukura haji balitung umungguh ring kaḍatwan」[7a: 3-4]と記される。

ジョグジャカルタ Yogyakarta—プランバナン Prambanan—クラテン Klaten 地域であると考えられる[Christie 2001: 43]。彼は、初めてシュリー・マハーラージャの称号を用いた王である。

カユワンギ王は 855 年に即位しているが、856 年のラトゥ・ボコで発見された 3 つのサンスクリット語刻文 (a, b, c) には、シュリー・クムバジャ śrī kumbhaja (a, b)、カラショードゥブヴァ kalaśodbhva (c) という名（ともに聖仙アガ스티アの別名）の王が「ヴァラインガの勝者 valaiṅgajetrā」(b)、「ヴァラインガの守護者 valaiṅgagoptrā」(a) として記されている。彼は勝利の印としてリングを建立しており、そのリングが建立されたラトゥ・ボコの丘がその勝利の場所と考えられている[Casparis 1956: 244-279]。そして 863 年のウキラン刻文には、同じく聖仙アガスティアを意味するクンバヨーニという名のラケ・ワライン rake walaing がシーマを定立したことが記される。彼は「ハル王の子孫 puyut sang ratu i halu」とされる。ここでは、王とは述べられていないが、この刻文はサンスクリット語と古ジャワ語の二言語で書かれており、彼が権威者であったことが伺える[Casparis 1956: 252]。ラトゥ・ボコの刻文に記された「valaiṅga」はおそらく、ウキラン刻文の「walaing」のサンスクリット語化したものと考えられ、クンバジャとクンバヨーニは同一人物であると考えられる。以上のことから、856 年の段階ではカユワンギ王とは別にクンバジャという名の王がラトゥ・ボコ周辺で力を示していたが、863 年の段階では王と称しておらず、カユワンギ王の統治下にすでに組み込まれていた可能性もある。また、第 2 章第 1 節に記したように、882 年の刻文ではラクルヤン・ハル rakryan halu がカユワンギ王の恩恵を受け、901 年のバリトゥン王の刻文ではラクルヤン・ハルが高官リストに含まれることから、ハルの領域は次第に王の支配領域に組み込まれたと考えられる¹⁰⁴。すでに 882 年の時点で、そのハルの領主とカユワンギ王の間の関係は良好なものであったかもしれない。上で述べたバーラプトラとの戦いによって王宮内は疲弊したと考えられるが、そのような情勢のなかで、クンバジャがラトゥ・ボコ周辺で勢力を振っていたのだろう。このように、カユワンギ王統治の初期は未だ、政治的に不安定な状態にあったと考えられる。

彼の統治期間に発布された刻文を見てみると、3 つの寺院が頻繁に記される。グヌン・ヒヤンの寺院 prāsāda i gunung hyang、パスティカの寺院、サリンシンガンの寺院である。そして、それぞれラクルヤン・シリカンであるプ・ラカプ rakryan sirikan pu rakap、ラカラヤン・イ・ウカであるプ・チャトゥラ rakarayān i wka pu catura、パムガト・ヒノであるプ・アプス pamgat hino pu apus に関係している。まず、グヌン・ヒヤンの寺院についてみる。フマンディ

¹⁰⁴ クリスティは、ハルがマタラム国の拡張によって、おそらく 8 世紀の半ばに二王家間の婚姻によって統合され、9 世紀の後半までにマタラム国の主要なワトゥク称号の一つになったと推測し、856 年の刻文にみえるクンバヨーニの王位への主張は一時的なものに過ぎなかったと指摘する[Christie 2001: 41-42]。クンバヨーニが自らを王と名乗っているのは 856 年の刻文だけであり、クリスティが指摘したように、彼の王位（あるいは王位への主張）は束の間のものであった。しかし、少なくとも、バーラプトラとの争い後の混乱した時期に、彼が自らの強さを刻文に示し、またリングを建立することで権威を高め、王を名乗っていたことは確かである。

ン Humanḍing 刻文 (875 年)、ジュルンガン Jurungan 刻文 (876 年) において、ラクルヤン・シリカンのプ・ラカプがグヌン・ヒヤンの寺院のためにシーマを定立している。フマンディン刻文では、シーマとなった土地はカユワンギ王による贈り物であると記される。また、878 年のママリ刻文ではグヌン・ヒヤンの寺院のためにラクルヤン・シリカンが菜園を購入したことが記される。ラクルヤン・シリカン、そしてカユワンギもまた、このグヌン・ヒヤンの寺院と何かしらの関係にあったと考えられる。さらに、ハリワンバン Haliwangbang (877 年) 刻文では、ハリワンバンの僧院 wihāra haliwangbang のためにラクルヤン・シリカンによってシーマが定立されているが、この土地もカユワンギ王の贈り物とされる。ほかに、トゥナハン刻文 (873 年) ではラクルヤン・シリカンがカユワンギ王から土地を与えられたことが記される¹⁰⁵。このことから、ラクルヤン・シリカンとカユワンギ王の間には特別な関係があったと推察される。

二つ目はパスティカの寺院である。ランウィ Ramwi (882 年) 刻文では、カユワンギ王の命令によって、ラカラヤーン・ハルであるプ・チャトゥラ rakarayān halu pu catura が彼の寺院であるパスティカの寺院 dharmma ing pastika¹⁰⁶のために、森（後に水田となる）をシーマとして定立した。また、クワク I 刻文 (879 年) では、ラカラヤーン・イ・ウカのプ・チャトゥラ rakarayān i wka pu catura がクワクの寺院 prisāda (prāsāda) i kwak のためにクワクの原野を水田に変え、シーマとするカユワンギ王の命令が記される。プ・チャトゥラ（ランウィ刻文以前ではラカラヤーン・イ・ウカ）はムラク Mulak (878 年) 刻文とクワク II (879 年) 刻文でユピトの寺院 prāsāda i yupit、ラタウン I 刻文 (881 年) ではスマールの寺院 parhyangan i sēmār、ラタウン II (881 年) 刻文ではランダの寺院 prāsāda i laṇḍa とパスティカの家の寺院 dharma umah ing pastika のためにシーマを定立している。これらにはカユワンギ王への言及はない。プ・チャトゥラは多くの寺院にシーマを定立しているが、パスティカの寺院とクワクの寺院のためのシーマは王の命令によって定立されている。ランウィ刻文ではパスティカの寺院はプ・チャトゥラの寺院と記されているが、カユワンギ王は死後、パスティカの寺院に埋葬されたと考えられている[Christie 2001: 44]。その根拠は、887 年のムング・アンタン刻文に「パスティカの神の王妃 binihaji sang dewata ing pastika」[3]と記され、このパスティカの神が 885 年以前に死去したカユワンギ王と考えられることである^{107・108}。カユワンギ王が寺院に埋葬された、あるいは祀られたという明確な記述はない。しかし、もしカユワンギ王がパスティカの寺院に埋葬されたならば、そのパスティカの寺院はプ・チャ

¹⁰⁵ トゥナハン刻文でカユワンギ王から与えられた土地は「sukat kahulunan ing tunahan lmaḥ i mamali」と記され、この土地はハリワンバン刻文にカユワンギ王から与えられた土地として記載される「lmaḥ sukat kahulunan i mamali」と同じ土地かもしれない。

¹⁰⁶ 同刻文で、「ランウィの彼の寺院 dharmma nira i ramwi」[A: 5]や「パスティカのランウィのラケ・ハルの寺院 dharmma rake halu i ramwi ing pastika」[A: 7]とも記される。

¹⁰⁷ SNI では、「sang dewata lumah i pastika」はラカイ・ピカタン rakai pikatan 王の死後の称号であると推測している[Marwati 2008: 172-173]。

¹⁰⁸ ウィンタン・マス Wintang Mas B 刻文 (919 年) では、「パスティカに埋葬された大王 śrī mahārāja sang lumah ing pastika」の恩恵が確認されている。

トゥラのパスティカの寺院であったかもしれない。同様に、ランウィ刻文には、プ・チャトゥラの寺院はパスティカのランウィの寺院とも記されており、カユワンギ王と関係するパスティカの寺院とは異なる可能性もある。前者の場合、プ・チャトゥラとカユワンギ王は、何らかの特別な関係にあったと考えられる。

三つ目はサリンシンガンの寺院である。クランビタン Kurambitan 刻文（869 年）とシュリーマンガラ Śrī Manggala II（874 年）刻文では、パムガト・ティルラヌであるプ・アプス pamgat tiruranu pu apus／パムガト・ヒノであるプ・アプス pamgat hino pu apus によってサリンシンガン Salingsingan の彼の寺院 dharmmanira のためにシーマが定立された。そしてサリンシンガン Salingsingan I（881 年）刻文では大王ラカ・カユワンギ śrī mahārāja raka kayuwangi がサリンシンガンの神 (bhaṭāra) への金の贈呈を行っている。このサリンシンガンの神がプ・アプスのサリンシンガンの寺院に祀られた神であるなら、王が高官の寺院に寄贈を行ったことになる。

上記の三つの高官の寺院とカユワンギ王には、何かしらの特別な関係があったと推察される。クリスティは、上記の頻繁に記される寺院三つのうちグヌン・ヒヤンの寺院とパスティカの寺院、そしてプ・チャトゥラがシーマを定立したクワクの寺院について、カユワンギ王との関連を次のように述べる¹⁰⁹。クワクの寺院はカユワンギとプ・チャトゥラに共有された祖先（おそらくラケ・ガルン）の灰を納めた寺院、グヌン・ヒヤンの寺院はラケ・ピカタンの住居、そしてパスティカの寺院はカユワンギが生前に建て、その死後に埋葬された寺院であり、少なくとも 3 つの寺院が墓廟 (funerary temple) に関係していることから、カユワンギに直接関係する恩恵の主な起動力は、彼の系譜上の地位、そして転じては彼自身の地位を強化する必要性であったようだと指摘している[Christie 2001: 44-45]¹¹⁰。クリスティが指摘するように、それぞれの寺院がカユワンギや高官たちの祖先あるいはリネージに関係していたと断言できる証拠はない。現存している宗教建造物はヒンドゥー教や仏教の性格を持つものであり、これらの建造物が祖先崇拜の対象として崇められていたのか、または王を祀ったものであったのかを判断する材料はない。

上に挙げたこれらの寺院を建てたのは、おそらくそれぞれの高官たちであった。これらの高官とカユワンギとの血縁（あるいはその他の）関係は不明であるが、特にプ・ラカプ、プ・チャトゥラは多くのシーマを定立しており、有力な高官であったことは確かである。カユワンギ王がこれら権威ある高官の寺院に対して恩恵を与え、彼らと密接な関係を持っていたのは、上で述べた不安定な情勢の中で、彼の地位を確かなものにするためであったと考えられる。また、プ・アプスはパムガトであり、ラクルヤンであるプ・ラカプやプ・チャトゥラよりも低い地位にあったと考えられるが、カユワンギ王はプ・アプスの寺院の神に寄贈を行っており、カユワンギ王にとってプ・アプスは彼が統治を行う上で重要な人

¹⁰⁹ クリスティ[2001]はサリンシンガンの神については言及していない。

¹¹⁰ クリスティは寺院に王の灰が納められていたと考えているが、すでに述べたように、スクモノは、チャンディは墓ではないと主張している[Soekmono 1995]。

物であった。カユワンギ王のこのような高官との関係を強化した統治によって情勢が安定したためか、彼は比較的長期にわたって統治を行っている。

さらに、クワク I 刻文やラムウィ刻文では、王の命令によって、原野がシーマとなり、水田に変えられたことが記される。このことは農地の拡大を意味し、農業生産の向上が促進されたと考えられる[Naerssen 1977: 51]。カユワンギ時代は王の命令だけではなく、ラクルヤンやパムグトたちによっても、原野が水田に変えられたことが刻文に記されている（ジュルンガン、クワク II、サリマル、ラタウン刻文）。これらの農地の拡大がどれほどの規模であったのかは明確ではないが、水田が増加し、ある程度の生産力の向上があったと推測される。カユワンギの統治はこれらの農業生産の向上によっても支えられていたであろう。

しかしその末期には、王宮内の情勢は不安定であった。880 年に発布されたウアタン・ティジャ刻文には、王家内での争いがあったことが記されている。この王宮内の不安定さは彼の死後も続いていたようである。実際に、ワヌア・トゥンガ III 刻文には、カユワンギ王の後に即位した王たちの統治が短期間の内に終わったことが記される。

第3節 バリトゥン王時代

バリトゥン王の刻文は、中部ジャワだけでなく東部ジャワからも発見されている。また、彼はラケ・ワトゥクラの称号を冠するが、その領地であるワトゥクラのワトゥクは東部ジャワのワトゥクラ刻文（発見地は不明）において確認でき、その刻文に記された称号が東部ジャワの特徴を持つことから、彼の領地は東部ジャワにあったと推測されている[Naerssen 1977: 76]¹¹¹。しかし、ワトゥクラという地名は中部ジャワのクドゥ南部¹¹²にも確認でき、また彼の最も古い刻文であるトゥラハプ *Telahap* 刻文（899 年）が中部ジャワのものであるということから¹¹³、彼の出身を中部ジャワとする意見もある[Marwati 2008: 168]。彼が東部ジャワの出身であるのか中部ジャワの出身であるのか、現段階でははっきりしない。なぜなら、東部説の根拠になっているワトゥクラのワトゥクに属す村が東部にあったとしても、ワトゥク内の村は散在しているため、彼自身が東部の出身であるとは断言できず、東部に彼の力が伸長した際にワトゥクラのワトゥクにその村が属した可能性もあるからである。また、中部説の場合も、即位後の刻文が中部から発見されたからといって、東部出身でなかったとは言えない。現段階で言えることは、ルカム刻文から王宮がクドゥにあったことがわかり、また彼の発布した刻文はクドゥ地域に多く、彼の統治の中心がクドゥにあったということである。

¹¹¹ ナールスンは、ワトゥクラ刻文に記された「*pañji*」や「*kanuruhan*」という称号の使用から、これは典型的なクディリ時代（12～13 世紀初め）の特徴であり、ワトゥクラが東部ジャワのどこかに位置していたこと、バリトゥンが東部ジャワの出身であったことの指針となると述べている[Naerssen 1977: 76]。

¹¹² ここでは、クドゥは現在のトゥマングン県を指す。

¹¹³ トゥラハプ刻文の現在の所蔵場所は不明である。この刻文は磨滅のため、読むことが難しかったようだが、バリトゥン王の名前が確認できる[Damais 1955: 117]。

彼の統治期間には複数の刻文が発布されているが、その称号には刻文によって違いがある。クロムは、907年のマンティヤシ I 刻文に言及されたバリトゥン王の結婚と、バリトゥン王が彼の一連の前任者を彼の王宮の守護者として言及していることに注目し、称号の変更はおそらく入婚によるものであり、そして、中部ジャワは事実上既に東部ジャワの影響下にあったが、この年から正式にマタラムのバリトゥンの王国の一部となったと指摘した [Krom 1931: 187]¹¹⁴。しかし、バリトゥン王の称号は 907 年以前に 3 つ確認できる。901 年の *dyaḥ dharmodaya mahāsambhu* (アヤム・トゥアス刻文)、902 年の *śrī īśwarakeṣawotsawatungga* (ワトゥクラ刻文)、904 年の *sang janardanottungga* (ルウィング I 刻文) である。婚姻以前にすでに複数の称号があったことになる¹¹⁵。さらに、バリトゥン王の即位は 898 年であり、907 年以前にもバリトゥン王やその大臣であるダクシャの名が記された刻文が中部ジャワで発布されており、907 年に結婚したことで中部ジャワが彼の統治下に入ったとすることには疑問が生じる。

バリトゥン王が即位した時期は、いまだ王の権威はそれほど高くなかったと考えられる。バリトゥン王時代には、王の名前が記されない、ラクルヤンやパムグトラによる刻文がある (カユ・アラ・ヒワン *Kayu Ara Hiwang*、パングムラン A、カンダンガン *Kanḍangan* 刻文など¹¹⁶)。これらのラクルヤンやパムグトラは自らの領地を統治し、王の権威に関わらず自立的に動いていたようである。バリトゥン王はこれらの自立的な領主を統合するために自らの権威を高める必要があった。ワヌア・トゥング III 刻文の記述によると、王の不在時期を経てラケ・ウンカルフマランが王位に就いたが、彼の発布した刻文は見つかっておらず彼

¹¹⁴ この「王の結婚」は 907 年のマンティヤシ I 刻文に記された「王の結婚式 *waraṇan haji*」を根拠としている。しかし、「王の結婚式」として解釈される「*waraṇan*」は、「(子どもの)結婚式」を意味し [Zoetmulder 1982: 2204]、907 年の刻文に記された「*waraṇan haji*」は「王の子の結婚式」の可能性もある。

¹¹⁵ 「王の結婚式」は 907 年のマンティヤシ I 刻文において、5 人のパティの功績の一つとして記されており、その「王の結婚式」がいつ行われたかについては明記されていない。そのため、907 年以前に「王の結婚式」が行われた可能性もある。しかし、上述の通り、王の称号は 907 年以前に 3 つあり、称号の変更の一つの原因が結婚によるものであったとしても、それ以外の原因があったと考えられる。

¹¹⁶ カユ・アラ・ヒワン刻文では、シーマを定立したラケ・ワヌア・ポであるディア・サラ *rake wanua poḥ dyah śala* を聖なるバジュラ王の子 *wka sang ratu bajra* であると記している。この刻文には、バリトゥン王の下で高官であるパムガト・ワディハティのプ・ダピト *pu ḍapit* (カユ・アラ・ヒワン刻文では *pu ḍangpit*) や、タジ *Taji* 刻文でバリトゥン王の恩恵が与えられているラクルヤン・イ・ワトゥティハン *rakryan i watutihang* のプ・サングラーマ・ドゥランガラ *pu sanggrāma dhurandhara* (カユ・アラ・ヒワン刻文では *pu sanggrāma śurandhara*) が贈り物リストに確認できる。カユ・アラ・ヒワン刻文には、バリトゥン王に関する記述はないが、バリトゥン王との繋がりがある人物が記されることから、ラケ・ワヌア・ポがバリトゥン王の権威を認めていたと推察される。またラケ・ワヌア・ポ自身はバジュラ王の子供であることをわざわざ記してはいるが、王を名乗ってはおらず、一地方領主であったと考えられる。このバジュラ王に関しては詳細がわからないが、「*śrī mahārāja*」ではなく「*ratu*」と記されているので、バリトゥン王が即位する以前の王の不在時期に、ある地域を支配していた人物であったと推察される。

についての詳細はわかっていない。しかし、自立的なラクルヤンの存在やバリトゥン王が歴代の王たちを刻文に列挙しその正統性を示す必要があったことなどから、バリトゥン王統治の初期には未だ王権が不安定であったことが示唆される。バリトゥン王の恩恵や命令を記した刻文には、バリトゥン王が王権を強化するために行った様々な手段が見て取れる。

バリトゥン王時代の刻文の多くも、シーマ定立を内容としている。バレット・ジョーンズはシーマ定立がラクルヤン（地方領主／高官）や寺院を統制するための王による手段として機能していたことを指摘しているが[Barrett Jones 1984: 80]、バリトゥン王時代においてもシーマ定立は統治のための重要な手段であった。

まず、バリトゥン王の刻文に記述されたシーマ定立の内容を概観する。

①アヤム・トゥアス Ayam Těas 刻文（901 年 1 月 1 日）

大王であるワトゥクラのラケ（バリトゥン王）の命令がラクルヤン・マパティ・イ・ヒノ rakryān mapatiḥ i hino たちに伝えられ、アヤム・トゥアスのシーマの村すべてに交易に関する規則を与えた。

②タジ Taji 刻文（901 年 4 月 8 日）

ラクルヤン・ワトゥティハン rakryan watutihang が、タジの菜園の地をシーマとして定立した。シーマ定立の理由はカビクアンが建てられたからである。刻文の後半部分には大王バリトゥンの恩恵が述べられる。

③ワトゥクラ Watukura 刻文（902 年 7-8 月）¹¹⁷

大王バリトゥンがワトゥクラのラーマンタ rāmanta らにシーマの儀式を行うための費用を与えた。このラーマンタたちはバリトゥン王のダルマ・パンガストゥーラン dharmma pangasthūlan（宗教建造物）¹¹⁸をバードラ月の満月ごとに祈り、ダルマに祀られた神への義務を負っている。ラーマンタたちは費用を受け取り、シーマ定立の儀式を行った。

④トゥラン Tělang II 刻文（904 年 1 月 11 日）

「シャタシュリング Śataśringga に横たわる神である王」の計画を完遂するよう、ラケ・ウラル rake wlar に大王バリトゥンの命令が伝えられた。不明瞭な部分もあるが、舟を贈ること、川に堤防をつくること、カムラーンをつくることが命じられ、それらを維持管理するためにトゥランの村などが贈られたようである。これらの村のラーマに課せられたブアト・ハジは、ダルマのシーマを整えることであり、前述の舟や川の堤防、カムラーンはこのダル

¹¹⁷ この 902 年の刻文の後に 1348 年の刻文が記されており、このワトゥクラ刻文は後代の複製と考えられている[Naerssen 1977: 74-76]。

¹¹⁸ ナールスンは、「ダルマ・パンガストゥーランはバリトゥン王の埋葬の建造物である。おそらくワトゥクラのラカたちの昔の領域に位置していた、バリトゥン王の祖先の寺院である」と述べている[Naerssen 1977: 75]。

マと関係があるものと考えられる¹¹⁹。これらの村は MDH の立ち入りが禁止され、そこでの交易に関する規定が記される。

⑤ ランドゥサリ Randusari I 刻文 (905 年 7 月 17 日)

大王バリトゥンの命令がラクルヤーン・マパティ・イ・ヒノ *rakryān mapatih i hino* とラカイ・ウワタン *rakai wwatan*¹²⁰ に下り、キニワンのワトゥクにあるポの村が何かしらの義務を終わりにすることが命じられた。シーマ定立の目的は、「パスティカに横たわる神」の聖なるチャイティヤ *caitya* のためである。

⑥ クブクブ Kubukubu 刻文 (905 年 10 月 17 日) (2 枚目欠如)

ダプンタ・マンジャーラ *dapunta mañjāla* たちがラクルヤン・フジュン *rakryan hujung* とルカイ・マジャウンタン *rēkai*¹²¹ *majawuntan* にクブクブ・バドゥリーの土地をシーマとして定立した。カヒュナンのサン・アパティ *sang apatih* (役職名) の水を管 (おそらく灌漑用) に通すために定立されたと考えられる。また、ラクルヤン・フジュンとルカイ・マジャウンタンがサン・アパティによって同伴され、バンタン *Bantan*¹²² を打ち負かしたことにより交易ができるという大王バリトゥンの恩恵を得たことが記される。

⑦ マンティヤシ Mantyasih I 刻文 (907 年 4 月 11 日)

大王バリトゥンの命令がラクルヤーン・マパティ・イ・ヒノ *rakryān mapatih i hino* らに伝えられ、マンティヤシのパティたちのシーマとしてマンティヤシの村などが定立された。ま

¹¹⁹ ダルマのシーマとはカムラーンと舟を守るために贈られたトゥランなどの村々を指している。また交易・生産規定を記した箇所では、免税範囲を超えた場合の税は、ダルマ、ダルマの守護者 (おそらくダルマの管理者)、MDH に三等分されることから、このシーマの受領者はダルマと考えられる。

¹²⁰ 同刻文の贈り物の箇所において、王とダクシャの間に「王の祖母ラカイ・ウワタンであるプ・タンムル *nini haji rakai wwatan pu tammēr*」[1b: 6]が記される。また、ルカム刻文では、同じく王の祖母であるラクルヤーン・サンジーワナ *rakryān sañjīwana* が記される。SNI は、「ラカイ・ウワタンはダクシャとともに述べられ、ダクシャはおそらくラカイ・ワトゥクラ *rakai watukura* の義理の兄弟であるので、ラカイ・ウワタンはダクシャの祖母であり、王妃の祖母となる。このように、ラクルヤーン・サンジーワナは王自身の直接の祖母である」と推測している[Marwati 2008: 172]。しかし、ダクシャがバリトゥン王の義理の兄弟であるとする説は、漢籍からのブハリの解釈に基づくが、そもそもこのブハリの解釈は推測の域を出ない (注 135 参照)。また、SNI はラカイ・ウワタンがダクシャとともに記載されることから、彼らの間に何らかの関係があったと推測するが[Marwati 2008: 172]、バリトゥンの時代では、マハーマントリであるダクシャに命令がくだり、そして関係する人物 (ラクルヤンなど) が次に記されることが一般的である。以上の理由から、ラカイ・ウワタンがダクシャの祖母であるとは断言できず推測の域をでない。単に、ラカイ・ウワタンとラクルヤーン・サンジーワナはバリトゥン王の父方母方いずれかの祖母であるとも考えられる。

¹²¹ おそらく *rakai* のことである。

¹²² バンタンはバリと考えられている[Barrett Jones 1984: 166; Titi 1996: 37-38.n.7]。

た、神々が列挙される箇所では「ポ・ピトゥのムダンで以前に神格化された者 *rahyangta rumuhun ri mḍang ri poḥpitu*」[B: 7-8]として 8 人の人物が挙げられている（表 1 参照）。

⑧サンサン *Sangsang* 刻文（907 年 5 月 4 日）

大王バリトゥンの恩恵がラクルヤーン・マパティ・イ・ヒノ *rakryān mapatiḥ i hino* に下り、サムガト・ランワ *samgat lamwa* にサンサンの村をウィハーラのためにシーマとするよう命じた。その理由はこの僧院がサムガトによって修復されているからである。王の恩恵として交易・生産規定が記される。

⑨ルカム *Rukam* 刻文（907 年 10-11 月）

大王バリトゥンの命令が、マハーマントリー *mahāmantrī* に下り、噴火の土石流によって損害を受けたために、ルカムの村が王の祖母ラクルヤーン・サンジーワナ *rakryān sañjīwana* のダルマのシーマになるよう命じている。リムウンにある彼女のダルマに贈り物をし、カムラーンを建立した。そのブンチャン・ハジ *buñcang hajy* はカムラーンを維持することである。

⑩ワヌア・トゥンガ *Wanua Těngah III* 刻文（908 年 9-10 月¹²³）

ピカタンのウィハーラのシーマである水田に関する歴代の王の取り扱いが記載される。バリトゥン王に関しては以下のことが述べられている。898 年に即位し、そのマハーマントリーはヒノのラケである。904 年に「ジャワのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラ *sang hyang dharmma bihāra i jawa*」のすべてがスワタントラ *swatantra*（自立／自由）となる命令が下され、905 年に大王はニュー・ガディン *Nyū Gading* からきて王宮に上がった。908 年にはピカタンの僧院のために、一度破棄されたピカタンの水田がシーマとして再び定立された。

⑪カラディ *Kaladi* 刻文（909 年 6 月 27 日）

大王バリトゥンの恩恵が、ラクルヤン・マパティ・イ・ヒノ *rakryan mapatiḥ i hino* に受け取られ、ラクルヤン・バワン *rakryan bawang* に伝えられた。その理由は、カラディとピャピャの土地がダンプンタ *dampunta* たちによってパニ克蘭・ススル *panikēlan susur*（義務のことか）を行うために、花が植えられるシーマとなるように請願されたからである。そして、そのガヤームとピャピャの土地は森¹²⁴であり恐れられ、昼夜商人や下流からの人々¹²⁵を弱

¹²³ クセンは「908 年 10 月 1 日」とし[Kusen 1994: 83, 90]、トゥリンガは「908 年 9 月 8 日」とする[Tringga 1994: 25]。

¹²⁴ バレット・ジョーンズは「未耕作地」とするが、原語は「*alas*」であり、一般に「木・森」と訳される[Zoetmulder 1982: 47]。

¹²⁵ 原語は「*hilirān (hiliran)*」で、「流れ、流れとともに漂流するもの（花、流木）、おそらく釣り具の一種（網）と釣り船」と解釈される[Zoetmulder 1982: 627]。バレット・ジョーンズは「下流からの人々」[Barrett Jones 1984: 181]と訳し、ティティは「漁師」としている[Titi 1996: 35]。

らせていたが、その森が水田となり恐怖がなくなったことが記される。

バリトゥン王時代にはシーマ定立以外を内容とし、バリトゥン王の名を記す刻文もいくつかある。

⑫ルンウィガ Rumwiga I 刻文 (904 年 12 月 28 日)

ラーマンタ・イ・ルンウィガ *rāmanta i rumwiga* がウマーリタの村の税を減らすように頼み、大王バリトゥンとラクルヤーン・ウアタン *rakryān wuatan* の恩恵によって叶えられた。刻文の最後にはママサン・グヌン *mamasang gunung* (儀礼のための支払いの一種¹²⁶) などの費用が述べられる。

⑬ルンウィガ II 刻文 (905 年 7-8 月)

ルンウィガのラーマが、サムガト・モマウマ・マムラティ *samgat momahumah mamrati* とラクルヤーン・ウンカル・ティハン *rakryān wungkal tihang*、マハーマントリであるラクルヤーン・リ・ヒノ *rakryān ri hino mahāmantrī* に対し、1 年ごとにマパサン・グヌンガ *mapasang gunung* のための銀などの恩恵が与えられるように請願している。ラーマらが贈り物をし、大王バリトゥンにも贈り物が贈られている。

⑭キヌウ Kiněwu 刻文 (907 年 11 月 20 日)

キヌウのラーマ *rāma i kinwu* が大王バリトゥンとマハーマントリに恩恵を与えられ、ラーマたちの水田の拡張が承認された。もともとラーマたちはキヌウの村が所属するランダマンのラクルヤーン *rakryān ni raṇḍaman* に水田の拡張を願い贈り物を贈ったが、水田が拡張される前にそのラクルヤーンは死んでしまった。ラーマたちは大王とラクルヤンたちに贈り物をし、水田拡張を実現している。

上記のバリトゥン王の刻文を考察すると、この時代のシーマ定立にはいくつかの経済的な側面が読み取れる。その一つは交易・生産規定である。アヤム・トゥアス刻文、トゥラン刻文、サンサン刻文では、特定の物品に関して規定の範囲内であれば税が免除されることが記され、さらにトゥラン刻文、サンサン刻文では、規定範囲を超えた場合の規則もみられる。これらの規定の詳細は前章で説明した通りである。これらの交易・生産規定の記述は、現在までに発見されている刻文をみる限り、バリトゥン王以前の刻文にはみられない[Naerssen 1977: 67; Barrett Jones 1984: 37]。バリトゥン王が新たに交易に関して税をかける

¹²⁶ 「*mamasang*」は「接頭辞 *mam* + *pasang*」から成る語と考えられる。マヒは、このママサン・グヌンを儀礼として捉えている[Machi 1983b: 40]。またティハン Tihan 刻文 (914 年) には、「*pasang gunung*」の語が見られ、リブトはこれを税の一種としている[Riboet 2003: 311-312]。この税が何を対象に課せられ、また何のために使用されるかは明らかでない。

ことができたのは、バリトゥン王が村々での活動、米の生産活動だけでなく村内交易や職人の産物により強い統制を持つことができ[Barrett Jones 1984: 38-39]、またこの時期にアジアの海上交易が回復したことで、交易に関するより多くの利益があったからだと考えられる[Christie 2001: 49]。シーマとなった地では、この交易・生産規定によって一部の税が緩和されたことで、交易の活発化が期待されたと考えられる。このような規定（を含むシーマ定立）は、もちろん寺院維持の側面もあったであろうが、交易を自由にさせるという、バリトゥン王による経済を活発化させる方法のひとつであった。

二つ目は、トゥラン刻文に記された舟渡しである。この舟渡しに関しては、バリトゥンが交通の整備に関心を持っていた例として、すでに先行研究でも指摘されている[Barrett Jones 1984: 81; Titi 1996: 34-35]。このトゥラン刻文に記された舟は、カムラーン（あるいはダルマ）に物資を運ぶための舟であると推測できるが、おそらくカムラーンだけでなく、その周辺の村の物資供給にとっても有益であった。なぜなら、この刻文には「この川を低い・中間の・高い地位の、あらゆる人々が渡るとき、支払いを要求してはいけない。もし支払いを要求すれば大きな罪である *yan wuat mantas rikanang luah kaniṣṭa maddhyama uttama saluiranikanang inantasakanya tan pintāna ataḥ upahan yāpwan paminta ataḥ sa upahan salungguḥ ni mahāpātaka*」[II-B: 12]という記述があり、地位に関係なくこの川を自由に渡ることができたからである。また、堤防がつくられたことで舟の行き来が容易になったと考えられる。バリトゥン王は、この川の舟は誰でも利用できるという恩恵を与え、さらにこのシーマへのMDHの立ち入りを禁止することで、この地域の交通を整備し、交易の活性化を促した。この川は現在のソロ川である [Titi 1996: 35]。またカラディ刻文では、人々に恐怖を与えていた森がシーマとして水田になることで、恐怖がなくなったことが記されている。この刻文はシーマを定立する理由として（おそらく儀礼で使用する）花を植えることを最初に記しているが、それだけが目的ではなく、危険な森をシーマとして水田にすることで、商人たちが安全に道を通ることも目的の一つであった[Titi 1996: 35]。

三つ目は水利に関するものである。クブクブ刻文では 2 枚目の銅板が発見されていないため、この水の管がどのような目的でつくられたのかは定かではない。しかし、この刻文に記載された人名の多くには、宗教的地位の高い人に用いられた冠詞と考えられるダプ（ダプンタの異形）やサンが冠せられるため、おそらくこの水の管は寺院あるいは寺院が所有していた水田の水路ではないかと推測される。つまり、このシーマはラクルヤン・フジュンとルカイ・マジャウンタン、そしてサン・アパティに関係する寺院あるいはその水田のための用水管設置を目的として定立されたと考えられる。この水路が特定の寺院や水田にのみ使用された可能性はあるが、おそらく周辺の水田などにも利用されたと考えるべきであろう。もしそうであるならば、このシーマは寺院やその周辺の水田に水を引くための水利事業を目的として定立されたといえる。シーマとなる土地の多くは水田であり、当時のジャワにおける農業の中心は水田であった。これらの水田に水を引くための灌漑施設は当時のジャワにとっても必要不可欠なものであった。このクブクブ刻文や上述のトゥラン刻

文の事例は、水利や交通の整備を行っており、公共事業の性格を持っている¹²⁷。

シーマ定立の目的の多くは寺院の維持である。カラディ刻文はバリトゥン王の恩恵によってパヌ克蘭・ススルのためのシーマが定立されたことを記録する。このパヌ克蘭・ススルに関しては詳細が知られていないが、おそらくはダンプンタたちに課せられた何らかの義務であったと考えられる。「花を植えるためのシーマとして祈られた」とあるので、この義務は花を必要とする儀礼あるいは寺院に関する義務であると推定できる。このシーマの定立は寺院あるいはその儀礼の維持を目的としていた。

また、マンティヤシ I 刻文では、5 人のパティが王の結婚式に貢献したことで毎年神々への祈りにおける功績¹²⁸を認められ、3 年毎に交代しながらシーマからの利益を得ることが記される。このことは、シーマが褒賞の 1 つの手段として使用されていたことを示している。またクブクブ刻文では、戦いで功績が認められたラクルヤンたちに、交易・生産規定の恩恵がバリトゥン王によって与えられている。シーマ定立に伴う交易・生産規定も褒賞の手段の 1 つとなっていた。

さらにルカム刻文では、バリトゥン王が土石流によって損害を受けた村を彼の祖母のダルマのシーマとするよう命令している。村がシーマとなった場合、交易における特権が与えられ、その村は経済的な利益を得る。また王やラクルヤンたちに徴収されていた税は寺院のために使われるので、その村の民衆に宗教的な面で「精神的な利益」を与えたと考えられる。このようにシーマの定立は経済的・精神的利益を村に与えるため、ルカム村の復興を目的としてこのシーマが定立されたと考えられる¹²⁹。これはバリトゥン王の統治におけるシーマ定立には救済措置の一面もあったことを示す。現在のところ、災害を受けた村の復興のためのシーマ定立はこの一例のみである。

以上のように、シーマ定立は交通や水利の整備などの公共事業、寺院あるいは儀礼の維持、臣下への褒賞、救済措置のために行われた。そしてシーマ定立に伴う交易・生産規定は、シーマ周辺の交易の活発化を促す意図があったと考えられる。

また、バリトゥン王の刻文には、シーマ定立の他に、儀礼や寺院の維持を目的とした命令が記されている。ルンウィガ I・II 刻文では、おそらく儀礼の費用のために、この村の税

¹²⁷ クリスティは、水利に関する 9 世紀から 14 世紀の刻文を考察し、堰の修築に関するカマラギャン Kamalagyan 刻文（1037 年）を除き、王による水利は水利そのものを意図して行われたのではなく、宗教的目的のために行われたことを指摘している[Christie 2007: 245-250]。

¹²⁸ パティのブアト・ハジとは、「王の結婚式、そして毎年マランクシェーシュワラ、プーテーシュワラ、クトゥサン、シラバーデーシュワラ、トゥレーシュワラの神の儀礼の時（のブアト・ハジ）。そしてクニンの村の恐怖を終わらせるために、パティが道を守ることを任された *kāla ni waraṇan haji. lain saṅke kapūjān bhathāra i malangkuśeśwara. ing pūteśwara. i kutusan. i śilābhedeśwara. i tuleswara. ing pratiwarṣa. muang sangkā yan antarālika katakutan ikanang wanua ing kuning. sinarabhāranta i kanang patiḥ rumakṣā ikanang hawān*」[A: 6-7] ことである。

¹²⁹ このルカム刻文では、村をシーマとする理由として、土石流によって村が「消えた」ことを記しており、明らかにこの定立は村に対する救済措置であった。

を減らすという恩恵が与えられた。ここではバリトゥン王が宗教儀礼を維持・保護しようとしたことが見てとれる。さらに、ワヌア・トゥンガ III 刻文では、904 年にバリトゥン王がジャワのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラ（聖なる寺院・僧院¹³⁰）のすべてをスワタントラとする命令を出したことが記録される。スワタントラとは「自由・自立」を意味するが、913 年のティンバナン・ウンカル刻文では、「スワタントラとは（以下の）MDH によって干渉されないことである *swatantra ngaranya tan pīnarabyāpāra deni saprakāra sang mangilala drabya haji*」[7-8]と記されている¹³¹。このことから、前述のワヌア・トゥンガ III 刻文の一文は、ジャワにあるすべてのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラが MDH から干渉されない、つまり王の税を免除されたと解釈できる。これはジャワのすべてのダルマ・ビハーラの経済的な負担を減らすための王による恩恵であった。バリトゥン王がこの命令を発布した理由は記されないが、サン・ヒャン・ダルマ・ビハーラにこのような恩恵を与えたことは、彼の寺院あるいは宗教に対する保護の 1 つの手段と考えられる。また、クリスティが指摘しているように、このような宗教の保護は彼の王権を確実なものとするための手段でもあった[Christie 2001: 48]。

以上のことから、バリトゥン王はシーマ定立を介さずとも、儀礼の費用に関する恩恵や寺院への税免除の命令を出すことによって、儀礼や寺院の保護を行ったことが明らかである。特にジャワにおけるすべてのサン・ヒャン・ダルマ・ビハーラへの免税に関する命令は、彼の王権強化の手段の 1 つであった。

また、ルンウィガ II 刻文やキヌウ刻文にみられるように、シーマ定立と同じく、何かを請願し承認してもらう際には、贈り物が必要であった。そしてキヌウ刻文によると、村人が請願する際には、まずその領地を統治するラクルヤンに、そしてラクルヤンの段階で叶わなければ、王に請願していたことがわかる。ほかに、ルイータン *Luītan* 刻文（901 年）やパルパンガン刻文（906 年）に記された村からの請願は、水田の再測量であり、これらはマハーメントリのダクシャに対して行われた。

バリトゥン王と歴代の王たち

上述したトゥラン刻文では、バリトゥン王によって「シャタシュリングに横たわる神」とされる王の計画を実行することが命じられ、おそらく「シャタシュリングに横たわる神」と何かしらの関わりを持ったカムラーンと舟のためにトゥランの村がシーマとして定立されたと考えられる。このように過去の王の計画を完遂するということは、バリトゥン王が過去の王を無視できず、その事業を引き継ぎ、統治を行わなければならなかったことを示唆する。あるいは、この過去の王の事業に何らかの利益を見出した可能性もあるが、この

¹³⁰ ここでは、寺院の僧院（寺院に付属する僧院）、あるいは寺院（ダルマ）と僧院（ビハーラ）と解釈できる。

¹³¹ ティンバナン・ウンカル刻文でスワタントラとなったのは、「ダルマ・カウィクアン *dharma kawikuan*」である。

事業が「シャタシュリングに横たわる神」の計画であると強調されていることから、バリトゥン王が過去の王の事業を引き継がなければならない事情があったと考えられる。過去の王の事業を引き継ぐことで、バリトゥン王自身を歴代の諸王の中に位置づけ、王権の正統化の手段とした可能性もある。

またランドゥサリ刻文では、シーマ定立の目的が、「パスティカに横たわる神」つまり死後に神格化された王のチャイティアのためと記される。このチャイティアはおそらく神格化された王の廟のような性質のものと考えられるが詳細はわからない。また、この刻文では、ダクシャとともに王の祖母であるワカイ・ウワタンにも命令が下ったことが記されていることから、パスティカに横たわる神はバリトゥンの祖母、あるいは彼にとって重要な人物であったと考えられる。もしかすれば、このパスティカの神は祖母を通じてバリトゥン王の祖先にあたる人物であったかもしれない。パスティカの神については、前述の通り、おそらく 885 年以前に死去したと考えられるカユワンギ王のことである[Christie 2001: 44]。カユワンギとバリトゥン、そして彼の祖母との関係は不明であるが、カユワンギ王は初めてシュリー・マハーラージャの称号を用い、29 年もの間統治を続けた偉大な王であった。バリトゥン王がこのチャイティアに恩恵を与えた理由は、バリトゥン王にとってカユワンギ王は偉大なる先王であり、カユワンギ王に敬意を表することは自らを歴代の王に連なる王として位置付ける手段であったのかもしれない。

マンティヤシ I 刻文では神々への祈願の箇所、歴代の諸王を列挙する。その諸王の初めに「ratu (古ジャワ語で「王」を意味する)」としてサンジャヤが挙げられ、サンジャヤのあとにシュリー・マハーラージャの称号を冠した 7 人のラカイが続く。一般に、バリトゥン王は歴代の王を列挙することで、自らをその後継者として位置付け、自身を正統な王として示したのだと解釈される[Djoko 1986; Kusen 1994]。しかしこの刻文では、歴代の諸王を列挙した後に、バリトゥン王がこれらの歴代の諸王よりも強力な王であることをほのめかす次のような一文がある。「もし、大王ワトゥクラのラケ・ディヤ・ダルモーダヤが呪いを発したなら、その鋭さは(歴代の王)より秀でている lwiha sangkārīkā laṇḍapan yān pakaśapatha śrī mahārāja rakai watukura dyaḥ darmmodaya mahāśambhu」[B: 9]。この一文から、バリトゥン王が歴代の諸王の後継者として自身を位置付けただけではなく、さらに歴代の諸王よりも自身が優れた王であることを宣言したと考えられる。また、バリトゥン王の刻文ではシーマ定立の規則に違反した者への呪詛を含む刻文がいくつかあるが、そのうちの一つであるルカム刻文では、カユワンギの刻文で初めて記された「マタラムの地の大王の王宮 kaḍatwan śrī maharaja i bhūmi i mataram」という文言ではなく、「ジャワの地の大王の王宮 kaḍatwan śrī maharaja i bhūmi jawa」と記す。これはバリトゥン王がマタラムよりもさらに広い範囲（東部ジャワを含めた地域）を統治する王を宣言したことを示唆する。

刻文に歴代の王の名を記すことは稀であり、この刻文を除くと、ワヌア・トゥンガ III 刻文のみである。ただし、バリトゥン王とこれらの諸王との血縁関係の記述は一切ない。ワヌア・トゥンガ III 刻文においても同様で、バリトゥン王以前に 11 人の王をその即位年とと

もに列挙するが、王たちの血縁関係について述べるのは、828年に即位したガルンのラケを「トゥルクに横たわる聖なる人の子 anak sang lumah i tluk」[I: 6]と記す箇所のみである。列挙された王同士の血縁関係は一切記述されない。バリトゥン王の統治期間にヒノのラケであったダクシャはバリトゥン王の後に王位についているが、バリトゥン王との血縁関係は刻文には記されない。なぜ王は血縁関係を記さないのか。そもそもこれらの諸王に血縁関係はなく、その時の有力なラクルヤンが王として在位していたのだろうか。この点については、次章で取り上げる。

バリトゥン王が、マンティヤシ I 刻文やワヌア・トゥンガ III 刻文に歴代の王を記したのは、自らの王としての地位を確立するためであった。マンティヤシ I 刻文では、歴代の王より自らが勝っていることを宣言し、ワヌア・トゥンガ III 刻文では、歴代の王を記し、その中に自らを位置づけ、またピカタンの僧院のシーマを再定立することで、その宗教的な権威を高めた。このように、バリトゥン王の統治期間には歴代の王よりも自らが優れていることを記す必要性があったことが推測される。

王の称号と後継者

バリトゥン王はラクルヤン、シュリー・マハーラージャの称号のほかに、ヒンドゥー教の神格名を含む称号を冠している。例えば、*dyah dharmodaya mahāsambhu*（アヤム・トゥアス刻文）、*śrī īśwarakeśawotsawatungga*（ワトウクラ刻文）、*sang janardanottungga*（ルウィング I 刻文）、*śrī īśwarakeśawotsawatuṅgarudramūrti*（ワヌア・トゥンガ III 刻文）である。これらの称号のなかにみられる、マハーシャンブ *mahāsambhu*、イーシュワラ *īśwara* はヒンドゥー教神であるシヴァ神を指し、ルドラ *rudra* もしばしばシヴァ神と同一視される神である。またケーシャワ *keśawa*、ジャナルダナ *janardana* はヴィシュヌ神の別名である。これはおそらく称号にヒンドゥー教の神を取り入れることで、王自らの権威を高めることを目的に行われた。

バリトゥン王以前の王では、カユワンギ王が *śrī sajjanotsawatungga*（ランウィ Ramwi 刻文: 882 年）という称号を冠しているが、ヒンドゥー教の神格名は含んでいない。このことは、バリトゥン王以前の王たちとヒンドゥー教神の間には距離があり、王は神との結合によって神聖化されてはいなかったことが推測される。これに対し、バリトゥン王は、少なくとも称号の上では、神との結合によって神聖化されていた。カスパリスは王の神聖化について、13 世紀以前の古ジャワ語文献や刻文においては明確に言及されることはめったにないが、（バリトゥン王の *śrī dharmodaya mahāsambhu* のような）長いサンスクリット語の名前の使用は、ほとんどの王が実際に神聖化されていたことを示唆すると指摘している[Casparis 1992: 489. n.9]。確かに、称号に神格名を含むことで、バリトゥン王はその神聖性を示したといえる。しかし、王がヒンドゥー教の神格名を含んだ称号を冠していることを理由に、実際に神と同一視され神格化されていたとは断言できない¹³²。

¹³² ただし、王は死後に神格化され、「hyañ」や「dewata」の語が冠せられ、「神」と認識さ

バリトゥン王時代の刻文において、バリトゥン王を除き、ヒンドゥー教神の名を含む称号を持つ者はダクシャである。彼はバリトゥン王のマハーメントリとして頻繁に刻文に記され、バリトゥン王の後に即位している。901年のśrī bāhubajra pratipakṣakṣaya（ルイータン刻文）の段階では神格名は含まれていないが、908年のbāhubajra pratipaksaksakṣaya wisnumurti（ワヌア・トゥンガ III 刻文）ではヴィシュヌの化身を意味する「wisnumurti」が含まれている。

バリトゥン王を除き、唯一ダクシャの称号にヒンドゥー教の神格名が含まれていることは、バリトゥン王がダクシャを正式な後継者として認めていたことを示唆する¹³³。バリトゥン王は後継者をはっきりと定めておくことで、王権の安定化を図ったのではないか。約7年間の王の不在時期、そしてその後に在位したディア・ジュバンが発布した刻文の欠如は、バリトゥン王の即位までは王権が不安定であったことを示している。バリトゥン王は自身の在位中に、ダクシャを自らの正式な後継者として選び、彼にこのヒンドゥー教神を含んだ称号を与えることで、次の王は彼つまりダクシャであることを他の高官や民衆に示していたのではないかと考えられる。

実際に、ダクシャはバリトゥン王時代の刻文ではその名がしばしば記され、民衆に恩恵を与えている。例えば、パルパンガン刻文（906年）ではパルパンガンのラーマンタ rāmanta i palēpangan がヒノのラクルヤーン・マパティ rakryān mapatih i hino であるダクシャによって恩恵を与えられ、証文による保護を得た。その理由は、彼らが自分たちの水田が測量された広さよりも狭いことを主張し、その水田が再測量されたからである。さらに、ルイータン刻文（901年）ではルイータンの住人が、彼らの守る水田が狭い為にウダーラ uddhāra（税）を満たすことができないとヒノのラクルヤーン・マパティ（ダクシャ）に伝え、彼（ダクシャ）とパガルウシのラクルヤーン rakryān i pagarwṣi によって測量が命じられた¹³⁴。

れていた。王の妻の父も同様に死後に「神」とされていた例もある。また、9世紀後半に成立したと考えられている『ラーマヤナ・カカウィン』[Robson 2015]では、神々が王の中におり、王の義務が神の性質に例えられ記される[第24章 51-60節]。しかし、この『ラーマヤナ』の箇所は、あくまで神々の性質や役割になぞらえて王のあるべき姿・行動を記しているだけであり、王が神格化されていたとは言えない。ここにおいても、実際に王が神そのものと考えられていたかは明確ではないが、王は神との繋がりを示すことで、自らの宗教的権威を高めていた、あるいは高めようとしたといえる。

¹³³ バレット・ジョーンズは、クブクブ刻文においてヒノ（つまりダクシャ）が「tka amawa śrī」と記されていることから、彼が王位の後継者として指名されていることを暗示しているようだと指摘する[Barrett Jones 1984: 99]。バレット・ジョーンズは「tka amawa śrī」を「王権を持つ bearing the kingship」と訳すが[Barrett Jones 1984: 173]、直訳すると「富（あるいは王に内在する力、つまりシャクティ）を支配するようになる」という意味になる。シャクティは「(個人の持つ) 力、精力」である。

¹³⁴ ティティ[Titi 1996]は、「バリトゥンが民衆の要望や抗議に関心を払い、この事柄の中で自己の利益のために住民によって支払われるべきものよりも多くを徴収しようとする徴税者を懸念する」例として、パルパンガン刻文やルイータン刻文を挙げるが、これらの刻文ではバリトゥンの名は記されず、マパティであるダクシャによって解決されている。

次節では、バリトゥン王以後の諸王に関して、彼らの統治時代の社会状況と前王との関係について論じる。

第4節 バリトゥン王以後の王たち

バリトゥン王の後に王位に就いたのはダクシャである。ブハリはダクシャをバリトゥン王の義理の兄弟と考えたが、確かな証拠はない¹³⁵。ダクシャの刻文は中部と東部で発見されており、彼も中部と東部を統治していた。東部の刻文にのみ記されるカヌルハン は 891 年のバリングワン Balingawan 刻文（シンガサリ地域）では自立的に行動していたが、915 年の刻文では高官のリストに記され、以後王の刻文に言及されるようになる。915 年にダクシャがシンガサリ周辺で権力を持っていたカヌルハンをその統治に組み込んだといえる [Naerssen 1977: 53-54]。

ダクシャはその刻文でサンジャヤ暦（注 82 参照）を使用している。このことは、バリトゥン王と同じくダクシャもサンジャヤに連なる王として自らを位置づけ、その王権の正統性をサンジャヤに求めたことを示している。しかし、このサンジャヤ暦はダクシャによってのみ使用され、彼以降の王には採用されなかった。

ダクシャの次に王位に就いたと考えられるのは、トゥロドンである。彼はダクシャ王時代の高官としては確認できない。彼のラクルヤン称号はラカイ・ラヤン *rakai layang* である。ダクシャ王時代の刻文であるポ・ガル Poh Galuh やエル・クウィン Er Kuwing 刻文にはラクルヤーン・ラヤン *rakryān layang* が確認できるが、この人物は贈り物の箇所で女性に贈られる「布 *kain*」を与えられており、女性であった可能性がある。SNI では、おそらく彼女は王の娘であり、そしてトゥロドンは彼女の夫であるとし、彼は王位の後継者候補ではなく正式な後継者から権力を奪った結果、王位に就いたと指摘している [Marwati 2008: 178-179]。しかしながら、夫婦が同じラクルヤン称号を持つと断言できる例はない。ラクルヤン称号の保有と継承に関しては不明な点が多く、またラクルヤーン・ラヤンが王の娘である証拠はないため、SNI の仮説には従えないが、少なくともトゥロドン王はダクシャ王時代の高官にその名がみえず、ダクシャの王宮の部外者であった。また、バリトゥン王時代のポ Poh 刻文にみえるラカイ・ハラランであるプ・トゥロドン *rakai halaran pu tulodong* が、トゥロドン王であるとする、彼はバリトゥン王の統治間にその高官の座から退き、ダクシャの死後に何らかの理由・手段によって王位に就いたことになる。さらに、上述したサンジャヤ

¹³⁵ ブハリは、『新唐書』に訶陵（社婆、闍婆）に関して記された「其官有三十二大夫，而大坐敢兄為最貴」の「大坐敢兄」を「ダクシャ、（王の）勇敢なる兄」と解釈し、バリトゥン王は結婚により王位に就く権利を得たという解釈とともに、ダクシャをバリトゥンの義理の兄であったと推測する [Boechari 2012a: 121-122]。しかし、ブハリも注で指摘しているが、「坐」が「kṣa」あるいは「ṣa」の音を移すことはないようである [Boechari 2012a: 124. n.12]。さらに、『新唐書』のこの記述がバリトゥン王の時代について言及しているとは断定できない。訶陵または闍婆の最後の朝貢は訶陵の咸通年間（860～873 年）なので、その可能性は低い。

暦の使用がダクシャ時代にのみ使用され、引き継がれなかったのは、トゥロドン王がダクシャの正統な後継者ではなく部外者であったという推察を支持する。また、トゥロドン王は彼の発布したリントカン刻文で、「トゥルマンガンビル *turumangambil* に埋葬された王の父のチャル *carua i caitya ni yaya(h) śrī mahārāja i turumangambil*」のために、土地を買い、その土地をシーマに定立したことを記録している。彼の父はトゥルマンガンビルに埋葬されたことがわかるが、どのような人物であったのか詳細は不明である。

次に、刻文に確認できる王はワギーシュワラである。東部ジャワで発見された 927 年のパルブハン *Palēbuhan* 刻文に「大王プ・ワギーシュワラ、聖なる・・・*śrī mahārāja pu wagīswara sang la(ra)...*」[A: 2]、「ガルンに・・・大王 *śrī mahārāja...ri garung*」[B: 10-11]と記される [Stutterheim 1935a: 433-435]。バレット・ジョーンズは「*garung*」の位置をおそらく中部ジャワであるとしている [Barrett Jones 1984: 5]。また、924 年の刻文 (KO XVIII) では、「大王ワギーシュワラ、カユ・ラムヤに横たわる聖なるもの *śrī mahārāja wagīswara sang lumah ri kayu ramya*」と記され、すでに死去した王として書かれている。924 年にすでにワギーシュワラが死去しているとすると、927 年の刻文に記されたワギーシュワラもすでに亡くなっていることになる。927 年の刻文の名前の後に続く「*sang*」以下の不明箇所には「*lumah ri kayu ramya*」が続くのかかもしれない¹³⁶。ワギーシュワラの詳細については明らかでない。

928 年の刻文には、ワワ *wawa* が登場する。ウラカン *Wulkan* (928 年) 刻文において、「森に葬られた聖なるもの(ラ)クルヤン・ラドゥヤンの子 *anak kryan ladheyan sang lumāḥ ring alas*」と記される。バレット・ジョーンズは、(名のある場所ではなく) 森で埋葬されたという事実から、ワワ王の父の家系は有名なものではなかった、あるいは幸運なものではなかった——例えば、戦いで死んだのかかもしれない——と推測している [Barrett Jones 1984: 3]。また、ダメイや SNI ではラドゥヤン *ladheyan* を、ウアタン・ティジャ刻文のラクルヤン・ランダヤン *rakryan landhayan* と同定し、ワワ王は彼の息子であると考えている [Damais 1970: 714; Marwati 2008: 166, 183]。しかし、そうだとすると、ワワ王は 48 年前の刻文で死んだと記された人の子となり、彼が 928 年頃に即位したとなると、かなり高齢で王位に就くことになり、受け入れ難い。

ワワ王は森に埋葬されたラクルヤンの子どもであり、戦いの中で王位についた人物であった可能性がある。ワギーシュワラが 927 年には中部ジャワの王であり東部にもその力を行使していたのであれば、ワワが王と記された刻文は 928 年に限られ、929 年にはシンドクが王位についているので、ワワ王の統治は 1 年と短いものとなる。

ワワの刻文には「マタラムの地の大王の王宮を守ることで知られる」の文言も記され、刻文の形式は中部ジャワ時代のものと同じであり、マタラムという国の王として統治して

¹³⁶ 中部ジャワの王の名前は一般に現地語名であるが、ワギーシュワラはサンスクリット語名 (ブラフマー、あるいはマンジュゴーシャ[マンジュシュリーの別名]) であり、古ジャワ語刻文では一般に記されないが、ワギーシュワラとは諡号の可能性もある [Stutterheim 1935a: 433-435]。

いた。しかし、彼の刻文には、それまで呪詛には記されなかったハリチャンダナという神が呪詛に登場するようになる。ダクシャ時代までの刻文では、呪詛の最初にはバプラケーシュワラが記されている。ハリチャンダナ神は中部ジャワの刻文と考えられるピンタン・マス Pintang Mas 刻文（878 年）に神として記されるが、呪詛には出てこない。シンドク王の刻文では呪詛の箇所ですばしば記され、バプラケーシュワラとともに記される刻文もある。このハリチャンダナ神はおそらく東部で人気のあった神ではないかと考えられる。そうであるならば、ワワ王はすでに東部に移っていた可能性もある。その神を呪詛の中に取り入れることで、東部での統治を安定化させたのかもしれない。あるいは、それまでの王たちが呪詛で記したバプラケーシュワラを捨てることで、彼以前の王との決別を意図したのかもしれない。発見地が明確なワワの刻文はすべて東部ジャワのものである。ウラカン刻文では中部ジャワの地名が確認できるが、すでにワワ王が東部にその中心を移していた可能性はある。

以上、バリトゥン王以後の中部ジャワの王について論じた。ダクシャ、トゥロドン、ワワ、そしてワギーシュワラについては史料の少なさから、その統治の詳細がわからない。しかし、バレット・ジョーンズはバリトゥン王以後の王たち（ワギーシュワラを除く）には連続性があり、彼らの王位継承は平和に進んだことを指摘する[Barrett Jones 1984: 3]。次の節では、実際にこれらの王たちに連続性はあるのか、彼らの王位の継承は平和裏に進んだのかを検討する。

バリトゥン王以後の王たちの連続性と非連続性

バレット・ジョーンズによって指摘される王たちの連続性のひとつは、彼らの称号に「tungga」という語が含まれることである [Barrett Jones 1984: 3]。ワギーシュワラを除き、バリトゥン王以後、王の称号には「tungga」が含まれる。しかし、この「tungga」という語は「高位の、優れた」を意味し、後の東部のクディリ時代の王の称号にも使用されている。例えば、「イーシャーナ」などの共通の神名などをそれぞれの王の称号が持つのであれば、諸王に何かしらのつながりがあったといえるが、「tungga」の語のみでは、それぞれの王に共通した連続性としては弱い。

もう一つの連続性は高官である（附表 4 高官リスト）。バレット・ジョーンズは、バリトゥン、ダクシャ、トゥロドン、ワワ、シンドクの 5 人の王の時期の行政において、これらの王の何人かに仕えた幾人かの役人たちが確認でき、この 5 人の王の継承が平和的であったということを提示する[Barrett Jones 1984: 4-5]。しかし、バレット・ジョーンズはダクシャとトゥロドンの共通の高官として、エル・クウィン Er kuwing 刻文（ダクシャ王の命令を記す）に記されるハルであるプ・ケトゥウィジャヤ *halu pu ketuwijaya* と 919 年のウィンタン・マス Wintang Mas B 刻文のヒノであるプ・ケトゥウィジャヤ *hino pu ketuwijaya* を挙げているが[Barrett Jones 1984: 5]、ウィンタン・マス B 刻文には王の名前は記されない。確かに同じ年（919 年）の 7 月にはトゥロドンによるリントカン刻文が出されているが、ここでヒノと

して記されているのはプ・ケトゥダラ *ketudhara* である。ナールスンは、リントカン *Lintakan* 刻文のラケ・ヒノ *rake hino* のケトゥダラをダクシャ王の高官であるラカイ・ハル *rakai halu* のケトゥウィジャヤ *ketuwijaya* の異形とし[Nearssen 1977: 54]、バレット・ジョーンズもダクシャ王のエル・クウィン刻文のラクルヤン・マパティ・イ・ハル *rakryan mapatih i halu* であるプ・ケトゥウィジャヤはおそらくトゥロドン王のリントカン刻文のヒノのプ・ケトゥダラ、ウインタン・マス B 刻文のプ・ケトゥウィジャヤ、ハリンジン *Hariñjing B* のプ・ケトゥダラ *pu ketudhara* と同じ人物であると指摘している[Barrett Jones 1984: 5]。しかし、少なくとも「*ketuwijaya*」と「*ketudhara*」の「*wijaya*」と「*dhara*」では意味が異なり、その音も違うため、名前の異形とは言い難く、同一人物であるとは断言できない。また、リントカン刻文やハリンジン B 刻文では、ヒノであるプ・ケトゥダラを「宝石の輝きを持ち、ウィシュヌの力を持つ主（王）*mañimantaprabhā prabhu śakti triwikrama*」と記すが、ケトゥウィジャヤにはこのような称号は冠されていない。919 年の 10 月に発布され、ダクシャ王の刻文に続いて記されたウインタン・マス B にみられるケトゥウィジャヤは、ダクシャ王の下で（当初はハル、後に）ヒノであり、ダクシャ王が与えた恩恵を彼の高官であるケトゥウィジャヤが安定させたのがこの刻文であると考えられる。この刻文には、ダクシャの名が記されない。つまり、この時点でダクシャ王がすでに死去している可能性もあるが、この場合、その高官であったケトゥウィジャヤが彼の王の恩恵を確認したのである。このように 919 年の時点で、トゥロドンは自らの刻文で王を称し高官を引き連れているが、その一方でダクシャ王の高官が自立的に行動をしていたことになる。このように考えると、同時代にヒノの称号を持つ者が二人存在していたことになる。ヒノの称号は、領地を表すとともに、高官の何らかの地位を示していたと考えられる。つまりヒノ称号を持った人物が、トゥロドンの王宮とは別に、他の王宮、つまりダクシャ王の死後に、別の人物によって引き継がれた王宮にいたと考えられる。このように考えると、919 年のそれぞれの刻文に記されたヒノのラクルヤン称号を持つ人物の名前が異なっていることの説明がつく。

さらに、バレット・ジョーンズはバリトゥン王時代の刻文とダクシャ王のウインタン・マス A 刻文に記されたマンフーリ *mañhūri* のプ・チャクラ *pu cakra* をトゥロドン王のリントカン刻文に記されたティルアン *tiruan* とし、同刻文のティリンピック *tilimpik* のプ・パンドムアン *pu paṇḍamuan* を、ワワ王のサングラン刻文に記されたプルワトゥ *puluwatu* と考える[Barrett Jones 1984: 5]¹³⁷。しかし、この二人の人物が同一人物である確証はない。たとえ同じ人物であっても、前王の高官が次の王の高官となるのが、王位の順当な継承を裏付ける、確かな根拠とはなりえない。実際に、バリトゥンとその正式な後継者と考えられるダクシャの間でも、両王の高官で同じ人物と断定できるのは、マンフーリのプ・チャクラとワディハティ *wadihati* のプ・ダピト *pu ḍapit* だけである¹³⁸。トゥロドンの王宮で、ウィシュ

¹³⁷ プ・パンドムアンは、シンドクの刻文ではマンフーリ *mañhūri* として記されている。

¹³⁸ バリトゥン王の刻文に記されるプ・ウッタラ *pu uttara* (サムガト・マムラーティ *samgat mamrāti*) は、ダクシャ王の刻文ではラケ・バワン *rake bawang* として、その名が確認で

ヌの力を持つと形容されたケトゥダラもワワの王宮には確認できない。これに対して、ワワ王時代の 928 年のサングラン刻文とシンドク王時代の 929 年のグルングルン刻文をみると、高官であるシリカン、ティアン、ワディハティ、ハララン、マムラーティ、マダンドゥル *madanḍər*、アングハン *anggəhan* の役職は同じ人物であることがわかる（附表 4 参照）。確かにワワ王とシンドク王の間には高官の連続性があるといえるだろう。

トゥロドンとワワを結びつけるのはシンドクである。しかし、ワギーシュワラの刻文には、ワワやシンドクの名前は記されない。ワギーシュワラがすでに死去している場合、彼が与えた恩恵を確認するために発布された刻文には、その刻文が発布された時点での王の名前が記されることで、その刻文の正当性が王によって付与される可能性が高い。バリトゥン王やダクシャ王の刻文にみられるように、死去した王の恩恵が実行あるいは確認される際には、その時に即位している王の恩恵が付与されるのが一般的である。このことから、この刻文の発布者は、ワギーシュワラ以外にその刻文の正当性を求めることをしなかったことになる。この理由として、924 年から 927 年の間に彼が恩恵を求める王がジャワにいなかった、あるいは王はいたが、彼らが恩恵を求めるほどに影響力のある王がいなかった、と考えられる。可能性として、トゥロドン王からワワ王即位までの時期は、誰もが認めうる王がいなかった時代、有力者が競い合っていた時代であったと推察される。このことはワワ王の父が森で埋葬されたこととも符合する。仮に、ワギーシュワラが存命であったとしても、彼の名前はトゥロドンの王宮には確認できず、トゥロドンとは関係なく、即位した人物と考えられる。

また、サンジャヤ王とのつながりで見ると、バリトゥン王はマンティヤシ I 刻文において、サンジャヤを諸王の最初の王として記し、彼の正統性をサンジャヤに求め、同様に、ダクシャ王はサンジャヤ暦を使用することで、サンジャヤに自らの正統性を求めている。しかし、このサンジャヤ暦はトゥロドン王以降の王には継承されなかった。つまり、ダクシャ王がバリトゥン王の王位（王権）を継承したことは明らかであるが、後に続くトゥロドンら諸王は、バリトゥン王やダクシャ王とは異なる認識を持っていた（異なる系統に属していた）可能性がある。

さらに、トゥロドン王の刻文では、バリトゥン王時代からみられる交易・生産規定が確認できず、呪詛の箇所では記される「大王の王宮を守ることで知られる」という文言も確認できない。これは、トゥロドン王の時代には交易・生産規定を用いることができなかった、つまりバリトゥンからダクシャが引き継いだ王権の基盤をトゥロドンは持っていなかったといえるかもしれない。そして「大王の王宮を守ることで知られる」の文言の欠如（マタラムという領域概念の欠如）は、トゥロドンがバリトゥンやダクシャ、ひいてはワワやシンドクたちとは異なる認識を持つ王であった可能性を示唆する。ワワ王のサングラン

きるが、同一人物とは断定できない。同じく、バリトゥン王とダクシャ王の刻文に見えるプ・チャクラ（マンフーリ）はトゥロドン王の刻文ではティルアンとして、プ・ダピト（ワディハティ）はマンフーリとして登場するが、同一人物かどうかは不明である。

Sangguran（928 年）刻文やシンドク王の複数の刻文では、呪詛の箇所はこの文言が引き続き使用されており、カユワンギ、バリトゥン、ダクシャらとの繋がりを維持している。

以上のことから、バリトゥンとダクシャの王位継承は順当なもので、平和裏に進んだといえるが、トゥロドンとはダクシャの王宮から出た王ではなく、ダクシャとトゥロドンの連続性は低い。トゥロドン以降の状況は不明な点が多いが、高官の記述がない、ワギーシュワラという（おそらくすでに死去した）王の刻文が発布され、またワワの即位が戦いによって勝ち取られた可能性があることから、この時代も王権の不安定な状態であったことが示唆される。しかし、呪詛の文言の使用を見るに、カユワンギ、バリトゥン、ダクシャ、ワワ、シンドクの諸王たちはマタラムという国を統治しているとの共通の認識を持っていたといえる。

第5章 中部ジャワ時代の王のありかた

前章では、中部ジャワ時代の王の統治に関して考察を行った。この章では、王朝や国家モデルの議論を参照しながら、前章までの考察結果に基づいて、中部ジャワ時代の王とはどのような存在であったのか考察を行う。

王朝の議論に関しては、すでに第1章で触れたので、ここでは細かい議論は省略する。ワヌア・トゥンガ III 刻文が発見されて以後の議論では、その多くが中部ジャワ時代の王を、シャイレンドラ王家か、サンジャヤ王家かに分類し論じる。クリスティは、サンジャヤ王家とシャイレンドラ王家はそれぞれマタラムと訶陵を統治する王家であった（後に統合される）可能性を指摘している[Christie 2001]。また、ブハリはサンジャヤと彼の後継者たちもシャイレンドラの成員とし、一つの強力なジャワの王朝を主張し[Boechari 2012e]、クセンはワヌア・トゥンガ III 刻文に記された諸王をすべて、サンジャヤの子孫として論じ、系譜を作成している[Kusen 1994]。しかし、刻文に記される諸王たちはその出自、王家が記されない場合がほとんどであり、シャイレンドラ王家の王たちが記すのみである。バリトゥン王が記したマンティヤシ I 刻文の諸王のリストによって、サンジャヤ王家という、ひとつの王家があったかのように言われるが、バリトゥン王はこれら諸王の血縁関係を述べていないし、自身との関係も記さない。これらの王たちはバリトゥン王にとって、彼の王権を正統化するために（あるいは強化するために）必要であったが、あくまでマタラムという領域を統治した前任者たちであった¹³⁹。

シャイレンドラや諸王のリストだけをみると単系的な王統に見えるが、この系統からはずれるような王の存在を指摘する研究者もいる。刻文からは、ボス、ナールスン、ヨルダーンらが提示するように、その他の有力者の存在が示唆される。ナールスンやヨルダーンの複数王朝説では、ウキラン刻文に記された「ハルの王」を根拠とする「ハル王朝」や、古マレー語で刻文を記し、その中で自らの親族を挙げるラカイ・パタパーンの家系を「パタパーン王朝」として考えている [Nearssen 1977: 38-40; Jordaan 2003: 3] ¹⁴⁰。

前章までの考察の結果、従来の王権の考え方とは異なる点が指摘できる。一点目は従来、多くの研究者は血縁による王位の継承を考えたが、王は力によって王位に就いたということである。シャイレンドラの諸王以外の統治者たちは自らの出自を語らない。クセンに代表されるように、先行研究では血縁関係があるものとして諸王が結び付けられるが、ジャ

¹³⁹ ザカロフは、マンティヤシ I 刻文やワヌア・トゥンガ III 刻文の諸王のリストにサンジャヤが含まれるが、このことはサンジャヤがマタラム国を統治していたことを含意せず、彼は過去の伝説的英雄、あるいは祖先、あるいは理想的な王として「ムダンの神格化されたもの」のリストに含まれたと指摘する[Zakharov 2012: 82]。

¹⁴⁰ 後者のパタパーンについては、確かに彼はガンダスリ II 刻文において親族を列举し、彼が「死去した王 hyang haji」と関係があったことを示唆している。しかし、彼を他の刻文で王を名乗り高官を従える人物たちと同等に扱うべきではない。彼はおそらく有力な地方領主であったと考えられるが、自らの刻文でも彼自身を王とは明記しておらず、シャイレンドラ王家や、いわゆるサンジャヤ王統の諸王たちと同等の権力（支配）を持つてはいなかったと考えられる。

ワの統治者たちにとって、王たり得る資質は血縁ではなかったのかもしれない。しかしながら、9世紀の王たち、特にカユワンギ王以降の王たちは、呪詛で「マタラムの大王の王宮を守る」という文言が記されるので、マタラムという領域を統治していたという意識を共有していたことが確認できる。しかし、その王たちが同一の家系の王であったことを直接示す、史料的な根拠はない。むしろマタラムという地域に領地を持っていた領主たちのうち、他を統べる有力な力を持っていた人物が王位についていたと考えられる。もちろん、王と王の間の血縁関係があった可能性を否定する訳ではない。前章でも述べたが、ラクルヤン称号をもたず王位に就いた人物がワヌア・トゥング III 刻文には二人確認できる。ラクルヤン称号をもたない、つまり自らの領地をもたない人物が王位に就くことができたのは、その血筋のためであったかもしれない。しかしながら、彼らの在位期間は短く、彼らが前王との血縁関係を根拠に王位に就いたとしても、やはり他の領主たちを統べる力を王自身が持っていなければ、在位し続けることは難しかったであろう。当時の王にとっては、血縁よりも他を統べる力を備えていなければならなかった。その証拠にバリトゥン王は前任者よりも自らの力が秀でていることを宣言している。

バレット・ジョーンズはシーマ定立の方式から、バリトゥン王時代以前には王の命令によるシーマ定立は稀であったが、バリトゥン王時代から次第に増え、シンドク王時代にはほぼすべてが王の命令によるものとなることを指摘し、カユワンギ王やバリトゥン王の時代よりもシンドク王の時代に王権が強化されたことを指摘した[Barrett Jones 1984: 62-65, 80]。しかし、その王権強化は単純に右肩上がりのもではなかった。9世紀半ばに即位したカユワンギ王の統治は29年にも及んだ。しかしその末期は王家内での争いがあり、王権の衰退期であったといえる。ワヌア・トゥング III 刻文によると、その後の諸王の在位は短く、王の不在時期もあった。バリトゥン王の王権強化の背景にはこのような王権衰退があった。バリトゥン王の時代には、中部ジャワだけでなく東部にまで力を及ぼすことができるようになった。しかし、バリトゥン王の退位後、王権はそれほど強いものではなかった印象を受ける。そしてシンドク王が東部で統治をはじめ、再び王権が強化された。

では、実際に古代ジャワ社会において王とはどのような存在であったのか。王権のあり方を含め、古代ジャワ社会を説明するために、いくつかの国家モデルが用いられる。クリスティ[1986]は以下のモデルを検討している。「多数クラトン説」、「マンダラ論」、「劇場国家論」、「分節国家論」である。これらのモデルは考察の対象となる時期や地域がそれぞれ異なっている。まず「多数クラトン説」は中部ジャワ時代の王権のあり方を論じたもので、ナールスンによって提唱された。彼は、中部ジャワ時代では、ひとつの王朝が中部ジャワのような広大な領域に対して中央集権化された行政機構を持って統治していたということを想像するのは難しく、クラトン（王宮）を持つ複数の統治者が存在したと指摘する[Naerssen 1977: 39]。次に、ウォルタースによって提示された「マンダラ論」である。マンダラ論は東南アジアの前近代の国家のあり方・王権を論じたものである。一人の権力者（統治者）の力が及ぶ範囲（権力範囲）をマンダラと呼び、そのマンダラには明確な境界線は

なく、他のマンダラと重なり合っていた。マンダラの大きさはその統治者の個人的な力によるところが大きく、常にマンダラの周辺の状況を把握し周辺の有力者を彼のネットワークに組み込む必要があった [Wolters 1999: 27-31]。続いて「劇場国家論」である。劇場国家論は 19 世紀のバリについて、ギアツが論じた国家構造の概念である。国は概して、その周囲によってではなく、その中心によって定義される。ヌガラ（スガラ）の統治者の神性は儀礼によって演出され、土地や民衆への象徴的な所有権以上のものを統治者に与えない [Geertz 1980: 102-109, 123-131]。最後に、シュタインの「分節国家論」である。元々は、東アフリカのアルル社会研究に基づくサウソールの分節国家論が 1956 年に提出され、1977 年にシュタインがこれを南インド古代・中世諸国家に適用した [辛島 1999: 293]。この分節国家とは、「内部が政治的に統一された自立集団が多数存在し、それらは全体に対するセグメント（分節）をなし、全体として政治的には統一されないが、中心的集団の長（王）によって宗教儀礼的に統一される。全体的統一の構造はピラミッド型をなし、各集団がそれ自体として全体に対応する」 [辛島 1999: 293]。

クリスティは、これらの国家モデルに対し、刻文資料から考察を行っている [Christie 1986]。結論として、初期ジャワ（8～13 世紀）の場合、検討中のモデルのいくつかを完全に捨て去るのは早急であるかもしれないが、どれも全体として受け入れられないとする [Christie 1986: 84-85]。クリスティは、初期中部ジャワの国は決して完全には集権化されていなかったようであるが、その力はナールスンの「多数クラトン」モデルが示唆するように分散されたものではなかったと指摘する [Christie 1983: 24]。その根拠として、8 世紀後半から 9 世紀初期の中部ジャワの低地での多くの寺院建立を挙げ、これらの初期の寺院は限られた領域の取るに足らない統治者たちによるものではなく、長期にわたってまさに実質的に社会的な余剰を支配するに十分なコントロールを持っていた国によるものであったとしている [Christie 1983: 24]。またクリスティは中央の権威は完全には中央集権化されていなかったが、劇場国家論や分節国家論が提示するような、純粹に儀礼的なものではなく、世俗的なものであり、その国の構造はマンダラ論で予見されたものよりも複雑であった（国の地位システム、税徴収システム、村々の経済的儀礼的結びつきなど）と指摘している [Christie 1986: 71-74, 85]。

上記のクリスティの指摘を検討するために、まず、本稿の対象時期である 9～10 世紀前半のジャワ社会の税システムについてみる。王の不在期間を経た後、刻文の内容は 9 世紀と変わらず、シーマ定立が主である。王の不在期間の社会については、史料の不足から推測になるが、王がいなくとも、地方領主たちによってそれぞれの地域が統治されていたと考えられる。ラクルヤン（ラクルヤン）は王と村々との間の唯一の行政レベルであり [Casparis 1986: 51, 56-59; Christie 1986: 70]、王の不在期間においても村々とのつながりを維持していたはずである。さらに、村々はそれぞれラーマたちによって運営されており、自立可能であった。村人たち（あるいは村）は村の彼らの土地の所有権を持ち、王や領主はそれらの土地に権利を持つてはいなかった。また、王の不在期間の後の、バリトゥン王の刻文では、従来通り、高官

たちが列挙され、村々はワトゥクに属していた。そしてこれらの刻文は、それ以前のシーマ定立の内容と変わらない。バリトゥン王が即位する以前にシーマの規定や習慣がその地域に存続していたことが示唆される。また徴税の権利はもともと領主であるラクルヤンたちが持っていた権利であり [Christie 1983: 20; 1986: 71]、王がいなくてもラクルヤンやパムガトなどの領主によって徴税システムが維持されていたと考えられる。カユワング王時代に原野が水田となることで農業生産が一部拡大し、国の生産基盤は以前より強固になったと考えられるが、その基盤は村やそれを統治する領主によって維持され、王権の生産への重要性（介入）は小さかった。このような基盤の堅固な徴税システムがあり、その上に王の統治が成り立っていた（村からラクルヤンやパムガトら領主が税を集めるというシステムの上に王の徴税システムがあった）。徴税システムにおける王権の役割はそれほど大きいものではなかったが、王にある程度の力がなければ、バリトゥン王が行ったように、徴税システムに新たな規定（交易・生産規定）を組み込むことは成し遂げられなかったと考えられる。

また、9世紀半ばから地方領主であるラクルヤンやパムガトが王宮に組み込まれ、刻文には彼らのリストが記される。そして彼らの称号が次第に何らかの地位や役職名を表すようになる。少なくとも10世紀頃に、官僚制とは言えないまでも、中央の高官制度が次第に形成されてきたように見える。これらの地方領主を高官とし自らの統治に組み込むことは、マンダラ論で提示されたような他の統治者を自らのネットワークに組み込むための手段（任官式）であったとも捉えることができる。

クリスティは、中部ジャワの税システムの基盤は堅固なものであり、マンダラ論で描かれるよりも、マタラムは中央集権化されていたと指摘する[Christie 1986: 71]。しかし、ウォルタースはクリスティの議論に対して、税徴収は政府の一般的な機能であり、また初期ジャワの二つの特徴、つまり「王朝」システムとは異なる手段による王位の継承と比較的流動性のある政治的中心はマンダラの特徴であると指摘した[Wolters 1999: 138]。確かに、9世紀から10世紀前半においては、上で指摘したように、ジャワの王権はある家系内で連綿と継承されるものではなく、政治的中心も王によって異なっていた。また、先に述べた地方領主を王宮の高官とすることは、マンダラ論で提示されたような、他の統治者を自らのネットワークに組み込むための手段であったともいえるだろう。しかしながら、マンダラ論で指摘される王の宗教的側面、例えば、王を他と差別化する王都での儀礼や、シヴァの権威に基づいた師としての王[Wolters 1999: 29-31]は、中部ジャワ時代には確認できない。また分節国家論や劇場国家論の核となる民衆を中央に統制する儀礼は、刻文には記されない。寺院で行われる儀礼に王が援助を行ったことは刻文に記されるが、その儀礼が国家的な儀礼であるかどうかは明らかではない。寺院への寄進やシーマ定立の恩恵は王の宗教的権威を高めたであろうが、王を神聖視し儀礼的に統制していた証拠は見られない¹⁴¹。むしろ、王

¹⁴¹ 刻文には「～に埋葬された聖なるもの sang hyang lumah i ...」という記述があり、死後に王が神格化されていたことは確認できるが、生前に王が神格化されていた証拠はない。た

の統治は税徴収を基盤とし、公共事業的性格を持つ王の恩恵に基づいて、政治的に統制されていた。

ピカタン時代に建立が開始されたと考えられるプランバナナ寺院などの巨大建造物の建立は、クリスティが指摘するように、たしかに強力な王でなければ成し遂げられなかったであろう。しかし、その集権化の度合いは王個人の力に拠っていたのではないか。つまり、マタラムという国は王や高官・領主たちによって維持されていたが、その中心にある王権の強さは王個人の力に基づいていた。前章でみてきたように、王はシーマ定立などの手段によって経済的・宗教的恩恵を民衆や領主／高官に与えた。カユワンギやバリトゥン王は、中部ジャワ時代の諸王の中でも特に有力な王であったと考えられる。しかし、彼らの後に王位に就いた者たちはその権力を引き継いではいなかった。カユワンギの場合、彼の後に即位したのは、ディア・タグワスである。彼はラクルヤン称号を持っておらず、彼自身の領地を持っていなかったと推測できる。ラクルヤン称号を持っていない彼が王位に就くことができたのは、彼がカユワンギに近い存在であったから、つまりその血筋のためかもしれない。刻文からは判断できないが、何らかの王位継承のシステムがあった可能性がある。しかし、ディア・タグワスは 9 か月足らずで王位を退き、パヌムワンガンのラクルヤン称号を持つディア・デーウェンドラが即位している。そしてデーウェンドラも 2 年足らずで王宮を追われるが、その後も王を名乗っていた。その次に王位についた人物は王宮から逃げ、「世界の統治者がいない」時代があった。その後、ラケ・ワトゥフマランが即位し、4 年足らずの間、統治を行ったが、彼の名がみえる刻文で彼は大王ではなく王であり、権力はそれほど強いものではなかった。カユワンギの死後には、王宮内、国内で政治的に不安定な状況が続き、群雄割拠の状態であったと考えられる。一方で、バリトゥン王の場合、彼の死後に即位したのは彼の下で高官であったダクシャであった。ダクシャ王は、バリトゥン王と同じくサンジャヤにその正統性（権力）を求めたようで、新たなサンジャヤ暦を作り出した。しかし、ダクシャ王の後に即位したトゥロドンはダクシャ王の高官にその名が見えず、またサンジャヤ暦も採用しておらず、ダクシャ王とのつながりは見られない。さらに 921 年のトゥロドン王の刻文から、928 年のワワ王の刻文までに、マタラムの地がどのような状況にあったのかは定かではない。924 年と 927 年の刻文にはワギーシュワラという名の王が記される。彼については詳細がわからないが、おそらく中部ジャワのある地域に力を持っていた人物であると推測できる。彼は刻文が出された時点ですでに亡くなっていた可能性もあるが、その場合、これらの刻文には当時の王に関する記述はなく、この地域で王として認められた人物がいなかったことを示唆する。また、ワワ王に関しても、彼の父は森に埋葬されており、戦いの中から王位に就いたと推測できる。トゥロドン王以後のマタラムは政治的に安定していなかったと考えられる。

だし、バリトゥン王の称号には神格名が含まれ、王が神聖性を持つ者として記されるようになった。このように、刻文には 9 世紀末から 10 世紀初期に王を神聖視するような記述がみられるが、実際に、この時代の王が神格化されていたとは断言できない。

また、それぞれの王の政治的中心は全く同じ場所にあったわけではなかった。カユワンギ王の政治的中心はプランバナ地域にあったが、バリトゥン王のそれはクドゥ地域であった。他の諸王の権力中心がどこにあったのかは明確ではないが、少なくとも、この二人の王の中心、その権力基盤となる地域は異なっている。このことは、王たちがそれぞれの権力基盤の土地を中心に統治を行い、その支配（の拡大）は土地を掌握するのではなく、それぞれの領地を監督する領主たちを自らの権力下に取り込み、従属させるものであったと考えられる。つまり、王となるのはそれら領主を自らの支配下に置くことができた有力な人物であったといえる。彼らの権力基盤はその血筋（王統）にあるのではなく、他の有力者を従える力にあった。

王位の継承が血縁関係ではなく力によるものであったと考えられる根拠の一つは、バリトゥン王やダクシャ王のサンジャヤに対する態度である。前章で述べたように、バリトゥン王はサンジャヤに、彼の王位の正統性を求めている。しかし、彼のどの刻文も、彼とサンジャヤの血縁関係（あるいはその他の関係性）については全く記していない。たとえ、実際に彼らの間に血縁関係がなかったとしても、自らの正統性を強く主張するのであれば、彼にとって偉大な王であるサンジャヤに連なる系譜を作成したほうがより効果的ではないだろうか。しかし、バリトゥン王はサンジャヤたち歴代の諸王の名あるいは称号名を列挙した後に、彼らとの血縁関係を述べることも、自らの力が彼らより強かったと記すことを選んだ。そして、サンジャヤ暦を作り出したダクシャ王も、サンジャヤとの血縁関係を述べることはない。

当時のジャワ社会では、マタラムの地（国）という地域概念が存在し、おそらくその地域のラクルヤンなどの領主たちに認識されていた。その地域で有力な者が王として認められ、彼の王宮がマタラムの中心として捉えられた^{142・143}。それは、王によってその政治的中心が異なることから支持されるだろう。これらの王位に就く者の選定は、例えば、有力な領主らによる合議制によって決定されていたのかもしれない。史料では、領主あるいは高官たちによる合議の場があったことを示す記述はみられない。しかし、王たちがマタラムという地域概念を共有し、また異なる王宮でも同じ人物が高官として記されることから、領主らの連合体が存在していた可能性がある¹⁴⁴。

以上のことから、9世紀から10世紀初めは、王権を強固に保持する国家としてのシステム（官僚制、王権継承システム）は未だ脆弱なものであったと思われる。王は領主たちの

¹⁴² 「マタラムの王宮」という語はシーマ定立の規定に反する者への呪詛で記される「マタラムの王宮を守ることで知られる」という文言でのみ登場する。この文言は王による恩恵や命令の刻文にのみ記される。

¹⁴³ ナールスンの多数クラトン説とは異なり、本稿ではクラトンつまり王宮は一つしか存在せず、王位に就いた者の政治的中心を意図している。

¹⁴⁴ 深見は、王たちが自らの系譜を語らない理由として、「一つの可能性は、統一権力が形成されたとはいっても、それはいわばラカイ連合政権であって、緊密な上下関係はいまだ形成されておらず、その時々最有力者のラカイが王位についたことである」と指摘している[深見 2001b: 302]。

中の有力者ではあったが、王の力が弱ければ、その統治下に入らず自立した領主もいた。王の力が強ければ、王は大王を名乗り、高官を従え、さまざまな寺院や僧院に恩恵を与えることができた。カユワンギ王、バリトゥン王は有力な王であり、巧みにラクルヤンたち領主を統制し、王権を行使していた。前章でみたように、カユワンギ王やバリトゥン王は高官や民衆をその統治に組み込むために動いていた。特にバリトゥン王の統治期は有力な者たちの中の第1人者としての権威を確実にするための王権強化の段階ともいえるだろう。しかしながら、バリトゥン王以後も、10世紀初めにおいては依然として有力な者たちが存在していた。ナールスンは、バリトゥン王が主導権を得る以前だけでなく、証拠はあまりにもないが、ヒンドゥー・ジャワ時代全体においても、他の統治者の政治的力を我々は過少評価すべきでないと指摘している[Naerssen 1977: 39]。

まとめると、中部ジャワ時代は徴税システムが基盤となって領主や王を経済的に支えていたが、これはもともと領主による徴税システムを土台とし、これに王の徴税システムが組み込まれた。王は経済的あるいは宗教的な恩恵を領主や民衆に与えることで、自らの権威を高めていった。そして、王は従来単一王朝説や二王朝説などで考えられていたような、王朝（王統）に属していたのではなく、領主たちの中で有力な者が王となって統治していたと結論づけられる。

おわりに

本稿では、中部ジャワ時代の諸王を王朝に収斂して語る先行研究に対して、当時の社会における王のあり方を議論するために王朝を中心に考える必要はなく、むしろ刻文の記述から当時の王の統治や彼を取り巻く社会状況、社会構造を読み解くことで、当時の社会における王（王権）の在り方を明らかにすることを目指した。

まず第 1 章において、先行研究、史料となる刻文の性質・内容について概観した。第 2 章では、刻文史料に基づいた、当時のジャワの社会構造の大枠の把握を目指し、中部ジャワ時代の社会における王、領主／高官、民衆（村人）、そして寺院について明らかにした。刻文に基づく、王や高官がいる王宮と、高官ら地方領主のワトゥク、それに属す村々という三つの領域がみえてくる。王や高官たちを村と結び付けていたのは、税や賦役、そして寺院（宗教）であった。稀に、王や高官に対する村人からの請願も刻文には記されるが、これらも土地の測量、ひいては税に関係していた。一方で、地方領主と彼の領地である村とのつながりは、税や賦役、寺院だけでなく、地方領主による住民たちの問題解決があった。続く第 3 章では、シーマ定立について、その内容、それに伴う規定、経済的政治的意義について分析し、王の統治にとってのシーマ定立の重要性を考察した。王にとってシーマ定立は、王の宗教的地位を高めるだけでなく、高官／領主や寺院を制御するため、民衆に経済的・宗教的な恩恵（交易の活発化、公共事業や救済など）を与えるためなど、様々な目的を遂行するための手段であったことを明らかにした。シーマ定立によって、村はしばしば寺院や王宮と結びつけられた。そして第 4 章では、ワヌア・トゥンガ III 刻文に記された王を中心に、特に刻文の数が多いカユワンギ王時代、バリトゥン王時代に焦点をあて、中部ジャワ時代の王の統治を考察した。カユワンギ王以前には、ワヌア・トゥンガ III 刻文で記された諸王以外にも、有力者が存在し、それぞれの領域で権威を揮っていた。カユワンギ王時代から、徐々に王権が強化され、地方の有力者たちが統治に組み込まれた。しかし、カユワンギ王統治の晩年には、王家内での争いがあったことが示唆され、カユワンギ王が退位した数年後には「王位の空白期」があった。そしてバリトゥン王時代に入っても、依然として王権を強化する必要があり、彼は様々な手段を用いて、王権を強化していった。バリトゥン王に続くダクシャは、バリトゥン王からその王位を平和裏に継承した。しかし、ダクシャの次に王として刻文に名が記されるトゥロドン王は、ダクシャの王宮から出た王ではなく、ダクシャとトゥロドンの連続性は低い。トゥロドン王以降の状況は不明な点が多いが、高官の記述がない、ワギーシュワラという（おそらくすでに死去した）王の刻文が発布され、また次に王として名の記されるワワの即位が戦いによって勝ち取られた可能性があることから、この時代も王権の不安定な状態であったことが示唆される。しかし、呪詛の文言の使用を見るに、カユワンギ、バリトゥン、ダクシャ、ワワ、シンドクの諸王たちはマタラムという国を統治しているとの共通の認識を持っていたといえる。そして第 4 章では、王位の継承は、血縁によるものではなく、王自らの力に基づいていたのではないかという仮説が導き出された。

続く第 5 章では、現在までに議論された国家モデルを取り上げながら、中部ジャワ時代の王とはどのような存在であったのか、中部ジャワ時代の王（王権）について考察した。クリスティは、「多数クラトン説」や「マンダラ論」などの国家モデルのどれも、初期のジャワ（8 世紀から 13 世紀頃）には当てはまらないと結論づけた。しかし、前章でみたように、確固たる王位継承システムの不在、王の中心地の移動はマンダラ論の指摘する王のあり方に近い。ただし、王を神聖視し儀礼的に統制していた証拠は見られず、むしろ、王の統治は税徴収を基盤とし、公共事業的性格を持つ王の恩恵に基づいて、政治的に統制されていた。

本稿で考察したように、中部ジャワ時代の王の資質はその血縁にあるのではなく、実力あるいは他の有力者を服従させる力にあった。かくして、カユワンギ、バリトゥン、シンドクといった有能な王は支配（中央権力）を安定させ強化することができたが、それは一代限りあるいはせいぜい二代（バリトゥンとダクシャ）限りであった。そして、王は従来単一王朝説や二王朝説で考えられていたように、王朝（王統）に属していたのではなく、領主たちの中で有力な者が王となって統治していた。もしかすれば、その王の選定は、有力な領主たちによる合議制のようなシステムによって行われていたのかもしれない。

本稿で対象とした時代は、史料の偏りにより、当時の統治形態や王権の継承、王権と宗教の関わりについて、明確に論じることができなかった。確かに、美術に目を向ければ、仏教（大乘）の仏やヒンドゥー教神の彫像、その他の宗教的な品が制作され、おそらく寺院に寄進されていたことがわかる。これらの品には、稀ではあるが、刻文（制作年代、寄進者など）を記すこともある。しかし、多くが制作年代は不明である。そのため、時期ごと（王の統治ごと）の宗教の遷移、あるいは仏教とヒンドゥー教への信仰の比重を知ることが難しい。このことは宗教建造物についても同様で、現存する建造物の正確な年代は特定できていない。これらの建造物から、当時に仏教、ヒンドゥー教が篤く信仰されていたと知ることができるが、王や民衆の信仰がどのようなものであったのかは不鮮明である。これら二つの宗教以外に信奉されていた土着の信仰があったかもしれない。

このように、今回の対象とした時代には、史料の制限が多く、本稿で論じたことも一つの仮説にすぎない。しかし、今後の刻文の新たな発見により、これまで語ることのできなかったことを語ることができるかもしれない。例えば、ワヌア・トゥンガ III 刻文の発見は、それまでの議論に再考を促した。新たな刻文の発見は稀なことではあるが、2015 年にはカユワンギ時代の刻文が新たに発見されている[Liputan6.com, Yogyakarta. 2015]。残念ながら、内容については公開されておらず、本稿では考察の対象に入れることができなかったが、このような新たな刻文の発見によって、それまでの歴史叙述が常に再考され、より事実に近い、充実したものになっていくことを望む。

参考資料 1 シーマ定立を記す刻文の内容構成（ルカム Rukam 刻文を例に）¹⁴⁵

項目 1. 日付

[1: 1]// swasti śakawarṣātīta 829 kārttika māsa tithi¹⁴⁶ daśami śuklapakṣa ma pa so wāra śatabhīṣa¹⁴⁷
nakṣatra baruṇa dewata wṛddhiyoga.

シャカ暦 829 年、カールティカ月第 10 日白分、マウル（六曜の日）、パヒン（五曜の日）、
ソーマ（七曜の日）、シャタビーサ（月宿）、バルナ神¹⁴⁸、月宿 11 番目のヨーガ。

項目 2. シーマを定立した者・項目 3. シーマ定立の理由、シーマからの利益を得る寺院

[1: 1]tatkāla ajña śrī¹⁴⁹ mahārāja rake watukura dyaḥ balitung śrī ḍarmmodaya mahāśambhu¹⁵⁰
ming[2]sor i mahāmantrī śrī dakṣottamabāhubajra pratipakṣakṣaya kumonnakan ikanang wanua i
rukam wanua i dro sangkā¹⁵¹ yan hilang dening guntur sīmān rakryān sañjīwana nini haji maṇasīa i
dharmmanira i limwung muang pagawa[3]yana kamulān

その時、大王ラケ¹⁵²・ワトゥクラ¹⁵³であるディア・バリトゥン、シュリー・ダルモダヤマ
ハーシャンプ¹⁵⁴の命令が大臣であるシュリー・ダクソタマバーフバジュラ・プラティパク
シャクシャヤ¹⁵⁵に下り、ワヌア・イ・ジュロ¹⁵⁶であるルカムの村が土石流¹⁵⁷によって消え

¹⁴⁵ 山崎美保（2016）「ルカム Rukam 刻文の転写と翻訳」から転写・翻訳を抜粋し、体裁の変更、一部に修正を加えている。

¹⁴⁶ TPB では「tithi」とする[Titi 1982: 23]。

¹⁴⁷ TPB では「śatabhīṣa」とする[Titi 1982: 23]。

¹⁴⁸ ヒンドゥー教の神であるヴァルナ Varuṇa 神（水、海の神）のことである。

¹⁴⁹ TPB では「śrī」とする[Titi 1982: 23]。

¹⁵⁰ TPB では「mahāśambhu」だが[Titi 1982: 23]、明らかに「sa」ではなく「śa」の文字である。

¹⁵¹ TPB では「sangka」であるが[Titi 1982: 23]、「ka」の文字には長母音の記号が確認できる。

¹⁵² ワトゥク（支配領域）を統治する領主。王や高官はこの称号を冠する。ラケの異形として、ラクルヤーン rakryān やラカイ rakai などがある。

¹⁵³ ラケ称号に続く語はワトゥク名と考えられる。

¹⁵⁴ バリトゥン王の称号のひとつである。いくつかの刻文で、名前に続くバリトゥンの称号は異なっている。

¹⁵⁵ 「dakṣottamabāhubajra」は「dakṣa（ダクシャ：個人名）」、「uttama（高位・最高の）」、「bāhu（腕）」、「bajra（雷・金剛杵）」からなる。「pratipakṣakṣaya」は良くわからないが「pratipakṣa（敵）」に由来する語と考えられる。ダクシャはバリトゥン王の次に即位した王であり、バリトゥン王の刻文では、常にこの称号を冠している。

¹⁵⁶ 原文では「wanua i dro」であるが、「wanua i jro（＝王宮に属する集団）」と考えられる。「wanua」は「村、居住地」の他に「（人々の）集団」を意味する。

¹⁵⁷ 「guntur」は「（火山噴火による、石や溶岩を伴う）洪水・雷鳴を伴う山の激流」を意味する。この刻文に記された「guntur」が噴火によるものかどうかは、刻文の記述からは不明であるが、TPB では「山の噴火」としている[Titi 1982: 36]。

たために、王の祖母であるラクルヤーン・サンジーワナのシーマとされ、リムウンの彼女のダルマ¹⁵⁸に贈られ、そしてカムラーン¹⁵⁹を作るように命じた。

項目 4. シーマに関する記述

[1: 3]paṅguḥhanya pirak dhā 5 pilih mas mā 5 marā ing parhyaṇan i limwung buñchang hajyanya umiwiw i kanang kamulān samahala ya sarabhāra iriya ring samahala kabaiḥ

その収入¹⁶⁰は銀 5 ダー、金 5 マーであり、リムウンのパルヒャガンのためである。その王への義務は農民がカムラーンを世話することであり、すべての農民に（その役割を）任せた。

項目 5. シーマ定立によって生じるいくつかの結果、権利や義務

[1: 3]parṇaḥhanya tan katamana deni [4]saprakāra ri ni mañilala dṛbya haji kring paḍam mangrumbe paranakan tapahaji airhaji mañhuri tuha dagang manimpiki limus galuḥ rataji pañaruhan kataṅgaran pinilai mapadahi mañidung hulunhaji ityewamādi sabra[5]kora¹⁶¹ ning mañilala kabaiḥ tan deyan tumamā iri ya bhaṭāra i parhyaṇan i limwung atah pramāṇā iri ya sowāra¹⁶² ni sukhadukhanya kabaiḥ

その場所は王の徴税者¹⁶³、クリン¹⁶⁴、パダム¹⁶⁵、マンルンベ¹⁶⁶、パラナカン¹⁶⁷、タパ・ハジ¹⁶⁸、アイル・ハジ¹⁶⁹、マンフリ¹⁷⁰、商業の長、指物師¹⁷¹、金細工師¹⁷²、ラタジ¹⁷³、金職

¹⁵⁸ 古代ジャワでは宗教的建造物を指す。しばしば「dharma」と表記される。

¹⁵⁹ 宗教建造物の一種である。ズットムルデルは「起源の寺院（祭壇）」とする[Zoetmulder 1982: 1158]。TPB では、ストウッテルヘイムの説を取り上げ、カムラーンは安全を守る者に充てられた建物つまり一種の詰所である可能性を指摘している[Titi 1982: 48.n.109]。

¹⁶⁰ しばしば「費用」と訳されるが、「paṅguḥan」（この刻文では「h」を二つ重ねている）の基語である「paṅguḥ」は呪詛の箇所では「受ける、被る」を意味し、ズットムルデルの解釈の通り[Zoetmulder 1982: 1259]、「paṅguḥan」は「収入、収益」を意味する。

¹⁶¹ 「saprakāra」が一般的である。TPB では「saprakāra」と読むが[Titi 1982: 23]、「p」の文字は明らかに「b」である。「kā」については、写真が不鮮明であるが、文字の左側に母音「o」を示す記号が見えるため、「kā」ではなく「ko」と読める。

¹⁶² TPB は「sowara」とするが、明らかに長母音「ā」を示す記号がある[Titi 1982: 23]。

¹⁶³ ジョーンズは、領主（王やラケ）の収入を徴収する者とし、これらの税を徴収するために王やラケの許可を得ていたとする[Jones 1984: 25,138]。クリスティは王の税を徴収する者としている[Christie 1983: 18]。

¹⁶⁴ 王の徴税者のリストにしばしば列挙されるが、その詳細は不明である。

¹⁶⁵ 「paḍham apuy 火を消す」として記載されることも多い。「火消し」を意味するか[Zoetmulder 1982: 1228]。

¹⁶⁶ 「儀礼をおこない、祈る職能の者」、「花屋や彫刻師」などの解釈がある[Titi 1982: 49.n.114]。

¹⁶⁷ ジョーンズは、「混血の生まれ」とする[Jones 1984: 148]。

¹⁶⁸ 王の徴税者のリストにしばしば列挙されるが、その詳細は不明である。

人¹⁷⁴、カタンガラ¹⁷⁵、ピニライ¹⁷⁶、ドラム奏者、歌い手、王の召使などによって入られることはない。それらすべてのマンガラ¹⁷⁷はそこに入ってはならない。リムウンのパルヒャガンの神のみがその喜びと悲しみのすべてに権利を持つ。

項目 6. 高官や役人、近隣の村からの証人への贈り物のリスト

[1: 5] maṇasēakan sira pasak pasak sabyawasthā¹⁷⁸ ning manusuk śīma i rakryān mapatiḥ i hi[6]no śrī dakṣottamabāhubajra pratipakṣakṣaya wḍihan gañjar pātra yu 1 mas pagēḥ su 1 mā 4 rakryān ni halu pu wīrawikrama¹⁷⁹ rakryān ni sirikan pu wariga pu samarawikrānta rakryān ni wka pu kutak kapua inangsēan pa[7]sak wḍihan kalyāga yu 1 mas su¹⁸⁰ 1 sowang sowang

彼らはシーマ定立の規則によって、贈り物を（以下のように）贈った。マパティ¹⁸¹であるヒノのラクルヤーン（つまり）シュリー・ダクソタマバーフバジュラプラティパクシヤクシヤにガンジャル・パートラ¹⁸²の服 1 対、（ある種の¹⁸³）金 1 ス 4 マーを（贈り）、ハルのラクルヤーンであるプ・ウィーラウィクラマ、シリカンのラクルヤーンであるプ・ワリガ、プ・サマラウィクランタ、ウカのラクルヤーンであるプ・クタク、（彼ら）すべてが、贈り物（である）カルヤーガの服 1 対、金 1 スをそれぞれ贈られた（中略）。

¹⁶⁹ 「王の水」を意味するが、詳細はわかっていない。

¹⁷⁰ 書記の職務を行う宮廷の役人である[Zoetmulder 1982: 1111]。

¹⁷¹ [Zoetmulder 1982: 1103][Jones 1984: 147]。

¹⁷² [Titi 1982: 49.n.115][Jones 1984: 147]。

¹⁷³ 王の徴税者のリストにしばしば列挙されるが、その詳細は不明である。

¹⁷⁴ [Titi 1982: 49.n.117]。

¹⁷⁵ 「tanggara 建物の一部（はしご?）」に接辞 ka-an が付いた形であるが[Zoetmulder 1982: 1937]、「kataṅgaran」の意味は不明である。

¹⁷⁶ しばしば「kataṅgaran」の前後に記されるが、詳細はわかっていない[Zoetmulder 1982: 1361]。

¹⁷⁷ 上述の王の徴税者であるマンガラ・ドウルウィア・ハジを指している。

¹⁷⁸ TPB では「sabyawastha」と読むが[Titi 1982: 23]、「stha」の「a」は長母音の記号が確認できる。

¹⁷⁹ TPB では「wirawikrama」と読むが[Titi 1982: 23]、最初の「wi」は長母音「ī」の記号が確認できる。

¹⁸⁰ TPB では「sū」と読むが[Titi 1982: 23]、「u」の記号は確認できるが「ū」の記号は確認できない。

¹⁸¹ 「mapatiḥ」は王宮の高官を指す。

¹⁸² 服の種類と考えられるが、詳細はわかっていない。「gañjar」は「報酬・褒賞」、「pātra」は「飲用の器・適した、価値ある器」などを意味する。「pātra」はしばしば「patra」とも記される。「patra」には「羽・葉」の意味がある。

¹⁸³ 「pagēḥ」は「安定」を意味する[Zoetmulder 1982: 1230]が、ここでの意味は不明である。金の種類を指すか。TPB はストウツテルヘイムの解釈を採用し、「mas pagēḥ」を「純金」と訳している[Titi 1982: 49.n.118]。

項目 7. 定立に伴う儀式の記述（供物のリスト）

[2: 3]saji ning manusuk sīma wḍihan sang hyang brahmā yu 1 mas mā 1 wḍihan sang hyang kulumpang yu 4 mas mā 4 （中略）[6]i sampun nikāṅ¹⁸⁴ saji kabaiḥ sangsipta humaḍang masamoha

シーマの定立のための供物はサン・ヒャン・ブラフマー（火の神）の（ための）服 1 対、金 1 マー、サン・ヒャン・クルンパン¹⁸⁵の（ための）服 4 対、金 4 マー（中略）。すべての供物が遅れることなく準備された後、（人々は）集まった。

項目 8. 共食を伴う宴会

[2: 6]sang wahuta hyang kudur muang rowang rakryān mapatiḥ [7]sang pañurang muang wahuta patiḥ muang rāma tpi siring muang rāmanta reṇanta sang sinusuk kabaiḥ grāma wiku kapua winaiḥ manaḍaḥha irikāṅ paglaran lwir ning tinaḍaḥ skul paripūrṇa timan matu[8]mpuk tumpuk harang harang ḍeng kakap kaḍiwas¹⁸⁶ ikan ḍuri ḍeng haṅang （中略）[9]ma[10]ṅkanang ininum twak siddhū ciñca

サン・ワフタ・ヒャン・クドウルとラクルヤーン・マパティの従者であるサン・パングラ、そしてワフタ・パティ¹⁸⁷と近隣のラーマ、そしてラーマンタ¹⁸⁸、ラーマンタの妻、定立された（その村のもの）すべて、住人、僧、すべてが広場で（料理を）与えられ食事をした。食べられたものは、すべてのご飯、料理されたものがたくさんあり¹⁸⁹、ハラン¹⁹⁰、カカプ（魚）の干物、カディワス（魚）ドゥリ（という名の？）魚、塩漬けされていない肉（中略）、そしてまた、飲まれた（物）、ヤシ酒、蒸留酒、チンチャ¹⁹¹。

項目 7. 定立に伴う儀式の記述（儀礼）

[2: 10]i sampun ning manaḍaḥ mapaṇaliḥ majnu makamwang irikang na sampun tabēḥ nēm ing rahina umaṅkat¹⁹² sira kabaiḥ maluṅguḥ ring lmaḥ makuliliṇan ing natar humarappakan sang

¹⁸⁴ TPB では「nikang」と読むが[Titi 1982: 25]、「ka」の文字には長母音記号が確認できる。

¹⁸⁵ 定立の際に建てられる神聖な石。あるいはそれに宿る精霊を指すか。ギリカン Gilikan I 刻文では「hyang kulumpang」が精霊として述べられている。

¹⁸⁶ TPB では「kadiwas」と読むが[Titi 1982: 25]、「d」は「ḍ」である。

¹⁸⁷ 王が村に派遣した役人と考えられる[Christie 1983: 14, Casparis 1986: 55]。

¹⁸⁸ 宗教的繋がりのあるラーマ（村の長）[Casparis 1986: 63.n.11]。

¹⁸⁹ 「matumpuk」は「tumpuk 大量、たくさん」からの言葉であり、「多くある」ことをさすと考えられるが、「timan」については不明である。TPB では、これらを「料理されたものが沢山ある」という意味で解している[Titi 1982: 51.n.133]。

¹⁹⁰ ブットムルデルは「木炭に準備された食べ物」とする[Zoetmulder 1982: 591]。

¹⁹¹ サンスクリット語「ciñcā」は「タマリンド」のことである[Zoetmulder 1982: 329]。

¹⁹² TPB においても指摘されているが、他の「u」の文字と比較すると、「da」の文字に近い

[11]hyang wuñkal sīma muang kulumpang i sor ning witāna lumēkas sang makudur mamangmang manumpaḥ manapatai manētēk hayam amantiñakan hantrini¹⁹³ ing watu sima mañirakan hawu

食べ終わった後に、パンガリを着て、化粧をし、花をつけた。昼の 6 時（現在の昼 3 時¹⁹⁴）になり、彼らは皆、移動し、地面に座り、（その）場所で円になる。天蓋の下のサン・ヒヤン・ウンカル・シーマ（神聖なシーマの石）¹⁹⁵とクルンパンに対面した。サン・マクドゥルは呪いを唱え始めた。呪詛を発し、鶏を切り、シーマの石に卵を投げつけ、灰を撒いた（中略）。

項目 9. シーマの決定に反する者への呪詛

[2: 12]ikana ling nira īndaḥ bhaṭāra i baprakeśwara brahmā wiṣṇu mahādewa

その言葉は、聞きたまえ、バブラケーシュワラ¹⁹⁶、ブラフマー神、ウィシュヌ神、マハーデーワ神¹⁹⁷、（以下略、参考資料 2 にて呪詛の全文を挙げている）。

[Titi 1982: 27.n.18]。「damañkat」では意味が取れないため、ここでは「u」と読む。

¹⁹³ TPB では「hantrīṇi」と読むが[Titi 1982: 25]、長母音記号「ī」は確認できず、「ṇ」は「n」の文字である。

¹⁹⁴ 「tabēḥ」では 1 日は昼間の 8 刻と夜間の 8 刻に分かたれる[Titi 1982: 51.n.134] [Zoetmulder 1982: 1892]。そのため昼間の 6 刻は午後 3 時頃に相当する。

¹⁹⁵ シーマの境界を定める際に建てられた石か。

¹⁹⁶ 「聖堂」や「王家の始祖」とする意見もあるが[Stutterheim 1934: 203-204]、刻文の記述からははっきりしない。

¹⁹⁷ シヴァ神を指す。

参考資料 2 シーマ定立の儀式（ルカム刻文を例に）¹⁹⁸

[シーマ定立の供物] [2: 3-6]

[3]saji ning manusuk sīma wḍihan sang hyang brahmā yu 1 mas mā 1 wḍihan sang hyang kulumpang yu 4 mas mā 4 tamwaku[4]r mesi bras 4 wsi ikat 4 wsi wsi prakāra. wadung rimwas patuk patug¹⁹⁹ lukai tampilan liṅgis 4 tataḥ laṇḍuk²⁰⁰ wakyul kris gulumi kurmbhāgi²⁰¹ pamajha²⁰² kampit dom tāmra²⁰³ prakā[5]ra dāng tarai paliwtan padyussan papañjuttan saragi pagañannan saragi inuman pāmassanya mas²⁰⁴ su 2 mā 1 ku 1 wḍus 1 taṇḍas 1 kumol 1 bras paja²⁰⁵ 1 wsi ikat 10 pras li[6]nimaran²⁰⁶ 2²⁰⁷ skul dinyun 5 hayam 4 hantrīṇi 4 pasilih galuh muang pañcopacāra

シーマの定立のための供物はサン・ヒャン・ブラフマー（火の神）の（ための）服 1 対、金 1 マー、サン・ヒャン・クルンパン²⁰⁸の（ための）服 4 対、金 4 マー、米の器、脱穀米の（ための？）鉄²⁰⁹（？）4、鉄 4 イカット（束？）²¹⁰、鉄に属する物、斧、（樵の）斧、つるはし、包丁、タンピラン²¹¹、鉄槌、彫刻刀、鋏、ワックユル²¹²、短剣、股鋏、鉄製の小刀、パマジャ²¹³、カムピット²¹⁴、針、銅に属する物、銅製の壺、銅製の皿、パリウタン²¹⁵、パドゥサン²¹⁶、燭台、野菜の調理のためのなべ、飲みものためのなべ、その合計は金 2

¹⁹⁸ 山崎美保（2016）「ルカム Rukam 刻文の転写と翻訳」から転写・翻訳を抜粋し、体裁の変更、一部に修正を加えている。

¹⁹⁹ 「patuk」か。

²⁰⁰ TPB では「tataḥ」の次に「4」の数字を読み、「laṇḍuk」を読んでいない[Titi 1982: 25]。しかし、明らかに数字の「4」は確認できず、「tataḥ」には「laṇḍuk」が続いている。

²⁰¹ 「kurumbhāgi」が一般的である。TPB では「kurmbhagi」と読む[Titi 1982: 25]。

²⁰² TPB では「pamajhā」と読む[Titi 1982: 25]が、長母音記号は確認できない。

²⁰³ TPB では「tamrā」と読むが[Titi 1982: 25]、長母音記号が確認できるのは「ta」であり、「mra」には確認できない。

²⁰⁴ TPB では読んでいない[Titi 1982: 25]。

²⁰⁵ 「pada」が一般的である。

²⁰⁶ 「pras」は「供え物のための器や料理」を意味し、「linimaran」が「limaran」に由来する言葉であり、モリング（和名：ワサビノキ）の葉の意味を与えられるならば、「pras linimaran」は「モリングの葉で飾られた料理」を意味するか[Titi 1982: 50.n.130]。

²⁰⁷ TPB では「2」を読んでいない[Titi 1982: 25]。

²⁰⁸ 定立の際に建てられる神聖な石。あるいはそれに宿る精霊を指すか。

²⁰⁹ TPB では「mesi bras」を訳出していない[Titi 1982: 39]。

²¹⁰ TPB では「鉄（の硬貨） 4 束」と訳す[Titi 1982: 39]。

²¹¹ 金属製の道具の一種か[Zoetmulder 1982: 1923]。

²¹² 「wakyul 鋏」か[Zoetmulder 1982: 2197]。TPB では「山刀 parang」と訳す[Titi 1982: 39]。

²¹³ TPB では「pamajhā」と読み[Titi 1982: 25]、バリでは樵の道具のひとつであり、木を滑らかにするために使われると述べる[Titi 1982: 50.n.127]。

²¹⁴ 道具、あるいは武器を指すか[Zoetmulder 1982: 786]。

²¹⁵ ご飯を炊く道具、あるいは茹でる道具か[Titi 1982: 50.n.128]。

²¹⁶ 水浴びを意味する「dyus」あるいは「adus（現代ジャワ語）」からの言葉であるが、ここでは水浴びのために使用される道具の一種であると考えられる[Titi 1982: 50.n.129]。

ス、1 マー、1 クである。山羊 1、頭 1、クモル²¹⁷1、脱穀米 1 パダ（?）、鉄（銅?）10 イ
カット（束）、料理（?）の供物 2、壺に入ったご飯 5、鶏 4、卵 4、パシリ・ガル²¹⁸と祈り
のための 5 つの必要品。

[共食に関する記述] [2: 6-10]

[6]i sampun nikāṅg²¹⁹ saji kabaiḥ sangsipta humaḍang masamoha sang wahuta hyang kudur muang
rowang rakryān mapatiḥ [7]sang pañurang muang wahuta patiḥ muang rāma tpi siring muang
rāmanta reṇanta sang sinusuk kabaiḥ grāma wiku kapua winaiḥ manaḍaḥha irikāṅ paglaran lwir
ning tinaḍaḥ skul paripūrṇa timan matu[8]mpuk tumpuk harang harang ḍeng kakap kaḍiwas²²⁰ ikan
ḍuri ḍeng haṅang kawan kawan rumahan layar layar halahala hurang dlag inaring muang hantrīṇi
gtam mañkanang gañan haḍañan sapi[9]wök sukan dinyakan kla kla samenaka hana amwil amwil
ataḥ ataḥ kasyakasyan sañasañān ḍalamman hinaryyasan ginañannan rumwarumwaḥ kulubkulubwan
ḍuḍutan tetis ma[10]ñkanang ininum twak siddhū ciñca

すべての供物が遅れることなく準備された後、（人々は）集まった。サン・ワフタ・ヒヤ
ン・クドゥル（シーマ定立を行う者?）とラクルヤーン・マパティの従者であるサン・パ
ングラン、そしてワフタ・パティ²²¹と近隣のラーマ、そしてラーマンタ²²²、ラーマンタの
妻、定立された（その村の者）すべて、住人、宗教者、すべてが広場で（料理を）与えら
れ食事をした。食べられたものは、すべてのご飯、料理されたものがたくさんあり²²³、ハ
ラン²²⁴、カカップ（魚）の干物、カディワス（魚）ドゥリ（という名の?）魚、塩漬けさ
れていない肉、カワン（魚）、ルマハン（魚?貝?）、ラヤル（貝?）、ハラハラ（おかず?）、
エビ、ドゥラグ（淡水の魚）、焼いた（食べ物）²²⁵、そして卵、カニ、そしてまた、野菜、
水牛、牛、豚、（これらの）好ましいものが（出席者の?）満足のいく料理となった。アン
ウィル（軽食?）、アタアタ²²⁶、カシアン²²⁷、炙った食べ物、内臓、ヒナリヤサン²²⁸があり、

²¹⁷ 家畜か[Zoetmulder 1982: 921]。

²¹⁸ 儀礼に必要なものと考えられるが、詳細は不明である。

²¹⁹ TPB では「nikang」と読むが[Titi 1982: 25]、「ka」の文字には長母音記号が確認できる。

²²⁰ TPB では「kadiwas」と読むが[Titi 1982: 25]、「d」は「ḍ」である。

²²¹ 王が村に派遣した役人と考えられる[Christie 1983: 14, Casparis 1986: 55]。

²²² 宗教的繋がりのあるラーマ（村の長）[Casparis 1986: 63.n.11]。

²²³ 「matumpuk」は「tumpuk 大量、たくさん」からの言葉であり、「多くある」ことをさす
と考えられるが、「timan」については不明である。TPB では、これらを「料理されたものが
沢山ある」という意味で解している[Titi 1982: 51.n.133]。

²²⁴ ブットムルデルは「木炭に準備された食べ物」とする[Zoetmulder 1982: 591]。

²²⁵ 「inaring（焼いた）」が前の単語「dlag（ドゥラグ）」にかかっている可能性もある。

²²⁶ TPB では「生野菜のサラダ」と訳す[Titi 1982: 39]。

²²⁷ 原文の「kasyakasyan」は「kasyan」と考えられる。「kasyan」は特別な方法で準備された
食べ物を指す[Zoetmulder 1982: 819]。

²²⁸ 「haryan（バナナの葉、食べ物が盛られた葉）」と関係するか[Zoetmulder 1982: 599]。

野菜とともに食べ、ルムワ²²⁹、茹でた野菜、ドウドゥタン²³⁰、テティス²³¹、そしてまた、飲まれた（物は）、ヤシ酒、蒸留酒、チンチャ²³²。

[定立の儀礼] [2: 10-12]

[10]i sampun ning manaḍaḥ mapañaliḥ majnu makamwang irikang na sampun tabēḥ nēm ing rahina umañkat²³³ sira kabaiḥ maluṅguḥ ring lmaḥ makuliliñan ing natar humarappakan sang [11]hyang wuñkal sīma muang kulumpang i sor ning witāna lumēkas sang makudur mamangmang manumpaḥ manapatai manētēk hayam amantiñakan hantrini²³⁴ ing watu sima mañirakan hawu i harappan [12]wadwā²³⁵ rakryān mapatiḥ muang rāma sinusuk muang rāma tpi siring kabaiḥ

食べ終わった後に、パンガリを着て、化粧をし、花をつけた。昼の6時（現在の昼3時）になり、彼らは皆、移動し、地面に座り、（その）場所で円になる。天蓋の下の子ン・ヒヤン・ウンカル・シーマ（神聖なシーマの石）²³⁶とクルンパンに対面した。子ン・マクドゥルは呪いを唱え始めた。呪詛を発し、鶏を切り、シーマの石に卵を投げつけ、灰を撒いた。ラクルヤーン・マパティの従者と定立された（村の？）ラーマと近隣のラーマすべてに対面して。

[儀礼で唱えられた呪詛の内容] [2: 12-20]

[12]ikana ling nira īndaḥ bhaṭāra i baprakeśwara brahmā wiṣṇu mahādewa candrāditya kṣi²³⁷ jala pawana hutāsana²³⁸ yajamāna ā[13]kāśa kāla mṛtyu gaṇa bhūta sahananta sandhyādwaya ahorātra yama baruṇa kuwera bāsawa yakṣa rākṣasa piśāca gaṇabhūta rāmadewata pretāsura gandharwa graha kinnara²³⁹ wi[14]dyādhara dewaputra nandīśwara mahākāla nāgarājā wināyaka[14]sakwaiḥ ta dewata prasiddha mangrakṣa kaḍatwan śrī mahārāja ing bhūmi jawa kita umasuk i hati ning ṇwang kabaiḥ tan [15]kawnang tinahannan kyan hanā²⁴⁰ pua anyāyā umulaḥulaḥha iking sī ṇuniwaiḥan

²²⁹ バリ語「rērubah」は「豚や亀の皮を茹で挽いた料理」だが、研究者によって「rumwah-rumwah」は香辛料、野菜とも解釈されている[Zoetmulder 1982: 1570]。

²³⁰ 食べ物、あるいは魚の一種か[Zoetmulder 1982: 424]。

²³¹ 特別な方法で準備された食べ物か[Zoetmulder 1982: 2002]。

²³² サンスクリット語「ciñcā」は「タマリンド」のことである[Zoetmulder 1982: 329]。

²³³ TPB においても指摘されているが、他の「u」の文字と比較すると、「da」の文字に近い[Titi 1982: 27.n.18]。「damañkat」では意味が取れないため、ここでは「u」と読む。

²³⁴ TPB では「hantrīṇi」と読むが[Titi 1982: 25]、長母音記号「ī」は確認できず、「ṇ」は「n」の文字である。

²³⁵ TPB では「wadwa」と読むが[Titi 1982: 25]、「dwa」には長母音記号が確認できる。

²³⁶ シーマの境界を定める際に建てられた石か。

²³⁷ 「kṣiti」が一般的である。

²³⁸ TPB では「hutāsana」と読むが[Titi 1982: 25]、「s」は「ś」である。

²³⁹ TPB では「kinnara」と読むが[Titi 1982: 25]、「i」に長母音記号は確認できない。

²⁴⁰ TPB では「hana」と読むが[Titi 1982: 25]、「na」には長母音記号がついている。

l̥bura ya ɖuɖuk hatinya sbittakan wtangnya uɖullakan pahungnya wijilakan ɖalammanya²⁴¹ tampyal i wi[16]rañan uwahi i tñannan²⁴²[16]yan para ya riñ alas patukan ning ulā pañannan ning²⁴³ mong pulirakna ning dewa manyuḥ yan para ya ring tgal alapan ning glap spalan ning rākṣasa sanghampan²⁴⁴ ning wuḥ²⁴⁵ si pamu[17]an²⁴⁶ andah²⁴⁷ ta kamung hyang kusi²⁴⁸ gargga metrī kurupya²⁴⁹ pātāñjala suwuk lor kidul kulwan waitan buangñakan ing nākāśa yan angñwang umalaḥulaḥ ikeng sīma rakryān sañjīwana de [18]yantā matīya sampal salamwittakan ni hyang kabaiḥ tibākan ing mahāsamudra kēlamakan²⁵⁰ ing ɖawuhan alappya jalam²⁵¹ er sanghappya ng wuhaya aṅkānan matya yan ang ñwang anyāyā umu[19]laḥulaḥ ikeng sīma upadrawā ing dewata²⁵² tātān tmu angśama bhraṣṭā²⁵³ liputtan ning ɖēra²⁵⁴ muliha ring naraka tibā ing mahārorawa yan ang ñuwang²⁵⁵ langghanā ing ājña haji i sampun yan mangka[20]na manamwaḥ ikanang patiḥ wahuta muang rāma tpi siring muang rāma sinusuk laki laki wadwan kabaiḥ i sang hyang watu sīma muang kulumpa²⁵⁶

その言葉は、聞きたまえ、バプラケーシュワラ²⁵⁷、ブラフマー神、ウィシュヌ神、マハーデーワ神²⁵⁸、太陽、月、大地、水、風、火、祭主、空、カーラ神²⁵⁹、ムリティウ神²⁶⁰、ガ

²⁴¹ TPB では「dalamnya」と読むが[Titi 1982: 25]、「d」は「ɖ」の文字である。

²⁴² TPB では「tañannan」と読むが[Titi 1982: 25]、「tñannan」が正しい。

²⁴³ TPB では「ing」と読むが[Titi 1982: 25]、「ning」が正しい。

²⁴⁴ 「sanghampan」と書かれるが、「sanghappan (捕まえられた)」と考えられる[Titi 1982: 28.n.24] [Zoetmulder 1982: 1665]。スギ・マヌック刻文などでも同様の箇所で見られる。

²⁴⁵ 一般に「wwil」と綴り、悪魔・巨人を意味する[Zoetmulder 1982: 2344]。

²⁴⁶ 「pamuan」は「pamungwan パムングワン (精霊・守護神)」と考えられる。

²⁴⁷ 原文は「andah」だが、「indah」の誤りと考えられる[Titi 1982: 28.n.25]。

²⁴⁸ 通常は「kusika」であるが、「ka」の文字が書かれていない。TPB では「kusiga」と読むが[Titi 1982: 26]、後ろに続く単語を「gargga」と読んでおり、「kusiga」と読むと「ga」の文字が足りない。

²⁴⁹ 一般的に「kuruṣya」と綴られる。

²⁵⁰ TPB では「kê kēnakan」と転写するが[Titi 1982: 26]、明らかに「kēlamakan」である。

²⁵¹ 「ɖalam」が一般的である。

²⁵² TPB では「dewatā」と読むが[Titi 1982: 26]、「ta」に長母音記号はついていない。

²⁵³ TPB では語末の「a」は長母音ではないが[Titi 1982: 26]、明らかに長母音記号がついている。

²⁵⁴ TPB では「dēra」と読むが[Titi 1982: 26]、「d」は「ɖ」の文字である。

²⁵⁵ 文字は「ñuwang」と綴るが、「ñwang」を意図したと考えられる。

²⁵⁶ 「kulumpang」と考えられる。

²⁵⁷ 「聖堂」や「王家の始祖」とする意見もあるが[Stutterheim 1934: 203-204]、刻文の記述からははっきりしない。

²⁵⁸ シワ神を指す。

²⁵⁹ 死や破滅を掌る神。「kālamṛtyu」はしばしば死の神（ヤマ）とされ、またその従者ともなる[Zoetmulder 1982: 768]。

²⁶⁰ 死を意味し、死の神でもある[Zoetmulder 1982: 1152]。

ナ²⁶¹、ブータ²⁶²、あなた方すべて、朝夕の黄昏、日夜、ヤマ神²⁶³、バルナ神、クウェラ神²⁶⁴、バーサワ（インドラ）神²⁶⁵、ヤクシャ²⁶⁶、ラークシャサ（羅刹）²⁶⁷、ピシャーチャ²⁶⁸、ガナ、ブータ²⁶⁹、ラーマ神²⁷⁰、プレタ²⁷¹、アスラ²⁷²、ガンダルワ²⁷³、グラハ²⁷⁴、キンナラ²⁷⁵、ウィドゥヤーダラ²⁷⁶、デワプトラ²⁷⁷、ナンディーシュワラ²⁷⁸、マハーカーラ²⁷⁹、ナーガラージャ²⁸⁰、ウィナーヤカ²⁸¹、これらの神々すべて、（そして）ジャワの地の大王の王宮を守ることで知られる神よ、あなた方は耐える力を持たないすべての者の心に入り、もし、そのシーマを動かし、さらに破壊する、正しくない行為をする者がいたなら、その心臓を裂き、その腹を引き裂き、そのパフン²⁸²を開き、その内臓を引き出す。左に打たれ、右に変えられる（打たれる）。

もし、森に入ったなら、蛇に咬まれ、虎に食べられ、神の怒りにまわされる（?）。もし、トゥガルに入ったなら、雷に打たれ、ラークシャサ（羅刹）に切られ²⁸³、ウィルとシ・パムングワンに捕まえられる。聞きたまえ、あなた方、神よ、クシカ、ガルガ、メトリー、クルシャ、パーターンジャラ²⁸⁴、北、南、西、東の守護者、空に投げる（?）。もしラク

²⁶¹ 半神の一種[Zoetmulder 1982: 484]。

²⁶² 一般に悪魔を指す[Zoetmulder 1982: 278]。

²⁶³ 死者の魂を管理する、死を司る神である[Monier 1872: 809-810]。

²⁶⁴ サンスクリット語「kubera/kuvera」。富と財宝の神である[Monier 1872: 237]。

²⁶⁵ インドラ神の名[Zoetmulder 1982: 223]。

²⁶⁶ 半神、クウェラ神の従者 [Zoetmulder 1982: 2355]。

²⁶⁷ 一般的に悪魔を指す[Zoetmulder 1982: 1442]。

²⁶⁸ 悪魔[Zoetmulder 1982: 1368]。

²⁶⁹ ムリティウ神の後ろにガナ、ブータがすでに記される。一般的にピシャーチャの次には、ラーマ神 *rāmadevatā* などが続くので、彫手の誤りである可能性が高い。

²⁷⁰ ラーマはダシャラタ *Dāśaratha* の息子であり、ウィシュヌ神の化身である。「ラーマ神 *Rāmadewa*」などの呼び名がある[Zoetmulder 1982: 1495]。

²⁷¹ 死者の魂、幽霊を指す[Zoetmulder 1982: 1422]。

²⁷² 悪魔（神々の敵）である[Zoetmulder 1982: 149]。

²⁷³ 半神である[Zoetmulder 1982: 486]。

²⁷⁴ 人の体や精神に悪影響をもたらす悪霊あるいは精霊の名であり、（太陽・月）食や惑星の意味もある[Zoetmulder 1982: 541]。

²⁷⁵ 人の姿をし、馬の頭をもつ架空の生き物[Zoetmulder 1982: 871]。

²⁷⁶ シワ神に仕え、ヒマラヤに住む、不思議な力を持った超自然的存在[Zoetmulder 1982: 2264]。

²⁷⁷ 神の息子[Zoetmulder 1982: 397]。

²⁷⁸ シワ神の従者[Zoetmulder 1982: 1173]。

²⁷⁹ 偉大なるカーラ神[Zoetmulder 1982: 1082]。

²⁸⁰ ナーガたちの王[Zoetmulder 1982: 1168]。

²⁸¹ 「障害を取り除く者」、ガネーシャの別名である[Zoetmulder 1982: 2283]。

²⁸² 体の一部と考えられる。

²⁸³ 原文「*spalan*」の意味は不明だが、ギリカン刻文やスギ・マヌック刻文では「*sampal/sēmpal*（ちぎる・引きはがす）」の語が使われる。

²⁸⁴ クシカ、ガルガ、メトリー、クルシャ、パーターンジャラはパンチャクシカ *pañcakuśika* と呼ばれる聖仙である。インドでは、歴史的人物、超自然的修行者の印象だが、インドネ

ヤーン・サンジーワナのシーマを動かす者がいたなら、彼の死の方法は、すべての神々にちぎられ、ばらばらに引き裂かれ、大洋に落とされ、堰に放り込まれ、水の中に引き込まれ、ワニにとらえられ、そして死ぬ。もしシーマを動かす、正しくない行為の者がいたなら、神々の不運に会い、転生しない。あなた（神々？）によって落とされ巻き込まれ、地獄に行き、マハーロラワ（地獄の一種）に落とされる。もし王の命令を拒否する者がいたなら。

そのような（呪詛を唱えた）のちに、パティ、ワフタ、そして近隣のラーマ、そして定立された（村の？）ラーマ、男、女、すべてがサン・ヒャン・ワトゥ・シーマとクルンパンに祈った。

[饗宴][2: 20-21]

[20] umuwaḥ sira kabaiḥ i ron nira sampun muwaḥ sira [21]mañigal mabatabata

彼らすべてが葉を換えた²⁸⁵。その後、また、彼らは踊り、バタバタ（踊りの一種？）²⁸⁶を行った。

シアでは変化し、神聖な目撃者としての地位に高められている[Hooykaas 1974: 132]。古ジャワ語の『ラーマーヤナ・カカウイン』などの文献にもみられる[Hooykaas 1974: 134]。

²⁸⁵ TPB では、「葉に（食べ物を）追加した」[Titi 1982: 40]。他の刻文では、料理を盛るための葉が参加者に配られることが記される。この「葉を換えた」という表現は、料理を盛るための葉を新しい葉に換えたことを意味している。

²⁸⁶ TPB では、「ジョゲット（踊りの一種）を踊る」[Titi 1982: 40]。

参考資料3 古ジャワ語『ラーマーヤナ』に記された王の資質²⁸⁷

弟バラタに対して、ラーマが説いた王の義務、あるべき姿(第3章 52-84 節からの一部抜粋)

54：寺院、堂、宗教施設を維持させよ。富を増やし、役にたつ問題に資金を供給せよ。あなたは、あなたが望むように[人生]を享受するだろうが、あなたの民に良き人生、つまりアルタ、カーマ、ダルマ、を与えよ。

55：良き行いを向上させ、熱情と憎しみを取り去れ。あなたの心から完全に妬みを遠ざけよ。規律であなた自身を満たし、あなたの行為のすべてを誰しにも心地よいものにせよ。精神もまた、わが弟よ、自己的であり過ぎれば滅亡へと導く。

56：あなたは優秀と眼識の起源をみななければならない。戦場における勇敢さと雄弁さを鍛えろ。[この世の生を]放棄し、ブラフマンやあらゆる苦行者に寛大であれ、すべきではないことをしてはならず、あなたのすべての力で人々を守れ。

57：美德を心掛けたものは賢い人物である。厳密に彼は彼の民の行いをみる。行為や彼の義務の遂行において良きものは誰も称賛され、期待に応えない者は誰も彼の行いに従い評価される。

58：王における優れた多くの徳を見ることを心がけよ。[彼は]何が善で何が悪かを注意深く見極め、無活動ではないだろう。人々の不満を聞け、なぜならこれが王の究極的な義務であるからである。

59：努力こそを前提とすべきである。いかなる仕事もしっかりとなされるべきである。低い(身分の)人でさえ侮辱してはならない。

(中略)

61：傲慢さを取り除け。何ものも当然とみなしてはならない。貴い家系によって夢中になつてはいけない、謙遜が好ましい。

62：しっかりと心に留めておくべき最も重要なことがある。謙虚な人を侮辱するな。深く学ぶならば、書物は素晴らしい。たとえとても難しくとも、それは従われるべきである。

63：知ることの源となるのが聖典に従うことである。[それらは]賢い行為を引き起こす。知識人、宗教的師、ブラフマンを敬え、[あなたへの]彼らの共感を増やすことに励め。

(中略)

70：これらの私が話したことを、あなたは人々と王国を守るために常に守るべきだ。僧院を良い状態に保ち、神聖な教義、そして土着の神々を祀る寺院とインドの神々を祀る寺院を保護するべきである。道、休憩所、泉、池、堰、壁、園地、市場、橋など人々に要求されたものは建てるべきだ。

72：すべての従者に関心を示せ。特に彼らの行為と主への献身を観察せよ。彼が良く振る

²⁸⁷ カカウインの抜粋箇所日本語訳は、[Soewito Santoso 1980]と[Robson 2015]の訳を参考とし、著者が行った。

舞うならば、まさに献身的で有能であり、卑しい出身ではあるが、あなたは彼を昇進させるべきであり、もし彼が良い家系であるならばますますそうすべきである。

76：あなたを、容赦なく世界を燃やす太陽（神）と比べよ。同様に王は悪人を消す。月は愛を与え、彼は人々によって愛される。明らかにあなたはそうにあるべきだ、弟よ、あなたに従う人々に関心を示せ（を保護せよ）。

77：王は山の如く、人々はそこに育つ草の如く。彼らの行為の良い性質と悪い性質の調和、これは幸せの原因である。立派な民は、森のようなものであり、つまり木と考えられる、そしてあなたはそれを守る獅子であり、とても素晴らしくみえる理由である。

ラワナの弟ウィビサナに対して、ラーマが説いた王のあるべき姿（第 24 章 48-62）

48：世界を規定する手順は以下のとおりである。まず、あなた自身は良き者に指示されるべきであり、あなたが聖典を固守することにすでに堅固であるとき、これに従う貴族や大臣に伝えよ。

49：役人たちの長はパティ Patih²⁸⁸であり、忠実であり誠実であり、先頭にたつすべての従者や助手とともに、正しき行為に従う彼らの子供に至るまで、そして参加し、良き者のための政策を監督する臣下である。

50：王である人は彼の行為に用心する。彼はすべて（の人）に模倣されるための例を与えなければならないからである。彼が間違えば、世界全体を迷わせる。世界（大地）は人々を統治する彼に従うからである。

51：さらに、道理（秩序）は彼が崇められるべきと定めた。なぜなら彼には神々がいる。王の体に八神がいる²⁸⁹。それ故、彼は比類なく勇敢である。

52：インドラ、ヤマ、スールヤ、チャンドラ、アニラ、クヴェーラ、ヴァルナ、アグニがその八神であり、彼らは王の体に具現する。それ故、彼はアシュタブラタ（行為の 8 つの方法）を彼の目的とする。

53：これはあなたが従うべきインドラ神の規範である。彼は雨を降らせ、世界に喜びをもたらす。あなたはインドラの規範の例のように彼をまねよ、世界を充たすあなたの雨は豊かな贈り物である。

54：ヤマ神の規範は、悪の業を罰することである。彼は盗人が死んだ時に盗人を罰する。あなたは彼のように誤った者たちを罰するべきだ。世界を混乱させる者は殺されるべきだ。

55：ラウィ（スールヤ、太陽）神は、絶え間なく水を吸い上げる。穏やかにゆっくりと彼はそれを行う。そのように、あなたはせわしすぎることなくゆっくり取り得るべきだ。これがスールヤの規範である。

²⁸⁸ 王宮の高位の役人、あるいは主のことである[Zoetmulder 1982: 1324]。

²⁸⁹ マヌ法典では、王は「インドラ、風神、ヤマ、太陽神、火神、ヴァルナ、月神、富の主」の要素から創造され（第 7 章 4～11 節）、「インドラ、太陽、風、ヤマ、ヴァルナ、月、火、大地」のそれぞれの行動（ヴラタ）を実行することが記されている（第 9 章 303～312 節）[渡瀬信之 2013: 214-215, 351-352]。

56：シャシ（チャンドラ、月）神の規範は、世界すべてに喜びを与えることである。あなたの行為は見守るためにやさしくやわらかにあるべきだ。あなたの笑顔はアムリタのようであり、あなたはすべての老い、賢き者を歓迎するべきだ。

57：あなたは世界の行為を見続けるハンギン（バーユ、アニラ、風）神である。あなたはすべての人の傾向を知らなければならない。良き間諜は見られることなく見るあなたの手段である。これはとらえがたきバーユの規範の驚くべき性質である。

58：あなたはくつろぎながら、喜びを味わうべきだ。食べ物や飲み物を規制されることなく、あなたは服、装飾品、豪華な装飾品を着るべきだ。それは従うべきダナダ（クヴェーラ）神の規範である。

59：ヴァルナ神は武器をもつ。それは有毒で、縛るナーガパーシャ²⁹⁰である。あなたはその規範を採用し、そしてあなたは多くの悪人を縛るべきだ。

60：敵を消滅させ続けることはバフニ（アグニ）の規範である。あなたの敵への激しさ（獐猛さ）は火である。あなたに攻撃する者は滅ぼされ破壊される。これがアグニの規範と呼ばれるものである。

61：このように、世界を守る者の良き資質である。（彼は）常に、敬意をもって扱われ、当然の注意を持って顧慮され、それらは貴重な石の数珠のように従われなければならない。それらが互いに押し合う方法が大きな一回りの腕輪を形作る。

62：幸せはあなたの堅固な耳飾りであり、良き行いはそれが緩まないための同等のものである。師への敬愛や尊敬はティラック²⁹¹とみなすことが出来る。人の思考で大事にされたシワへの信仰は思考の宝石である。

²⁹⁰ サンスクリット語の「nāgapāṣa」。ヴァルナ神の武器を指す[Monier 1872: 475]。

²⁹¹ ティラックとは、ヒンドゥー教徒が額につける赤い印のことである[Robson 2015: 696-697. 62c]。

参考文献

(日本語)

- 青山亨. 2002. 「東南アジア島嶼部におけるインド系文字」『上智アジア学』20: 11-23. 上智大学アジア文化研究所.
- 石澤良昭. 1982. 『古代カンボジア史研究』国書刊行会.
- 岩本裕. 1962. 「Sailendra 王朝と Mataram 王国の Java 支配について—De Casparis : Inscripties uit de Cailendratijd, Bandung 1950 の紹介をかねて」『西南アジア研究』8: 47-68.
- 1981. 「ジャワ碑文研究 (1)」『南方文化』8: 153-160.
- 1982. 「ジャワ碑文研究 (2)」『南方文化』9: 19-32.
- 1983. 「ジャワ碑文研究 (3)」『南方文化』10: 83-94.
- 1984. 「ジャワ碑文研究 (4)」『南方文化』11: 13-25.
- 辛島昇. 1999 年「古代・中世タミル地方における王権と国家」『岩波講座 世界歴史 6』: 291-308.
- 仲田浩三. 1978a. 「ジャワにおける初期シーマ定立の編年に関する研究」. 『東方学』56: 131-112.
- 1978b. 「ジャワ出土ブルムプナン刻文の紀年—インドネシア最古のシーマ定立年代—」『國學院大學栃木短期大學紀要』12: 47-60.
- 1988. 「インドネシア刻文の古文書学的研究 (I)」『鹿児島大学教養部史学科報告』35: 1-32.
- 1989. 「インドネシア刻文の古文書学的研究研究(II)」『鹿児島大学教養部史学科報告』36: 1-27.
- 1990. 「インドネシア刻文の古文書学的研究 (III)」『鹿児島大学教養部史学科報告』37: 1-86.
- 1991. 「インドネシア刻文の古文書学的研究 (IV)」『鹿児島大学教養部史学科報告』38: 1-53.
- 深見純生. 1994. 「シュリーヴィジャヤ帝国」『変わる東南アジア史像』: 47-69. 山川出版社.
- 1999. 「ジャワ古代史の再構築—シーマ定立の政治経済学」『岩波講座 世界歴史 6 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』: 353-374. 岩波書店.
- 2001a. 「9 マラッカ海峡交易世界の変遷」『岩波講座東南アジア史 1 卷原史東南アジア世界』: 255-283. 岩波書店.
- 2001b. 「10 ジャワの初期王権」『岩波講座東南アジア史 1 卷原史東南アジア世界』: 285-307. 岩波書店.
- 2003a. 「II 原史料と文書館 1. 金石文」『岩波講座 東南アジア史別巻 東南アジア史研究案内』: 119-124. 岩波書店.
- 2003b. 「系譜を語らない王たち: 王朝史再構成の構図」角田文衛ほか監修『古代王権の誕生 第2巻東南アジア、南アジア、アメリカ大陸編』: 50-62. 角川書店.

- 藤善真澄（訳注）. 1990. 『諸蕃志』 関西大学出版部.
- 山崎美保. 2010. 「古代ジャワにおける社会構造—9 世紀から 10 世紀前半の古ジャワ語刻文からの考察」（修士論文、東京外国語大学大学院提出）.
- . 2011. 「9 世紀から 10 世紀前半の古代ジャワ社会におけるシーマ定立の意義とそれに伴う儀式の役割: 古ジャワ語刻文からの考察」『東京外国語大学大学院 言語・地域文化研究』 17: 187-210.
- . 2015. 「バリトゥン王（在位 898-910 年頃）の統治と王権強化」『東南アジア—歴史と文化』 44: 83-100.
- . 2016. 「ルカム Rukam 刻文の転写と翻訳」深見純生（編）『東南アジア古代史の複合的研究』 科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書: 87-103.
- 渡瀬信之（訳注）. 2013. 『マヌ法典』（東洋文庫 842）平凡社.

（漢籍）

歐陽修、宋祁撰『新唐書』第二〇冊卷二一八至卷二二五下（傳）. 中華書局.

（外国語文献）

- Balai Arkeologi Yogyakarta. 2011. Hasil penelitian situs Liyangan 2011 (2011 年リヤンガン遺跡の調査報告) . Balai Arkeologi Yogyakarta. 2015 年 1 月 15 日アクセス . http://arkeologijawa.com/index.php?action=news.detail&id_news=128
- Barrett Jones, A. M. 1984. *Early tenth century Java from the inscriptions: a study of economic, social and administrative conditions in the first quarter of the 10th century*. Dordrecht; Cinnaminson: Foris Publications. (KITLV, Verhandelingen 107)
- Boechari. 1966. Preliminary report on the discovery of an Old Malay inscription at Sodjomerto. *MISI* 3 (2-3): 241-251. [In Boechari 2012: 349-360].
- . 1977. Candi dan lingkungannya (チャンディとその環境) . *MISI* 7 (2): 319-341. [In Boechari 2012: 273-290].
- . 2012. *Melacak sejarah kuno Indonesia lewat prasasti /Tracing ancient Indonesian history through inscriptions*. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia.
- . 2012a. Rakryān mahāmantri i hino: a study on the highest court dignitary of ancient Java up to the 13th century A. D. In Boechari 2012, 115-134. [Boechari 1967-68. *Journal of the Historical Society of Singapore* 1967-68: 7-20].
- . 2012b. Some considerations on the problem of the shift of Mataram's center of government from Central to East Java in the 10th century. In Boechari 2012, 155-182. [Boechari 1976. *Berita Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional* 10: 1-27].
- . 2012c. Epigrafi dan sejarah Indonesia (碑文とインドネシアの歴史) . In Boechari 2012, 3-28. [Boechari 1977. *Majalah Arkeologi* 1 (2): 1-40].

- 2012d. Aneka catatan epigrafi dan sejarah kuna Indonesia (碑文の諸記述とインドネシア古代史) . In Boechari 2012, 401-420. [Boechari 1982. *Majalah Arkeologi* 5 (1-2): 15-38].
- 2012e. Satu atau dua dinasti di kerajaan Mataram kuna? (古マタラム国は単一王朝か二王朝か) . In Boechari 2012, 197-202. [Boechari 1989 (unpublished)].
- 2012f. Transkripsi (dan terjemahan) aneka prasasti (諸刻文の翻字 (と翻訳)) . In Boechari 2012, 473-530.
- Bosch, F. D. K. 1924. Het lingga-heilingdom van Dinaja. *TBG* 64: 227-273.
- 1928. De inscriptie van Kelurak. *TBG* 68: 1-64.
- 1941a. De inscriptie van Ligor. *TBG* 81: 26-38.
- 1941b. Een Maleische inscriptie in het Buitenzorgsche. *BKI* 100: 49-53.
- 1952. Çrivijaya, de Çailendra- en de Sanjayavamça. *BKI* 108: 113-123.
- 1958. Boekbespreking; Prasasti Indonesia diterbitkan oleh Dinas Purbakala Republik Indonesia II.---J. G. de Casparis: Selected Inscriptions from the 7th to the 9th century A. D., Masa Baru, Bandung, 1956, 395pp. *BKI* 114(3): 306-320.
- Brandes, J. L. A. 1889. Een jayapattra of acte van eene rechterlijke uitspraak van Çaka 849. *TBG* 32: 98-149.
- 1913. *Oud-Javaansche oorkonden, Verhandelingen van Het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen* 60. Batavia: Albrecht's Hage: Nijhoff.
- Casparis, J. G. de. 1950. *Prasasti Indonesia I* (インドネシアの刻文 I). Bandung: A. C. Nix and Co.
- 1956. *Prasasti Indonesia II*, Bandung: Masa Baru.
- 1958. *Short inscriptions from Candi Plaosan Lor*. Jakarta: Dinas Purbakala Indonesia.
- 1975. *Indonesian palaeography: a history of writing in Indonesia from the beginnings to c. A.D. 1500*. Leiden/Köln: E.J.Brill. (Handbuch der Orientalistik)
- 1986. Some notes on relations between central and local government in ancient Java. In *Southeast Asia in the 9th to 14th centuries*, edited by D. G. Marr and A. C. Milner, 49-63. Singapore: Institute of southeast Asian Studies-Research School of Pacific Studies.
- 1992. Some notes on ancient Indian ritual in Indonesia. In *Ritual, state and history in South Asia: Essays in honour of J.C.Heesterman*, edited by A. W. van der Hoek, D. H. A. Kolff and M. S. Oort, 480-492. Leiden: E.J.Brill
- Chhabra, B. C. 1935. Expansion of Indo-Aryan culture during Pallava rule, as evidenced by inscriptions. *JASBL* 1: 1-64.
- Christie, J. W. 1983. Rāja and rāma; the classical state in early Jawa. In *Centers, symbols, and hierarchies: essays on the classical states of Southeast Asia*, edited by Lorraine Gesick, 9-44. New Haven, Conn.: Yale University Southeast Asia Studies. (Monograph series / Yale University Southeast Asia Studies 26)
- 1986. Negara, mandala, and despotic state: images of early Java. In *Southeast Asia in the 9th*

- to 14th centuries, edited by D. G. Marr and A. C. Milner, 65-93. Singapore: Institute of southeast Asian Studies-Research School of Pacific Studies.
- 1991. States without cities: demographic trends in early Java. *Indoensia* 52: 23-40.
- 1992. Water from the ancestors: irrigation in early Java. In *The gift of water: water management, cosmology and the state in South East Asia*, edited by J. Rigg, 7-25. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- 1996. Money and its uses in the Javanese states of the ninth to fifteenth centuries A.D. *Journal of the economic and social history of the Orient* 39 (3): 243-286.
- 2000. Register of the inscription of Java- from 732 to 1060; part I: 732 to 898 A.D. (Consultation Draft)
- 2001. Revisiting Early Mataram, In *Fruits of inspiration: studies in honour of Prof. J.G. de Casparis*, edited by M. J. Klokke and K.R. van Kooij, 25-55. Groningen: Egbert Forsten.
- 2007. Water and rice in early Java and Bali. In *A world of waer; rain, rivers and seas in Southeast Asian histories*, edited by Peter Boomgaard, 235-258. Leiden: KITLV Press.
- 2009. Preliminary notes on debt and credit in early Island Southeast Asia. In *Credit and debt in Indonesia, 860-1930 from peonage to pawnshop, from Kongsì to cooperative*, 41-60. Netherlands: KITLV/Singapore: ISEAS.
- Coedès, G. 1992. *Sriwijaya; history, religion & language of an early Malay polity, collected Studies by George Coedès and Louis-Charles Damais*, edited by Pierre-Yves, Manguin, Kuala Lumpur: MBRAS.
- 1992a. The kingdom of Sriwijaya. In Coedès 1992, 1-40. [*BEFEO* 18 (1918): 1-36].
- 1992b. The Malay Inscriptions of Sriwijaya. In Coedès 1992, 41-92. [*BEFEO* 30 (1930): 29-80].
- 1992c. The Inscription on the Ligor stone: The Current State of its Interpretation, In Coedès 1992, (103)-111. [*Oriens Extremus* 6 (1959): 42-48].
- Cohen Stuart, A. B. 1875. *Kawi oorkonden in facsimile, met inleiding en transscriptie*. Leiden: E.J.Brill.
- Damais, L. -Ch. 1951. Études d'épigraphie indonésienne. *BEFEO* 45 (1): 1-63.
- 1952. Études d'épigraphie indonésienne: III Liste des principaux inscriptions dates de l'Indonésie. *BEFEO* 46 (1): 1-106.
- 1955. Études d'épigraphie indonésienne: IV. Discussion de la date des inscriptions. *BEFEO* 47 (1): 7-290.
- 1968. Bibliographie indonesienne: XI. Les publications épigraphiques du service archéologique de l'Indonésie. *BEFEO* 54: 295-521.
- 1970. *Répertoire onomastique de l'épigraphie Javanaise, jusqu'à pu sindok Śrī Isānawikrama Dharmmotuṅgadewa; étude d'épigraphie indonésienne*. Paris: École

- française d'Extrême-Orient.
- 1990. *Études d'épigraphie indonésienne*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Djoko Dwiyanto. 1986. Pengamatan terhadap data kesejarahan dari prasasti Wanua Tengah III tahun 908 M (908 年のワヌア・トゥンガ III 刻文からの歴史資料に関する考察). *Pertemuan Ilmiah Arkeologi* 4 (2a): 92-110.
- Eade, J. C. and Gislén, Lars. 2000. *Early Javanese inscriptions; a new dating method*. Leiden; Boston; Köln: Brill.
- Geerts, Clifford. 1980. *Negara: the theatre state in nineteenth-century Bali*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Goris, R. 1929. De oud-Javaanshe inscripties uit het Sri-Wedari-Museum te Soerakarta. *OV* (1928): 63-70.
- 1930. De inscriptie van Koeboeran Tjandi. *TBG* 70: 157-170.
- 1954. *Prasasti Bali: inscripties voor anak wungcu*. 2 vols. Bandung: Masa Baru.
- 1984. The religious character of the village community. In *Bali: studies in life, thought, and ritual*, by Koninklijk Instituut voor de Tropen, 77-100. Dordrecht, Holland; Cinnaminson, U.S.A.: Foris Publications. (First published in 1960 by W. van Hoeve Ltd, The Hague and Bandung for The Royal Tropical Institute, Amsterdam)
- Griffiths, Arlo and Lunsingh Scheurleer, P. 2014. Ancient Indonesian ritual utensils with inscriptions: bells and slitdrums, *Arts Asiatiques* 69: 129-150.
- Hasan Djafar 2010. *Kompleks per candian Batujaya: rekonstruksi sejarah kebudayaan daerah pantai utara Jawa Barat* (バトウジャヤのチャンディ群：西ジャワ北海岸地域の文化史再構築). Bandung: Penerbit Kiblat Buku Utama; École française d'Extrême-Orient; Pusat Penelitian dan Pengembangan Arkeologi Nasional; KITLV-Jakarta.
- Herni Pramastuti, ed. 2007 *Pusaka aksara Yogyakarta* (ジョグジャカルタの文字遺産). Yogyakarta: Balai Pelestarian Peninggalan Purbakala Yogyakarta.
- Jordaan, R. E, ed. 1996. *In praise of Prambanan: Dutch essays on the Loro Jonggrang temple complex*. Leiden: KITLV Press. (Translation series 26)
- 2000. Pāla chronology; the dating of the Nālandā inscription, and the end of Śailendra rule in Java, paper for the 8th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archeologists, Sarteano (Tuscany), Italy, 2-6 October 2000.
- 2003. Wanua Tengah III and the problem of the origin of the Śailendra dynasty, paper presented at the International Conference on Indonesian Art, New Delhi (IGNCA), 4-6 March 2003.
- 2006. Why the Śailendras were not a Javanese dynasty. *Indonesia and the Malay world* 34 (98): 3-22.
- Jordaan, R. E. and Colles, B. E. 2004. The Ratu Boko mantra and the Sailendras. *Berkala Arkeologi*

- 24 (1): 56-64.
- 2009. *The Mahārājas of the isles: the Śailendras and the problem of Śrīvijaya*. Leiden: Opleiding Talen en Culturen van Zuidoost Azie en Oceanie. (Semaian 25)
- Kern, H. 1885. Sanskrit-inscriptie van Java, van den jare 654 Çaka (A. D. 732). *BKI* 34: 123-130.
- 1913-1936. *Verspreide Geschriften*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Krom, N. J. 1931. *Hindoe-Javaansche geschiedenis*. 's-Gravenhage: Nijhoff. (The revised edition)
- Kulke. 1986. The early and the imperial kingdom in Southeast Asian history. In *Southeast Asia in the 9th to 14th centuries*, edited by D. G. Marr and A. C. Milner, 1-22. Singapore: Institute of southeast Asian Studies-Research School of Pacific Studies.
- Kusen. 1988-1989. Faktor-faktor penyebab terjadinya perubahan status sawah di Wanua Tengah dalam masa pemerintahan raja-raja Mataram Kuna abad 8-10 (8~10 世紀の古マタラム諸王の統治時代におけるワヌア・トゥンガの水田の所属変更の諸要因) . Laporan penelitian, Fakultas Sastra Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta.
- 1994. Raja-raja Mataram Kuna dari Sanjaya sampai Balitung sebuah rekonstruksi berdasarkan prasasti Wanua Tengah III (サンジャヤからバリトゥンまでの古マタラムの王たち—ワヌア・トゥンガIII刻文に基づく再構成) . *Berkala Arkeologi* tahun XIV edisi khusus: 82-94. Yogyakarta: Balai Arkeologi. (深見純生訳. 2001. 「古マタラム王統再構成: ワヌア・トゥンガ第三刻文」『桃山学院大学総合研究所紀要』26 (3): 91-105) .
- Machi Suhadi. 1983a. Seven Old-Malay inscriptions in Java. In *Spafa final report: Consulative workshop Archeological and Environmental studies on Srivijaya (T-W3) Bangkok and South Thailand*, March 29 April 11, 1983: 67-81.
- 1983b. Prasasti Rumwiga (ルンウィガ刻文) . *Berkala Arkeologi* 4: 37-47.
- 2003. *Laporan penelitian prasasti di Museum Mpu Tantular dan di Museum Perbakala Trowulan tahun 2003* (ムプ・タントゥラル博物館とトロウラン考古博物館所蔵の刻文調査報告 2003 年) . Jakarta: Badan Pengembangan Kebudayaan dan Pariwisata/ Deputi Bidang pelestarian dan Pengembangan Budaya/ Pusat Penelitian Arkeologi.
- Machi Suhadi and Soekarto, M. M. 1986. Laporan penelitian epigrafi Jawa Tengah (中部ジャワの碑文研究報告) . *Berita penelitian arkeologi* 37:
- Macdonell, A. A. 1971 (1924). *A practical Sanskrit dictionary: with transliteration, accentuation, and etymological analysis throughout*. London: Oxford University Press.
- Manguin, Pierre-Yves and Agustijanto Indradjaja. 2011. The Batujaya site: new evidence of early Indian influence in West Java. In *Early interactions between South and Southeast Asia: reflections on cross-cultural exchange*, edited by Pierre-Yves, Manguin and A. Mani Geoff Wade, 113-136. Singapore: ISEAS Publishing.
- Marwati Djoened Poesponegoro and Nugroho Notosusanto. 2008. *Sejarah Nasional Indonesia II Zaman Kuno* (インドネシア国史 II 古代) . Jakarta: Balai Pustaka.

- Monier-William. 1872. A Sanskrit-English dictionary: etymologically and philologically arranged with special reference to Greek, Latin, Gothic, German, Anglo-Saxon, and other cognate Indo-European languages. Oxford: The Clarendon Press.
- Museum Nasional. 1985-1986. *Prasasti koleksi Museum Nasional*. Jakarta: Proyek Pengembangan Museum Nasional.
- Naerssen, F. H. van. 1937. Twee koperen oorkonden van Balitung in het Koloniaal Instituut te Amsterdam. *BKI* 95: 441-461.
- 1947. The Çailendra interregnum. In *India Antiqua*, edited by J. P. Vogel, 249-253. Leyden: Brill.
- 1977. The economic and administrative history of Early Indonesia. In *The economic and administrative history of early Indonesia*, by F.H. van Naerssen and R.C. de Jongh, 1-84. Leiden/Köln: E.J. Brill. (Handbuch der Orientalistik)
- Nakada, Kozo. 1982. *An Inventory of the dated inscription in Java. Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 40: 57-196.
- Poerbatjaraka. 1926. *Agastya in den Archipel*, Leiden: E.J. Brill.
- 1975. *Riwayat Indonesia I* (インドネシアの歴史). Yogyakarta: Purbayasa (新綴り版) (原著 1952. *Riwayat Indonesia I*. Jakarta: Jajasan Pembangunan) .
- 2010. *Rāmāyaṇa Djawa-kuna: teks dan terjemahan* (古代ジャワのラーマヤナ : テキストと翻訳) . Jakarta: Perpustakaan Nasional RI.
- Riboet, D. 2003. *Sima dan bangunan keagamaan di Jawa abad IX–X TU* (9-10 世紀のジャワにおけるシーマと宗教建造物) . Jogjakarta: Prana Pena.
- Robson, S. 2015. *The Old Javanese Rāmāyaṇa; a new English translation with an introduction and notes*. Tokyo: Research Institute for languages and cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. (Javanese Studies; contributions to the study of Javanese literature, culture and history 2)
- Sarkar, H. B. 1971-1972. *Corpus of the inscriptions of Jawa (up to 928 A.D)*. 2 vols. Calcutta: Firma K.L. Mukhopadhyay.
- Setten van der Meer, N.C. van. 1979. *Sawah cultivation in ancient Java: aspects of development during the Indo-Javanese period, 5th to 15th century*. Canberra: Australian National University Press. (Oriental Monograph Series 22)
- Soekmono. 1995. *The Javanese Candi: function and meaning*. Leiden; New York: E.J. Brill.
- Soewito Santoso, ed. and trans. 1980. *Ramayana kakawin*. 3 vols. New Delhi: Sarada Rani.
- Stein, C. P. V. van. 1934. De Inscriptie van Soekaboemi. *MKAWL* 78 (Serie B): 115-130.
- Stutterheim, W. F. 1925. Een oorkonde op koper uit het Singosarische. *TBG* 65: 208-281.
- 1927. Een belangrijke oorkonde uit de Kedoe. *TBG* 67: 172-215.
- 1935a. Een oorkonde van koning Pu Wagiçwara uit 927 A.D. (Epigraphica I). *TBG* 75:

420-437.

- 1935b. Een Javaansche acte van uitspraak uit het jaar 922 A. D. (Epigraphica III). *TBG* 75: 444-456.
- 1940a. Oorkonde van Balitung uit 905 A. D. (Randoesari I). In *Inscripties Van Nederlandsch-Indië* 1: 3-28. Batavia: Drukkerij de Unie.
- 1940b. Oorkonde van Dang Ācārya Munīndra uit 885 A. D. (Randusari II). In *Inscripties Van Nederlandsch-Indië* 1: 29-32. Batavia: Drukkerij de Unie.
- Sukarto Kartoatmodjo, M. 1969. The discovery of three new inscriptions in the district of Klaten (South Central Java). *Berita lembaga Purbakala dan Peninggalan (Bulletin of the Archaeological Institute of the Republic of Indonesia)* 8: 3-28.
- Sundberg, J. R. 2003. A Buddhist mantra recovered from the Ratu Boko plateau; a preliminary study of its implications for Sailendra-era Java. *BKI* 159(1): 163-188.
- Titi Surti Nastiti. 1996. Eksistensi kekuasaan Rakai Watukura Dyah Balitung (898-910 Masehi) (ラカイ・ラトゥクラ・ディア・バリトゥン(898~910年)の権力の所在). *Amerta; berkala arkeologi* 17: 29-41.
- Titi Surti Nastiti, Dyah Wijaya Dewi and Richardiana Kartakusuma. 1982. *Tiga prasasti dari masa Balitung* (バリトゥン時代の3点の刻文). Jakarta: Pusat Penelitian Arkeologi Nasional.
- Tringga. 1994. Analisis pertanggalan prasasti Wanua Tengah III (ワヌア・トゥンガ III 刻文の日付の考察). *Berkala arkeologi* tahun XIV edisi khusus: 22-26.
- Wicks, R. S. 1986. Monetary developments in Java between the ninth and sixteenth centuries: a numismatic perspective. *Indonesia* 42: 42-77.
- Wolters, O. W. 1999. *History, culture, and region in Southeast Asian perspectives*. Ithaca, N.Y.: Southeast Asia Program Publications. (Studies on Southeast Asia: no. 26) (revised edition).
- Zakharov, A. O. 2012. Epigraphy, political history and collective action in ancient Java. In *Connecting empires and states: selected papers from the 13th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, volume 2*, edited by Mai Lin Tjoa-Bonatz, Andreas Reinecke and Dominik Bonatz, 82-89. Singapore: NUS Press.
- Zoetmulder, P. J. 1982. *Old Javanese English dictionary*. 's-Gravenhage: Nijhoff.

(デジタルコレクション)

Leiden University Libraries Digital Special Collections (ライデン大学図書館・特別デジタルコレクション)

(その他)

ネット記事

Liputan6.com, Yogyakarta. 2015. Prasasti Tahun 869 Masehi Ditemukan di Candi Kedulan (869 年の刻文がチャンディ・クドゥランで発見される) (2015 年 7 月 30 日付) . アクセス日 2017 年 6 月 29 日.

(<http://news.liputan6.com/read/2283102/prasasti-tahun-869-masehi-ditemukan-di-candi-kedulan>)

附表1

本稿で使用する刻文の表

名称	別称	年代	所在	発見場所	言語	形状・材質	翻字・翻訳
Sojomerto		7th C.		Central Java : Batang	OMa	stone	Boechari 1966: 243-244; Boechari 2012: 353-355
Tukmas		7th C.	in situ	Central Java : Grabag, Magelang	Skt	boulder	VG 7: 201-204; SNI 2008: 128 n. 49 (Boechari's transliteration); Sarkar 1971: 14
Canggal		732-10-06 (654SE)	MNJ: D4	Central Java : Gunung Wukir, Magelang	Skt (verse)	stele	BKI 34: 125-132; VG 7: 118- 123; Sarkar 1971: 17-24
Plumpungan	Hampran	750-7-24 ? (672SE)	est.473/ in situ	Central Java. : Salatiga	Skt	pillar	Casparis 1950: 9
Kanjuruhan	Dinaya	760-11-28 (682SE)	MNJ: D113/OD743, A. 633	East Java : Malang	Skt	stele	OJO 1 (transliteration); TBG 64: 227-230; Sarkar 1971: 25-33
Kalasan		778-03-04 (700SE), or 779-03-22	MNJ: D147	Central Java : Kalsan, Prambanan	Skt (verse)	stele	TBG 68: 57-62 ; Sarkar 1971: 34-40; 岩本1983
Kelurak		782-09-26? (704SE)	MNJ: D44	Central Java : Kelurak, north of Candi Prambanan	Skt (verse)	stele	TBG 68: 1-56; 岩本1984; Sarkar 1971: 41-48
Ratu Baka	Abhyagiriwihāra	792 (714SE)	MNJ: D50/DP19377,	Central Java : Ratu Boko	Skt (verse)	stele	Casparis 1950: 21-24; Sarkar 1971: 48 (i)-48 (vii) (in part)
Mañjuśrīgrha		792-11-2 (714SE)	Museum Prambanan	Central java: complex candi Sewu (Prambanan)	OMa	stele	Christie list 9
Candi plaosan		before 9th C.	MNJ: D82	Central Java : Candi Plaosan (Prambanan)	Skt (verse)	stele	Casparis 1956: 192-206; Sarkar 1971: 48 (viii)-48 (xvi)
Lurah		early-mid 9th C.?	MNJ: E14	Central Java : Temanggung	OJ?	copper plate	OJO 107 (transliteration), Sarkar 1972: 284; Christie list 36
Rudra		mid 9th C.	BP3y: BG1410a	Central Java: Ratu Boko	skt	gold plate	Christie list 54 (transliteration)
Humpan	Dieng IV	mid 9th C.(c.860?)	MNJ: D15	Central Java : Dieng	OJ	stele	OJO 97 (transliteration); Sarkar 1972: 63-264; Christie list 65
Patapān III		mid 9th C. (c.860?)	MNJ: D43	Ceentral Java: Dieng?	OJ	stele	OJO 101 (transliteration); Sarakar 1972: 268; Christie list

附表1

本稿で使用する刻文の表

Dieng VI	Ra Kiḍan	mid-late 9th C	MNJ: D57	Central Java : Dieng	OJ	stele	OJO 99 (transliteration); Sarkar 1972: 266-267; Christie list 74 (translation)
Bhaṭāra i Dihyang		mid-late 9th C	MNJ: 5823	Central Java : Batur, Banjarnegara	OJ	the neck of a broken silver urn	Christie list 70
D182		mid-late 9th C	MNJ: D182	East Java : Malang	prakrit/skt	stele	Christie list 61
Syukan		late 9th C.?	BP3y: BG1253	Central Java : Seyegan, Sleman	OJ	pillar	Christie list 117
Jragung		late 9th C.?	BP3y: BG37	Central Java: Brebah, Sleman	OJ	pillar	Christie list 117a (transliteration)
HariñjingA	Sukabumi	804-03-25 (726SE)	MNJD: 173	East Java : Pare, Kediri	OJ	stele	MKAWL 78: 116-117, 120-121
the stone of Dieng	Hanasima-stone, śrī Manggala I	(731SE)	MNJ: D58	Central Java : Dieng	OJ	stele	OJO 2 (transliteration), Sarkar 1971: 49-52, Christie list 84 (translation)
Gandasuli II	sang hyang Wintang	about 810 A.D		Central Java : Temanggung	OMa?	stele	OJO 105. A/B (transliteration); Sarkar 1972: 278-281, 仲田 1988: 2-14 (transliteration); Christie list 15 (translation)
Dieng III	Temple inventory	815-45?	MNJ: D11	Central Java : Dieng	OJ	stele	OJO 96 (transliteration); Sarkar 1972: 261-262; Christie list 31 (translation)
Garung	Pengging	819-03-21 (741SE)	MRPS: ?	Central Java : Banyudono, Boyolali	OJ	copper plate	OV (1920): 136 (transliteration); OV (1928): 65 (transliteration); Sarkar 1971: 53-55
Kamalagi	Kuburan Candi	821-04-30 (743SE)	in situ / est.2720	Central Java : Candimulya, Magelang	OJ	stele	TBG 70: 157-160; Sarkar 1971: 56-63
Kayumwungan	Karang Tengahan	824-05-26 (746SE)	MNJ: D27 (b)• D34(e) *a, c, d: lost	Central Java : Temanggung	Skt/OJ	stele	Casparis 1950: 38-50; OJO 4 [c, e (D34)] (transliteration); Sarkar 1971: 64-75
Dang Pu Hawang Gelis	Gondosuli I	827-05-07 (749SE)	lost, MVL: 2993 (a plaster cast)	Central Java : Temanggung	OMa	stele	OJO 3 (transliteration); Sarkar 1971: 75 (i)-75 (ii)
Kuṭi	Jaha	840-07-18 (762SE)	MNJ: E2	East Java : Sidoarjo	OJ	copper plate	KO 2: 7-10 (transliteration); PKMN : 16-21 (transliteration); Sarkar 1971: 76-99

附表1

本稿で使用する刻文の表

Tri Těpussan I	Candi Pětung I, Trui Těpussan I	842-11-11 (764SE)	MNJ: D107	Central Java : Magelang	OJ	stone	OJO 10 (transliteration); Sarkar 1971: 100-101(transliteration); 仲田1988: 14-17(transliteration)
Tri Těpussan II	Candi Pětung II, Trui Těpussan II	842-11-11 (764SE)	MNJ: D39	Central Java : Magelang	OJ	stone	OJO 17 (transliteration); Casparis 1950: 79-80; Sarkar 1971: 102-111; 仲田1988: 17-26 (transliteration)
Sucen I	Parasol á éclipse, Mandang	843-3-19 (765SE)	MNJ: 685a-c (B685a)	Central Java : Temanggung	OJ	silver umbrellas	NBG 26: 21-22; Sarkar 1971: 112-113
Layuwatang	Kadiluwih	845-03-12 , or 846-02-28 (767SE)	MNJ: D141	Central Java : Gunung Wukir, Magelang	OJ	stele	NBG 58: 52-53
Tulang Air I	Candi Pěrot I	850-06-15 (772SE)	MNJ: D7	Central Java : Candi Perot, Temanggung	OJ	stone	OJO 6 (transliteration); TBG 70: 161; Sarkar 1971: 114-124; 仲田1989: 2-13 (transliteration)
Tulang Air II	Candi Pěrot II	850-06-15 (772SE)	MNJ: D80	Central Java : Candi Perot, Temanggung	OJ	stele	OJO 5 (transliteration); Sarkar 1971: 125-126; 仲田1989: 13-20 (transliteration)
Wayuku	Dieng	854-03-16 (776SE)	MNJ: D10	Central Java : Dieng	OJ	stele	KO 25: 34 (transliteration); Sarkar 1971: 127
Śiwagr̥ha		856-11-12 (778SE)	MNJ: D28	Central Java : unknown	Skt (verse)/OJ (verse)*with liberal	stele	Casparis 1956: 311-330; BEFEO 47: 24 (transliteration; in part) ; Sarkar 1971: 128-130 (in part)
Kṛttikavasalinga	Ratu Baka a	856-57 (778SE)	MNJ: D104(a)	Central Java : Ratu boko	skt	stele	Casparis 1956: 270-272; Christie list 55 (translation)
Tryambakalingga	Ratu Baka b	856-57 (778SE)	BP3y: BG533	Central Java : Ratu boko	Skt	stele	Casparis 1956: 273-277; PAY: 23-24; Christie list 56
Haralingga	Ratu Baka c	856-57?	BP3y: BG529	Central Java : Ratu Boko	Skt	stele	TBG 75: 443.n.3; Casparis 1956: 278-279
Bulai	Gunung Murya	860-3-27 (782SE)	MNJ: E82// OD11859	Central Java : Pucang Gading river, Demak	OJ	copper plate	BEFEO 47: 25 (transliteration)
Kañcana	BungurA, Gěḍangan	860-10-31 (782SE)	MVL: 3059774 (401/22)	East Java : Gedangan river, Surabaya	OJ	copper plate	VG 7: 32-41(transliteration); VBG 39 (2) (Kawi-Oorkonden): 3-9 (transliteration); Sarkar 1971: 133-162

附表1

本稿で使用する刻文の表

Gunung Wule	Brahol	861-12-19 (783SE)	MNJ: D74	Central Java : Wonosobo	OJ	stele	NBG 27: 16 (transliteration); Sarkar 1971: 163-164
Talaga Tañjung	Kali Beber	862-1-5 (783SE)	MNJ: D20	Central Java : Wonosobo	OJ	stele	OJO 7 (transliteration) ; Sarkar 1971: 165-170
Wukiran	Pereng, Coll. Klä ring	863-01-25 (784SE)	MNJ:D77	Central Java : Pereng (near Prambanan)	Skt (verse)/OJ	stele	KO 23: 33-34 (transliteration); Agastya: 45-51 (translation); Sarkar 1971: 171-177
Wanua Těngah I	Candi Argapura I	863-06-10 (785SE)	MNJ: D81	Central Java : Candi Argapura, Temanggung	OJ	stele	OJO 8 (transliteration); Sarkar 1971: 178-179 (transliteration)
Wanua Těngah II	Candi Argapura II	863-06-10 (785SE)	est.177, 118	Central Java : Candi Argapura, Temanggung	OJ	stele	BEFEO 47: 28 (Transcriptipn); Sarkar 1971: 180
Mangulihi A	Dieng II, Diyeng fund. L	864-04-03 (786SE)	est.2102, DP2526-2527	Central Java : Wonosobo	OJ	stele	Christie list 73
Sarawaden'	upit	866-11-11 (788SE)	BKI 131, 2/3: pl.	Central Java : Klaten	OJ	pillar	BKI 131 (2/3): 248; Christie list 75 (translation)
Sumundul	Candi Kedulan	869-8-15 (791SE)	BP3y	Central Java : Kalasan, Sleman	OJ	stele	PAY: 27-28
Pananggaran	Candi Kedulan	869-8-15 (791SE)	BP3y	Central Java : Kalasan, Sleman	OJ	stele	PAY: 31-33
Kurambitan I	Krapyak	869-11-17 (791SE?)	est.2743	Central Java : Magelang	OJ	stele (lingga)	TBG 74: 85-93; Sarkar 1971: 181-182; Christie list 76
Kurambitan II	Rambianak	869-11-17 (791SE)	DP19913-19930, 21044-21051	Central Java : Magelang	OJ	stele (lingga)	Boechari 2012: 332-334 (transliteration); Christie list 77 (translation)
Mangulihi B	Dieng III, Diyeng fund. L	870-09-26 (792SE)	est.2102, DP2528-2529	Central Java : Wonosobo	OJ	stele	Christie list 78 (translation)
Candi Abang		872-8-26 (794SE)	est.2739	Central Java : Candi Abang, Yogyakarta	OJ	pillar	Sarkar 1971: 183 (transliteration); Christie list 79
Alih Tinghal	Candi Bongkal	872-74?	MNJ: D83	Central Jawa: Candi Bongkal, Temanggung	OJ	pillar	OJO 109 (transliteration); Stutterheim 1932: 292-301; Sarkar 1972: 289 (transliteration); Christie list 80
Paki Hum Jah		872-74	est.2996 (missing)	Central Jawa?	OJ	pillar	Christie list 81 (transliteration)
Tunahan	Polengan I	873-1-14 (794SE)	Museum Sonobudoyo: 12515//OD13691	Central Java : Kalasan, Sleman	OJ	copper plate	BEFEO 47: 30 (in part) ; Sarkar 1971: 184 (in part) ; Christie list 82 (translation)

附表1

本稿で使用する刻文の表

Waharu I	Kēboan Pasar	873 -4-20 (795SE)	MNJ: E3	East Java : Sidoarjo	OJ	copper plate	OJO 9 (transliteration); BEFEO 47: 31 (in part) ; PKMN: 22-25 (transliteration); Sarkar 1971: 185-193; Christie list 83
Śri Manggala II	Candi Asu	874-3-24 (796SE)	MNJ: D144	Central Java : between Candi Asu and Candi Lumbung, Mangelang	OJ	pillar	OJO 11 (transliteration); TBG 74: 86-88 (translation); Sarkar 1971: 194-196; Christie list 85
Wihāra	Kērtā	874-7-17~8-16 (796SE)	est.385	Central Java : Yogyakarta	OJ	stone	Christie list 86
Wihara I		874 (796SE)	BP3y: BG323	Central Java : Pleret, Bantul	OJ	stele	PAY: 35
Wihara II		874 (796SE)	BP3y: BG774	Central Java : Pleret, Bantul	OJ	stele	PAY: 37
Anggēhan	Klorok	875-2-25 (796SE)	MRPS: est.2707	Central Java : Klaten	OJ	pillar	Sarkar 1971: 197-198; Christie list 87 (translation)
Humāṇḍing	Polengan II	875-4-11 (797SE)	Museum Sonobudoyo: 12514//OD13692	Central Java : Yogyakarta	OJ	copper plate	BEFEO 47: 32 (transliteration; in part); Sarkar 1971: 199 (in part); Christie list 88
Jurungan	Polengan III	876-12-30 (798SE)	Museum Sonobudoyo: 12513//OD13695	Central Java : Kalasan area	OJ	copper plate	BEFEO 47: 33 (transliteration; in part); Sarkar 1971: 200; Christie 1996: 276-278 (translation); Christie list 89
Haliwangbang	Polengan IV	877-11-22 (799SE)	Museum Sonobudoyo: 12512//OD13701	Central Java : Kalasan area	OJ	copper plate	BEFEO 47: 33 (transliteration; in part); Sarkar 1971: 201 (in part); Christie list 90
Supit	Kwak IV, Mulak III	before 878		Central Java : Magelang	OJ	copper plate	KO 12: 23 (transliteration); Christie list 92 (translation)
Marsēmu		before 878	MNJ: E16	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	KO 13: 23; Christie list 92 (translation)
Kapuhunan	Pintang Mas	878 -8-1 (800SE)	MVL: OD10017	unknown (Dieng-Magelang area?)	OJ	copper plate	Agastya: 74-76; Sarkar 1971: 202-207; Christie list 94
Mulak I	Ngabean I	878-10-3 (800SE)	MNJ: E5	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	KO 11: 21-23 (transliteration); PKMN: 28-30 (transliteration); Sarkar 1971: 208-214; Christie list 95 (translation)
Mamali	Polengan V	878-11-23 (800SE)	Museum Sonobudoyo: 12516//OD13707,	Central Java : Yogyakarta	OJ	copper plate	BEFEO 47: 34 (transliteration; in part); Sarkar 1971: 215-216 (in part); Christie list 96

附表1

本稿で使用する刻文の表

Kwak III		878-883?	MNJ: E18	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	OJO 106 (transliteration); Sarkar 1972: 282-283(transliteration)
Kwak I	Ngabean II	879-7-27 (801SE)	MNJ: E6	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	OJO 22 (transliteration); PKMN: 30-32 (transliteration); Sarkar 1971: 217-226; Christie list 98
Kwak II	Ngabean III	879-7-27 (801SE)	MNJ: E7	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	OJO 13 (transliteration); PKMN: 32-33 (transliteration); Christie list 99 (translation)
Salingsingan I/II	Central Java	880-5-2? (802SE)	MNJ: E8A	unknown (Kedu?)	OJ	copper plate	KO 10: 20-21 (without second plate) (transliteration); PKMN: 34-37 (transliteration); Christie list 100 (translation)
Salimar I	Prambanan	880-10-10 (802SE)	MNJ: D45	Central Java : near Prambanan	OJ	pillar	OJO 14 (transliteration); Sarkar 1971: 241-243; Christie list 101 (translation)
Salimar II	Nanggulan II	880-10-10 (802SE)	MNJ: D46	Central Java : Yogyakarta	OJ	pillar	OJO 15 (transliteration); Christie list 102 (translation)
Salimar III	Papringan	880-10-10 (802SE)	est.2740a	Central Java : Bantul	OJ	pillar	TBG 73: 99-100 (transliteration); Christie list 103 (translation)
Salimar IV		880-10-10(802SE)	BP3y: BG36	Central Java : Sleman	OJ	pillar	PAY: 40-41; Riboet 2003: 291-
Salimar V		880-10-10(802SE)	BP3y: BG254	Central Java : Sleman	OJ	pillar	PAY: 44-45
Salimar VI		880-10-10(802SE)	BP3y: BG852	Central Java : Gondokusuman, Yogyakarta	OJ	pillar	PAY: 48; Riboet 2003: 292-293
Wuatan Tija	Manggung	880 (803SE) /881 (802SE)	private collection?	Central Java : Gunung Kidul, Yogyakarta	OJ	copper plate	TBG 75: 437-443 (translation) ; OV (1925).Bijl. K: 172-173 (transliteration [fragment-Resik]); OV (1926).Bijl. B: 60 (transliteration[Museum-fragment]); Sarkar 1971: 250-261; Christie list 104
Pëndēm		881-3-19 (803SE)	MNJ: D62	Central Java : Loano, Purworejo	OJ	stone	Sarkar 1971: 264-265 (in part) ; Christie list 106 (translation)
Ra Tawun I	Ngabean IV	881-7-14 (803SE)	MNJ: E9	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	KO 14: 23-24 (transliteration); PKMN: 37 (transliteration); Sarkar 1971: 266-271

附表1

本稿で使用する刻文の表

Ra Tawun II	Ngabean V	881-7-14 (803SE)	MVL: OD10023	Central Java : Dieng	OJ	copper plate	OJO 16; Sarkar 1971: 272-275
Pastika	Trujuk, G.Gondang	881-07-31 (803SE)	MNJ: D64	Central Java : Trucuk, Klaten	OJ	pillar	NBG 26: 74-75 (translation); Sarkar 197: 276-277
Taragal	Polengan VI	881-11-20 (802SE)	Museum Sonobudoyo: 12511/12517//OD13	Central Java : Yogyakarta	OJ	copper plate	BEFEO 47: 36 (transliteration; in part); Sarkar 1971: 262-263; Christie list 105 (translation)
Sang Pamgat Swang		881 (803SE)	Museum Ronggowarsito, Semarang?	Central Java: Magelang	OJ	pillar	Christie list 109a (translation)
Ramwi	Ngabean VI	882-3-29 (804SE)	MNJ: E10	Central Java : Magelang	OJ	copper plate	KO 15: 24-26 (transliteration); PKMN: 38-41 (transliteration); Sarkar 1971: 278-287; ; Christie list 110 (translation)
Indrokilo	Salingsingan III	882 (804SE)	BP3j: 508//Museum Prambanan?	Central Java : Dieng	OJ	stele	Christie list 112 (translation)
Kalirungan	Rhambonin	883-2-26 (804SE)	MVL: 3010682 (5392)/OD10021-10022	Central Java : Yogyakarta	OJ	copper plate	Boechari 2012: 478 (in part); Christie list 114
Ngruweng		883(-884) (804SE)	Museum Prambanan	Central Java : Klaten	OJ	stele	Sukarto 1969: 22-23
Kurungan	Randusari II	885-4-29 (807SE)	MRPS: A.504//OD14454-14457 (photo)	Central Java : Klaten	OJ	copper plate	Stutterheim 1940b: 29-30; OJO 29
Kaduluran	Kluwangan	885 (807SE)	Museum Prambanan	Central Java : Klaten	OJ	copper plate	Sukarto 1969: 6-9
Munggu Antan	Bulus, Tumbu	887-02-09 (808SE)	MNJ: D93	Central Java : Balak, Magelang	OJ	stone	OJO 18 (transliteration); Sarkar 1971: 288-290
Er Hangat	Ratanira	c.888	MNJ: E17	?	OJ	copper plate	OJO 104 (transliteration); PKMN: 53-56 (transliteration); Sarkar 1972: 275-277
Poh Dulur	Balak	890 (812SE)	MNJ: E46//OD2153/2154	Central Java : Balak, Magelang	OJ	copper plate	PKMN: 107-109 (transliteration); Barret Jones 1984: Appendix 6
Balingawan	Singasari	891-04-13 (813SE)	MNJ: D54 (stone)/D109 (Gaṇeśa statue)	East Java : Singosari, Malang	OJ	stone/Gaṇeśa statue	OJO 19 (transliteration)(stone)、OJO 20 (transliteration) (Gaṇeśa statue)

附表1

本稿で使用する刻文の表

Wadihati	Dieng V	891-4-13~28 (813SE)	MNJ: D30	Central Java: Dieng	OJ	stele	OJO 98 (transliteration); Sarkar 1972: 265-266; Christie list 124 (translation)
Panunggalan		896 (818SE)	MNJ: E11	Central Java : ?	OJ	copper plate	KO 9: 19-20 (transliteration); PKMN: 41-42 (transliteration); Sarkar 1971: 307-311
Tělahap		899 (820SE)	est.123-124	Central Java : Temanggung	OJ	stele	Damais 1955: 117 (transliteration; in part)
Penampihan		899 (820SE)	Dinas Purbakala, Jakarta: 435	East Java : Sendang, Tulungagung	OJ	stele	OJO 21 (transliteration); Sarkar 1971: 312-314
Ayam Těas I	Purwarěja	901-1-1 (822SE)	MNJ: E69	Central Java : Purworejo	OJ	copper plate	JBG 5: 121-122 (transliteration); PKMN: 137-139 (transliteration); Sarkar 1972: 1-
Taji	Panaraga	901-4-8 (823SE)	MNJ: E12	East Java : Madiun?	OJ	copper plate	TBG 27: 544-548 (transliteration); OJO 23 (transliteration), PKMN: 42-46 (transliteration); Sarkar 1972: 4-
Kayu Ara Hiwang	Bara Těngah	901-10-5 (823SE)	MNJ: D78	Central Java : Purworejo	OJ	stele	OJO 22 (transliteration); Sarkar 1972: 15-20
Luītan		901-4-16 (823SE)	Museum Ronggowarsito (Semarang)	Central Java : Cilacap	OJ	copper plate	TPB: 12
Rongkab	Paṭi	901 (823SE)	MNJ: E83	unknown (Central Java?)	OJ	copper plate	Barret Jones 1984: Appendix 2; PKMN: 170-172 (transliteration)
Watukura A	Copenhagen	902 (824SE)	private collection?	unknown	OJ	copper plate	OJO 24 (transliteration); Sarkar 1972: 21-23; Christie 1996: 280 (translation; in part)
Panggumulan I	Kěmbang Arum A	902-12-27 (824SE)	Museum Sonobudoyo	Central Java : Sleman	OJ	copper plate	OV (1925): 41-49 (transliteration); Sarkar 1972 : 24-41; JGIS (1987); TPB: 13-22
Siddhayoga	Panggumulan II, Kěmbang Arum B	903 (825SE)	private collection?	Central Java : Sleman	OJ	copper plate	OV (1925): 41-49 (transliteration); Sarkar 1972: 24-41; JGIS (1987); TPB: 13-22
Tělang I	Wanagiri I	904	Mangkunegara collection	Central Java : near Solo river, Wonogiri	OJ	copper plate	TBG 74: 285-290 (transliteration); Sarkar 1972:

Tělang II	Wanagiri II	904-1-11 (825SE)		Central Java : near Solo river, Wonogiri	OJ	copper plate	TBG 74: 298-295; Sarkar 1972: 42-50
Rumwiga I		904-12- 28(826SE)	BP3y: BG637	Central Java : Bantul	OJ	copper plate	PAY: 74-79 ; Machi Suhadi 1983b: 37-40
Rumwiga IIA		905 (827SE)	BP3y: BG639	Central Java : Bantul	OJ	copper plate	PAY: 82-84; Machi Suhadi 1983b: 42, 44
Rumwiga IIB			BP3y: BG638	Central Java : Bantul	OJ	copper plate	PAY: 88-90; Machi Suhadi 1983b: 43, 45
Poh	Randusari I	905-7-17 (827SE)	OD14439	Central Java : Prambanan	OJ	copper plate	Stutterheim 1940a : 3-28
Kubukubu	Kubukubu Bhadrī	905-10-17 (827SE)	MNJ: E75	East Java : unknown	OJ	copper plate	Barret Jones 1984: Appendix 3; PKMN: 155-159 (transliteration)
Kikil Batu I	Java Central	905-11-28 (827SE)	MNJ: E8b	Central Java : unknown	OJ	copper plate	KO 10: 20-21 (transliteration); PKMN: 34-37 (transliteration)
Kikil Batu II		905 (827SE)	MNJ: E8b	Central Java : unknown	OJ	copper plate	KO 10: 21 (transliteration; only first plate); PKMN: 34-37 (transliteration)
Palēpangan	Boro Budur	906-8-15 (828SE)	MNJ: E66	Central Java : near Borobudur	OJ	copper plate	OV (1917): 88-98; JBG (1937): 154; JGIS (1939): 124; Sarkar 1972: 55-59; PKMN: 124-126 (transliteration); Christie 1996: 281-282 (translation; in part)
Kaṇḍangan	Gunung Kidul	906-9-11 (828SE)	MNJ: D17	Central Java : Gunung Kidul, Yogyakarta	OJ	stele	OJO 25 (transliteration); Sarkar 1972: 60-63; KO 24: 34 (transliteration)
Rabwan	Pekalongan	906 (827SE)	Dinas Purbakala, Jakarta	Central Java : Mt.Kendeng, southeast of Pekalongan	OJ	bell	Boechari 1963b; Boechari 2012: 341-343; Arlo 2014: 132
Kasugihan		907-1--18 (829SE)	MRPS: G2.17A (193)	unknown (Central Java?)	OJ	copper plate	OV (1922): 85, n.1 (transliteration); OV (1928): 65 (transliteration); Sarkar 1972:
Mantyasih I	kědu	907-4-11 (829SE)	MRPS: G2.18, G2.19/OD8737	Central Java : near Parakan, Temanggung?	OJ	copper plate	TBG 67: 172-215 (transliteration); Sarkar 1972:
Sangsang	Amsterdam	907-5-4 (829SE)	Koninklijk Instituut voor de Tropen: N/958	Central Java : Pekalongan or Tegal	OJ	copper plate	BKI 95: 441-444 (transliteration); Sarkar 1972: 85-98
Rukam		907-10-11	BP3j: 1421, 1422	Central Java : Parakan, Temanggung	OJ	copper plate	TPB: 23-28

附表1

本稿で使用する刻文の表

Kiněwu		907-11-20 (829SE)	Museum Blitar	East Java : Blitar, Kediri	OJ	Gaṇeśa statue	KO 26: 35 (transliteration); OJO 26 (transliteration); Barret Jones 1984: Appendix 1 (translation); Sarkar 1972: 108-112
Guntur	Diedukusman	907 (829SE)	Maritime Museum (Rotterdam)	unknown	OJ	copper plate	TBG 32: 146-148; VBG 39 (2) (Kawi-Oorkonden No.2): IA.1-2 (transliteration); Sarkar 1972: 99-101
Mantyasih III		907	MNJ: E19	Central Java :?	OJ	copper plate	OJO 108 (transliteration); PKMN: 57-59 (transliteration); Sarkar 1972: 285-288
Boechari 2012: 480-483		907 (829SE)	private collection	?	OJ		Boechari 2012: 480-483
Wanua Těngah III		908	BP3j: 1118, 1119	Central Java : Kaloran, Temanggung	OJ	copper plate	Riboet 2003: 298-309; Boechari 2012: 484-491(transcription)
Wukajana		c. 908	Koninlijk Instituut voor de Tropen	Central Java : Pekalongan or Tegal	OJ	copper plate	BKI 95: 444-446 (transliteration)
Barsahan		c. 908	MNJ: E68	unknown	OJ	copper plate	PKMN: 135-137 (transliteration)
Turu Mangambil	Pěnděm II	c. 908/884(-885) (806?)	MNJ: D63	Central Java : Purworejo	OJ	stele	OJO 33 (transliteration); Sarkar1971: 291-292
Kaladi	Pěnanggungan	909-6-27 (831SE)	MNJ: E71	East Java : Penanggungan, Surabaya	OJ	copper plate	Barret Jones 1984: Appendix 4; PKMN: 147-153 (transliteration)
Bulusan	Samalagi	mahamantri daksa	Museum Prambanan: BG839	Central Java : Bantul	OJ	copper plate	PAY: 93-95 (transliteration); Boechari 2012: 479-480
Tulangan	Jědung I	910-8-13 (832SE)	MVL: 3029227 (3340)	Surabaya?	OJ	copper plate	OJO 28 (transliteration); Sarkar 1972: 120-122
Taji Gunung		910-12-21 (194sanjaya)	MNJ: D6	Central Java : Taji, near prambanan?	OJ	stele	OJO 36 (694) (transliteration); Sarkar 1972: 123-134
Wuru Tunggal	Yogyakarta	912 (833SE)		prambanan?	OJ	copper plate	OJO 55 (transliteration); Sarkar 1972: 135-137; Christie 1996: 282 (translation; in part)
Timbanan Wungkal	Gatak	913-2-11 (196sañ jaya)	MNJ: D36	Central Java : Gata, near prambanan	OJ	stele	OJO 35 (transliteration); Sarkar 1972: 138-142
Pěsinḍon I		914-8-14 (836SE)	MNJ: B791	Central Java : Wonosobo	OJ	silver plate	VG 7: 13, 15; TBG 25: 464; Sarkar 1972: 143-144

附表1

本稿で使用する刻文の表

Pēsīṇḍon II		914-8-14 (836SE)	MNJ: B791	Central Java : Wonosobo	OJ	gold plate	VG 7: 13, 15; TBG 25: 464; Sarkar 1972: 143-144
Tihañ		914-11-8 (836SE/198sanjaya)	BP3j: 1179	Central Java : Srumbung, Magelang	OJ	copper plate	Riboet 2003: 309-312; Boechari 2012: 493-494 (transliteration)
Wintang MasA		before 915	MVL: S.J.32	unknown	OJ	copper plate	KO 20: 30-31 (transliteration); Agastya: 77-78
Sugih Maněk	Singasari	915-9-13 (837SE)	MNJ: D87	East Java : Singosari, Malang	OJ	stele	OJO 30 (transliteration); Sarkar 1972: 145-160
Er kuwing	Barāhāsrama	after 915	MVL: 2120	Central Java : Yogyakarta area?	OJ	copper plate	KO 17: 27-29 (transliteration); Sarkar 1972: 183-191
Kiringan	Jatibēdug	917-11-14 (839SE)	MNJ: E64	Central Java : Ngawen, Yogyakarta	OJ	copper plate	JBG (1936): 191; PKMN: 122-123 (transliteration); Barret Jones 1984: Appendix 5
Piling Piling		c. 918	MNJ: D95	East Java : Malang	OJ	stele	OJO 53/54 (transliteration)
Lintakan		919-7-12 (841SE)	MNJ: E13	Central Java : Yogyakarta	OJ	copper plate	KO 1: 1-6 (transliteration); PKMN: 46-52 (transliteration); Sarkar 1972: 162-182
Wintang Mas B		919-10-12 (841SE)	MVL: 2299	unknown	OJ	copper plate	KO 20: 30-31 (transliteration); Sarkar 1972: 192-195
Hariñjing B	Sukabumi	921-9-19 (843SE)	MNJ: D173	East Java : Pare, Kediri	OJ	stele	MKAWL 78: 117-118, 121-122; Sarkar 1972: 196-197 (transliteration; in part)
Wuruḍu Kidul A	Central Java/Singasari III	922-4-20 (844SE)	MNJ: E63a	Central Java : Wurudu Kidul (Jones 1984)/East Java: Malang (Nakada 1982)	OJ	copper plate	TBG 75: 444-456; PKMN: 120-122 (transliteration); Sarkar 1972: 198-206
Wuruḍu Kidul B	Central Java/Singasari IV	922-5-6 (844SE)	MNJ: E63b	Central Java : Wurudu Kidul (Jones 1984)/East Java: Malang (Nakada 1982)	OJ	copper plate	TBG 75: 444-456; PKMN: 120-122 (transliteration); Sarkar 1972: 198-206
Gilikan I		c. 923		unknown	OJ	copper plate	OJO 102 (transliteration); Sarkar 1972: 269-272 (transliteration)
Gilikan II		c.923		unknown	OJ	copper plate	OJO 103 (transliteration); VBG 39 (2) (Kawi-Oorkonden No.2): IB. 2-3 (transliteration); Sarkar 1972: 273-274 (transliteration)
KO XVIII		924 (846SE)		unknown		copper plate	KO 18: 29-30 (transliteration); Sarkar 1972: 207-212

附表1

本稿で使用する刻文の表

Kambang Śrī	Jēḍung II	926-10-14 (848SE)	Museum Mojokerto //est143	East Java : Sukorame, Lamongan	OJ	stele	OJO 33 (transliteration); Sarkar 1972: 213-214
Hariñjing C	Sukabumi	927 (849SE)	MNJ: D173	East Java : Pare, Kediri	OJ	stele	MKAWL 78: 118-119, 122
Palēbuan	Gorang gareng	927 (849SE)		East Java : Madiun	OJ	copper plate	TBG 75: 420-437 (translation); Sarkar 1972: 215-219
Kinawē	Tañjung Kalang	928-2-28 (849SE)	MNJ: D66	East Java : Berbek, Nganjuk	OJ	stele	OJO 32 (transliteration); BEFEO 47: 53-54 (transliteration); Sarkar 1972:
Sangguran	Minto Stone, Ngandat, Minto	928-8-2 (850SE)	Minto House (Scotland)•BGII853 (photo)	East Java : Junrejo, Batu	OJ	stele	OJO 31 (transliteration); KO 29: 37 (transliteration); Sarkar 1972: 227-248
Wulkan	Sri Wedari	928-11-14 (849SE)	MRPS: 281, 281a	unknown (Central Java?)	OJ	copper plate	OV (1928): 66-67 (transliteration); Sarkar 1972: 220-223 (transliteration)
Air Kali		928 (850SE)	MNJ: E34	East Java : Mt. Kawi	OJ	copper plate	PKMN: 95-97 (transliteration); Sarkar 1972: 249-254
Panggumulan III	Blota	928 (850SE)	Museum Mojokerto //est.535	East Java : Mojokerto	OJ	stele	OJO 34 (transliteration); Sarkar 1972: 255-260
Kambang Śrī II	Jēḍung III	928(-929) (850SE)	Museum Mojokerto //est.142-143, 265	East Java : Mojokerto	OJ	stele	OJO 33 (transliteration)
Kampak		before929	MNJ: D21	East Java : Surabaya	OJ	stele	OJO 52 (transliteration)
Gulunggulung	Singasari V	929-4-20 (851SE)	MNJ: D88	East Java : Malang	OJ	stele	OJO 38 (transliteration); 仲田 1990: 2-21 (transliteration)
Waharu II	Jēnggala	929-5-24 (851SE)	lost?/ E4 (PKMN) ?	East Java : Sidoarjo	OJ	copper plate	OJO 42 (transliteration)
Sarangan	Mojokerto I	929-8-05 (851SE)	MNJ: D14	East Java : Mojokerto	OJ	stele	OJO 37 (transliteration)
Linggasuntan	Lawajati	929-9-03 (851SE)	MNJ: D103	East Java : Malang	OJ	stele	OJO 39 (transliteration); 仲田 1990: 21-33 (transliteration)
Cunggrang I	Suci/sukci	929-9-18 (851SE)	est.2647	East Java : Pasuruan	OJ	stele	OJO 41 (transliteration)
Cunggrang II	Gunung Kawi	929-9-18 (851SE)	OD9524/ lost?	East Java : Malang?	OJ	copper plate	TBG 65: 231-238
Poh Rinting	Glagahan	929-10-21 (851SE)	Museum Mojokerto: 82	East Java : Jombang	OJ	stele	OJO 40 (transliteration)

附表1

本稿で使用する刻文の表

Jěrujěru	Singasari VI	930-5-26 (852SE)	MNJ: D70	East Java : Malang	OJ	stele	OJO 43 (transliteration); 仲田 1990: 33-51(transliteration)
Waharu IV	Gresik I	931-8-12 (853SE)	MNJ: E20a-f	East Java : Surabaya	OJ	copper plate	KO 7: 15-18 (transliteration); PKMN: 59-65 (transliteration)
inscription of Rakryan Juru Pangambat		932 (854SE)		West Java : Bogor	OMa	stele	Machi Suhadi 1983a: 70 (transliteration); Bosch 1941: 49-50
Gěwěg	Těngaran	933-8-14 (855SE)	est.494	East Java : Jombang	OJ	stele	OJO 45 (transliteration)
Sumbut	Gading/Sidoarjo	933-10-02 (855SE)	MNJ: E31	East Java : Sidoarjo	OJ	copper plate	KO 6: 14 (transliteration); PKMN: 92-93 (transliteration)
Hěring	Kujon Manis	934-5-22 (856SE)	MNJ: D67	East Java : Kediri	OJ	stele	OJO 47 (transliteration); Christie 1996: 279 (translation; in part)
Wulig	Bakalan	935-1-08 (856SE)	Museum Mojokerto: 320 //est.502	East Java : Mojokerto	OJ	stele	OJO 44 (transliteration)
Añjuk Ladang	Candi Lor	937-04-10 (859SE)	MNJ: D59	East Java : Candi Lor, Kediri	OJ	stele	OJO 46 (transliteration)
Sobhamṛta	Bětra	939-5-02 (861SE)	MVL: pl.1, 3 (2092-2093) //British Museum 2, 4, 5, 6, 7	East Java : Sidoarjo	OJ	copper plate	KO 22: 32-33 (transliteration)
Kamban	Pělěm	941-3-19 (863SE)	MNJ: E21a-c	East Java : Mojokerto	OJ	copper plate	OJO 56 (transliteration); PKMN: 65-67 (transliteration)
Paraḍah II	Siman II	943-7-10 (865SE)	lost? est.395	East Java : Kediri	OJ	stele	OJO 48 (transliteration)
Muñcang	Malang II	944-3-03 (866SE)	est.402, 2646 /Balai Penyelamatan Benda Purbakala Mpu Purwa Malang	East Java : Singosari, Malang	OJ	stele	OJO 51 (transliteration)
Wuraṇḍuian	Malang III	948-2-23?	lost	East Java : Malang	OJ	copper plate	OJO 50 B (transliteration)
Tija dan Haru Haru		Siṇok era	Kayurangan Church (Malang)	East Java : ?	OJ	copper plate	Boechari 2012: 495-499; OV (1925): 57

略称

BP3j=Balai Pelestarian Peninggalan Purbakala Jawa Tengah* 調査（2011年）後、2012年にBalai Pelestarian Cagar Budaya Jawa Tengah (BPCB Jateng)に名称が変更されている。

BP3y=Balai Pelestarian Peninggalan Purbakala Yogyakarta* 調査（2011年）後、2012年にBalai Pelestarian Cagar Budaya Daerah Istimewa Yogyakarta (BPCB DIY)に名称が変更されている。














































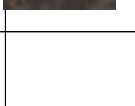




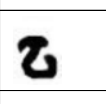
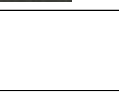
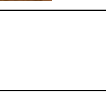



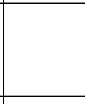










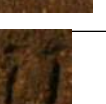




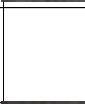

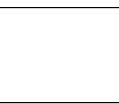
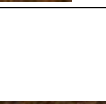
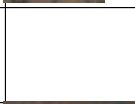
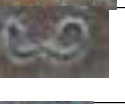

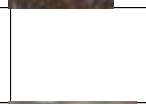



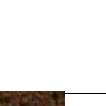









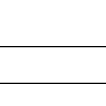










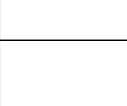
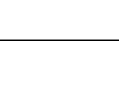



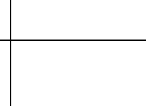









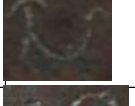












































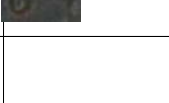















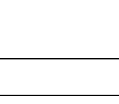


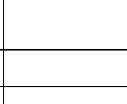

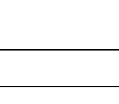
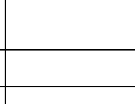


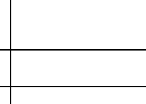

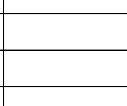
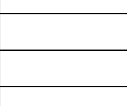
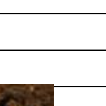
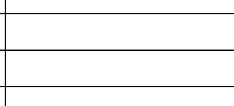
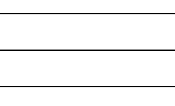
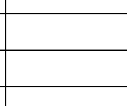
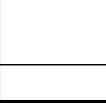



MNJ=Museum Nasional Jakarta/ MRPS=Museum Radyapustaka Solo/ MVL=Museum Volkenkunde Leiden

OD=Oudheidkundig Dienst (写真整理番号) / DP=Dinas Purbakala (Jakarta) (写真整理番号ODの後続)

est.=rubbing (拓本)
















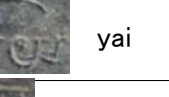









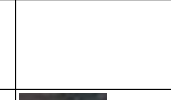































































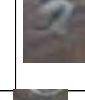


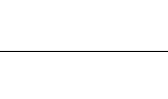
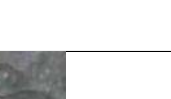

































附表2

刻文のローマ字転写のための文字表

	Ratawun I 881	Mulak 878	Kwak II 879	Munggu Antan 886	Panunggalan 896	Rukam 907	Tihan 914	Lintakan 919
ka								
kha								
ga								
gha								
ña								
ta								
tha								
da								
dha								
na								
ta								
tha								
ɖa								
ɖha								
pa								
pa								
pha								
ba								
bha								
ma								
ca								
cha								
ja								
jha								
ña								
sa								
sa								
sa								
ha								
ya								
ra								
la								
wa								
a								
ā								
i								
ī								
u								
ū								
e								
o								
ai								
au								
am								
ah								
on								
r								
r̄								

附表2

刻文のローマ字転写のための文字表

	Ratawun I 881	Mulak 878	Kwak II 879	Munggu Antan 886	Panunggalan 896	Rukam 907	Tihan 914	Lintakan 919
I								
Ī								
(ā)					 ā			
(ai)					 bai		 yai	
(u)								
(o)								
(i)								
(ī)								
(ū)					 lū			
(ē)					 mē			
(ō)								
(e)								
(y)					 nyā			
r-		 rtti			 rvva	 rha	 rma	
(r)								
(r								
(ng								
(h								
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
0								

*文字の写真は著者が2011年9月にジャカルタ国立博物館、中部ジャワ考古遺物保存局にて撮影したものを使用した。Mulak刻文の「da」「ta」「ā」の文字は著者が撮影できなかった板に記された文字であるため、ライデン大学の特別デジタルコレクション（KERN E5）を参考に著者が記した。

附表3

シーマ定立における定立者・目的・規定一覧表

刻文名	発布年	主への言及(王でない者の恩恵)	定立者	シーマの目的	シーマとなる場所	義務(buat haji)	シーマへの立ち入り禁止	交易・生産規定(①②③)	高官の記述(高官リスト／贈り物リスト)	贈り物リストの有無	権利者(シーマ・DH・スカドゥカなど)
Kamalagi	821		sang pamgét wugaであるpu mangnĕp	?	Khipihakの水田とKamalagiの菜園とナヤカの居住地(?)					証人のみ	
Kayuwungan	824		rakarayān (patapā)nであるpu palār夫婦	?	水田(合計16hamat 1wha)					○	
Trui Tĕpussan	842		śrī kahulunan	Bhūmi sambhāraの寺院(kamūlān)	Trui tpussan村					○	
Tulang Air	850	王rakai pikatan	rakai patapānであるpu manukū	?	Tulang air				高官リスト	参加者リストのみ	
Wayuku	854		rakai sisairāであるpu wirājä	Abhayanandaの(rakai sisairāの)僧院(bihāra)	Wayukuの水田						
Siwagrha	856 (古ジャワ語部分)		samgat wantil ?	神(シヴァの住居)	水田(2tampah)						
Wukiran	862		rake walaingであるpu kumbhayoni (ハルの王sang ratu i haluの子孫)	sang hyang wināya (ガネーシャ?)への米粥(carua)	Wkiranの水田(2tampah)					水田が与えられた人々?	
Wanua Tĕngah I	863	王rakarayān kayuwangi pu lokapāla	rakai pikatanであるpu manukū	?	Wanua tangngah (KasuigihanのDamakの水田)(3barih)				高官リスト(一部不鮮明)		
Kurambitan I	869		samgat tiru raṇuであるpu apus	Salingsinganの(samgat tiru raṇuの)寺院(dhamma)	Kurambitanの水田(3tampah)						
Waharu	873		sang hadyan kuluptiruである(?) rakryan tolobong		Waharuの土地(5tampah)		MDHという記述はないが、watek i jroなどの立ち入りが禁止。	(①)に挙げられるものの列挙か? 三等分などの規定はない)		○(短い、一部不鮮明)	sang hadyang kuluptiru (DH)*シーマは彼の子孫によって相続される。[スカドゥカは記されるがその権利を誰が持つかは明記されない]
Śrī Mangala II	874		sang pamgat hinoであるpu apus	Salingsinganの集団(hummā)(あるいは従者kawadua hummā)?	Śrī mangalaの水田(南に44ḍpa、東に27ḍpa)					証人(食べ物と衣服を与えられる)	
Humandĕng	875	大王rakai kayuwangi	rakarayān i sirikanであるpu rakap	Gunung hyangの寺院(prāsāda)	Humandĕngの水田(4tampah)					○(wyawastha ning manusuk śīma)	
Jurungan	876		rakarayān i sirikanであるpu rakap	Gunung hyangの寺院(prāsāda)	Jurunganの藪(後に水田)(6tampah)					○(土地が属していたワトゥクのrakarayān i pagarwsi pu manusiに多くの贈り物が為されている。彼がその土地を与えた者と記される)	
Haliwangbang	877	大王rakai kayuwangi	rakarayān i sirikanであるpu rakap	明記なし					贈り物リストにsang pamgat wadihatiとsang pamgat makudur	○(wyawastha ning manusuk)	
Mulak I	878		rakarayān i wkaであるpu catura	Yupitの寺院(prāsāda)	藪(東72ḍpa、南63ḍpa)と水田(2tampah、1blah)					○(wyawastha ning manusuk śīma)	
Mamali	878		rakarayān i sirikan	Gunung hyangの(rakarayān i sirikan)の寺院(prāsada)	Mamaliのラーマの共同体の菜園(後に水田)(周囲の長さの合計331ḍpa)					○ / 証人	

附表3		シーマ定立における定立者・目的・規定一覧表									
刻文名	発布年	主への言及(王でない者の恩恵)	定立者	シーマの目的	シーマとなる場所	義務(buat haji)	シーマへの立ち入り禁止	交易・生産規定(①②③)	高官の記述(高官リスト／贈り物リスト)	贈り物リストの有無	権利者(シーマ・DH・スカドッカなど)
Kwak I	879	大王rakai kayuwangi	rakarayān i wkaであるpu catura	Kwak dhamの寺院(prā sada)	Kwakの原野(Stampah)(後に水田)	チャイトラ月とアスジ月の昼夜平分時に花かごを作る。			高官リスト / 贈り物リスト	○rakarayān i wka pu caturaによる(高官の名は見えるが王はみえない)	
Kwak II	879		rakarayān i wkaであるpu catura	Yupitの寺院(prāsāda)	Kwakの原野(Stampah)(後に水田)					○	
salimar III/IV	880		sang pamgat balakasであるpu balahāra	Kaṇḍanのrāmanta	Salimarの森					シーマが与えられたラーマンタのリスト	
Salimar VI	880		san pamgat balakasであるpu balahāra	Yuweniのrāmanta	Salimarの森					シーマが与えられたラーマンタのリスト	
Wuatan Tija	880	大王	dyah bhūmijaya?	Wuatan tija村への褒賞?	Wuatan Tijaの村		MDHの語のみ(すべてのMDHが免除か?)			○(? :近隣の者たちとの共食)	dyah bhūmi (スカドッカ・Wuatan tija村[シーマ])
Ratawun I	881		rakarayān mapatih i wkaであるpu catura	Smārの寺院(parhyangan)	Ratawunの原野(水田2tampah)				贈り物リスト	○rakarayān mapatih i wka pu caturaによる(高官の名は見えるが王は見えない)	
Ratawun II	881		rakarayān apatih i wkaであるpu catura	Laṇḍaの寺院(prāsāda)、Pastikaの宗教建造物(dharma umah)	Ratawunの原野(水田2tampah)、Kwakのアラン(草)の原野(水田2tampah)、Patapanの菜園(水田2tampah)					○	
Taragal	881	大王rakai kayuwani	rakarayān i sirikan	Gunung hyangの(rakarayān i sirikan)寺院(prāsāda)	Taragalの水田(1lamwit、2tampah)と藪(周囲の合計450ḍpa、2hasta)					○	
Ramwi	882	大王rake kayuwangiであるśrī sajjanotsawatungga	rakarayān haluであるpu catura	PastikaのRamwiの(rake haluの)寺院(dhamma)	森(Ramwiの地:水田2lamwit)		列举されたマンギララ		高官リスト / 贈り物リスト	○rake halu による(高官の名は見えるが王は見えない)(sawyawasthā ning manusuk sima)	rakryan halu pu catura (スカドッカ・Ramwiの寺院)／PastikaのRamwiのrake haluの寺院の神(mangilala)
Munggu Antan	887	大王rake gurunwangi	sang pamgat mungguとその妹であるsang hadyan palutungan(バスティカの聖なる神sang dewata ing pastikaの妻)	Gusaliの僧院(wihāra)	Munggu Antan村					証人リスト	
Er Hangat	c888	大王 dyah gwas śrī jayakī(r)ttiwarddhana	sang hadyan bamwuna?	寺院(dhamma)?	森?		MDH			○	寺院(スカドッカ)
Balingawan	891	(三人の大臣[rakryān i sang mapatih katrinī])	ḍapunta ramyahとḍapu hyang bhāratī daman tarṣa ḍapu jala	原野に恐怖があり、苦しみを引き起こしていたため。	Gurubhaktiの原野	決められた時にシーマはsang mapatihに花を贈る(buat hajiの語はない)。	(pa)tiḥ katrini / 列举されたマンギララ			○ / 証人	
Taji	901	大王rake watukuraであるdyah balitung(後半に)/	rakryan i watu tihangであるpu sanggrāma dhurandhara	Dewasabhāのカピクアン(kabikuan)	Tajiの菜園(複数)	チャイトラ月とアスジ月に花かごを作り、香(を賣うための)金2kuを支払う。		kilalanの規定	贈り物リスト	○rakryan i watu tihang による(sawyawasthā ning manusuk sima)	rakryān ri watu tihangの妻samgat dmung pu cintyāの子であるrake śrī bhāru dyah dhetā(寺院・シーマ)/Rajaのsang marhyang(スカドッカ)
Kayu Ara Hiwang	901		rake wanua poḥであるdyah śala(バジュラ王sang ratu bajraの子)	寺院(parhyangan)	Kayu Ara Hiwang村				贈り物リストに一部	○	
Panggumulan I	902		rakryān i wantilであるpu pālakaと妻と子	Kinawuhanの神と女神	Paṅgumulan村		列举されたマンギララ		贈り物リスト	○(sabyawastha ning manusuk śima danū)	Kinawuhanの神と女神(スカドッカ)

附表3

シーマ定立における定立者・目的・規定一覧表

刻文名	発布年	主への言及(王でない者の恩恵)	定立者	シーマの目的	シーマとなる場所	義務(buat haji)	シーマへの立ち入り禁止	交易・生産規定(①②③)	高官の記述(高官リスト／贈り物リスト)	贈り物リストの有無	権利者(シーマ・DH・スカドッカなど)
Tělang I/II		904 大王rake...	rake wlarであるpu sudaršana	寺院(dhamma)／堤防建設、宗教建造物(kamulān)や舟の管理	Tlang, Maha, Paparahuan村	ラーマは寺院のシーマを整える。	sang mānak katriṇi pangkur tawān tirip / 列挙されたMDH	②③①(三分分:MDH・寺院・寺院の守護者)	高官リスト(刻文の初めではなく途中に)	○	寺院(スカドッカ)
Randusali I		905 大王rakai watukuraであるdyah balitung	Poḥのラーマたち	Pastikaに横たわる聖なる神の宗教建造物(caitya mahaywa silunglung)	Poḥ村とその下のRumasanとNyū村(NyūのRumasanの村?)		列挙されたMDH		贈り物リスト	○(大王とその祖母にも。rāma kabaih i poḥ ring rumasan ring nyūによる)	Pastikaに埋葬された神の寺院(スカドッカ)
Kubukubu		905 大王rakryan watukuraであるdyah balitung (交易ができることに関しての恩恵)	dapunta mañjālaとsang manghambin、sang diha sang dhipa dapu hyang rupin	水路と、rakryan hujungであるdyah mangarakとrakryan matuha rēkai majawuntanへの褒賞のため?	Kubukubu bhadrīの原野		(MDHの語は記されないが、シーマに干渉してはいけない者たちとして、mīśraなどの通常MDHに入る者たちが列挙されている)	(①に挙げられるものの列挙か? 三等分などの規定はない)	高官リスト(刻文の初めではなく途中に)	○	
Kaṇḍangan		906	rakryan i wungkal tihangであるpu wirawikraman	Prasājaの寺院	Kaṇḍangan村とその下のErijo村	buat haji の語は見えるが不鮮明なため詳細不明。					寺院(その[シーマの]収入・スカドッカ)
Mantyaṣih I		907 大王rakai watukuraであるdyah balitung śrī dharmodaya mahāś ambhu	patihであるpu sna、pu kolā、pu puñjēng、pu karā、pu sudraka	バティの共同体(Mantya siḥのバティ)への褒賞	Mantyaṣih村		sang pangkur tawān tirip / 列挙されたMDH		高官リスト/ 贈り物リスト	○(sawyawasthā ning manusuk sīma)	patih mantyaṣihたち(スカドッカ)
Sangsang		907 大王rakai watukuraであるdyah balitung śrī dharmodaya mahā sambu	samgat lamwaであるpu layang	Hujung galuḥの僧院(wihāra)の神	Sangsang村(gawai 2ku)	金7su、ワフタの共同体の金2su	sang mānak pangkur tatun tirip / 列挙されたMDH	②③①(三分分:神・MDH・シーマの守護者)	贈り物リスト	○(大王にも。samgat lamwaによる)	Hujung galuḥの僧院の神(税? [parmmasanya]・スカドッカ)
Rukam		907 大王rake watukuraであるdyah balitung śrī dharmodaya mahā sambhu	rakryān sañjiwana(王の祖母)	Limwungの(rakryān sañjiwanaの)寺院(dhamma／parhyangan)	ワヌア・イ・ジュロの村であるRukam村	寺院の管理。	列挙されたMDH		贈り物リスト	○siraとあるが誰かは不明。村あるいはバルヒヤンガン?(sabyawastha ning manusuk sīma)	Limwungの寺院の神(スカドッカ)
Wukajana	c.907	śrī mahārāja raka i watukura	samgat kalang wungkalであるpu layang	Dalinarの僧院(samgat kalang wungkal)の建造)	Wukajana、Tumpang、Wuru tluの村	途中からのため不明					
Wanua Těngah III		908 大王rake watukuraであるdyah balitung śrī iś warakés awotsawatunggarudramurī	Pikatanのdang sanggha	Pikatanの僧院(bihāra)	Wanua Těngahの王の水田				(Rake Garungのシーマの再定立の箇所で参加した人々)wahuta、patih)/(バリトゥン王の再定立)贈り物リストに高官	○(バリトゥン王の再定立:大王にも。dang sanggha i pikatanによる)	
Barsahan	c. 908	śrī mahārāja		dapuṅku ugihanとその子sang pantan?(彼らへの恩恵)	Barsahan?		(MDHの列挙の途中から刻文が始まる。)				
Kaladi		909 大王rake watukuraであるdyah balitung śrī dharmodaya mahā sambhu	rakryan bawangであるdyah śraḥwana?	パニクラン・ススル(義務?)の花を植えるため／森が水田になり恐怖がなくなる	KaladiとPyapyaの土地	水田の目的として、適した時期にgarigariを買い、神の儀礼に提供する(buat hajiの語はない)。	patih wahutaと列挙されたMDH/kilal ānであるkli arja singhal drawila banyaga 4 paṇḍikir campā rammān kismimira marga mangmāng		3枚目がないため確認できない	○	mula dhrmma(シーマでの善悪)／samgat wadihati(ある犯罪や死)[ワディハティが死んだ場合、(その権利を)三分分(神・mula dharma・punnakāya)する。mula dharmaが死んだ場合、ḍampuntaに与えられない(? 文意不明)。]
Taji Gunung		910 (rakryan i sigadiri pinghay wahuta i wungkal tpat [recto:20])(rakryan mahamantriと[?]rakryan momahomah gurubangiとsamgat lua [verso:25-26])	rakryan mahāmantriとrakryan gurumwangiとsamgēt lua	?	Taji Gunung村		列挙されたMDH			△(書記官への贈り物以外は明記されない。証人リスト?)	

附表3

シーマ定立における定立者・目的・規定一覧表

刻文名	発布年	主への言及(王でない者の恩恵)	定立者	シーマの目的	シーマとなる場所	義務(buat haji)	シーマへの立ち入り禁止	交易・生産規定(①②③)	高官の記述(高官リスト／贈り物リスト)	贈り物リストの有無	権利者(シーマ・DH・スカドッカなど)
Sugih Manĕk		915 大王śrī dakṣottama bāhubajrapratipakṣaśaya	rakai kanuruhanであるmumpung	sugih manekのカピクアン(prāsāda kabikuan)である(?) (rakryānの) 寺院(dhamma)	Limus村とその下のTampuran	シーマの目的として、毎日神に会い、神の儀礼の(ために)約束の量の食糧を適切な時に提供する(buat hajiの語はない)。	sang mānakatrīni pangkur tawān tirip tiruan manghuri / すべてのMDH	②③①(三等分:神・寺院の守護者・MDH)	贈り物リスト(一部)	○(大王 / rakryān binihaji parames warīを含む。rakai kanuruhan mumpungによる)	(寺院の) 神(スカドッカ)
Er Kuwing	c. 915	大王rakai hinoであるśrī dakṣottama bāhubajra prati...	śrī mahārājaでありrakai hinoであるśrī dakṣottama bāhubajra prati...?	SārayūのBarāhāśramaの神	Poh Galuh村とEr Kuwing村	青い蓮などの花かごを作り、果物などを運ぶ(buat hajiの語はない)。	sang mānak katrīni pangkur tawān tirip / (MDHの語はないが通常MDHに含まれるものが列挙)		贈り物リスト / 高官リスト(Halu, Sirikan, Wka, Bawangのみ)	○(誰によるかは不明)	明記なし(スカドッカ)
Lintakan		919 śrī mahārāja rakai layang dyah tlodhong śrī sajjanasannatanuraga	śrī mahārāja rakai layang dyah tlodhong śrī sajjanasannatanuraga	Turumangambil に埋葬された大王の父の寺院(caitya ni yaya(h) śrī mahārāja)のチャルのため	Lintakanの森とTunahの森、Wruの藪?				贈り物リスト	○(王による定立なので王が贈ったのか? 明記なし。)	
Hariñjing B		921 śrī mahārāja rake layang dyah tulodong	bhagawanta bāriの子	Hariñjingの寺院の水路(dhamma kali)			patih wahuta rāma / 列挙されたMDH		高官リスト		
Gilikan I	c. 923?	?		Glamの神	水田						
Gilikan II	c. 923?	?		Glamの神	水田(4tampah)					○	
OJO XVIII		924 大王wagiswara sang lumah ri kayuramya	śrī mahārājaであるwagiswara (Kayuwamya)に横たわる聖なる者 sang lumah)	kalangの共同体?	Wangwang村		(MDHの語は記されないが、misraなどの通常MDHに入る者たちが列挙されている)				
Palēbuhan		927 大王pu wagīswara	大王か? (恩恵は samgat amrāti...tiruan wadihati makuduriに受け取られる)	?	(sīma i palēbuhan)		MDHとmisra paramśraに干渉されない[B: 7]*この後に「もし超過した場合、sang mangilala soddha(ra)によって干渉される」[B: 8]とある(*この箇所は交易規定の一部なのか?)。*干渉されないDHの列挙は[A:5-6]に記されている。	②③	恩恵はsamgat amrāti...tiruan wadihati makuduriに受け取られる		
Kinawĕ		928 大王śrī wawa...	rake guṇunganであるdyah muatan (dyah bingahの母)	?	Kinawĕ村				贈り物リスト(途中までしかない)	○(大王にも)	
Sangguran		928 大王rakai pangkajaであるdyah wawa śrī wijayalokanāmottunga	punta i manañjung	Manañjungのjurugusaliの共同体のシーマにある(?) 寺院(prāsāda kabhaktyan)の神	Sangguran村	毎日神に4つの供物を行う[不鮮明](buat hajiの語は確認できない)。	patih wahuta / 列挙されたMDH	①(三等分:神・シーマの守護者・MDH)②③	高官リスト一部 / 贈り物リスト	○(大王にも。punta i manañjungによる)	寺院の神(DH・スカドッカ)
Air Kali	wawaの時代／928?	大王rake sumbaであるdyah wawa	?	Air kaliの寺院(damma)							
Kampak	c. 929						? (MDHの列挙の途中から)		贈り物リスト	○(大王にも。ḍapungkuによる)	
Gulunggulung		929 大王rake haluであるpu sindok śrī iśānawikrama dhammottunggadewa	rakryān hujungであるpu maduralokārāñjana	Pangawānの寺院(kahyangan)	Gulunggulungの水田(7tapak)とBantaranの森の半分	HemadとPangawanのそれぞれの神の儀礼時に共同で作業を行う。(ここで定立された、あるいは別の?) シーマの義務として、Hemadの神の儀礼のために昼夜平分時毎に参加する。(buat hajiの語はない)	patin wahuta rāma nāyaka ya samgat / 列挙されたMDH	①②(途中まで、後半不明)	贈り物リスト	○(大王にも。rakryan hujungによる)	寺院(Hemadの寺院?) (DH・スカドッカ)
Waharu II		929 大王pu jngok (sindok) śrī iśānawikramotunggadewa	śrī mahārājaであるpu jngok (sindok)?	Waharuの子孫?	Waharuのディア・シンドックの土地		sang mana katripi pangkur tawan tirip / 列挙されたMDH				
Sarangan		929 大王rake hinoであるpu sindok śrī iśanawikrama dhammotunggadewa	samgat momahu.....?	?	Sarangan村		(通常MDHに列挙される人々の立ち入り禁止)	③②	?	○(大王にも。samgat momahu.....による)	
Lingasuntan		929 大王rake hinoであるmpu sindok śrī iśānawikrama dhammotunggadewa	śrī mahārājaでありrake hinoであるmpu sindok?	Balaṇḍitの神	Lingasuntan村		patih wahuta / 列挙されたMDH	①(三等分:神・守護者・MDH)②③(一部不鮮明)			Balaṇḍitの神(DH・スカドッカ)

シーマ定立における定立者・目的・規定一覧表											
刻文名	発布年	主への言及(王でない者の恩恵)	定立者	シーマの目的	シーマとなる場所	義務(buat haji)	シーマへの立ち入り禁止	交易・生産規定(①②③)	高官の記述(高官リスト／贈り物リスト)	贈り物リストの有無	権利者(シーマ・DH・スカドッカなど)
Cunggarang I		929 大王rake hinoであるmpu sindok śrī īśānawikrama dhammotunggahan pu kuṇḍala	pāwilraの宗教施設(dharmmāsrama)と神として知られる聖なる者(sang siddha dewata)の宗教建造物(prāsāda silunglung)?	Cunggarang村		patih wahuta rāma nāyaka partyaya pangurang / 列挙されたMDH	(一部不鮮明)①(三等分:神・シーマの守護者・MDH)			宗教施設(スカドッカ)(一部不鮮明)
Cunggarang II		929 大王rake hinoであるmpu sindok śrī īśānawikrama dhammotungga	王妃?	Pawitraの宗教施設(dharmmāsrama)と王妃の父でrakryan bawaである神として知られる聖なる者(sang siddha dewata)の宗教建造物(prāsāda silunglung)	Cugrang村		patih wahuta rāma nayaka pratyaya pangurang / 列挙されたMDH	①(三等分:神・シーマの守護者・MDH)②③			Pawitraの神と寺院(スカドッカ)
Jērujēru		930 大王śrī īśānawikrama dhammotunggaddewa	rakryān hujungであるpu mawura	Himadの聖なる建造物(sang hyang śāla)である(rakryān hujungの)寺院(kuśāla)	Jurujru村		patih wahuta rāma nāyaka parttaya sangak / 列挙されたMDH		贈り物リスト	○(大王にも。rakryān hujungによる)	sang hyang śāla (DH・スカドッカ)
Gēwēg	933(935?)	大臣(rakryān śrī mahā mantri)であるpu sindok sang śrī īśā nottunggadewawijayaと王妃であるśrī warddhant kbi	ungguであるpu sisikanとrakryān iy anggēhanであるpu kuṇḍala?	?	Dmak村					○(不鮮明)	
Hēring		934 大王pu sindok śrī īśānawikrama dharmotunggadewa	samgat marganungであるpu danghil	僧院(samgat marganungであるpu danghilと妻であるdyah pēndelに共有される?)	Hringの召使いの共同体の水田(6tampah、1suku)と居住地(?tampah、1suku)		不鮮明	①三等分(samgat marganung・シーマの守護者である聖職者[punta]・MDH)	贈り物リスト(一部不鮮明)	○(大王にも。samgat marganung pu danghilによる)	samgat marganung pu danghil (DH・スカドッカ)
Añjuk Ladang		937 大王pu sindok śrī īśānawikrama dhammotunggadewa	samgat añjuklaḍang(?)	Śrī jayāmṛtaの寺院(dharma)の宗教建造物(prasāda kabhaktyan)の神	(Añjuklaḍangの)召使いの水田	一年ごとに金12su.	sang māna katriṇi pangkur...../ 列挙されたMDH	①(三等分:神・シーマの守護者であるpunta jā(ta)ka・MDH)	贈り物リスト?(不鮮明)	○(大王にも。samgat añjuklaḍangによる)	Śrī jayāmṛtaの寺院の宗教建造物(DH・スカドッカ)
Sobhamṛta		939 śrī mahārāja rake hino mpu sindok śrī īśāna wijaya dhammotunggadewa	mpuku i nerānjanā (?)	mpungku bodhiwala?/ 僧院?	(Sobhāmṛetaの)水田(1 tampah)、菜園、居住地	(buat hajiの語はないがgawayとして) kapujān kahaywaknaning rāt	列挙されたMDH(2枚目がないため途中から)				彼がsobhāmṛetaの水田、菜園、居住地の権利をもち、未来において彼の子孫に入る。/ mpungku i nerānjanāが権利を持つ(DH・スカドッカ)
Kamban		941 大王rake hinoであるśrī īśānawikrama dyah mattā nggadewa	rakryan kanuruhan ?	?	王の集団の村(?)であるKamban村		tan kna ring pinta palaku lakwalakwan mīśra... (通常のMDHが続くが2枚と3枚目がないので全容は不明)			○(途中から)/ 王の命令(sang hyang ajñā haji)を受け取ったラーマたちの列挙	
Paradah II		943 大王rake hinoであるpu sindok śrī īśānawikrama dharmmottunggadewa	sang sluk (kluk/ñluk)	宗教建造物(dharma kamulān)	Paradahの水田とTagiの稲作地	義務?(不鮮明なため不明だが、広さや金額がみえる)	sang mānak katriṇi pangkur tawān tirip pinghai wahuta / 列挙されたMDH	①(三等分:寺院・[不明]・MDH)	贈り物リスト?(不鮮明)	○(不鮮明だが、大王にも)	sang slukの子孫(シーマ?)/寺院(DH・スカドッカ)(一部不鮮明)
Muñcang		944 大王rake hinoであるpu sindok śrī īśānawikrama dharmmottunggadewa	samgat ḍa ṇa である(?) dangācāryya	Siddhayoga...という名の宗教建造物(prāsāda kabhaktyan)	Muñcangの市場の南の土地	Walaṇḍētの神に花を供え.....1か月毎に1つの竹網のがご...Asuji毎に...供える...[不鮮明]。	sang mānak katriṇi pangkur tawān tirip pinghai wahuta / 列挙されたMDH	①(三等分:神・シーマの守護者であるrāma jāpaka・MDH)②			Siddhayogaの宗教建造物(の神?)(DH・スカドッカ)

色分け

ajna śrī mahārāja 大王の命令 anugraha śrī mahārāja 大王の恩恵 欠損によってどちらか不明

称号	刻文名	Kayuwani										
		Pikatan			Kayuwani							
		kayumwungan 824	Tulang air 850	Wayuku 854	Wanua Tengah I 863	Samdul 869	Kurambitan 869	Tunahan 872	Śrī manggala II 874	Humanding 875	Jurungan 876	
śrī mahārāja			(ratu) rakai pikatan		(ratu) rakrayān kayuwangi pu lokapāla			rakai kayuwangi		rakai kayuwangi		
rakryān (mapatih) i hino									(sang pamgat) pu apus			
rake halu												
rake sirikan			pu sarwwa					pu rakap		pu rakap	pu rakap	
rake wka			pu puluwatu		pu manūt							
samgat tiruan			(tiruan) pu mantara		(tiruan) pu sapi							
manghūri			pu manduta									
wadihati			pu manawan		pu manū				(samgat) pu manū	pu mangih	(samgat) pu manputani	
makudur			pu gadā		pu manga				(samgat) pu mamnang	pu mañindat	(samgat) pu manindit	
rake pagar wsi												
rake bawang												
rakryan watu tihang												
rake halaran			pu madhāwa									
rake palarhyang			pu wairawa		(panggil hyang) pu...							
dalinan			pu manū		pu dhnang							
wlahan			pu tunggū									
pankur			pu agra		pu brahā							
tawān			pu mulung		pu...							
tirip			pu gadā		pu ...							
samgat mamrāti												
tilimpik												
tiru ranu							(pamgat) pu apus					
samgat mamahumah pakatan												
(samgat mamahumah) madandér												
(samgat mamahumah) anggehan												
(amrati?) pulu watu												
wadihati kasugihan												
		Kayuwani								王位の空白期		Jbang
称号	刻文名	Haliwangbang 877	Mulak 878	Pintang Mas 878	kwak I 879	Salingsingan 880	Ratawun II 881	Taragal 881	Ramwi 882	Poh dulur 890	Panunggalan 896	
śrī mahārāja		rakai kayuwani			rake kayuwangi	rakai kayuwangi		rakai kayuwani	rake kayuwangi śrī sajjanotsawatungga	rake limus dyah dewindra	haji rakai watu humalang	
rakryān (mapatih) i hino					pu aku				pu aku			
rake halu									pu catra			
rake sirikan					pu purungul			○	pu purungul			
rake wka					pu catra		pu catura		pu ding			
samgat tiruan									(tiruan) pu manghuri		sang siwāstra (tiruan)	
manghūri					pu kiti				pu kiti			
wadihati	(sang pamgat) pu manuduk				pu manū				pu manū			
makudur	(sang pamgat) pu manindit	(makudur sang rawngwug) pu manggal			pu mnang		(sang makudur sang kusambyan) pu raja		pu mannang			
rake pagar wsi												
rake bawang					(samgat) pu partha				(samgat) pu partha			
rakryan watu tihang					pu agra							
rake halaran					pu dōmpāngkara				pu dipāngkara			
rake palarhyang					(panggilhyang) pu uttarāsangga				(panggilhyang) pu uttarāsangga			
dalinan					pu acung				pu acung			
wlahan									(rake) pu jeṣṭa			
pankur					pu gawa				pu gawa			
tawān					pu rañjan							
tirip					pu agra pinda				pu agrapinda			
samgat mamrāti	(sang pamgat) pu campa											
tilimpik						(samgat manimpiki) pu acung						
tiru ranu												
samgat mamahumah pakatan												
(samgat mamahumah) madandér												
(samgat mamahumah) anggehan												
(amrati?) pulu watu												
wadihati kasugihan												

称号	刻文名	Balitung								
		Ayam Teas 901	Taji 901	kayu ara hiwang 901	Rongkab 901	panggumulan A 902	Watukura 902	Telang 904	Rumwiga I 904	Randusali 905
śrī mahārāja		rake watukura dyah dharmodaya	rake watukura dyah balitung				rake watu kura dyah balitung śrī iśwarakeśawotsawatungga	rakai watukura dyah balitung	sang janardanottunga dyah balitung	rakai watukura dyah balitung śrī dharmmodayamahāsambhu
rakryān (mapatih) i hino		pu bahubajra pratipaksaksaya	pu bāhubajrapratipaksaksaya			pu daksa sang bahubajrapratipaksaksaya		śrī daksottama		
rake halu		pu sanggrāmanurāddhara				pu bwalu sang sanggrā madurandhara		pu wirawikrama		pu wirawikrama
rake sirikan		pu samarawikranta	pu samarawikrānta			pu wariga sang samarabikrānta*		pu samarawikrānta		pu wariga
rake wka		pu bhāswara	pu kutak			pu kutak		pu kutak		pu kutak
samgat tiruan		pu śiwāstra	sang śīastra pu asangā*			pu asanā sang śiwa astra*		sang śiwāstra		pu asangā
manghūri		pu cakra				pu cakra		pu cakra (役職不明)		sang cawastu
wadihati		pu dāpit		pu dāngpit		pu dāpit		pu dāpit		pu cakra
makudur		pu sāmwrda				pu sambrda		pu sāmwrda		pu dāpit
rake pagar wsi		pu wirawikrama				pu wirawikrama		pu bhāswara (wka?)		pu sāmwrda
rake bawang		pu malawan								pu wirā
rakryan watu tihang			pu sanggrāma dhurandhara	pu sang grāma śurandhara						(wungkal tihang) pu bwalu
rake halaran			pu hawang			pu basu		pu ...		pu kiwing
rake palarhyang						pu puñjang		pu puñjang		pu puñjung
dalinan						pu gālatha				sang sukhapanggih
wlahan						pu dhepu				pu mangunsir
pankur						pu rañjan		pu rañjan		pu rañjān
tawān						pu warā		pu pañjaluān		pu pañjālwan
tirip						pu krsna		pu wiṣṇu		pu wiṣṇu
samgat mamrāti										
tilimpik										
tiru ranu										
samgat mamahumah pakatan										
(samgat mamahumah) madandēr										
(samgat mamahumah) anggechan										
(amrati?) pulu watu										
wadihati kasugihan										
称号	刻文名	Balitung								
		Rumwiga II 905	Kandagan 906	Mantyasih I 907	sangsang 907	rukam 907	(Boechari 2012: 480-482)(907)	kinewu 907	wanua tengah 908	kaladi 909
śrī mahārāja		dyah balitung śrī dharmmo daya mahāsambu		rakai watukura dyah balitung śrī dharmmodaya mahāsambhu	rakai watukura dyah balitung śrī dharmmodaya mahāsambhu	rake watukura dyah balitung śrī dharmmodaya mahāsambhu		rake watukura dyah balitung śrī iśwara keśawasamarottungga	rake watukura dyah balitung śrī iśwara keś	rake watukura dyah balitung śrī dharmmodaya mahāsambhu
rakryān (mapatih) i hino		śrī daksottama bahubajra pratipaksaksaya		mahāmantri śrī daksottama	śrī daksottama bāhubajra pratipaksaksaya	śrī daksottama bāhubajra pratipaksaksaya (mahāmantri)	śrī daksottama bāhubajra pratipaksaksaya	(mahāmantri śrī daksottama wajrabāhupratipaksaksaya	śrī daksottama bāhubajra pratipaksaksaya	śrī daksottama bāhubajra pratipaksaksaya
rake halu				pu wirawikrama	pu wirawikrama	pu wirawikrama		pu wirawikrama		
rake sirikan				pu warigasamarawikrānta*	pu wariga	pu wariga pu samawarikrānta*		pu wariga		
rake wka				pu kutak bhāswara*	pu kutak	pu kutak		pu kutak		
samgat tiruan				pu śiwāstra	pu śiwasta	pu asanā sang śiwāstra*	pu asanā sang śiwāstra	sang śiwāstra		pu t'gang
manghūri				pu cakra	pu cakra	pu cakra		pu cakra		(samgat) pu cakra
wadihati		pu dāpit		pu dāpit	pu dhāpit	pu dāpit				
makudur				pu samwrda	pu samwrda	pu samwrda				
rake pagar wsi				pu yayak						
rake bawang										
rakryan watu tihang		(wungkal tihang) pu wirawikrama	(wungkal tihang) pu wirawikrama					(wungkal tihang) ○		dyah śrahwana
rake halaran				pu kiwing		pu kiwing				
rake palarhyang				pu puñjeng		pu puñjang				
dalinan						sang sukha				
wlahan										
pankur						pu rañjan		pu ranjan		
tawān						pu pañjaluān		pu pañjaluān		
tirip						pu krsna		pu tunggang		
samgat mamrāti		(samgat momah umah mamrati) pu utara			pu utara			(samgat momahumah i panrati) pu utara		
tilimpik								○		
tiru ranu										
samgat mamahumah pakatan										
(samgat mamahumah) madandēr										
(samgat mamahumah) anggechan										
(amrati?) pulu watu										
wadihati kasugihan								pu padma		

称号	刻文名	Daksa		Toldong		Wagiswara	Wawa			Sindok	
		sugih manek 915	Barāhāsrama (daksa)	Wintag Mas 919	Lintakan 919	924年の刻文〔Sarkar 1972:207〕 OJO XwIII	Palebuan 927	Kinawe 928	Sangguran 928	Wulakan 928	Gulunggulung 929
śrī mahārāja		śrī dakṣottama bahubajra pratipakṣāsava	rakai hino śrī dakṣottama bā hubajraprati		rakai layang dyah tlodhong śrī sajjanasannatanuragatangadew	wagiswara sang lumah ri kayuramya	pu wagiswara sang la(r)a...(A2) / ...ri garung (B10)	śrī mahārāja śrī wawa---rakai sumba	rakai pangkaja dyah wawa śrī wijavalokanāmottunga	dyah waba anak kryan ladheyan sang lumāh ring alas	rake halu pu sindok śrī tsā nawikrama
rakryān (mapatih) i hino				pu ketuwijaya	pu ketudhara			(rakryan mapatih pu sindok isā navikrama)*hinoかどうかは不明	śrī tsānawikrama (sindok)		
rake halu			pu ketuwijaya		pu sindok						
rake sirikan			pu suparna		pu hawang				pu amarendra		dyah hamarendra
rake wka			pu hanumān		pu kirana						dyah balyang
samgat tiruan					pu cakra		○		(tiruan) dapunta taritip		(tiruan) dapunta taritip
manghūri			pu udara		pu teja				pu manguwil		pu paṇḍamuan
wadihati			pu dapit		pu nanggala		○		pu dinakara		sang dinakara
makudur					pu dhanuka		○		○		pu balawān
rake pagar wsi											
rake bawang			pu utara								
rakryan watu tihang											
rake halaran			pu mañā		pu wihikan				pu gunottama		pu gunottama
rake palarhyang			pu khatwānga		pu balandung						
dalinan			pu tanggēlan		pu parbwata						pu karšana
wlahan											
pankur					pu jayanta						
tawān					pu sena						
tirip					pu hariwangsa						
samgat mamrāti					pu dapit		○ (samgat amrati)		(amrati) hawang wicaksana		(mamrāti) caksana
tilimpik					pu paṇḍamuan						pu dhanuka
tiru ranu											
samgat mamahumah pakatan					pu kambaladhara						
(samgat mamahumah) madandēr									pu padma		(rakryan) pu padma
(samgat mamahumah) anggēhan								pu kuṇḍala	pu kuṇḍala		pu kuṇḍala
(amrati?) pulu watu									pu paṇḍamuan		
wadihati kasugihan											
Sindok											
称号	刻文名	waharu II 929	Sarangan 929	Cunggarang I 929	Lingasuntan 929	Kampak c. 929	Jêrjêru 930	Hêring 934	Anjuk landan 937	Paradah II 943	Muñcang 944
śrī mahārāja		śrī mahārāja pu jngok (sindok) ś rīśānawikramotunggadewa	rake hino pu sindok śrī isāna wikrama dhammotunggadewa	rake hino mpu sindok śrī isāna wikrama dhammotungga	rake hino mpu sindok śrī isāna wikrama dhammotunggadewa	○	śrī tsānawikrama dhammotunggadewa	śrī mahārāja pu sindok śrī isāna wikrama dharmo tunggadewa	pu sindok śrī isāna wikrama dhammotunggadewa	rake hino pu sindok śrī tsā nawikrama dhammotunggadewa	rake hino pu sindok śrī tsāna wikrama dhammotunggadewa
rakryān (mapatih) i hino		○						pu sahasra	pu sahasra		
rake halu		pu sahasra	(dyah sahasraの名は確認できるが、ラケ称号は不明)							pu sahasra	pu sahasra
rake sirikan							... marendra	dyah amarendra	pu balyang	pu ma---	
rake wka		pu baliṣwara	dyah balyang				pu balyang	dyah balyang	pu baliṣwara	pu baliṣwara	
samgat tiruan			(tiruan) dapunta taritip				(tiruan) dapunta taritip	(tiruan) dapunta taritip	(tiruan) dapunta purilap	(tiruan)---	
manghūri			dyah narendra				pu paṇḍamuan	pu paṇḍamuan	pu sadaya	pu sudaya	pu daya
wadihati			sang dinakāra				sang dinakara	pu dinakara	pu dinakara	pu dinakara	sang di---
makudur			pu balawān				(akudur) pu balawān	pu balawān	pu dwa---	pu dwa---	
rake pagar wsi											
rake bawang											
rakryan watu tihang											
rake halaran			dyah surendra				(halaran) pu guranāntama	pu gunottama	pu bingung	pu bingu	
rake palarhyang			(panggilhyang) pu---				(panggil hyang) pu glo				
dalinan			sang hambulu				pu karsana				
wlahan											
pankur											
tawān											
tirip											
samgat mamrāti			(amrati) hawang wicaksana				(mamrāti) hawang wicaksana	(mamrāti) hawang wicaksana			
tilimpik									pu daduka		
tiru ranu											
samgat mamahumah pakatan											
(samgat mamahumah) madandēr			pu padma		pu padma	○	pu padma	pu padma			
(samgat mamahumah) anggēhan			(samgat anggēhan) pu kuṇḍala	(---han) pu kuṇḍala	pu kuṇḍala	○	pu kuṇḍala	pu kuṇḍala			
(amrati?) pulu watu											
wadihati kasugihan											

*○は高官名は記されるが、個人名が不明なもの。